

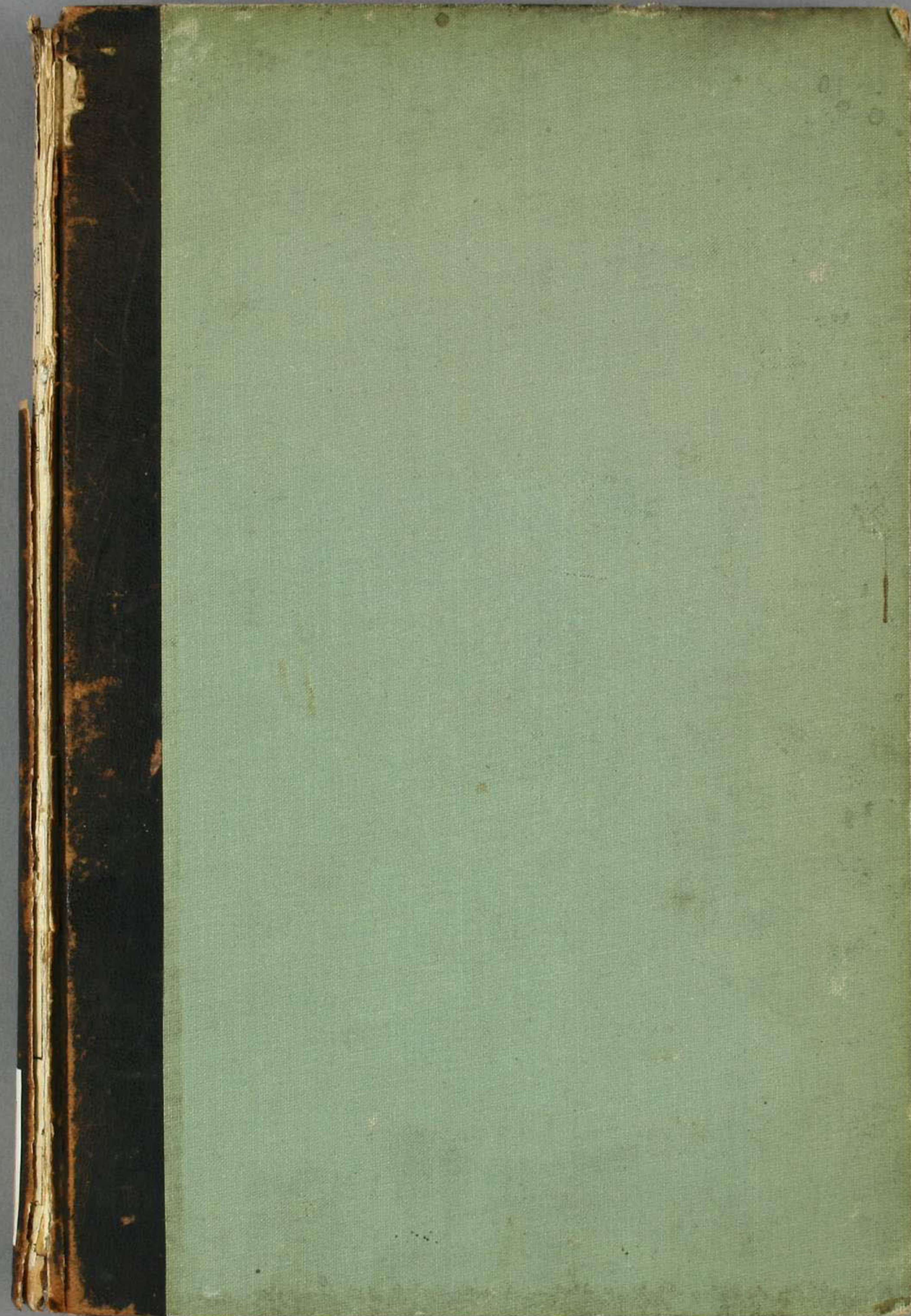
は出来ぬ
妻もな
夫が一月の
入る世帯の
ば、驚く程
出しては行か
世人のわの方
己、え、何
を罷めたりし
自身の痴話の

集

完

抱月外
青二園合著

本問文庫
文庫 14
D 293



文庫14
D293

雪の巻序

此の書を合著せんの議成りて、さて梓にして
後に傳へんほどの述作我れにありやと顧み
れば、二三年來書きすてし長き短き文ども、一
として今の我が意にだに滿つるものなし、ま
して大方百年の批評をや。たゞ自家經歷の一
端にもと、掻い集めたるもの、彼れ是れ數十篇、
多きに過ぐればとて孰れを捨て孰れを取る

14
293

と品づけせんも事々しく、まばらく明治廿八年中の作の長きもの、みを取り出でて、この巻に收むること、しぬ。見ん人其の心して幸に教を垂れよ。

明治三十三年四月

抱月識

風雲集 雲の巻

目次

抱月著

西鶴論	一
音楽美の價值	三九
『伊達鏡阿國劇場』を観て所謂夢幻劇を論ず	四五
悲劇と人生觀	五二
『不言不語』を讀みて所觀を記す	七一
『新浦島』を評す	七八
新詩の形に就いて	八二
絢爛と平淡	一〇〇
戦争後の國文學	一一二
詩人と實驗	一二七
氣韻生動	一一九
變化の統一と想の化現	一二三

14
293

月の巻

目次

宙外著

二

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す……………一
 序論及び美妙論の梗概……………一
 尾崎紅葉氏を評す……………六
 幸田露伴氏を評す……………三一
 『戀八卦柱曆』を讀みて所感を述ぶ……………五一
 おさんと茂兵衛……………五六
 批評法のさまじく……………六七
 露伴が『あかりがま』を讀みて……………七三
 弦齋著『櫻の御所』……………七七
 『片ゑくぼ』に就きて……………七八
 性格と片輪者……………八〇
 小説界の前途……………八七
 性格に就きて疑者に答ふ……………九〇
 再び性格を論じて歸休庵に答ふ……………九四

小説と片輪者……………九七
 思ひ出づるまゝ……………一〇〇
 筆まかせ……………一〇二
 觀念小説……………一〇三
 『ひとり寐』を評す……………一〇五
 『雲の袖』を評す……………一〇五

三

14
293

花の巻

目次

青々園著

馬琴の小説史……………一
 當世後言……………一八
 明治廿七年の梨園……………二二
 十八大通……………二七
 『東海道四谷怪談』……………四一
 團十郎の熊谷……………五三
 近松と沙翁との同事異文……………五七
 『忠臣藏』の型……………六〇
 市川團洲と其の技藝……………六八

四

風雲集目次終



風雲集雪の巻

風雲集

抱月外 青青園共編

雪の巻

抱月

西鶴論 (人に答ふる書に擬す)

紛々たるかな西鶴の是非、或時はわけの聖ホトとたへられ、或時は文盲にして書法を知らずと嘲けられ、此の人、肚裏に一字の文學なしと卑むものあれば、好色の書を作りて活計の謀としたる罪人と誹るものあり。『日本文学史』の著者は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず高雅なる思想を有するにあらず従うて其の作何れも猥雑卑陋にして後世識者の譏を免れず」といひ、『好色五人女』の驕刻者は「さはれ西鶴は一箇の詩腦を蓄へしが故に閨巷の些事を見るも凡そ眼に觸るゝもの總て自家の詩材に供へしかど、彼は小説家にも物語作者にもあらねば、元より彼の手腕をもて京傳或は馬琴と比ぶべくもあらず、彼が述作は足利時代の小話を一轉し、分明に一種の淫世草紙派なるものを起し、小説世界の一紀源を開きしかど、悉く端物にして廣く人間を観察せしむ社

西鶴論

一

西鶴論

二

會の一部に過ぎず、殊に性情を面白く寫せしも其變化流轉する所以を詳かにせず、深く世態と人情との關係する處を説明せしに非ず、又最高の理想あつて是を人事に寓せしにもあらず。されば小説家として是を尊ぶと頗る疑はしく京傳馬琴以上にあるべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫も減せざるなり」といひ、また「西鶴と芭蕉は以て元祿の社會を代表すべし。共に厭世家にして高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に、唯俳諧に満足せずして其奇才を驅て卑猥なる社會を毫も假借する處なく有りのまゝに描寫して獨り樂み獨り笑ひ、一般の我が文學者と全くと社會的觀念は微塵もなく、破天荒の浮世草子は偏更色道の隱微に渡りき」といへり、其の他彼れを樂天的といふものあり、彼れの理想を粹の一字に留むべしと論ずるものあり、知らず、西鶴の眞價畢竟幾何ぞ。案ずるに貴論質さるゝの主意は以上の如くに候ふべし。本より西鶴を一個人としてそが人品を論ぜんは、彼れの生涯を明めたる後の事、且つ道德上より見ると文學上より見るとは、其の間多少の區別もあることに候へば、茲には社會的に西鶴をあげつらふを止め、旨と文學上より彼れが價値につきて立論いたすべく候。中にも

浮世草紙の西鶴

是れ彼れの本面目に御坐候。御存知の如く西鶴の浮世草紙に筆を染めしは、五代將軍常憲公の二年、天和二年に出でし『好色一代男』を始と致し、越えて二年、貞享元年『好色二代男』成り、同じ三年『好色一代女』『好色五人女』『本朝二十不孝』成り候へど、翌貞享四年には浮世草紙の面目

一變して『男色大鑑』『武道傳來記』『武家義理物語』等となり、相尋ぎて『日本永代藏』『新可笑記』『本朝櫻蔭比事』『胸算用』のたぐひ見はれ申候。今假に天和二年より元祿六年西鶴の死せしまで凡そ十二年間を彼れの浮世草紙時代といたさば、件の變化を界として文學者西鶴の一代はあつたら前後の兩期に分かれ申すべきか、即ち前期は『一代男』『二代男』を経て『一代女』『五人女』に其の圓熟の極を示し、後期は『武道傳來記』『武家義理物語』『永代藏』『胸算用』などにて代表せらるゝ義に御座候。試に之れを色分けいたさば、無論一は好色氣質を素とし、他は武家氣質、商人氣質を素とするものと申すべく、而して『男色大鑑』は一種の異彩として其の間に挟まれ、兩者を糊塗するが如き觀有之候。この他西鶴の死後世に出でしものにては、『俗つれく』『萬の文反古』など或は偽作なるべしと論ずる向も有之、且つ思想露骨、文調淺俗のふしもなきにあらねば、偽作ならぬまでも之れによりて西鶴の眞價を窺はんは如何と存候。さて西鶴のいかに人生を觀せしかを尋ぬるに先ちて辯ずべきは

西鶴が浮世草紙

の性質に御座候。概して申さば浮世草紙は今日いふ所の小説に候はず、小話或は短き記事文といはい相當たり候はんか、固より此處にて、小説といへるに嚴正の定義を下さんとは候はねど、假にも小説と名け得ん限は、脚色を匠みて事柄を面白く叙し候ふか、性情の發展人間の運命を描き候ふか、何れといたすも單に一場の出來事、一時の心ざまを記述するのみにては、飽き足らぬ

西鶴論

三

心地いたし申候。例へば『一代男』『二代男』『三代男』『一代女』など、表面は主人公ありて首尾一貫するに似たれど、其の實主人公を因として事柄を之れに湊合せしむといふにも候はねば、さりとて毎段別に一の首尾結構を具ふと定まれるにも候はず、申さば切れ／＼の記事を無秩序に綴り合はせたるに過ぎず、『男色大鑑』『二十不孝』以下の作に至りては、全く小話集の性質を顯し申し候。ひとり『五人女』のみは、五種の短篇を集めたるものなれど、毎篇略々小説の態をなし、西鶴物中にての異色と見え申し候。要するに浮世草紙の性質は小話集にて、西鶴は人間の全運命を觀じて之れを描破せるよりも、寧ろ人間の一部の運命を描破して眞に達せるものと申すべく候。語を更へて申さば所謂氣質を緯として雑多の事件を織りはへたるものにて、西鶴の作は何れか氣質物に候はざらんとりわけ好色氣質其の主なる部分を占め、武家氣質、商人氣質など之れに亞ぎ候ふべし、只後の其蹟、自笑等の如く特に親父氣質娘氣質と取り出で、申さざりしのみ。まづ『一代男』に就きて御覽あるべし、七歳より六十歳の老人となるまでに三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少人を弄びきといふ世之介が好色の行狀五十四條は其の事柄こそさま／＼なれ、必竟同輩に候はずや、作者の自白せる如く、世之介生れ落つるより黠しきこと十歳の翁と申すべく

女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後小箱をさかし芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取そろへ、これ／＼大事の物ながら、襟に何惜かるへき、御なぐさみにたてまつるこ、此れにてたらせども、嬉しさうなる氣色もなく、頼て子を持つたらば之れに泣きやます物にもなるぞかし、此のおきあがり其方に惚れたかして倒けかくるさいひさま、膝枕してなほおきなしきこゝろあり

といへる九歳の少年は、やがて、あれこそ譯知りの世之介さまと持て囃され、廣き世界の遊女町残らず眺め廻れる當年の世之介と何の擇ぶ所か候はん。例を擧げて論ずるまでもなく、好色道の極意、粹の一字が權化して世之介となりたるものと申さば事足るべく候。既に粹といへる一性情の權化なるからに之れを火に投ずるも、水に委ぬるも變化の妙なく、五十四條の複雑なる事柄は、一條にも納むべく五十四條にも別かつべく虚靈なる人間の精神が一貫の特性を具しながら尙五十四境の變化をなすとは趣を別にする次第に御座候。思ふに西鶴が落筆當時の用意も恐らく人間の性情を根本より描破せんなど申す高尙のものにあらざりて、只そが好色界に發現したる結果を面白く寫すにありしものと存じ候、他語にて申さば、西鶴は『一代の男』の主人公を描かんとせるにあらず、むしろ世之介といへる一箇の粹客を觀察者の地位に立て、其が周圍に蟠集し來たる好色界の現象を觀察せしめたるもの、而して世之介はやがて西鶴自身かと存せられ候。勿論西鶴の平生を審にせざれば、此等悉く彼れの實驗譚なりや否やは明めかね候へど、その中幾分は確に聞觀實歴の事柄に材料を取りたるものと見え申し候。さて斯の如く世之介は單に粹の權化とも申すべき言は、變通虚靈の性なき人物にして其はまた西鶴の係なりといたさは、一見西鶴の心はしかく狹隘にして單調なるものかとの御疑も生ずべし、されどこは怪むに足らず候、世之介を西鶴の作りたる完き人間もしくは西鶴自身の全軀と申さばこそ悪しけれ、萬般の好色の現象を一に統べんため總て是等を包容して之が軸となるに堪ふへき圓滿の好色家すなはち理想的好色氣質を捏成化ししたるものといはれよろしかるべく候。西鶴の理想を器に譬ふれば、之に好色を盛りたるが粹にして

西鶴論

世之介はこれなるべく、更に盛るに武道を以てすれば武家氣質となり、財事を以てすれば商人氣質と相成るべし。さればまた一方より言ふときは武家氣質も理想なれば、好色氣質も理想にて、何れも西鶴の一部なれど全軀には候はず西鶴を掩ふの理想は一段大なるものならざるべからずと存じ候。隨うて彼れの間観は彼れの氣質と別なること申すまでもなし。次に『一代女』はた『一代男』と同調にて、女主人公が十一歳より六十五歳までのいたづらを書き連ねたるものに御座候。但し主人公の女性なるだけ、此方の事柄及びそが觀察の、彼方のと別趣なること二者相違の第一點に御座候。又種々の好色事件を統轄すべき極致、彼方にては粹又は大通など申す男性的のものに歸し、此方にては遊女氣質とも申すべき複雑なる女性的のものに歸すること、二者相違の第二點に御座候。此等を除き候はゞ『一代男』も『一代女』も共に作者が好色氣質といへる中央點に立ちて周圍の好色界を眺むるものなること、相同じく候。兩書の性質既にかく候上は、之れによりて一面、西鶴の好色的極致を窺ふと、もに、他面にはそを軸として群り來たる事柄につき彼れが人間觀の片々をも尋ね難からずと存じ候。『五人女』に至りて西鶴の本領は最も圓滿に見はれたりと申すべきか、この作、『一代男』『一代女』の如く切れ〜なる事柄を強ひて結びつけし嫌なく、毎篇主人公と境遇と、因縁兼ね到りて個人の性情おもひ〜の發展を遂ぐる所、五篇の短小説と申すべく、幾分か今日所謂小説の軀面を具へ申し候。作者みづからは此の書にも得意の好色の二字を冠し候へど、實は夫の支離滅裂の事柄を狹隘なる好色氣質の埒にて結び廻したる如き『一代男』『一代女』など、異なりて覺束なきながらも人間の全局其の裡に髣髴せられ申し候。西鶴が小説家としての技倆及

び彼れの纏まりたる人間觀を示すは此の書を第一と致すべきか、さればこゝにては、西鶴が色道の極致とせるものにしてまた幾分か彼れの儂なる好色氣質を説明いたすに『一代男』『一代女』を以てし小説家として人間の運命を描ける彼れを觀察いたすに主として『五人女』を以てすべく候。其の他女色界を去りながらも猶好色の味忘れず、顧みて武道に恰好なる男色に指を染め、之れをもて、武士氣質を彩れるもの『男色大鑑』に候はずや。西鶴の前期と後期とを點綴すとは此の意に御座候。この書、軀裁は一章一事の純然たる小話にて、其の中より抽象いたさば、一種の武家氣質を得べく候。更に進みて後期の諸作につきて申さば、『武道傳來記』『武家義理物語』の武士氣質に於ける『日本永代藏』『胸算用』の商人氣質に於ける、何れも漸く色道とは相遠かり候へど、畧々おなじ型と御承知下さるべし。而して武士氣質は義理をいのちと致し、商人氣質は財貨集散の秘訣、遣り繰り懸け引きの利巧を眼目と致すとは申せ、此れらはさまで複雑ならぬものに候へば、取り出で、論ずるまでも候まじきか。尤も義理と申すには説あり。西鶴の描ける義理は後の作家が勸懲の窓より觀ぜし義理とかはりて、極めて純潔のものど存ぜられ候その故は、後世の義理は眞吾の底より流れ出づるものに候はで、只々世間躰とか外見とか申す點より割り出し候もの、即ち形式的人爲的のものに過ぎず、申さば輕薄なる義理に候へど西鶴のは然らず、眞に我が本然の性より煥發するもの西鶴の義理にして、彼れの之れを寫し候や、單調子ながらも靈氣淋漓、深く人心に通徹する所有之候。蓋しかゝる相違は之れを時勢の上にも認めがたからず、西鶴の義理はまた

西鶴論

西鶴論

元祿的

と申すも不可なかるべしと存じ候。徳川氏のはじめ文運未だ盛ならず、雲の如く林の如き參河武士が創痕斑々の腕骨を撫して、一番槍の功名談に餘念なかりし世は、人々眞率、意を着けて正義を衒はざるも動作のづから義理を離れず候ひつれど元祿の一關を越えてのち、文漸く質に勝ち淫靡蕩敗の餘弊は人を虚儀虚飾の奴隸と化せしめ候ひぬ。あはれ武道の精英は發して元祿武士と句ひしまゝ名残を此に留めて日に月に銷磨し行き候。劃と何時頃を境とは定めかね候へど、およそ天和元祿の際を徳川氏治平の頂上といたさば、此の時代はまさに、質をもて優れる慶長元和の氣象、寛文延寶の頃を経て文の衣を着し文質調和の實を示せるものと申すべく。人皆泰平にして殆ど無缺とも見えけん現實の世界に満足して他を思はず、世を擧げて醉生夢死、いはゆる「花に寐て夢よりぢきに死なんかな」の境に彷徨へる有様に候ひき。されば一方より見る時は此のうちに既に不健全の萌芽を含み候こと勿論なれど、かゝるは歴史が示す必然の數にして、圓熟の極はやがて腐敗の端なること、有限の人世には免れがたき所に御座候。元祿は圓熟の極なり、その後は腐敗の端なり、圓熟と腐敗と相接するのゆゑをもて圓熟を誹議せんとするは燎くを恐れて火を廢するの愚と擇ひ候はんや。天和元祿の社會は固より淫逸華奢に候ひき、しかも淫逸といひ華奢といふの性質おのづから後世のものと異なりて、眞摯なり、一徹なり、眞面目なり、天和元祿の人の花に戯るゝは、花に戯ると申すよりも、花に狂すと申すべく、彼等の月に浮かるゝは月に浮か

ると申すよりも月に淫すと申すべく、凡そ其の境に入るときは則ち滿腔の熱誠を捧げて顧みざること當時の狀態と存じ候。要するに天和元祿の社會は情熱的、狂氣的とも評し候はんか、比較を英のエリザベス時代に取るものあるも此のゆゑに候。今より見れば、丹前妾に六方を踏みきといふ元祿の伊達男は狂に似たれど、しかも彼等は澁面つくりて之れをなしゝに候はずや。はたエリザ朝の紳士淑女は靴尖を延ばして膝に餘り、帽子に帆を張りて二重三重に及べるものありしに候はずや。而して此等の雅態却りて可憐の心地するは、畢竟眞心流露して虚偽ならず輕薄ならざるに因り候。この至情一轉して他方に向ふときは、道義金鐵の元祿的武士氣質を成すも怪むに足らず候。天地の美は常に一元を姿とし人心の本然はた二元を惡むの理を會得候はゞ、元祿の社會其の物の甚だ惡むべきにあらぬを知るに難からずと存じ候。元祿以後の社會はすなはち然らず、彼等は表面に義理を説きながら内心必しも之れに應ぜず、もしくは衷心私に憚る所ありながら煩惱の犬制し盡くされずして遂に蕩淫身を敗る、何れか輕浮の心根に候はざらん、元祿以上にありては、世間の知ると知らざるとに論なく自家の信する所に從ひて義理をも行ひ淫逸にも耽ける社會的眼光を以ていたさば不善に候べし、しかも尙その自己のために自己の信する所を行ふの形式は美に候。元祿以下にありて義理も世間のために行ひ、淫逸も世間のために抑ふ、時に結果の善に似たるもの有之も、所詮醜態を免れず候。元祿を境としてかく義理の性質を分かち、さて西鶴を件の潮ざかひに立てるものと致さば、彼れの振りかへりて寫せるは無論元祿以上のものに候。而して其の善惡ともに滿身の熱誠を捧げて一往直前、他を顧みざるは、之れを元祿的と申すべく、西鶴

四鶴論
の作全部に通徹するはこの風に御座候。以下章を改めて西鶴の好色氣質及び彼れの人間觀に論及すべく候。

好色氣質

好色氣質に新説なし、たゞ少しく巨細に論究いたすまでに御座候、之れを内分して粹人氣質、遊女氣質の二といたすこと前に申上げたるが如し。或は粹人氣質など申す事、用語未熟の嫌有之やも計られねど、其はしばらく御見ゆるし下さるべく候。まづ粹人氣質は如何。春のや氏がひとむかし前の戯文の一節に

(前略)世に粹といふことあれども其傳來も詳ならず或は所謂通をいふ或は今いふ意氣なる者を指す九大夫が由良さんと呼んで粹め々々といふは通人めといふ心なるべく母親の粹な割といへるも亦同様なる心なるべしし
かして粹な姿といひ粹な調子の爪弾などいへば今の所謂いきな姿いきな調子を指したるに似たり曲亭翁嘗ていはく「萬事に心ききたる者を華といふ由は柏案驚奇に見えたり水滸傳に華覺とあるも同意なり國俗は粹とかくもあり華は元明の頃よりの俗語ならんか又按ずるに華は俗省華は華の本字にて乖と異なり」といへり云々
また同じく

(前略)故に粹には三原素あり曰く酌情曰く寛恕曰く自敬即ち是なり此三原素を井有して饒熟其妙に入りたる者は是之を大通と云ふ大通は恬澹無爲大聖のごとく大知識の如し得て名狀すべくもあらず老子の曰く大徳は徳とせずとをもつて徳ありと大通もまた然り外に求むる所なくして自ら守る是大通の形といふべし世人或は粹と通とを混じり或は花柳界の事に明き者を以て

直に通さざる者あり蓋し誤れりといふべし通は萬事に通するをいふ花柳事情に通するものは單に老練の嫖客なるのみいかに通といふべけんや如何とされば花柳事情に通するもの未だならずしも粹ならず粹なるもの亦必しも花柳事情に通せざるも可なればなり

といへる、片々たる戯文字に候へど、粹、通など申すもの、義は畧と相通じ申候。たゞし通の本義はしかく廣しといたさんも、其を花柳界に應用したるものやがて粹かとも存せられ候へば、こゝには粹と通とを分かつたず、むしろ粹を花柳界の事とし之れと意氣とを對せしめて立言いたすべく候。春のや氏の説の外、鷗外氏は曾て

意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず、唯その人を凌ぐや體面を傷らす、唯その我を以て彼の領地を犯すや趣味を損せず、意氣と云ひ粹と云ひまた通といふ、其秘鑰蓋しこゝにあり
といひまた

世に大通と稱するものあり、説をなすものは通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其誤は平淡を以て絢爛の極なりとするものにおなじ、絢爛豈平淡の前階級ならむや、意氣豈大通の前階級ならむや、大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

といはれたれどこれ亦精しからず、餘事は姑く措き好色界にて粹と由すは、言はゞ斯の道の極致にして、鷗外氏のいはゆる通、意氣など申す境を通り抜け優に大通の域に入りたるものに候。蓋し鷗外氏の通もしくは意氣とは、着意して通を利かし粹を銜ふもの、したがひて着意の底には利己排他の一念潜むを免れず、所謂通の通くさく、味噌の味噌くさき物に候はんか。眞の粹、大通の

通はさに候はじ、野暮はたしかに未だ意氣ならざるの名、意氣は着意して粹ならんとするの名、粹は乃ち野暮と意氣との上に選出したるものと存じ候。語を換へて申さは好色道にての野暮とは、未だ意氣の何ものなるかを知らず、随ひて意氣ならんのを有せざる心さまに御座候、之れを作文に譬ふれば、些も鍛錬修飾を加へざる稚き文章の如きものに候、若しくは粉脂を解せざる垂髻乙女の無邪氣なるにも比べ候はんか、要するに其の道にかけては猶無縁地にありて全く無心無意識なるものと申すべし。しかもやうやく見聞の廣まり行き候どもに心やゝ動きはじめて全盛の羨むべきを思ふに至るは人心の自然に候、斯くして陰に陽に虚實を盡くして全盛あたりを拂ふの用意に汲々たるを意氣の時代とは名け候、文章にてはまさに絢爛綺麗、辭のために辭を聯ぬるものに相當すべく、鞅鞅の下、春風に泣く少女が長眉畫くべく粧盒親むべきを知れるたぐひに御座候、すなはち、意識して極致を真似るの状態にして、凡そ何の社會たるを問はず、それ〴〵の道に入る第一歩は常にかゝるべしと存候。更に粹に至りては此等の兩端を没入して意識無意識の外に優遊するものと申すべく候、又は其のあとを尋ぬれば、意識を追ふの極、意識の盡くさるるものあるを曉りて不用意自然の我れに還れるものとも見なされ候はん、又は意識の表にては平々淡々他の野暮漢の云爲するに所に異ならざるも、しかも應對のづから節に合して、櫻に霞める春の月、紗に裏める夜光の璧の含蓄限りなきが如きものに候はん。要は着意して奇を求めざるも奇自然に會し、斯の道に於て他より尊ばれ、さもあるべしと思はるゝ諸性質期せずして一身に湊まるにあり、經驗を極め差別を悉して其を自己の昧といたすにあり、意氣の中より着意の分子、

我執の塵を清め去りて無意不識なる姿趣の復び野暮と似寄るにあり、野暮と意氣とを没するにあり、自他の城壁を抜くにあり、本然の我れに還るにあり、同情にあり。眞の同情に滯るものは、野暮來たるとき野暮をも容れ、意氣來たるとき意氣をも容れ、偏執なく端微なく、事々すべて無碍なるのさかひに出入す、之れ粹の與義にしてまた大通の實諦かと存じ候。さてかく形式の上にては一わたり粹人氣質の何物なるかを辨明いたし候へど、これのみにては物色いまだ定かならず、いでや粹とは如何なるものに候やらん、取りわけ西鶴の眼に映せし所はいかに。生まれながら聖なるものに候は、知らず、凡下のものにありては、何事によらず、修行を積み精進を重ねたる後にこそ始めて即身即法の三昧地に達し得るものに候へば、粹と通とはた此の數には漏れ候はじ。而してその修行地に入るの第一歩は、粹を極めたる人のちのづから他より尊仰せらるゝを見て己れも之れに倣はんの意を起すにあり、凡夫の免れざる所に御座候、所謂意氣の始は是れに候べし、すなはち粹を街ひて他を凌ぎ他より敬愛せられんとするに外ならず候。これにも差等あれど『一代女』に

今の世のよれのすきぬる風俗は千筋染の黄無垢の上に黒羽二重の紋付褌短かに、帯は龍門の薄かば、羽織は紅さびにして八丈袖のひつかへし、素足に藁草履はきす座敷つきゆたかに臨差すこし抜出し扇つかへして袖より風を入れしありて手水に立ち石鉢に水はありさも改めて水をかへさせて靜に口中なごあらひ禿いひやりて供のものに持たせ置きし白き奉書包の煙草さりよせ呑むなご、のべの鼻紙膝近く置きてかりそめにつかひひりて引舟女郎を招きよせ手を少し借りたひみ袂より内に入れさせけんべけにすゑたる灸をかゝせ太鼓女郎に加賀節のぞみて謡うてひくなそれをも心をきめて聞かす小歌の半に末社

に咄しかけ昨日の和布刈の脇は高安はだしと褒め此のちうの古歌を大納言ごにお尋ね申したが拙者聞いた通り在原の元方に極まりたなごたり物語二つ三つ、かしらにそゝらすして萬事おとしつけて居たる客には太夫氣をのまれて我れさ身にたしなみ心の出来て其の男するほどの事賢く見えて恐ろしく位さる事は脇になりて機嫌を取る事になりぬ

と申すは意氣の上乗なるもの、強ち身に粹骨なきも態度の表だけは粹の形を摸し得たるものと申すべく候。單に嫖客氣質のみにつきていは、此のあたりを其の頂點といたすべくや。一面より申さば、『一代男』『二代女』『三代男』など、要するにかゝる心意氣を粹する淺薄なる人物と、やゝ複雑なる傾城氣質と相觸れて生ずる事件を寫せるものに外ならず、まことの粹は一段高きものと存じ候。西鶴はいかにしてまことの粹の消息を傳へ候ひしか、『一代男』五十四條の何れを見候も、表面に現れたるは意氣全盛の事柄のみにて、まだ、粹の彼岸は遠しと申すべし。さはれ一人壇上に立ちて瞰すとき、眼下に集まり來たるもの、己れより矮きを怪み候はんや、作者が一段高き處より知らず、主人公の上に放つ光明にこそ、『一代男』の粹は留め申すべけれ。世之介十八歳まで部屋住の色ぐるひ、十九歳勘當せられて凡そ色界の貧しきかたを漁り盡くし、三十四歳にして歸參、心のまゝ此銀つかへと母親氣を通して二萬五千貫目確に渡しけるに「何時なりとも御用次第に大夫さまへ進じ申すべし日ごろの願今なり思ふものうけ出し又は名高き女郎殘らず此の時買はいではと弓矢八幡百二十の末社どもを集めて大大大盡の豪奢の緒を開き候までは、さしたる事もなければ、之れより後の世之介は、全盛以外に分明に一種の光彩を發し申候。例へば或時は「今日は譯知りの世之介さまなれば何隠すべき各々の科にはと申すうちに夜更けて

介さまのお越と申す大夫只今の首尾を語れば其れこそ女郎の本意なれわれ見捨てむと其の夜俄に立み立て吉野を受出し」或時は「女の心入を驚き様子を聞けば隠れもなき人の御息女なり請出して直に丹波へ送り」「戀は互」の思ひやり自然に身に備はり「人の男を取らるゝ事此ちうの仕出しなり此の心入のいやな所はさらゝ戀にあらざ紋日缺かさぬ程の大じんばかり其仕方ぞかし」と噂せらるゝ悪女郎には「四五度も忍び會うてから、正月の入用御無心の書簡拜しまるらせ時分がら忝くぞんじ候金を出して女郎狂ひ仕れば御存じの通り此方に好き申す太夫と久々申しかはし候貴様よりは只のやうに御申越候程に戀の暇のなき身なれども折節合力にあうて進じ申候餘人を御かせざるべし日貸の金子御貸しなされ候は、肝いり申すべく候」と眞向より責めつくる類、一方より見れば所謂俠にも通ふべき振舞と申さんか。勿論俠と申すにも等ありて、市井の俠は、大俠の根本より正義を粹とするに異なりとは申せ、俠と粹とは畢竟同じ水脈の別なる噴井かと存じ候、大にしては大和魂など申すも矢張り同呼吸に候べし。所詮粹は好色界の俠骨、好色界の大和魂なり、つぶさに色道の坎坷、人情の曲折を経歴して酸きも甘きも噛み分けたる上、其を鹽梅するに濁なき同情の淨味を以てするものに候。尋常の場合にては、何事にまれ己れ專にせんとすれば他を壓するに至ること避けがたき結果に候へど、ひとり粹は然らず、粹は此の際に處して能く自他を調和し、己れ遊興を盡くすも他を犯さず、隨うて他をして己れをも犯さしめず、却りて己れの欲する所直に他の樂ふ所に合するものに御座候。哲學者の口氣を假りて申さば、好色界全躰の目的とする所と、其内の一員の目的とする所と、所謂平等想と差別想との相即せるおもむき、

西鶴論 一六

之れ粹に候。粹を銜ふの徒は藉りて以て他を壓するの具と致せど、粹其の物は、他より尊仰せらるゝの性をこそ有すれ、他を壓せんとはいたさず候。

以上粹の辨稍と贅に似たれど、然らずと存じ候、其のゆゑは、後の作者の粹を描き候や、多くは外形に泥みて、命脈の繋かる所を觀ず、西鶴の死後二十年ならずして世に出で、善く西鶴の骨を得たりと稱せらるゝ八文字舎の『傾城禁短氣』すら既に色道の粹を解して澄空一點の雲氣あるを免れず候、况や其の以下の作者をや。『傾城禁短氣』に

法師さらしせかすしてあくる四ッ過に來たられ何を騒がしうするぞ山伏などの祈で行くものにあらず我れらが粹の秘密にて此の狂氣をなほして見すべしと座敷へ通り給へば眼すはり息ざし荒く美しき姿はなくて凄じき體相、鐵漿つけし齒を鳴らしてさま／＼の諷言聞くに身の毛もよたつばかり法師は少しも騒がず煙草盆ひきよせ心靜かに一服煙らせおこしつけて是れ八雲、所に居て多くの客に採まれてもまた粹さいふ人を見しらぬと見へたりなぞ打ちわつて我が身には深い言交はせの男あればおなまきに其れに添はせてたまはれさ包ます心底をあかし我が手前を首尾ようひまは賈はれずして騒がしい狂言をばとめ飽かれてひまを取うさはそりや前方なる若手の男にして見せたがよい答この古法師はそんなちよろい手なくふ事にあらず念ころな男は廓にあるか客にあるかありやうに白狀めされ出しおくれになつて長狂言せらるるも其方が身は買切ておいた物なれば死なるゝまで座敷牢に押しこめ置き月日の光を見せぬがなんぞ八雲返事はごうとやと星をくはされ覺へず足手一所へトんどとよつてほろり涙をこぼし何事も今までおなまきに御免ありて御機嫌ようおいさま下さるべし深間の男さ申すはいたづらにもあらず我れゆゑに代々の家を潰して淺ましくなられし丹波橋の少六さいふ大臣に添はいては心中立たず様子は是れにこそ少六文を懐より出だし涙片手に見せければ見るまでもなし外に心ある女を不便がるはらうのわれてある煙管で

煙草のむやうなもので煙が傍へもれて我が口の慰にはならず其方ゆゑ身代つふしたる男を忍ぶは情の最上即ち今より暇をやるも二念なくひまをやらせし法師の捌き天晴至極の譯知りさ今につたへてわるうは言はず

とある、何條心からの粹に候べき。化性を見抜ける法師の眼力は凄きほどなれど、我れ粹顔の手捌きは輕薄とや申さん。まこと不便の心あらば、始より何にも言はずにひまやるこそ粹の極意に候はめ、若し又奸計憎しと思はれ飽くまでも懲らすが眞の人情に候はずや、何れともつかぬ鼠色は、必竟下地に名聞利己のにござりあればに候べし。此等は未だ意氣の範域を脱せざるものにて、味ひ來れば、色ばかり酔に似たる直し酒のひり、と舌に障る心地いたし候。此のきはを超して酔乎醉の妙境に入れるは獨り西鶴あるのみ、西鶴が好色氣質の貴きはこのゆゑに候。兩刀手挾んでは元祿武士となり、抜き額に六方陥みては男伊達となり、腰纏萬貫狹斜に豪放しては粹大通となれるもの、これ豈一代に燦爛たりし元祿の花に候はずや。爾來徳川のながれ淵瀬うつろひ、逝く水杳然春を載せ去りて回らず、我等は只々西鶴の描破せる所によりて其の一端を想望いたすのみに御座候。」次は遊女氣質の説に候。總じて西鶴の好色氣質を寫し候や、女性の方に密にして男性のかたに疎なるの傾有之候。こは作者が觀察の自然にも由るべけれど、また實際嫖客氣質のみにては、さまざま多趣なるものならぬにも由り候べし之れに反して吳郎を送り越客を迎へ、朝夕境遇の變に處し、一人の心もて萬人の心を操る傾城の氣質は勢、複雑ならざるを得ざる義と存じ候。さて「京の女郎に江戸の張を持たせ大坂の揚屋で會はし此の上何かあるべき」と『一代男』の好みもさることにて、西鶴の寫せる傾城はちのづから江戸と上方との二色に分かれ申候。『一代男』に

西鶴論

(前畧)秋まで残る螢を数つゝみて壳に遣はし蚊帳の内に飛ばして水草の花桶入れて心の涼しきようなして都の人の野さや見
ららん(中畧)假にもさもしきこいはず可愛さのまゝ人のほしがる物は是ぞさ巾着にあるあほど打明けて物數四十ばかり
包みて袖に投げ入るれば取敢へず夜も明けて別がれさまに旅の道心者の志うけたきこいふ彼の女郎袖の包金を其まゝさらせ
ける

といへる、作者の意は由緒ある身の上を示すにあれど、却りてこれ優にやさしき遊女の心意氣と
や申さん。同じく

茲に吉原の名物吉田といへる口舌の上手あり(中畧)萬賢きこ思の外なり山の手のさる御方殊更不便からせ給ひ數々恭き御
みなし否こいはれず外をやめて指に疵なごつけてまここの心になつて御いさしきも増すまきさる大夫を變ひ初め吉田の退き
端を色々仕かけ給へども一つも憎むべき事あらす或藝方に小柄屋の小兵衛ばかり召連れられ何によらず今日は限りに難儀を
申かけ手をよく引きて遊をかへるぞ急げと清十郎方に行きて大夫に會ひてそも／＼より横を行けばはや合點して少しも氣や
ぶらす常の酒振り重ね飲みになつて無理を着になすぞかし(中畧)花も火もす時分になつて大夫勝手へたちさまに廊下を
半すきて取はづされて其の音に疑なし世之介も小兵衛も横手を打つて面白の春邊やな天晴口説の本たて重ねて出たらは座敷
が臭うて居れぬこいばう、いや兩人共に鼻塞きてあの方からあらためるまきに今日よきにはひを嗅ぎに來たぞ申せ之れを待
てども出ですまもや出らるゝ所でないひと大笑して見るに衣裳仕替へて櫻一本待ちながら立出づるより二人目をつけて居るに
最前尻をこきたる板敷まで來て此所にて心を着け障子を明けて疊の上へ廻らるゝこそ一代の大事こゝなれ小兵衛も聊爾申て
はこしぼし之れを黙りぬ世之介も二の足を踏みてかの板敷歩めども鳴らざりしされども出し遅れてゐる中に吉田方より申し
出して此のちの御仕方總てよめぬ事のみ始より飽かるゝまでこの御傳へ成程今日切りに飽ました御見も今より後はさ申

し捨て表の見世に出で、犬にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは心惜けれ
大人しき態度、利發なる取り捌き、善きかたより申す傾城の心がけは此の邊に候べし。此には假
に之れを傾城の上方氣質と名くべく、江戸氣質の張り強きものと照り合うて一段の風情有之候。

『二代男』に太夫高橋の意氣地を叙して
それ程急な人には會うて面白からず喜右衛門方に戻りぬ七左方より呼び立つれども歸らず世之介も戀は互に思ひ大夫を諫
め是非行けと申せば今日に限つて日本の神ぞ／＼行かぬと申すよく／＼分別を極めよもや先にも此のまゝは措か／＼搦みに來
る時腰半分切つてやつて頭此方に置かぬと申すいかにも覺悟せ世之介にひかせて膝枕してさても命はと投げぶし聞いて居ら
れぬ所ぞ尾張の大盡刀抜きながら切つてかゝれ目も遣らずまして聲も振はせず唄ひけるめい／＼取付き様々扱へども聞
かず兩揚屋町中袴着て兩方の詫こさ入り亂れて親方かけつけ今日は尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて高橋がたぶさを
取つて宿に歸るそれにも飽かず世之介さまさらばこいふこそ心強き女此の男にあやかりものぞかし

といひ太夫小紫の豪奢と俠氣とを記して
紫さまお一つまぬれと暴くおさへて襟から膝くだり打ちこぼしたんさ氣の毒がる顔つきおかし太夫苦しからぬと座をたちて
行水取れとて湯殿に入り最前の衣裳つき少しも變らず肌は白編子中は紅鹿子のひつかへし上は淺黄八丈の八たんかけ召しか
へられける又上方女郎のせぬ事なり(中略)世之介重ねてたづねれば様子見るに少し足らぬ人を賄にして遣はしけるまきな
がら見えますよつて先さまの人憎しあんな男に逢うてさりましたさいふ

といへる、さては『一代女』の主人公の、己れに敵するものには飽くまで憚に、己れに與するもの
には飽くまで情深き一種の氣象、『此の男嫌うて振るにはあらずかしらに粹顔をせらるゝによつて

此方からもむつかしく仕掛「くるまけ魂、正しく町の髪結らしく思はるゝ、供の男が全盛顔の憎さに一旦は振りたれど、其の男の優しさに心和ぎかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程なしわれは先へ歸れ、髪結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起こされける之れを聞くも又こゝろざし替はり先に見立てし職の人なればかさねて浮名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる」情より名聞」の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといたし候は、上方氣質と江戸氣質と、相通ずる節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤なみの細く長う風に靡くを執ねしと見候は、雪折竹の雪に一夜の宿をだにおしむは無情とも見え候はん、されど亦細く長う續くは情に深入りせぬ故にて、太く短く一夜に折るゝものこそなか／＼に熱情とも申すべく候へ。外に「いかなる粹もいやといはぬ」遊女の手鏡、「客からのつけ次第にして傲る」遊女の威、遊女の薄情、遊女の莫連、いまさら例を擧げて論ずるにも及ばずと存じ候。要するに、一代女の生涯は即ち遊女氣質の始終にして、上に論ぜし諸性質は其が根じめとなれるものゝ一斑に候。されば遊女氣質の粹人氣質と異なるは、一は女性だけに我れといふ城廓を胸に構へ、絶えず其を振りかへり見るの風あれど、他は同情の面より此の城廓を脱却し、時に放焉として本來平等の天地に遊ぶを得るの點に候。縦令しか意識せざるまでも偏狭は女性の常に候へば、審美上に所謂同情、忘我等の境には長く停まるを借ず、動さずれば我れの身上に立ち還らんとする傾有之候。意氣地といひ、名聞といひ、たしなみといひ、利發といふ、何れか此の我執の影に候はざらん。粹は此處を通り抜けたるものにして、粹人氣質

と遊女氣質との相違はやがて男性と女性との差別と申して可然候。

好色論の終に申添ふべきは粹、傾城などすべて好色氣質を躰とするものと、眞の戀との逆行する一事に候「五人女」は眞の戀を描かんとせるが故に好色の範圍を逸し、「一代女」は好色を寫せるが故に其の戀一も眞の戀となり申さず、此の關係は次章西鶴の人生觀を論ずるくだりにて細述いたすべく候。

西鶴の人間觀

人間觀、人生觀など申すと、此の頃の流行語にて何人も口にする所に候へど、其の本義はさる簡易のものに候はず、近松が心中物のあはれを寫したるの故をもて彼を厭世詩人といひ、西鶴が好色界の快樂を描きたる故をもて彼れを樂世詩人といふの類は勿論據なき説に候。本來は人間を何と解し現世相を如何さまに觀すべきかと尋ぬる前に、先づ人生の果たして解了せらるべきものなりや否やを論じ、兼ねて智識の性質を明め、造化の秘密は約そ何分通りまで人智の思量をゆるすものなるかを研究致したるのち、人生觀の厭世といひ樂世といふが如き感情的のものに分かるゝ所以を説くが至當の順序に候へど、煩はしければ、他日に譲り、此には直に西鶴の人間を觀せし次第に論及いたすべく候。

西鶴が作の原來小説にあらざして短き記事文なる由は既に申上候、隨ひて作者の理想を加へて結構せるもの甚く多くは俗にいはいゆる寫實に候。されど一方より申すときは却りて頗る理想派に近

き點もなきにあらざ、『一代男』『一代女』など、全軀より見るときは即ちこれに候、其ゆゑは此等の作の表にては、人生は全く好色氣質の獨舞臺にして何程蕩淫を極むるも社會的制裁とか周圍の係累とか申すことは殆どなく好色者流の理想郷も斯くやと思はるゝ有様に候へば也、すなはち個々の事柄は寫實なりといたすも、全局の上よりいふときは實際にあるまじき世相に候へば也。『一代男』『一代女』の描ける所は好色といふ目安より割り出だせる一種の理想的社會にしてまた西鶴が好色の窓より觀せる人生の極致に候。さもあらばあれ是れ彼れが人生觀の一部のみ、之れを以て全西鶴を掩はんとするは僻事に候べし夫の西鶴を譯の聖といひ又は高上の理想なき野人といふが如きは、貴ぶも賤むも、ともにこの間の消息を會得せざるに由るものと存じ候。或は西鶴の何故にまかく不健全なる理想世間を不健全と知りつゝ描きしかと訝る者も候はんか、そは戯作者の本意を除りに重く見たる論と申すべし。昔時は戯作者の筆をとり候や、まづ念頭に浮ぶは讀者を娛ましめんの一事にあり。『一代男』『一代女』の成れる、はた此の目的にしたがへるに外ならず候。されば西鶴のはじめより人生に對する己れの感情を歌はんとせるにあらざるは申すに及ばず、彼れは人生の圓滿を夢想して之れを髣髴せんとせるにも候はず、否、圓滿を髣髴せんとは致したれど、其の圓滿は人生の圓滿にあらずして歡樂の圓滿に候ひしなり、就中強大の勢力ある色欲的歡樂の圓滿に候ひしなり。而して西鶴の之れを擇ぶに至りしは、彼れの時勢と彼れの地位との所以にして、猶馬琴が勸懲の眼鏡により仁義世界の圓滿を想望せるがごときものに候。たゞ馬琴は一途道念の満足を得んと欲して煩惱の念を拒斥し、之れを以て人生の圓滿と心得候へど、西鶴は然

らず、西鶴が色慾の満足をもて直に人生の圓滿と觀ぜしにあらざるは『一代女』『五人女』などの中に勸懲の口氣を帯べる節少からぬを見て知らるべく候、殊に自恣自由なる『一代女』を讀み卒へたる眼を『五人女』に移すときは此の事實最も著く見えすき申候。『五人女』は即ち西鶴の觀せし人間の全相なるからに、其の中なるは、色も戀も、『一代女』と異なり極めて窮屈にして煩惱の傍に常に何物かの看守するが如き心地いたし申候、例へば等しく肉慾の戀を寫し候も、『一代女』にありては青天白日誰れ憚る所なきに引きかへ、『五人女』にありては、お夏と清十郎、お仙と長左衛門、おさんと茂右衛門、お七と吉三郎、何れも其の戀密事の性を有せるたぐひ、若しくは「世に神ありむくひあり隠してもしるべし人おそるべきは此の道なり」あしき事はのがれずあなおそろしの世や」等の評語を以てせるなど、明に西鶴が描ける人間の煩惱一偏に非ざりしを證するに候はずや。『八犬傳』は其の偏狭なる不健全なる道義界を以て人生を掩はんとせるが故に、結果は娛樂よりも驚嘆を主とするに至りたれど、『一代男』『一代女』は娛樂を主として驚嘆を求めず、是れ前者の動もすれば説理に終らんとする所以後者の知らず／＼美術の肯綮に觸れ得る所以に候。近松は乃ち能く美術の本旨の娛樂にあるを忘れざると共に其の娛樂の單に煩惱に媚ひ肉感を充たすにあらざるを知り、人間の全相を活寫して始より同情の娛樂に訴へんとせるものに候。佛の批評家ティンが曾てミルトンの驚嘆シエイクスピアの創造、スヰフトの打破バイロンの挑戦スヘンサーの夢想を並稱せるに倣ひて上の三家を品騰致さば、馬琴は驚嘆するを好み、近松は同感するを好み、西鶴は娛樂するを好みきとも申さんか。要するに元祿の社會にありて西鶴が娛樂の頂點を好色界

西鶴論

に求めしは怪むに足らず、一步を進めて無意識のうちに審美の域に參せしは彼れの偉なる所以に候。西鶴の詩人としての技倆は彼れに取りては寧ろ無意識的に候、但し美術の成るはすべて無意識と意識との両面の作用によるものとも見らるべくハルトマンの

無意識的概念によりて能く部分を全に統理し渾成し、同く無意識の所産なる自然味と比肩するを得るに至るは天才なり
(中略)此のゆゑにセリシク及び其の流派の人々は一切の美術的作業には意識無意識の兩作用の不斷錯綜して相助け相濟するを要すといけり

といへるも此の理に候へど、此は西鶴の場合に意識無意識と申すとは別に、直接に美を目的とし美術のために美術を營むものにつきての事に候、即ち美を成せんと意識して青を點し丹を施せども、これのみにては未だ美ならず、此の上に美趣の横溢し來たるは別に無意識の作用によれりとの義に候、近松の如きは之に候べし。他に勸誨を直接の目的とする馬琴の如き、娛樂を直接の目的とする西鶴の如き、感慨を遣るを直接の目的とする詩歌辭賦の如きも有之候て、此等は其の直接の目的より更に審美的同情といふが如き間接の目的に移るの手續を要し候、西鶴を無意識と申すは此の際にて、彼れは意識内にては單に娛樂又勸誨といへる淺俗なる目的に停まりたれど、無意識の間に高尚なる審美的同情を目的とするに至りたるものと存じ候、約言すれば西鶴の浮世草紙を作る趣意はたい面しをかくし讀ましめんといふにありたれど、何時か人間の真相を描破して同情に訴ふるの呼吸を默會したるものと申すべし『一代女』には片々ながらもこの穂影鋭く見れ『五人女』には稍々含蓄の態をなして圓滿に顯れ申候。或は西鶴の意ことさらに社會の淫猥を暴

露して之れを刺るにありきといひ、或は西鶴冷に世相を觀じて獨り筆にし獨り笑めるのみといふが如きは、恐らくは聖海上人が社前の獅子のたぐひかと存じ候。斯く西鶴の悟入は無意識に近かりきといへども、されども悟入は悟入にて其の此處に到れる天才の効は没すべくも候はず、若し西鶴が好みて不健全なる色界の歡樂を題目とせるに罪あらば、そは肉躰の快樂と精神の快樂との調和し圓熟せる醉生夢死の社會の全般に涉れる罪にして西鶴は社會の兒たりしに過ぎず候。西鶴の人生觀を論ずるはやがて『五人女』を評するも同じ事に候、まづ大幹の點より申さん『五人女』の動因も『一代男』『一代女』の動因も等しく色情なれど『一代男』『一代女』には只々色慾ありて戀愛なし、眞の戀愛は『五人女』にはじまり申候、之れ明に西鶴が『五人女』に一轉歩をなせし證にて、好色に執する限は戀愛に筆を着くるの餘地なかりしこと當然に候。好色と戀愛とは一方に於て相類し他方に於て相背くものにて、精しく申さば好色も我れを中心とし、戀愛も我れを中心とし、兩者差別見に立脚する點に於ては同一に候へど、また好色の我れは全く我れ一人なり、戀愛の我れは我れと我が愛する人とを合したるや、廣き我れなるの相違有之候。此の相違こそ好色と戀愛とを背馳せしむる根本にして、好色は我れに不利なるもの、すべてを排し候へど、戀愛は戀人の爲にのみは我れの不利をも顧みず多淫浮薄は好色のいのちにして實意献身は戀愛の面目と存じ候、二者の併立せざるは此れにて相知れ申すべし。『五人女』に好色の二字を冠せしは單に市らんためか、はた好色戀愛の別などには無心なりしたためか、知りがたく候へど、實際の上にて正しく西鶴は『一代女』と『五人女』との間に一頓悟いたし候。而して頓悟して好色と戀愛との別を

辨へ、戀愛の本性を描破し到底戀愛の、道念の制縛以外に獨立するを得ざる所以を示せしもの、
『五人女』の心中悲劇に候。

總じて古今心中物の精神は近松の世話浄瑠璃に鐘まれりと申候へど、其の發端は西鶴の『五人女』
にあらんと存じ候。心中物とは必竟戀愛といへる一種の煩惱と、義理とか世間とかいへる道念と、
即ち哲學者のいはゆる差別と平等との衝突に基くものにて、何故に衝突の此世にあるかは姑く別
問題といたすも、本來萬物存在の大原理は件の兩端の調和にあり、之れに正反對なる衝突は存在
すべからざるもの即ち自滅すべきものたり、心中悲劇とは此の衝突の調和するを得ずして遂に自
滅するものに外ならず、一切の悲劇は此の原則に依りて生ずるものに候。たゞ此に注意すべきは
斯く心中悲劇のみが盛に我國最大詩人の手に描かれたる所以に候、勿論シェイクスピアにも『ロメ
オ、エンド、ジュリエット』、『アントニー、エンド、クレオパトラ』以下心中悲劇に近きものなき
に候はねど、其の趣も異なり、且つ我が國ほど多からず。『ロメオ、エンド、ジュリエット』のみ
は其の社會の我が國のに似たりしたため稍、我が心中物と同調にして近松よりもむしろ西鶴に近似
せる節有之候、蓋し後に論ずるが如く、西鶴の作はすべて元祿を寫し候へば、南方伊太利を寫し
て批評家をして

管に事柄のみならず語句の形までも南方より來れるを見る、其の抒情的音節、其の言情熱、其の殷豐なる活氣を見、燦爛た
る想像を見、放膽なる措辭を見て誰れか伊太利を想はざるものあらん。
といはしめたる『ロメオ、エンド、ジュリエット』の西鶴に似たるも無理ならぬ義に候はんか。さ

て立ちかへりて案ずるに、心中悲劇の我が國に行はれしは東洋の社會の特質に由來せしものに候
はんか、西洋にては蚤く個人といふ思想發生して、差別を重ざるの風行はれ候ひしより、社會を統
制し行く平等すなはち道念もさまで差別に酷ならず、實に酷ならざるのみならず、兎もすれば差別
の方跋扈して、政治に宗教に哲學文學美術に、善惡ともに差別の勝てるより來たるもの多き傾候ひ
き。此に於てや、差別見に立つ戀愛の如きも、一舉一動道念に掣肘せらるゝの累なく却りて神聖視
せらるゝまでに相成り申候。東洋は之れに反して古より萬事平等を先とするの傾向強く、隨つて
道義の如きも差別的個人的の所業を酷遇するの嫌あるを免れず、萬國史家が亞洲國民の特質を舉
げて個人の意識薄く自由の想念に乏しなど申すは口惜しけれども致しかたなき事に候、これ我が
國にて戀愛の動もすれば義理と衝突して心中悲劇を醸す所以に候べし、西洋の戀愛の何處となく
白晝公然の趣あるに引きかへ、東洋の戀愛の多く秘事隱密の性あるもゆゑある事に候。或は東洋
の戀の肉感に流れ易きを譏るものも候へど、こは西洋とても同輩にて、永く精神上の戀にのみ停
留するは寧ろ變例に候、詩人の好みて精神上の戀愛を寫すは之れを縈紆ならしめんために強ち
戀愛の肉感に終るを咎むる譯は候はず、精神の作用はやがて肉體の作用にして體、心必竟は二致
なく、愛の極は必ず肉體の觸接に終るべきこと心理學の證する所に候。但し實際世間の上にては
詩歌美術の上にては肉感の前驅として愛の跡を摸するもの、賤むべきは勿論に候。
心中悲劇の由來以上のごとしといはし、さて等しく此の地盤に立てる近松、西鶴兩家の殊なる所
を考ふるに、まづ目に留まり候は、悲案を結ぶべき最後の破裂すなはち主人公の滅亡のさまの、

彼れ此れ著く相違することに候。單に此く申し候のみにては些々たる表面の事柄のやうに思ひ做されんも計りがたく候へど、決して然らず、其の裏面の意味はたしかに兩家の人間觀の相違といふことに候。近松の情死は『曾根崎心中』『天の網島』を首とし多く男女の主人公が現世の羈約に堪へ得ずして厭離穢土、欣求淨土の念に驅られ、相携へて自滅する心中悲劇の態を具へ候へど、西鶴にありては、現世の羈約、煩悩は煩悩なれども、之れが爲に直に厭欣の一念に驅られみづから殄滅の淵に赴くといふことなし、西鶴の人間は斯かる場合に處しても猶現世を見捨てんとは致さず、動もすれば却りて平等旨を破り、道義の綱を潜りても、煩悩の慾を追うて現世にながらへんとす、此をもて必然の結果として他人の手に逼まれ不承ながらに死地に就くもの比々是れに候。設ひ一時は來世を樂ふの氣分となることあらんも、其は刹那の出來心にして、根柢を叩けば何處までもこの世を捨て、他界に快樂を求めんの覺悟なく、會、自殺せんとすれば他の手に囚られたる絶命の場合のみなること、おなつ清十郎もおせん長左衛門もおさんも茂右衛門もお七も吉三郎も皆同様候。凡そ煩惱と道念、差別と平等とが一旦衝突の端を啓き候上は特別の事情によりて之れを調和する喜劇、例へば『伊達染手綱』『夕霧阿波鳴渡』などの外は、主人公の滅亡は必定免れざるものにして滅亡の模様は三種ありと存じ候、一は飽までも差別に執して平等の法に抗せんとするため遂に社會の手に強迫せられて死するものにて、西鶴の人間は此のかたに傾けるものに候、二は一に反し平等の前に慫伏して差別の欲を捨て形骸ほどは殘せど有餘の涅槃に入りしも同然、情あり熱ある世間の存在を亡じて白眼世を看るの人となるものにて、馬琴の人間は往々之れに近

づき候、三は差別の慾も捨てられず、さりとて平等の法をも破り得ず、悶又悶、遂に自滅の途に就くものにて、近松の人間は之れに外ならず候。近松にありては『難波土産』に「某が憂はみな義理をもつばらとす」と申せし如く常に差別と平等、煩惱と道念とを并べ掲げて彼れに五分、此れに五分の重さを持たせ候へど西鶴にありては差別のかた七八分を占め、やゝもすれば批評家の眼に映じけんシエークスピアの人間の如く、人間の本相は煩惱我、煩惱狂にあるかと疑はれ申候。同一社會を寫しながら、近松と西鶴と其の觀せし心中物の人物のかくの如く相違いたすは何故に候べきか、蓋しこれ前に申し述べたる、近松の意識的と西鶴の無識的とのまた一を理想的ならしめ他を寫實的ならしめ、一をして眞を先とせしめ他をして實を先とせしめたるに由るものと存じ候。審に申せば近松は現實世間の人間の昏々として歡樂に耽けるの外二念なきを見、而して其の終に自滅に就くの必至なるを見て差別我、煩惱我の傍常に平等、道念の看守するものなかるべからざるを察し、且つ此の兩端、時により處によりて互に消長はあれど古今東西に通じて觀るときは兩々對峙して何れを重しとも定め難く、衝突するの已むべからざるものたるを曉り、此の人生不朽の眞相を描破して詩人の本分を完うせんといたせしものに候、すなはち現實の世相は如何あらんも、之れを醇化して眞に近からしめ以て一段明に天の人間を作れる本意即ち造化の極致、即ち天の理想を發揮せんとせる者之れ近松に候、近松もし西鶴に比して高き者あらば正に此の點に候べし、彼れの「大まかなる所あるが結句人の愛する種子とはなるなり」と申せしは善く其の理想的なりし趣意を表し申候。西鶴は之れと異なりて現實の世相を現實のまゝに觀じ候ひぬ、現實の

世相とは如何なる者に候ひしぞ、曰はく社會の組織圓熟して差別平等一諦に歸し、人々現世の外をおもはず、打ち見たる所天地は現實の生活、差別我の動作に盡きたらんが如く、無邊に流行する平等の大力には夢にだに想及せざりし者、これ元祿以上の世相に候、一言以て掩は、樂世的なりきとも申さんか、但し樂世的と申すには二義ありて佛家のいはゆる常見外道の樂世と、斷見を經由し斷常二見を空したる後の樂世とは、おのづから別に候、前者は無意識に只わけもなく此の世樂しと觀するもの、後者は此の世の外に淨土なく煩惱即菩提なるを意識して此の世を樂しとするものに候。元祿社會の樂世は固より前者にて、何の代の泰平か夫の爾々たる蒼生をして悉く悟後の樂世に達せしむるを得候はんや、此に於てか元祿の社會は動もすれば平等の畏るべきを知らずして差別の一偏に走るの病あり、悲劇の芽す所此にありと存じ候、換言すれば、ひたすら差別界の歡樂を極めんとするが故に平等之れを責めて、尋ぐに哀傷を以てするもの、やがて元祿の心中悲劇に候。西鶴は實にかゝる社會を現實のまゝに描寫するに出で立ちしものにて深く此の奥に踏み入らんとはいたさゞりきと存じ候、被れば煩惱に狂せる人間が盲奔して遂に道義の大法に觸れて滅する次第を描くに能事了ると思量いたせしものに候、近松は時空を超して其の此の如くなる所以の真相を此の上に達觀いたせしなり。されば西鶴は元祿といへる一定の社會に實現したる人間を描き、近松は此の圈を取り除きたる人間を描けるものと申すべく、近松の寫せる所は直に不朽といふを得れど、西鶴は全部其のまゝを不朽といはんこと難く候。西鶴の人間觀は元祿の社會を悉くも明治の社會とは全くかなはずといふ如きとあるべし、近松の人間觀は元祿の現社

會をも明治の現社會をも必然掩ひ盡くすとは限られぬど、また元祿も明治も彼れの埒外には逸し得ざるものに候。時により處により西鶴に同感するを得ざるもあるべく馬琴に同感するを得ざるものもあるべし而も何人か近松に同感し得ぬもの候はんや。序ながら近松の人間の情熱なるを元祿の產物といふは異存なれど、近松の心中物をもて直に元祿を描けるものといたすが如きは淺膚の見たるを免れず候、近松の心中物出でて之で造られ感化せられし以後の社會は知らず、近松を造りし以前の社會は決して近松の心中物其儘の社會にあらざりし義と存じ候。勿論時に一二の近松的なる人物事件はありきといたさんも、大體は近松よりも寧ろ西鶴に似、道念と煩惱との衝突に苦みて自殺するよりも煩惱に驅られて盲進し自滅することこそ元祿社會全般の本調に候ひつらめ、これより近松に至らんには尙一際平等を炳焉たらしめ差別との權衡を保たしめざるべからず、近松の理想的なるは此のゆゑに候、西鶴の寫實的なる所以もまた此れにて明瞭と存じ候。以上西鶴の人間觀の基く所を概説して近松の人間觀と并べ論じれば、以下『五人女』の總評に移りてさらに事實の面より之れを明め申すべく候、而して、『五人女』中五の卷は姑く措き、餘の四卷の歴卷は第三と存じ候へば之れを骨子といたして立言いたすべく候。『五人女』の醜刻者は「就中四の卷は西鶴作中屈指の文字彼れを代表するに足る」と申し候へど、我等の見る所は然らず候。さて『五人女』は其の名の示せる如く、女主人公の悲劇にして、一の卷お夏清十郎、四の卷お七吉三郎は共に無分別なる若氣の戀、二の卷おせん長左衛門、三の卷おさん茂右衛門は共にやゝ差別つきたる年増婦人の戀にして、後の二者は何れも其戀の性質極めて複雑、眞箇千古の好詩題と見え申

候。然るに西鶴は二の巻にては可惜筆をそらして枝葉の事柄に巻の半をうづめ、要所をば巻尾にちらと叙述し去りたるに止まれれば見るに足らず、真に悲劇の面目を具へたるは三の巻のみと相成り申し候。又近松の筆に上りて『戀八卦柱曆』の名篇となりしも之れに候。そもく此の悲劇の主人公は如何なる人物にして其が戀愛は如何にして始まり如何にして終りしか。申す迄もなく西鶴にては茂右衛門は一の配色たるに過ぎず候へば、兩人の戀愛より其破滅に及ぶまで一切の動因はあさんに歸する義に候。而してあさん茂右衛門と全く意外の契を結び夢おどろきて「わけもなきことに心はづかしく成てよもや此の事人にしれざることあらじ此のうへは身をすて命かざりに名を立て茂右衛門と死出の旅路の道づれと尙やめがたく」遂に邪徑に迷ひ入りし刹那の心機こそ全運命の要にして如何様にも解せらるべき微妙の問題に候へ。稍同轍ながらも二の巻あせんの戀は又別様の所ありて「おもへばく憎き心中とてもぬれたる袂なればこのうへは是非に及ばずあはの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより格別のこゝろざし程なく戀となりしものに候へば始はさらく長左衛門いとしの愛着心より起これるに候はず、唯々我れに辛き女に鼻あかせんの面あて心、即ち意地、即ち戀と異方面なる一種の煩惱心、差別心より來たれるものにて、終には必然之れに伴生すべき長左衛門への同感も交り眞の戀となりしものと存じ候、されば自然と才覺づき人たる人の娘はかくありたきものと褒められたる發明女の、たい一筋に柔和なるのみにあらで、何處にか意地もありて申さば遊女氣質の幾分に女房氣質の肉を被せたらんが如きあせんの性格もよく相見え申候、且つ此の何處にか遊女氣質の名残の失せかぬるは西

鶴が描ける女主人公の一貫の風格にしてまた元祿女の特質ならんかと存じ候。あさんにありては其の心緒の複雑なることあせんの比にあらざ、あさんが奇禍身を汚して今さら退きも進みもならぬ大窮地に陥れるあはれもさること候へど、彼れが心機窮まりて而して革まり、老陰再び陽に往きて正に皆を決して天堂、地獄の岐頭に立てる一髮裡こそ千萬の人間觀を容れて餘あるの地ならめと存じ候。馬琴をして此の際に處せしめば如何、特別の事情なき限は彼れの間人は恐らくは直に刃に伏して心の潔白を證し候はん。近松をして此れに當たらしめば如何、『戀八卦柱曆』は答へて申すらく、近松のあさんは流石にしかく單調子ならず、結ばれてなまなかつらき亂れ夢の解くに解かれぬ義理人情に縛られ夢にだに戀せぬ中の戀となり「ア、おろかしい事いふ人じや我れひとり生きながらへ言譯が立つほどなれば二人生きても同じ事とりちがへうがどうしやうが以春と云ふ男持ちながら其方と肌ふれ寐たは定、かたちは生まれ替つても此の悪名は削られぬ」と自死の以て罪跡を清むるに足らざるを知るとともに、絶えず良心の呵責に苦むさまは表面に相見え候へど紆餘曲折は之れに盡きず、さらに裏面に一大秘密の潜むもの候はざらんや、縦令身に怪氣といへる缺點ありきとは申せ、當初の心根は微塵曇のなかりしものを斯くまで酷き周囲なかく／＼に怨めしく心ともなく振りかへりて茂兵衛の方を見れば這はそもいかに、あさんの胸底には實に夢にだに知らざりし一道の異光漏れ來て兩人の行手を照すに似たり、あはれあさんが無意識的に茂兵衛に寄せし同感是由來遠かれど此に至りて形をなすまでに成長いたせしなり、而して成長いたせる同感に周囲に對する諸多の感情及び危害を避くる生類の本能と混じて一團となり、あさん

を刺撃して茂兵衛と共に一往夢路を辿らしめ候ひぬ、即ち一方には我れを責むるの道念儼として存し、他方には責めらるゝの煩惱我無意識裡に蟠り以て『戀八卦柱層』の悲劇を成せるものと存じ候。最後に西鶴のおさんは近松のとも異なり、近松にありては道念の手にさいなまれての驅落候へど、西鶴にては濡れぬ前こそ露をも厭への意氣ほの見え道義世界に絶望せし極終に「此のうへは身をすて命かぎりに名を立」てんと一直線に煩惱に走れるおもむき有之候。斯くなるには自暴自棄の底に既に知らず／＼の戀の萌芽も潜みしか、其處までは今は研究いたさざるも、自暴自棄に流れ易き性格より察するも西鶴が人間を観ずるの本意は大抵相知れ申候。彼れに取りては道念の羈は以て狂へる意馬を制するに足らず、隙だにあらば蕩地煩惱に馳せんとするを人間の本相とせるものに候、されば西鶴は毎々人間を悪しく卑しき方より観ずるの風あり、石山寺の開帳に都の袖をつらぬるは「どれがひとり後世わきまへてまうでけるとは見えざりき皆衣裳くらべの姿自慢此の心ざし観音さまもおかしかるべし」と笑ひ、尾上の櫻咲く頃は「人の妻の様子自慢、色ある娘は母の親ひけらかして花は見ずに見られに行くは今の世の人心なり」と嘲り、なべての世のさまを觀じては「人はみなうつり氣なる物ぞかし」「一切の女うつり氣にして」など罵れるたぐひ皆之れより割り出だせるものに候。さはいへ理想の歡樂郷にあらざる限は人生は哀傷は逃れぬもの候へば、西鶴の描ける人間とて固より煩惱一偏なるを得ず。

其の頃おさんも茂右衛門つれて御寺にまいり、花はいのちにたさへて何時散るべきも定めがたし、此浦山を又見る事の知れざれば、今日のおもい出に、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋の頼をかけても、短きは我々がたのしみも、涙は枕のこぼ

の山、あらばるゝまでの亂髮、もの思ひせし顔はせを鏡の山も曇る世に、霧の御崎の逃れがたく、堅田の舟よびも若しやは京よりの追手か心のたまも沈みて、ながらへて長柄山我が年のほごも此處にたさへて、都の富士二十にもたらずして頓て消ゆへき雪ならば幾たび袖をぬらし、志賀の都はむかし語さ我もなるべき身の果ぞと一しほに悲しく、龍灯のあかるき白髭の宮所につきて神いのるにぞいこし身の上はかなし、兎角世にながらへる程つれなき事こそまされ、此の湖に身を投げて長く佛國のむたらい。

切戸の文珠堂につやしてまごころみしに夜半さもおもふ時あらたに靈夢あり、汝等世になきいたすらして何國までか其の難のがれがたしされどもかへらぬ昔より向後浮世の姿をやめて惜きさおもふ黒髪を切り出家となり二人わかれ／＼に住みて悪心去つて菩提の道に入らば人も命を助くべしとありがたき夢心。

どいへる、又はや、首尾透徹の致を缺けども末章茂右衛門が心の上の悲劇に筆を移せるくんだり、茂右衛門が案内知りたる京の町の忍びあるきにも十七夜の影法師に胸をひやし、雑談の立聞に身をふるはし、おさんの舊夫を一目見るや「たましひ消えて地獄の上の一足飛び玉なる汗をかきて木戸口にかけ出」づるなど何れか緒に觸れて閃發する道念の光に候はざらん、されど荊り盡くさるる雑草は茂り易く、間もなく煩惱の蔭さしてくらぶ山もとの闇路を復たたどりそめ最後の淵に急ぐばかりに候。五百兩の金子を持ち出だして家を走りしそも／＼より、入水と見せかけて身を逃れ念、罪科を重ねて顧みず「うれしや命にかへての男じやもの」といふにいたりて全然不義煩惱の犬となり了れる箇のおさんは豈近松の描かんとして描くに忍びざる所、馬琴の夢にだも想像し

得ざる所に候はずや、取りわけ文珠堂の靈夢はやがて我が道念の影なるに之れに對して、

何にならうともかまはしやるな、こちや之れが好きにて身にかへての脇心文珠さまは衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじいふかと思へば嫌な夢さめて橋立の松の風ふけば塵の世下やものごなな／＼やむ事なかりし。

といへる煩惱心の強梁なる、此の一節にて西鶴の人間觀を悉すに足らんと存じ候。粟田口の露草とはなりぬ九月廿二日の曙の夢さら／＼最期いやしからず世語とはなりぬ今も淺黄の小袖の面かげ見るやうに名は残りし」と西鶴の筆はうつくしけれど、おさん茂右衛門が最後決して潔しとは申されず、之れも煩惱我の是非なしとや申さん。要するに西鶴が一代の述作は一面に武士氣質、好色氣質、商人氣質のさま／＼を寫しておのづから其の骨髓となれる一道の氣魄を髣髴せしめぬ、大和魂とは之れに候べし。而して他面には元祿を寫實して其の奥に伏する煩惱狂の人間を描き候ひぬ。右に日本左に元祿の人間を束ねし西鶴が手腕亦巨ならずと申さんや。近松の世話物は乃ち元祿を門として横に不朽の堂奥に逼れるものと申すべく、之れに時代物を并べ觀るときは、近松の手には右に不朽の人間宿り左に日本國民藏れぬと見え申候。ついでながら申上ぐべきは近松を理想的と申すに疑を挟むものあるに候、此は恐らくは理想の本義を解せざるに由り候はんか。近松は實よりも眞を理想とせるが故に其の作厭世樂世の二端を絶して孰れにも近づきぬ、これ理想の本義に候はん。天地の眞は本來無邊なり、其の定着せる意味はカントのいはゆる意匠と申す一形式の外説明すべからず、説明すべきものは既に實にして眞に候はず、西鶴は固より意識して理想せんとせざりしが故に、此に論ずる限に候はねど、かの馬琴の人間を觀じて煩惱は何時

も道念の下には届し易きものとせるが如きは理想の小なるもの、其れ唯小なるがゆゑに樂世とか厭世とか黒とか白とか説明するを得る義に候、近松の厭欣黑白の矛盾を包藏して場合により何れとも見らるべき所殆ど無理想に似たるは其の大に理想的なる所以に候はずや。尙近松の論は盡きぬと他日に譲り申候。

終に拾ひて申上ぐべきは西鶴が神佛不思議に對する觀念の著く現世的人間的なりしことに候、之れはた彼れの間觀の自然の結果に候はんか。西鶴は不思議を寫せども心より之れを信じたるものとは見え、隨うて神佛と申すも神々しき所なく、其の言ふ所は皆西鶴自身の語氣にして前に擧げたる文珠の告の外

老翁枕神に立たせ給ひあらたなる御告なり、汝我が言ふことを善く聞くべし總て世間の人、身のかなしき時いたつて無理なる願、此の明神がまゝにもならぬなり、俄に福徳をいのり、人の女をしのび、悪き者を取り殺しての、降る雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高うしてほしいのさ、さま／＼のおもひ事、さても叶はぬに無用の佛神を祈り、厄介をかける、過にし祭にも參詣のさもから一萬八千十六人、いづれにても大欲に身のうへを祈らざるはなし、聞いておかしけれど散錢投げるがうれしく、神の役に聞くなり、此のまいりの中に只一人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足手息災にて又まいりまじよと拜みて立ちしが、小戻りして、私もよき男を持たして下さりませと申す、其れは出雲の大社を頼め、こちには知らぬ事と云ふたれど得聞かずに向しけり、その方も親兄次第に男を持つては別の事もないに、色を好みて其の身もかゝる迷惑なるぞ汝おしまひ命はながく、命をおしむ清十郎は頼て最期ぞあり／＼の夢かなしく云々。

とらへるなど、粹なる親爺の口小言ども聞こえて可笑しく候。何れの世にか斯かる道化たる神佛

西鶴論

のましまさんや。或はまた此等の神佛の、作者の化現とも見ゆると共に、之れに出會へる人物の心とも見らるゝより考ふれば、穿ち過ぎたる説かは存せねど、西鶴は一切の神佛不思議を主觀的のものとし、我れの心の影と解釋せるにあらざるか。『一代女』夜發附聲の章に。

一生の間さま／＼のたはぶれせしを思ひ出だして觀念の意より覗けば、蓮の葉の笠を着たるやうなる子供の面かげ腰より下は血に染みて九十五六ほど立ちならび、聲のあやされもなく負りよ／＼泣きぬ、是れかや聞きつたへし孕女なるべしと氣を留めて見しうちに、むごいがか様さめい／＼に恨み申すにぞ、扱ては昔血死をせし親なし子か悲し、無事に育て見ば和田の一門より多くて目出たかるべきものを過ぎし事ども懐かし、まばらくあつて消えて跡はなかりき、是れを見るにいよ／＼世を隈とおもひしに、其の夜明くれば、つれなや命の捨てがたく想はれし。

といへるは何等悽涼の筆に候ぞ、今日の智識より見るも優に幽を聞くの文字と申すべし。更に「總じて五百の佛を心靜に見とめしに皆々逢馴れし人の姿に思ひあたらぬは一人もなし」といへる「皆思謂五百羅漢」の條は『一代女』の掉尾の絶唱、此等に見れば思半に過ぐるもの候はん。

西鶴の文章と、西鶴の人生觀に關係ある滑稽諧謔とは他日別に一題として論ずるの價値あるべければ此には省き候。たゞ彼れの小説家としての技藝につきては到底幼稚と斷ぜざるを得ず、人物の主客を轉倒し記事の繁簡を亂し、意匠脚色の單純に失する等、今日より言へば未だ小説の形を成さずと申すべし。西鶴に取る所は其の人間觀の深刻にして、衣を剥ぎ皮を剥ぎたる元祿の煩惱社會を忌憚なく活寫せる點に御坐候、是れのみにて西鶴は近松馬琴と并べ論ずるの價値十分と存じ候勿々不宣。(完)

音樂美の價値

昔者師曠、琴を授りて清商を鼓す、「一たび之れを奏すれば玄鶴二八あり南方より來たりて郎門の境に集まり、再び之れを奏するとき列し、三たび之れを奏するとき頸を延べて鳴き翼を舒べて舞ふ、音、宮商の聲に中たり聲天に聞こえぬ。」師曠又琴を授りて清角を鼓す、「一たび之れを奏すれば玄雲あり西北方より起こり、再び之れを奏するとき大風至り大雨之れに隨ひ、帷幕を裂き粗豆を破り廊瓦を墜としぬ。」(韓非子)。音律の妙に感じては行く雲も停まり、梁上の塵もおのづから動きぬべし、古より音樂の美を説けるもの多くは其の人心に入るの深きに驚き、之れを讀して人寰以上の消息となす、必竟音樂美の眞價値は幾許なるか。此の問題に答ふるはまた音樂とは如何なるものなりやとの問題にも兼ね答ふるなり。吾人はまづ之れを最も音樂の讚美者たるシヨオペンハウエルの説に見んとす。其の意に曰はく

(前略)音樂は他のすべての藝術と全く別なる地位にあり、吾人は之れをもて一も存在事物の想をさながらに寫し又は繰り返せしものとは認め得ず、而も尙音樂は至高の藝術たるべし。(中略)音樂は現世界其の物、否個々物界を集成せる諸多の想其の物と同様、直接に意其の儘を權化し臨摸せるものなり、此のゆゑに音樂は決して意の權化たる想を覆寫するを務とする他の藝術と等しなみに見るべからず、これ音樂の人心に入るのしかく深くして、人心を動かすのしかく大なる所以也。他の藝術は單に影を傳ふれども音樂は形を傳ふるものといふべし云々。

音樂美の價値

音樂美の價值

尙審に之れを釋せんにはシオベンハウエルの哲學を説かざるべからず、是れ本論の許さざる所、要するにシオベンハウエルは天地の根本を意(慾)とし、之れを助けんために想(理)出で來たり此にはじめて星辰山河人獸草木の萬象を成せりとするものなり。月の月たり花の花たる故は即ち想にして、更に此等の想をして想たらしむるものは意に外ならず。意は形の如く想は影の如し、而して詩歌、繪畫のたぐひは此の影を描くものなれど、ひとり音樂のみは徑に其の形を髣髴せしむ。たどへば

意(想)即ち天地——詩歌、繪畫

音樂

この圖の如し。此をもてまた音樂は天地の事物のさまと段々相呼應して、一點の隙をも剩さず、無量の形式(事相)かつ種きかつ來たりて、懷中に曠功の住を裏み、廣大無邊の迷室裡に轉帳するものは個の世界相なり、音樂はすなはち眞にして圓なる一幅の世界相畫。しづのみならず人間の感情も亦皆この妙調には漏れず、喜や悲や憎や憂懼や希望や、其の量に限られず、總べて虚形にして内容空しく、譬へば物質なうして心靈のみなる世界の如し。

所詮音樂は天地の最上の形式に象れるものといふべし。其れたい形式なるがゆゑに

吾人之れに聽き入るときは、自然其を實にし、想像をもて肉し骨して、天地人諸般の光景を其うちに觀んごす、されど概していふときは、斯かるは寧ろ縁なきものを濫に附會するの弊あるのみにて、音樂を解し音樂を觀むには益なし、眞に音樂を知らんごせば其の純粹の本来に頼らざるべからず。

内容は充たし得べきも充たさずして尙能く美なるを得、之れ音樂の高上なる所以なり。

シオベンハウエルは此の如く論じ來たりて、細に天地人の現相と音樂の調子と相應する次第を説きぬ。げに音樂の、虚なる形式の美にして、唯、高低大小の音色の組み合せ方を命脈とするものなるはシオベンハウエルの言へることし、音樂の美は審美學者のいはゆる形式の美に屬し圖紋と同一の地に位するものなり。夫れ種々なる色彩と線面とを組み合はせて、變化の裡に統整せる所あらしむるは圖紋の美なり、色彩線面に代ふるに音色を以てし同じ手續によりて美を成ずるものは音樂なり、部分の變化益、多態なることも全軀の調和愈、一如に歸するの形式と、此の形式以外に花といひ月といふが如き定着したる意味なきこと、の二點に於ては兩者擇ぶ所なし。而して一切の美の根原は要するに此の多態の一如に即するおもむき、差別即平等の形式にあり、只造化之れを作るときは、吾人感じて花鳥風月といふが如き意味ありとなす、之れに反して人間は全く新なるものを創造するの力なきが故に、あるときは公然造化の産物たる花鳥、風月、人間等を藉りて心底の靈調を寄す、いはゆる内容美とは之れなり、あるときは又私に造化の産物たる色、線、音を利用して徑に造化に徹するの妙曲を彈ず、形式美とは之れに外ならず。詮ずる所彼れ此れに貫通する美源は差別即平等の形式にあり、而してシオベンハウエルは之れを意の姿なりといふ、之れ彼れが哲學の特色なり。吾人の信ずる所は根本より之れと異なり、件の形式を以て直に天地人に遍き大造化の理想の圖形となす。其は兎まれ、斯かる形式を美の源泉となす以上は、單に之れのみを現せんとする音樂と、之れに造化の意味を加ふる他の藝術とは、美たるの價值何れか高き、何れか低き、換言すれば形式美と内容美との優劣如何。これ必ずしも斷じ易からざる也。

此れに答ふるに先ち、美術の形につきて論ずべき問題あり、時間的美術と空間的美術と、何れか美を發揮するに便利なるといふことは是れなり。

時間美——詩歌等——音樂
 空間美——繪畫等——圖紋

(此のうち詩歌は想像に屬するの美術として全く他の美術と區分するものあり、此には取らず)

思ふに美の極致は變化の益、多きと共に統一の益、密なるにあり、故に美の旨を深からしめんには、まづ變化を匠むこと最も自在ならざるべからず、詩歌、音樂は此の點に於て繪畫、圖紋等に優る。繪畫、圖紋の類は上に表示せるごとく空間を主とするの美術にして、僅に看るもの、連想によりて時間美の分子を加へ得べきのみ、ラオコオンの彫刻像を見てラオコオン父子が當時の苦痛の心情に同感するが如きは此の例なり。されど空間は概して物質的を意味し不變を意味し一を意味し、上にいへる變化自在と相容れず、繪畫、圖紋は此を以て美を現すること十分なるを得ず。詩歌音樂は乃ち時間を主とするの美術にして、心靈的を意味し變化を意味し多を意味す、固より時間的美術にも一失はありて空間的美術の苟も變化の來たらん限は統一するを得べきに引きかへ、時間的美術は變化の容易なるに比例して統一を成する能はず、變化餘ありて統一足らざるの傾あり、此の點に於て音樂、詩歌は繪畫、圖紋に劣る。然れども人間の事業はすべて變化の側より着手し、統一は自然の結果として其の上に来たるを常とすれば二者中變化の容易なるものの勝を制するは勿論なり、到底時間的美術は空間的美術の上に居るべきものといふべし、詩歌の繪畫

に優り音樂の圖紋に優るを怪まんや。

さらば形式美の一なる音樂を以て内容美なる詩歌、繪畫に比すれば如何。内容といへる中には複雜の意義籠りたれど、茲には單に天地の存在物に標依して生ずる種々の名目關係なりと解せん。而して詩歌、繪畫は此等によりて美を調ずる者なりとすれば、内容美は形式美に比して制限せらるゝ所あり。何ぞや。人間は本來造化の最高産物たるが故に、其が心に躰する理想の形式即ち美は、時に緒に觸れて鏗然として金玉の響を發し眞宰亦泣くの高調をなす、然るに花鳥風月といふが如き定まれる名目既にあるときは、融通無碍の形式却りて之れが爲めに其の虛靈の性を害せられ、束縛せらるるが故に、此の刹那、人間の此の高調を寓し盡くさざるとあるべし、人間の理想を荷ふに堪ふるものは亦人間以上の存在物ならざるべからざればなり、音樂は此の際に於て詩歌、繪畫に優れり。但し嚴に曰ふときは、詩歌と繪畫とは別趣にして、詩歌は人間を主題とするが故に能く上の制限を脱し、如何に微妙なる情緒をも略表し盡くすを得べし、音樂の詩歌に及ばざる場合此にあり、繪畫は之に反して、其の題目多くは花鳥風月、然らざるも元來空間的といへる埒内にあるが故に、時間的以上なる心靈の變化に應ずるを得ず、終に項を音樂の下に伏するなり。客觀的觀察地に立ち美術其の物に粘して論ずる時は、音樂は詩歌の下、繪畫の上に位すべきものなると以上の如し。若し夫れ形式美の一なる圖紋の美の論ふに足らざるは多言を須たむ。更に美術を賞翫する人の心さまに着きて主觀的に論ずるときは、音樂の特色他に一條あり。音樂の美は形式の美なるが故に定着したる意味なく、定着したる意味なきが故にシヨオペンハウエル

のいへる如く聽者の心一つにて如何さまにも我れより意味を附し得べし、されど之れと共にまた、構へて意味に誘惑せられ審美の大道を逸するの恐なし、之れ他の藝術の及ばざる所なり。繪畫以下は姑く措き詩歌にありては其の描出する美は音樂に比して高等なりとせんも、材料とする所凡て世間聞親の事柄なるがために、審美の素養なきものは勢ひ實感に惹かれて觀美の境に到り難し。音樂は美の生命のみを描き出だしたらんが如きものなれば、審美上不具の嫌はありとも、頭に實際生活の座に汚れたる人の心を觀美の淨土に導き易く、美の性質極めて剗切なり。春温は育せざるものなけれど、堅氷若し之れに融けずんば、取りて熱火に上すの直截なるに若かず、樂を奏して蠻人の心を和らげ得るは此の理なり。さればサツカレーも「大奸人は歌謡を愛して之れに融和せらる云々」(『Newcomes』)と云へり、楓葉萩花豈啻に江州の司馬を泣かしむるのみならんや。

音樂の本面目は斯く形式美の邊にあり、されども之れを發達せしむるに當たりては、限なき人情の變化に伴はしむるを好方便とす、即ち形式美をして内容美に調和せしめ、音律の美をして意味の美に合せしむるなり、我が國にて俗樂の雅樂に比して著く進歩せるは職として此の理に由るか。就中音律と意味との調和普く成就して聽くに堪ふるものあるは淨瑠璃なり。されど其のうち今日専ら行はるゝ義太夫節の如きは多く既に意味の方音律に超え、主客の地位轉倒して、音樂といふよりも寧ろ一種の影芝居といふが如きものに近きぬ。是らも藝術として妙なる節なきにあらざれど、過ぎたるは猶及ばざるが如く、音樂としての價値は薄らげり、淨瑠璃の妙は飽くまでも調曲

を主とする所、いはゆる音律的なる邊にあり、此等の論は他日題を改めて論ずることあるべし。要するに音樂美の價値は一方に於て詩歌、繪畫に優り、一方に於て詩歌の下、繪畫の上にあり。

『伊達競阿國劇場』を觀て所謂夢幻劇を論ず

なべての事物、此處に一短あれば彼處一長あり、夢幻劇もまたこの數には漏れず。頃日歌舞伎座に團十郎、九藏の兩優相會して舊劇中の精華たる『伊達競阿國劇場』を演ずるや、觀客の歡迎、近年稀に觀る所なり。固より客脚の繁きと人氣の熾なるを以て、直に當社會の好尚を議せんは非なり、彼等の多數は俗客のみ、眞に美を味ふに足るの好尚あるにあらず、彼等の劇を觀るは、劇を觀るにあらずして藝を見るなり、否藝を觀るにあらずして俳優を觀るなり、此を以て團洲場に上れば狂呼し、九藏場に上れば喝采す、而して其の他を知らざるなり。いかにこれを以て劇に對する社會の好尚を判すべけんや。されば觀客悉くかくの如くなるにあらず、彼等の幾分は劇其の物にも興を感ず、夫の多少見識あるものにして頗る夢幻劇の妙を喋々するは大抵此の部分に屬するなり。但し此等の人々も雖も多くは審美的標準を欠き往々夢幻劇の弊處をだに和唱するの嫌あり。隨つて間々夢幻劇を以て劇の極致の如く言ひ做し、其の弊や我が國劇をして發達進暢する能はさらしめんとす。必竟は夢幻劇の眞價のいまだ曾て評定せられざるが爲也。逍遙氏嘗て本誌に於て夢幻劇の利弊を論じたりしが世間の大半は其の旨を誤解せるに似たり。同志吾人の再び筆を授るまた已むを得ざるにいつるなり。

所謂夢幻劇の美とは何ぞや

伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

四六

劇はもと人間を主題とするの美術なり、此の故に之れが極致を求むれば、精神と事柄と、内外具足したる人間の全相を活現せんを要す、然れども此は夢幻劇の能くする所にあらず、夢幻劇の美は僅に其の一面を具するのみ。凡そ事柄と精神と相岐かるるや、精神は飄然として作家の主觀に歸り、事柄のみ冷なる形骸となりて客觀に残留す。而して主觀に歸れる精神は、作家の影となりて、或時は抒情詩中に寓し、或時は叙事詩中に寓す。客觀に残れる事柄は乃ち叙事詩を織り成すの根原なり、夢幻劇の美の立脚地はこの以下にあり。夢幻劇は事柄の美を生命となす。しかも單純なる事柄の美は淺弱にして長く人心を撃ぐに足らず、こゝに於てや夢幻劇は其の補給を上下兩面に求めたり。一は一場一時の事柄にあらゆる手段を加へて、悲しき事柄はあくまでも悲しく、凄き事柄はあくまでも凄からしめ、以て全壁の上に荒める觀客の同感を零碎の裡に收めんとする是なり。他は人事の自然の發展を外にし、人事を畫家の丹青と同視し、之れを材料として變化の上に變化を構へ、單に目前の變化といふことによりて形式上の美を織り成し、以て觀客を喜ばしめんとする是れなり。されば夢幻劇特有の美は主として(一)凄し悲しなどいふ斷片的感情の閃發すること、(二)目前の變化の華やかなることの二點に存すといふべし。

其の價值

之れを『伊達競阿國劇場』に見る、「竹の間御殿の場」に於ては、忠義心といふ一種の概念を代表せる政岡を中心とし、これを杜くに同じく残忍邪曲なる女性といふ概念を代表せる八汐を以てし、

これを通ずるに其の場の最大權力者たる無邪氣なれど君主の心ある鶴喜代を以てし、以て一種の漠然たる感激、即ち概念的感情を挑發するを主眼とせり。されば只感激の情と其を起こさんと苦心する作者の技巧とが主となりて殆ど箇々の人物なし、箇の政岡だになし、况や其の他の人物をや。「飯禁の場」はた然り、同じく忠義心の塊たる政岡が親を滅せざるを得ざる悲哀の情(煩惱)と、其を激成すべき具とはこれあるも、個人的政岡なく、其の他の人物もなし。要するにこれらは皆一時一處の感情美のみ、これらとても人間美の斷片たるには相違なけれど、斷片に一指頭を染めしのみにて大鼎の美味を悉せりとおもふは誤れり。夫の劇を觀了して觀棚を出でしとき、又は同一劇を觀ること再三に及べるとき、懷裡淡然として水の如く、餘情の恍惚たるものなきは、其の美の彼れが如く稀薄なるに由らずんばあらず、一時一處の人間美は繪畫尙よく之れを現すべし、劇の面目豈此にあらんや。而して夢幻劇は常に此の美を頂點とす。『伊達競阿國劇場』の作の本意は一半此にあり。

淨瑠璃『伽羅千代萩』の如きこの意ます／＼著きを見る。因に記す、幸堂氏が考證の一節に曰はく、

御承知之通『伊達競阿國劇場』は安永八年の作「伽羅千代萩」は天明五年の作此間七年あり阿國劇場は(三浦屋)(高尾殺し)(豆

腐屋)(御殿の毒味)(椽下)(女之助切腹)(埴生村)(同境場)(對決)等也(今先代萩は手元になし)果の狂言は古くよりあれど此

時阿國劇場に組込みたるなるべし此阿國劇場は操より歌舞伎にうつりたるものあらず却て歌舞伎より操にうつたるものなり

其譯は安永七年の壬七月中村座にて『伊達競阿國劇場』と云ふ名題を以て興行せり此狂言中には不破名古屋淨世又平などを加

へたり其他の役割は丸本の通り伊達騒動の狂言は是まで必ず仕組であるものならんか明かならず伊達何々といふ名題に赤松

伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

四七

伊達鏡阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

四八

則祐の役割あるは多分原田の變名なるべし又其前にも山名細川仁木彈正渡邊民部宛獅子男之助などいふ名前はあれど伊達の事は思はれずされば安永七年の阿國劇場が匂ひの高き伊達騷動成べし

又伽羅先代萩の方は結城座の縁芝居に書卸したるもの併し是は其頃伊達騷動實に近く作りて態と役名を違へたるものか或は又貝田勘解由が事實に縁ある名かは江戸歌舞伎にては此名題を文政頃まで見ず大阪にては寛政末頃より此名題役名を用ひたり尤も江戸歌舞伎にても名題を替て此筋を用たるものがあるべし既に飯焚は先代萩の方にあるべし阿國劇場にはなし乳母は外記左衛門の娘月岡なり

先代萩貝田勘解由は黒仕立の忍び姿が仕來り見えへて大阪の團十郎と呼ばれたる團藏(四代五代共)此拵らへなり

阿國劇場の方は椽下に仁木は出す修験者貴藏院なり(先頃明治座にて左團治の勤めたるは則ち是なり)長上下の仁木は先代萩の勘解由を直したるものなるべし尤も風色の好みにしたるは五代目松本幸四郎(和泉町)にて頃は文政年中ならんと思はる(此調は今閑暇なければ暗記のまゝ)此役は尾上松緑が黒の長上下にて勤めし事あれば夫を手本として幸四郎が風色に工夫せし或は工夫者の松緑の事ゆゑ既に風色を用ひし事ありしか尙考ふべし云々

次に悪人と見えしお慎の忽にして善人となり、泥溝鼠の倏爾として人間に化するなどは夢幻劇の慣用手段、此方に丹装火の如き男之助あれば彼方に蒼顔死に似たる仁木あり、沙庭上に長袴踏みしだきて入り來たる勝元の優長は髯毛を援きて印影を割らんとする彈正の(實際あるまじき)細慧に對照して、宛然一幅の好錦畫をなす、正に是れ夢幻劇得意の處、一意目前の華やかならんを願へる結果なり。この種の形式美の人間美に對するは、曾金朱燦爛たる極彩色畫の圓山、狩野の名畫に於けるが如し、その相距たるの遠きは言を須たず、しかも舊劇の作意の一半は此にあり、以

て前の感情美と變びて夢幻劇の美を全うす。

夢幻劇の美は改善し得べきか

總べて美は一等進むごとに下等なるものを打破して自家内に沒了せんとするの傾あり、在來の夢幻劇を修正補綴して人間美に接せしむるを得とせば、之れと同時に、夢幻劇の眼目たる感情美(感激、悲哀など)と形式美(變化多態のあもむき)とは漸く薄れゆかざるを得ず。吾人は固より夢幻劇に戀々するものならねば、之れに代ふべき良の劇美をたに得ば、何ぞ劣等美の廢るを傷まんや。然れども、今日の夢幻劇を僅に補修したるのみにて夢幻劇の域を脱せしめんとするは、彼の粉壁を藉りて和屋を洋風に擬せんとするのたぐひ、殆ど望むべからざるに似たり。若し此の務を成ずるに足るの大手腕出でたりとせば、シェークスピア、ギョオテのブルーターク、ボツカチオ等に於けるが如く、之れを材料として寧ろ新劇を創すべきのみ、何を苦みてか補綴の蔭に踟躕するを要ひん、他人の作を補修して名什を成せるものは古來稀なり。所詮夢幻劇は永く夢幻劇として保全するを得策となすに似たり、若し之れに改善すべき點ありとせば、其の標準は一處々々の感情を切ならしむるにあるべし、若しくは眼界を單調子ならしめざるにあるべし、約言すれば益々夢幻劇の本意を發揮するにあるべし。既に成れるの夢幻劇を取りて寫實劇に調和せんとするが如きは、中庸を成ずるの道に背けり。更に之れを全と分との上より見るときは、部分に重を置きて全幹の統一を輕ずるを夢幻劇の本色とす、彼の全劇の筋をば觀者に預けて、面白き齣のみを選

伊達鏡阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

四九

伊達義河園劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず

五〇

り出で演ずる弊風の如きも、畢竟此に根せるなり。全軀を直うせんために部分の曲折を矯め、論理をもて現實をもて夢幻劇を律せんとするときは、夢幻劇の美は亡すべく、而して真正なる劇の美は來たらざらん。吾人は櫻痴居士の新作劇に往々斯かる傾あるを見る、今回の中幕『向井將監』の如きも、縱令舞踊を眼目とすとはいへ、其の一なり。或は以爲へらく、かくの如く論ずるときは、夢幻劇は毎々大時代の摸型を株守して寸毫も移るを得ざるべしと。何ぞそれ然らんや、俳優にして當役の精神あり當劇の本意を解するを得ば、之れに因きて時の好尚と推移し行くは必然の數なり。花道の仁木の黒裝束いつしかに長上下となり、更に一轉して鼠色とあらたまれるが如きは、趣味を損せざるのみならず、却りて之れを増すの妙あるもの、要は夢幻劇の美を失はざるにあり、此の際に鼠と人間と同むかるべき謂なし等の理屈を挿むべけんや。吾人はこの點に於て團十郎一派の活歴主義に不平なり、及び故なくして忽ち活歴を讀し忽ち之れを眩する劇評家に慚らず。

歌舞伎座所觀

明治の現在はおのづから徳川の過去の繼續と異なり。世を擧げて夢幻劇の外を知らざりし時は既に去り了んぬ。今日の社會は明に一轉歩して性格劇をさへ欲望せんとす。今もし性格劇を望むの心を以て全く別の礎に立てる舊劇を改竄せんとせば、其の弊や必ず舊美を失ひて新美をも得ざらん。團十郎一派の諸優が舊劇を演ずるに當たりて漫に寫實の分子を加へんとするは、見識に似て

却りて見識ならず。勿論團洲の熟練と精神とを以てせるがゆゑに、夢幻劇の趣味を損せざる限に於ては、其の注意改良の結果めでたかりしもの「竹の場」「飯焚場」中の處々に見えざるにあらず。されども、勝元一人は満足の技を演しながら全舞臺の呼吸合せずして、華やかなる對決場の活氣を挫きたるが如き、又は長袴の裾を括りての出は、理に合ふにもせよ、目に訴へし前人の意匠を破壊せしまでにてさしたる益なきが如き、又は仁木落命の場の餘りに多人數なりしたため、凄しといふ感を薄くせるが如き、又はさなきだに貫目なき瀧十郎に近世の寫眞を被らせて彌々貫目を減じたるが如き、(仁木の夢幻劇を許さば山名も鬼貫も共に舊夢幻劇を用ひて見る目なほよくするが、此等は皆なまなかに現實を摸せんとして却りて美趣を損し、いはゆる角を矯めて半を殺すに終れるものなり。或は對決の場に於て三猿に精神の闕けたりしを咎むるものあり、げに團洲に比すればこの非難あるべし、されど夢幻劇の舞臺に立てるものとしてはさまでの事なし、彈正、勝元、音響呼應の妙を缺きしは、必竟一は舊劇の精神を以てし、他は寫實の心を以てするに由るか。縱令また此の間仁木其の他をして勝元と同呼吸ならしめたりとせんも、斯くては徳川法庭の實況をこそ寫さめど、其の全局に美神の宿るや否やは覺束なし、况やさらに之れを他の幕と連絡せしめたる全劇の美に於てをや。活歴派の弊處數へ來たらば尙他にもあるべし、自己一人寫實の旨を實行して他を顧みず、甚しきに至りては、他と折合はずと知りつゝ我見を押し遂ぐるが如き、團十郎の三省すべき所なり。俳優は劇を演ずるよりも自家の藝を誇示せん覺悟にて場に上り、觀客はた同じ意を以て之れを迎ふ、此の如くにして斯道の進歩を希ふは難いかな。

悲劇と人生観

(甲) 厭世観の三類及び其の要件

樂世といひ厭世といひはた樂天といふ、其の義を究めて十分ならんとせば、先づ人生の原理より説き起こさるべからず、されどそは本論の能する所ならねば暫く措きつ。世の詩人を論ずるもの動々もすれば則ち惘然言を立て僅に左右の一端を揣摩して厭世といひ樂世といふ、畢竟推理の精しからざるが故也。吾人は心理學者の所論以外に、哲學上より厭世観の構成せらるる所以の一斑を論じ、其の種類中著きもの三を擧げ併せて之れが要件を示さんとす。

人性の兩面

吾人をして冒頭第一に前定せしめよ、曰はく、人間の本然には一見相反するが如き兩端あり以て天地萬有の二元の面と相應すと。所謂兩端とは何ぞや、靈性と、肉性、理性と、感性、道心と煩惱、博愛と利己、社會性と個人性、凡そこれらのものは精確なる點に於て多少相違する所あらんも、大體は其の義相通じ、一は平等圓融の旨を成ずるの根本となり、他は個々差別の相を現するの原理となる、未然是知らずといへども、過去及び現在の經驗以内に於ける事實は此の如し、吾人の前定せんと欲するはこの事實なりとす。復言すれば、人間の本性は由來一なりとせんも、表裏相即の關係によりて一面に平等心と現じ、他面に差別心と現じ、相對し相背くの勢を示す、是れ

經驗上否むべからざるの事實也。吾人をして唯此の事實を前定せしめよ、而して其の何ゆゑに然るかを問ふこと勿かれ、若し夫れ之れが價値を批判して平等と差別とを是非軒輊するは、やがて厭樂二端の岐かる、所以にして、後段の論點なりとす。

快感苦感の意義

快苦の意義を論じたるもの古來尠からず、或は之れを關係比較の上より見て度の大小に歸し、或は之れを意識の原理より推して消極積極の論をなす。今快感苦感の意義を考定するに先だち、本論の第二の前定として、人間は欲を有するもの、即ち欲の動物なりといふべし。饑えて食を欲し凍えて衣を欲するは煩惱の欲なり、仁を成し義を成さんと欲するは道心の欲なり、かゝる意味にて人間は欲の動物なり。また欲は必ずしも意識に入らざるも、知らず識らず本然の底にありて活動するを得べし、故に意外に得たる物に對する満足も同じく欲の満足といひて不可なし。要するに人間は緒に觸れて雜多の事物を意識的、無意識的に將欲す、人間の人間たる活動は主として此の欲に基く、之れ争ふべからざるの事實なり。

さて此の前定によりて快苦の義を案ずるに、二條の説明を得べし、其の一に曰はく、他の一切の事情を除き單に快感苦感の二者をのみ抽き出だして計量するときは、快は人の得んと欲するもの、苦は人の避けん欲するものなり、即ち快苦の二者を欲の尺度に擬するときは、快は欲の向ふ所、苦は欲の拒む所といふべし、隨うて快を樂ひ苦を忌むは人間の自然なり、故なくして之れに背く

は自然に背くなり。若し夫れ欲するが故に快なるか、快なるが故に欲するか、此等は此に辨ずるの要なし。其の二に曰はく、快の來たるは慾の充たされたる場合にして、苦の來たるは欲の阻まれたる場合なり、但し斯くいへばとて欲が直接に快を目的とし苦を目的とすといふには非ず、欲の目的は別に之れあり、別に之れあるの目的に達せると否とに由りて報酬に快苦の品ありといふのみ。或は難じて曰はく、人茲に忠義を成さんと欲すとせよ、而して成し得たりとせよ、其の結果は往々却りて苦なるとあるにあらざやと。これ僻見のみ、既に便宜のため人間に兩面あるを假定せる以上は、これによりて此の疑を解かんと易し。おもふに欲の満足と不満足とは常に該の欲の主に就きていふべきものか、忠義といふが如き平等心の欲を充たしたる場合には、宜しくまた平等心の快苦如何を考ふべし。上の例の如きは此の標準を誤りたるの論なり、平等心は忠義を將欲し之れを得て快く満足しつ、たゞ差別心は之れがために不快を感じたり、論者乃ち此の差別心を苦を誤り認めて平等心と混淆し、さて平等心は欲する所を得たれど結果は苦なりきといへるなり、この事尙後に論ずべし。

人生の目的と快苦

人生の目的の如何なるものなるかは此に論ずべき限にあらざ、され之れと快苦の情とは如何なる關係を有するか、總じて目的の成就したる結果の快なるは、猶欲の遂げられし瞬間の快なるが如きものなるか。此問題を解釋せんとせば、所謂目的と欲との關係を明めざるべからず。吾人は

茲に便宜の爲兩者を合一すべしと雖も、欲を全く一種の衝動のみとし、之れに目的を附して指導するものは別の原理なりとするも一説なり。本論にては差別心と平等心とを并べ掲げて、差別心には差別的欲あり、之れを指導する差別的目的あり、平等心にもまた平等的欲あり、及び之れが標本となるべき平等的目的ありとするが故に、欲と目的とを別論するの必要なし。換言すれば欲するが故に目的とするか、目的なるが故に欲するか、此れらの先後は論ぜざるべし、たゞ既に目的といふ限は、必ず欲するものならざるべからずといひて已まんのみ。蓋し平等心も差別心も全く欲せざるものを將て目的とするが如きは自然の人情にあらざ、隨ひて目的の達せられたる結果は常に快感ならざるべからず、甚くとも之を欲したりし半面は快と感ぜざるべからず。之れに因りて是れを觀れば、人生の目的とは人間の最も欲すべきもの、又現に欲するものにして、之れを得れば快を感じ、之を失へば苦を感じるものなり。言ひ更ふれば、快樂は直に人生の目的にあらずとされど、目的は必然快樂の色を帶着せるものならざるべからず、快樂は目的を達したる結果なり報酬なり、快樂説と苦行説とは此の點に於て調和すべし。因りて思ふに人生の眞の目的は感性、理性の兩者を等しく満足せしむるもの即ちいはゆる差別、平等調和の域にあるものならざるべからざるの理、此れに由りて益明なり。而して我等人間は精進以て此の目的に近づき得べし、欲する所に從ひて矩を踰へざるの妙境は蓋しこれならんか、此の點に於て人生は多望なりといはざるべからず、吾人が世の厭世論に同ずる能はざるの根據此にあり。

目的と手段との齟齬より來たる厭世觀

既に目的といふ、希望して而して之れが手段を取れるものならざるべからず、到達すべからずと信ずるに及べば、目的たるの性は亡すべし。されどまた獲得せんと欲したりし目的の時に或は獲得せられざるとあり、所謂目的と手段との齟齬これなり。而して欲したるものを得ざるは苦なること既に論ぜしが如し、人もし此の見を推し廣め、人生の目的限なくして手段の之れにかなふべきなきを信ずるに至らば、此に目的の破壊を來たし、人世に絶望して之れを厭離するの已むを得ざるに終らん。人間は欲の動物なりといふの一業、既に如何さまにか欲するの目的あるを前定するが故に、此の目的をさへ破壊せざるを得ざる自家撞着の苦境は、人を厭世の淵に驅るもことわりなり。斯くして來たる厭世觀最も世に多し、青春多望の徒が坎坷數奇、失敗に失敗を重ねて遂に現世に絶望し、自家の目的を自家破却し去るに了るが如きは皆此の部に屬せり。吾人の論せんとするは此の種の厭世觀の由來なりとす、之れに凡そ三種あり(一)人生の目的を平等心差別心兩面の満足に置けるもの、(二)之れを平等心の満足に置けるもの、(三)之れを差別心の満足に置けるものこれなり。以下之れを別論せんに、人生の目的成就したる結果は必然

(一) 平等心差別心兩面の満足

を來たすべしと信じたりしもの、一朝この兩面の到底衝突すべもの、調和の望なきものなるを

見るや悲觀之れより生ず。一時の例を援きて曰は夫の平の重盛が忠孝兩全の途なきに絶望し甘じて死地に就けるが如きは是れなり。世或は忠と孝との衝突を目して、直に二種の平等想の衝突せるものとす、されど此は誤れり。當時法皇と清盛との不快は、理により是非を匡さば歸着する所あるべし、假に清盛の暴横を非とし、法皇の之れを惡みたまひしを理なりとせんか、單に平等心の上よりいは重盛たるもの直に馳せて法皇の御味方に參すべきのみ、何を憚りてか父を顧みんや。此の際重盛が父を見ること路傍の人の如くなるを得ざりしものは必竟親を先にし疎を後にする差別想の無下に蔑視し去るに忍びざるものありたればなり、孝もし此の如き意義なりとせば孝は差別心に根せるの徳といふべし。親を捨つるに忍びざるは差別心の徳なり。理に就き君に奉ずるは平等心の徳なり、(此等につきては論あるべけれど此には省きつ)、しかも二者共に善なり軒輕し易からず、此に於てか衝突の已むべからざるものあるなり。此の例を全人生の上に應用するときは、則ち本條の厭世觀となるべし。さればこの種の厭世觀を構成するの要件は次の三條ならん、第一、人間に差別平等の兩面あるの事實を認め、第二、この兩面ともに眞にして輕重の分なきことを信じ、第三、而して兩者の到底調和すべからざるを斷定すること是れなり。兩者の調和するを容すときは樂世主義に入るを得べし。若しくは厭世に陥らざるを得べし。次に人生の目的は

(二) 平等心の満足

に伴ふを以て足れりとするの論者あらんか、人生は冷なる理性の満足に終るべし、差別心の欲の如きは始より存在すべからざるものとなるべし。而も實際の人世にありては、差別の欲禁ずるに由なく、精進に精進は重ねども、動もすれば乃ち退轉して煩惱の濁を着す。換言すれば、本来存すべからざる差別心の存せるため、人生は汚濁の淵となり煩惱の宅となる、厭離穢土の念は之れより生ずるなり。ストア学派、Kantian Teleologia は知らずといへども、東洋思想中にはこの類の厭世観最も多し、之れに要する三件は、第一、差別平等の両面あるの事實を認むること、第二、此のうち平等心を是とし眞とし差別心を拒排すること、第三、しかも差別心の到底現世にては脱離し難きを信ずること是れなり。差別心を抜去すること容易なりとするものは厭世に到らず一派の小説家等が描く賢人君子は大抵かゝる人物なり。最後に人生の目的

(三) 差別心の満足

を來たすにありとし、平等を否定するものあり、而も尙ほ否定したる平等心の抑へ難きありて我れをして差別の欲に耽るを得ざらしむと觀せんか、此にも厭世觀を生ず。之れに要すべき三件は、第一、差別平等の両面あるの事實を認むること、第二、差別心を眞實とし平等心を妄とすること、第三、されど尙現世にては平等心の変除し盡くし難きものなるを信ずること是れなり。而して此のたぐひの厭世觀は實際あること稀なり、これ一には人間の本来の到底平等心を無視し得ざるものありと、一には若し之れを無視し得る。どの人ならんには、一時抑壓し去りて差別心の欲に耽る

人生の目的を苦とするの厭世觀

こと難からざるとに由るならん、此れらの人はやゝもすれば劣等なる快樂主義に入るなり。

前段論ぜし所はすべて先づ人生の目的を立て、而して之れに達し得ざるに及びて之れを破壊し去り、人生を厭ふに終るものなり。或はまた、人生の目的を以て苦の結果を生ずべきもの、即ち人間の避けんと欲するものとすの論あり。此はみづから目的を立て、みづから破却するものなり、何となれば、既に目的といふ限は之れを得れば快なるべきに却りて苦なりといふは矛盾なればなり。おもふに此の論は前に挙げたる(二)(三)等の場合の變形せるものにして謬誤を含むの論たり。試に(二)の例に就きて言はん、論者以爲らく人の目的は平等心の満足にあり、されば其の結果の苦なること例へば義のためには愛をも捨てざるべからざるの類也、人間何を苦みてか強て斯かる世に生存し、斯かる不快の目的を追ふを要ひん、世にある限は苦しき目的を追求せざるべからず、死してこの苦を解脱するの安に如かざるなりと吾人は此の説を難するに一種の快樂説なりといふを以てせざるべし、快樂と目的との關係は前に論ぜし如くなればなり。此の説の缺點は平等心と差別心とを混淆せるにあり、平等心の欲する所を成し得たるの結果は、平等心其の物の満足となるも差別心には苦となること、人事往々にして然り、論者は此の際に誤謬の見を挿みて、差別心の苦と平等心の快とを混同したるものといふべし、若し此の如く平等心と差別心と快苦相逆ふを咎めば、釀りて(一)の厭世觀に參すべきなり。夫の仁義は人生の目的なれども之れを成ずるは

苦なりといひ、又は肉體の快樂は人生の目的なれども之れに耽けるは苦なりといふが如きは、概ね此の謬見的厭世觀にして、其を構成すべき要件は、第一差別平等の両面の存する事實を知り、第二其の一方を是認し他方を非認し、第三非認したるもの、苦を是認したるもの、満足の上に蒙らしめて是認したるもの其の物の満足は苦の結果を生ずと斷案するにあり。

外に始より人生の目的を否むの論あり、此は人生に目的なしとし、一躍して他界に之れを求むるものなれば、立脚點のつから以上の論と別なり。

また人性の両面を認むるに及ばずして厭世觀を構ふるものあり、道理以外、平等以外に人生なしとするもの、及び煩惱心、差別心の欲を追ひて顧みざるものは是れなり、平等の一面に埋頭するものは、萬事この範圍に於て自由を成壞し得べきものと信ずるがゆゑに、反對の原理なる差別の、傍より之れを羈縛するを知らず、幾たびか驅逐して遂に吾生の厭ふべきを觀するに至る。差別の一面に執するものは乃ち一意煩惱の欲を追ふのみにて、平等の大法の高處より之れを限れるに心つかず、此に於てか歡樂の極めがたく富貴の恃みがたきを觀じて我れと厭世の淵に趨くなり。されば此等は畢竟するに前に掲げたる三類の何れかに歸宿すべきものにして、此のまゝにては取り出で論ずるの價値なしとす。

(乙) 悲劇の種類を論ず

上

悲劇はおよそ三面より論ずるを得べし、第一悲劇の哲理、第二悲劇の美、第三悲劇の結構これなり、而して本論の主とする所は此の第三の問題を研究するにあり。今主題に入るに先だち、第一第二の兩點に就きて吾人の取る所を一言し置くべし。悲劇の理に關する學説は今日さまで多様ならず。それ差別の調和といふことを萬有存在の一原理とすれば、之れに正反對する差別界の衝突といふことの、到底存在を害ふものなるは言ふまでもなし。されば人間社會の上に見るも、調和は人生の幸福を意味し光明を意味すれども、衝突は悲惨、暗黒の半面を表す。或は義理人情の柵にせかれ、或は讒諂邪惡の毒に中たり、盲運のため、錯誤のため、つぶさに人生の苦趣を味ふもの、此等すべて人間界の衝突にあらざるはなし。義理人情の柵とは個人と社會、情と理との衝突をいへるなり、讒諂邪惡の毒とは善人と悪人との衝突をいへるなり。しかも人生は終に衝突なくして已むべきものにあらず、社會の進歩を助くるに於て衝突はまた人生必須の一原理なり、之れを河水の混々として晝夜を合てざるに譬ふ、其の溶々は以て人生の順境に比すべく、其の巖に激し限に盛まるは以て世路の艱險に比すべし。悲劇は乃ち此の衝突に由りて人生を描寫せんとするもの、猶畫家の險山難水に筆を着けて全幅の景を真にせんとするが如し。言ひ更ふれば、悲劇は衝突以上の人間を寫せるものなり、但し斯くいへるのみにては盡きず、悲劇とは人生の衝突が其人物の死に迄るまで解け去らざるさまを描けるものなり、主人公の死によりて僅に衝突の此の世より拭ひ去らるゝの謂なり。之れを悲劇的結案といふ。

次に悲劇の美的快感を吾人に與ふるは何故なるか。之れが解釋は古來一ならず、或は之れを藝術

悲劇と人性観
六二

の力に由るとし、或は之れを崇高の理に同じとし、或は之れを利己の一念に基かしめんとす。吾人は之れを同情性の満足に歸せしむべし、即ち悲劇によりて人間美の益々圓に現はるゝと共に、吾人の之れに對する同情ますます切なるを得、この切なる同情其のものはやかて美的快感の根ざす所なり。以上の二點を前定して、さて第三に移るべし。

下

悲劇の結構とは人物の運命をして悲劇的結案に達せしむるの模様を謂ふ、之れに相反する二系の説あり、一は稍廣き意にての善惡因果説にして、他は生存即罪惡説なりとす。審に言へば、因果説にありては、悲劇的結案をして必ず其の人物の上に由來せしめ、犯せる罪、性格の缺點、錯誤等の原因ありしがために、悲劇的結果に到達せるものに外ならずとなす。すなはち悲劇によりて現世の無法無秩序のものにあらざること、罪と罰との必然相平均すべきものなることを説明せんとするなり、故にまた此の説は之れを樂世的悲劇論ともいふべし。生存即罪惡説は乃ち始より人生其の物の罪惡なる所以を前定して立論す、以爲へらく、現世は穢土なり、火宅なり、天道必ずしも是ならず、姦邪時を得て忠貞却りて窮途に泣くもの、見わたす限り世間は此の如し、人生豈厭ふべからずや。而して最も善くこの理を説明するものは悲劇なり、吾人悲劇に感興を發して現世に執着するの念を斷つべしと。悲劇的結案の常に其の人物の缺點、罪惡、過誤等より來たらずして、却りて自然の人事上に織り出ださるべきを主張するなり。前者に對して此の説を厭世的

悲劇論といふべし。

さて上の二説は何れか是にして何れか非なる。思ふに兩者共に或度までは真にして其の以上は偏せるの論なるべし。之れを個人と社會との上に見よ。或時は個人罪（固より廣義にての罪）ありて自ら亡ぶることあり、此の場合にては善惡應報の分まことに顯著なり。或時はまた、社會（豈くとも當人以外の四圍）罪ありて而も個人の之れが犠牲となることあり、此の際にては善必ずしも勝者にあらず、惡必ずしも敗者にあらず、強弱の標準別に存するなり。樂世論者は個人に罪あるを知りて社會に罪ある場合を認めず、厭世論者は社會、否人生其のものに罪あるを知りて個人に罪ある場合を等閑に附す、共に長短あるを免れざるなり。

樂世論者難じていはく、社會の罪も之れあるべし、しかも尙他に個人の上に罪ありてこそ始めて悲劇的結案をば生ずるなれ、單に社會の罪といふを以て個人を殺すが如きは、天道の本意にあらず。例へば世を擧げて濁れるの際に獨り皓々の白を以て處るもの、彼れは少くとも和光同塵といへる處世の一原則にたがへる點に於て罪あり、以て甘んじて悲劇的結案に服すべきの類也と。吾人はむしろ斯かる論の強辯に近きを信ず、人固より神にあらざる限は、君子も欺くに道を以てするときは欺かるべし、オセロ、デスメナは言ふに及ばず、コトデリアの清淨純潔を以てするも、此の如く穿鑿し來たらば多少の缺點なからんや。之れを極言するときは世の惡人の爲に欺かるゝ者は凡て欺かるゝ點に於て缺點ありといはざるべからず、強て斯かる薄弱なる據を索め來たりて悲劇の因縁となし、却りて他の重き社會の罪といふが如きものゝ天網に漏るゝ所以を觀過

悲劇と人性観
六四

す、至當の論といふべからざるなり。必竟これらの論者は、因果の理を狭く解したる弊に坐す、彼の勸懲説は見地の最も狹隘なるもの、樂世論はや、廣げれども尙五十歩百歩の譏を免かれざるものといふべし。勸懲論者は人間の有意的善惡を根柢として因果應報を説き、樂世論者は之れを擴めて性格上の缺點、過失等をも應報の因となす也。されど此の外に更に差別界必至の缺點として、個々人相互の地位、關係より織り成さるべき罪惡の存するを知らざるは二者一なり、約言すれば到底個人の罪のみを認めて社會の罪を認めざるの弊あり。或は社會は即ち個人の集合にして社會の罪といふも必竟は個人の罪の相寄れるものに外ならずといふ。何ぞ必ずしも然らんや、松に聲なく風に聲なし、而も松風相あひて聲をなす、社會の事も亦此の如きのみ。且つたとひ個人の罪相集まりて社會の罪を成せりとするも、報を受くるもの常に罪を荷へるものにあらざることあるに於てをや。

厭世論者は曰はく、個人の罪を認めざるにあらざるも、量に於て社會人世の罪の居多なるをいかにせん、且つ個人をして罪を犯さしむるが如き不完全の社會は既に罪あるにあらざやと。斯かる厭世觀を根柢より説破するは容易の業にあらず、此には只人間の本然が實際世の進歩といふことを豫期し、及び進歩の頂點として罪惡跡を絶てる圓滿の社會を想像し得るの一事を以て之れに答へんのみ。人生に悲劇あるは、其の到底罪惡汚濁の淵なるに由るか、はた不完全より完全に向ふの途次、崎嶇坎坷の免れがたきものあるが爲か。吾人は後者の意義に於て樂世的ならんを欲するものなり、即ち個人に罪ある場合を認むると共に社會に罪ある場合をも認め、而して社會進歩の

ためには個人の遂に之れが犠牲となることあるの理をも信ずるものなり。

以上の所論は主として人生の上より觀察せるものなれど更らに之れを劇として見るも同様の結論に到るべし。一切の悲劇の動機を主人公の罪に歸すると、社會の罪をも之れに交へ用ふると、美的快感を買ふに於て差等あり。戀のために死するの『ロメオ、エンド、ジュリエット』は『ハムレット』『キング、リリア』の多趣なるに如かず、はた『博多小女郎浪枕』『戀八卦柱曆』等の複雑なる悲劇に至りては、皆な多少社會の罪に筆を着けざるなし。個人の罪を主とするの悲劇にありては、假令主人公に同感するの度は深切なることあらんも、之れにより全人間に同感すること難し、此をもてこの種の悲劇は悲哀なるを得るも高大の致なく、眞に悲壯の境に達すること尠し。之れに反して全人間、全社會の罪によりて悲劇的結案を結構するときは、個人たる主人公に同感すると共に、之れに對する人間の全運命といふことにも同感すること容易に、何人も高大悲壯の妙味を解し得べし。我が心中悲劇の悲壯といはるべきものに乏しきは、職として此の理に由るか。

個人の罪によりて悲劇を成すにも、或は差別の欲に走りて平等を忘れたるもの、或は平等の一面に偏りて差別を疎にせるもの、固より種々なるべし。社會の罪といふにも品あり、二三の悪人が人情の弱處につけ入りて罪なき人を陥るゝが如き、又は盲運に役せられて悲惨の境に沈淪するが如き、此れらは其の最下層なり。雜多の性格の相寄れるため、何れ罪を犯せりともなく、錯綜糾紛して悲劇をなすの類は其の中層なり。己れの把持する主義、道德と當社會の主義、道德と衝突

悲劇と人性観 六六

して悲劇的結案に到達するもの、例へば之れを小にしては革命時代の偉人が往々にして陥る悲壯の末路、之れを大にしては全人間の悪と闘はんとせる釋迦、基督の徒の如きは其の最上層なり。而して若し之れらの種々を交錯せしめたるものあらば、其を以て悲劇の最も妙なるものとすべし。

終りに、樂世的悲劇論者は、當然の結果として、悲劇の快感を道德の圓成せらるゝに基かしめ、厭世的悲劇論者は、之れを現世の穢土たるを示すに由るとなす。すなはち一は人間の道德心の満足を主とし、他は人間の厭欣心の満足を主とするなり。此に於てか前者は漸く美感と實感との區別を没せんとし、後者は悲劇と喜劇と觀美の方法を二途ならしめんとするの傾あり。此は他日題を改めて論ずべければ今は言はず。

(丙) 劇詩人と人生觀

造化意ありて天地を造れるか、知るべからず、忖度するものは我れの心なり。精舎の鐘の音に諸行無常を感じ飛花落葉に盛衰のことわりを悟るもの、彼れの現世厭ふべしと念ずるは猶井して飲みみ研して衣る無懷氏の民の知足淨士の樂趣に飽くが如きのみ、厭ふべきが如く樂むべきが如く渾圓として端なきものはそれ天地の實相か、厭樂の目は畢竟觀るものゝ心にあり。

詩人は第二の造化なりといふ、劇詩人に於て最も然り。手に眞宰の樞機を把りて、生殺與奪心のまゝに機微の運命を描く、この刹那、詩人の懷慮は江漢の廣きよりも廣く霽月の清きよりも清か

るべし。偏執の見を將りて強て自家の人間を染め出さんとするが如きは固より客觀詩人の事にあらず、造化の心なきが如く劇詩人はた此の意に於て無心なるべきなり。されば詩人もまた人なり、日常差別の世に處して、朝三暮四、喜悲の其の身に蝸り來るに逢ひては、誰れか厭樂の間に出入することなしといはんや。一面に平等無私の詩人、むしろ第二の造化翁として花にも同情の涙を濺ぐの彼れは、他面に社會の一分子として或は生をはかなみ世を憤ることもあるべし、しかも其の社會に處するの心は以て詩人の心と混ざべからず。此に於てか劇詩と劇詩人の人生に對する觀念とは如何なる關係あるかの問題出づ。就中悲劇と其が作者の厭世觀との關係如何。

人間の全相を寫さんとするものゝ、ことさらに我見を其の間に挿むべからざるは既にいへるが如し。即ち劇の極致をいへば、其の描ける所は直に無端無方の天地と相通じ、心ありて作爲せる我れの小天地觀とは相關せざるを本意とす。否天地觀ある必しも咎むべきにあらず、思量以外直に造化の大天地觀と感應する底のものならんには、小天地觀といふとも誰れかは咎めん。要するに劇詩は作家より出で、而も作家の見地を離れ、獨立自主の姿をなさざるべからざるなり。されど此は之れ極致につきていへるのみ、シェイクスピアの作或は之れに近かるべく、近松の作また或は之れに近かるべし、而も事實果たして然りや否やは本論の問ふ所にあらず。バイロンが世を憎むの念衷に盛に、情を抒するの『チャイルド、ハロルド』に成功して、人間を描くの『マンフレッド』、『ケイン』等に失敗せる、縦令失敗は之れありきといへども、劇詩の必しも作家の影を宿せるものなきにあらざるを見るに足らん。しからば即ち劇詩の上につきて作家の觀念を窺はんとする、如

何せば可ならんか、劇詩人が抱持する厭世観の其の作る所の悲劇に見はるゝの模様如何。此の問題に答へんとせば、先づ之れを作劇の趣意に求めざるべからず、作家が悲劇に筆を着くるに至れるは何故なるか。時としては單に功を収め易きゆゑを以て悲劇を擇ぶ、猶畫家が春水の畫き難きを避けて、秋渚蘆荻の畫き易きに就くの類なり。又は當代社會の嗜好に制せられ、其の外に一步を轉ずるの餘地なかりしたため、可惜手腕を悲劇の一面にのみ揮ふものあり。これらはずべて全く自由なる詩人の境にあらず、斯くして出で來たるの詩篇は、設令幾百部に及びて而も悉く一様の悲劇なりきとするも、此の故を以て作家は人世を一大悲劇と觀せりとはいふべからず。之れに反して作家眞に天地を涙の谷と觀じ、此に感發して悲劇を成せりとせんか、此の事實をだに定かならしむるを得ば、作は僅に一篇にとしまらんも、以て優に作家の厭世思想を窺知するに足るべし。所詮本論の要は第二の造化が其の作に先だちて懷抱する本意の何邊にありしかを研究するにあり。吾人は之れを四點に分ちて下に論述すべし。

第一、作家みづから權に作中の或人物に化し其の言動によりて自家の本意を表白することあり。第二、其の主人公はやがて作家自身にして、隨うて全曲に通徹せる悲慘の聲は作家の感慨に外ならざることあり。されど上の二者は未だ純粹なる客觀詩とはいひがたし、蓋し斯く明に主人公若しくは其の他の人の言動に作家の影の憑れることを知り得るに於ては、其の詩は到底作家一人の外に眞の人間を寫すこと能はざるべければなり。第三、主人公と作家と直接に合躰せりといふにあらざるも、描く所の人間すべて、作家の實相と觀せる性格を具し、而して其の性格は一途悲劇的

なることあり。第四、個人の性格上には作家の厭世的所見存せざるも、千差萬別の人間の錯綜せる際に、必然悲劇的結構の生ずる所、作家の意見を寓せるものなることあり。而して第三、第四は共に眞の純客觀詩につきての論なりとす。

此に悲劇ありとせよ、而して作家の厭世観此のうちに見れたりとせよ、吾人は此の上につきて、更にこまかに前段の四點を論究すべきなり。或者はいはく、曲中の某の人物が云々の言動をなせし所、明に作者の厭世思想を表示せるものなりと、例へば『ハムレット』の曲中にて公子ハムレットが芝居道の講釋をなすあたりを、直に作者シェイクスピアの意見と見なすたぐひをいふ、此は前段第一の場合なり。論者若し此の如く結論し來たらんとせば、此の際に要すべき立證と判斷とは、其の曲中の人物の片言隻句、果して作家自身の意見なりや否やを明にするにあり。或者はさらにもへらく、曲中の主人公は其のまゝ作家の面影にして、主人公の世を惡み天を恨む悲慘の光景は、やがて作家が現世を厭ふの念を直現せるものに外ならずと、例へばハムレットを直にシェイクスピアの寫眞と見做し、シェイクスピアは實に生死迷途の境に彷徨せるものなりといはんが如し、此は前段第二の場合なり。かくの如く論斷し來たるに際して要すべき立證と判斷とは言ふまでもなく主人公の果たして作家自身なりや否やを明にするにあり。或者はまたおもへらく、曲中の重なる人間即ち主人公の性格既に悲劇的結案に到るの外なき缺點を有すとせば、之れ明に作家が人生を悲劇の舞臺と觀せし者に非ずやと、例へば心中悲劇の主人公がすべて戀愛の一偏に走らんとするの傾あるを見て、心中悲劇の作者は此の間に自家の厭世思

想を寄せたりといふの類なり。此は前段第三の場合に相當す。此の如く論下せんとする際に要すべき立證と判断とは、要するに作家が性格上の件の缺點を全人間の漏れがたき真相と認識せりや否やを明むるにあり。而して此の斷證を誤らしむべき事情は種々ある中に、(一)、他の事情によりて悲劇の大幹の種類、結案等まつ定まり、而してのち之れに恰合すべき性格を擇べるものなるを、順次を轉倒して作家が好みて性格を擇べるに基くが如く思惟する事。(二)、前に掲げたる悲劇論に一言せる如く、個人の罪に因りて悲劇を描く場合にも、觀方によりて厭世的と樂世的との二面あり、ざるを其の樂世的すなはち罪あるものの罰を得て亡ぶる趣を寫せる方の本意を忘れ、一途に厭世の意に基けるものと思ひ僻むる事等其の主なるものなるべし。

最後に、或者はまた、曲中の主人公乃至其の他の人物の、罪なくして不幸に陥るを見て、作家が人生を苦趣、罪業の宅と見なせる厭世思想の現れたるものに外ならずといふ、例へばシヨオベンハウエルの眼に映せし『ハムレット』の如き、若し果たして社會の罪を描くを以て本意とせるものならんには、之れに由りてシエークスピヤの厭世觀を證せんとするの類なり、此は前段第四の場合に當たれり。此の結論に要すべき立證と判断とは、要するに作家果たして斯かる罪ある社會を、人間の全真相と認識せりや否やを明むるにあり、若し單に之れを人間の半面として描けるものなるが如きことあらば、以て作家の人間觀を表するに足らざること論勿しとす。

夫れ劇に悲劇あり喜劇あり、人生また廬山の面目に似て、右よりすれば戀となり左よりすれば峯となり、厭ふべきが如く厭ふべからざるが如し。厭世詩人の作る所必しも悲劇のみならねば、樂世

詩人の作る所また時に悲涼の調なきにあらず。而して吾人の特に悲劇と厭世詩人との上に就きて論ずる所以のものは、世間往々にして悲劇詩人なるが故に厭世詩人なりといふが如き誤謬の結論に近かんとするものあればなり。且つ吾人は前來號を重ねて、厭世觀を論じ、悲劇を論じ、及び二者の關係する所以を論じ了りたれば、他日稿を更へて我國唯一の劇詩人近松が諸作に就きて論究する所あらんとす

『不言不語』を讀みて所感を記す

『不言不語』はもと翻案なりといふ、されど吾人は之を既往に徹して全部紅葉の述作する所と見做すの妥當なるべきを信ず、何となれば、翻案といふといへども、唯僅に想の彼方此方を彼れに取れるまでにして、之れにて肉し之れに皮するはすべて紅葉の技倆に屬すればなり。『不言不語』に若干の妙所あらば、これ紅葉の妙所なるべし、多少の缺點あらば、之れはた紅葉の甘じて責に任ぜざるべからざる所。

さて『不言不語』を評するにあたりて、冒頭第一に提起すべき問題は、此の篇の趣意とする所如何といふにあるべし。換言すれば、作者は此の篇に於て、何事を描き、如何にして讀者を娛ましめんとせしか、『不言不語』一部の生命は何れにあるか。或は答へて云はく、笠原といへる素封家の夫妻、はじめは疊の上の鴛鴦とまでいはれし二人の仲、不思議にも三年このかた荒み果て、夫は

不言不語を讀みて感を記す

妻を疎じ、妻は夫を恐るゝさまとなれる怪しき家内のいはれを、環といへる侍女とともに讀者が探らんとするの興味、之れ此の篇の命脈なりと。或はまた云はく、一篇の主人公たる笠原夫人が罪過を胸に藏して良心の呵責に苦む悶々の状を、侍女環によりて寫し出だせるもの、やがてこの篇の悲劇なりと。前説は夫人の罪過を馳げにして之れを探知せしめんとするの探偵小説なりといふにあり、後説はこの罪過以後に於ける夫人が心内の苦悶を描ける悲哀小説なりといふにあり。よりに思ふに、探偵的と悲劇的との本篇に於けるは楯楯の両面の如きか、夫人の心中の悲劇を寫して讀者に同感の涙を求むると共に、結構を奇にして同情以外のおもしろさを感じしめんとするは本作者が當初の用意なるべし。さもあらばわれ、本篇の結果よりいふときは、件の立案は果たして成就せしや否や。吾人の見る所を以てするときは、決して成功せりといふべからざるに似たり、否、探偵的の一面に於ては成功せりといへども、悲劇の面にせるものといふべきなり。吾人をしつて先づ其の成功せる方面より觀せしめよ。

吾人は第二回はじめて笠原家の有様を點出せる條に讀み到りて「此家の内には何等の仔細かありてかくは恐しき心地するにはあらざるか」といへるに、まづ何等かの秘密を提出して解釋を求めらるゝ心地しぬ、及び之れと共に氣味悪しとの漠然たる一種の感情浮びぬ。而して讀みもて行くにしたがひ一家の此の不思議は、春月の曇れる所あるが如く怪しき夫人の顔色、さては人目をも憚らでむごたらしう餘所くしき主人の待遇、主人を憚れて繼子の片隅に潜むが如き夫人の様子と密に關係するものなるを見る。赤子といひ、兄の亡兒といひ、「三箇日か七種の内に誰やらむ

歿くならし人のありしやうなり」といふ、必竟すべて一の不思議をしますます複雑ならしむるの用をなすにあちざるはなし。斯くして讀者一たび環とともに作者が布きし八陣の裡に迷ひ入らば、怪異また怪異、局を窮めざれば已む能はざるに至らん、之れ探偵小説の本色なり。されど『不言不語』の探偵的方面は之れに盡きず。それ人不思議に會ふときは即ち疑懼の心を生じ、疑懼の心はやがて不安の念を生ず、凄し、淋し、氣味悪しなどいへる感情はすべて之れに外ならず。作者は巧に此の理を應用して、一方に不思議をますく不思議ならしむると共に、他方に努めて凄凉の感を挑發せんとせり。固より時に琴を倩ひ酒を倩ひお増を倩ひ、以て秋風蕭殺のうちに一道の春光を點し事に變化あらしめたる作者の技倆は之れありといへども、要するに第六回までは、この不思議と之れに伴へる惨凄荒涼の感を中心として筆を下せるものといふの外なし。就中凄凉の感といへるに意を用ひ、『源氏』夕顔の巻の筆致を學びて、ただく不思議を探知せんとする露なる好奇的趣向を葆さんとせる所、普通の探偵小説にはなき用意なり。若し夫の探偵小説をして感情界に片脚を投ずる真正の美文たらしめんとせば、極致は思ふに此の邊にあらんか、たゞ此の篇にありては悲劇といへる他の目的に制せられて探偵的結構を十分に複雑ならしめ得ざりき。詮ずるに『不言不語』は不思議を探らんとするの好奇心に訴ふる事、及び怪異不思議に伴ふべき一種の感情を刺戟することに於て成功せり、之れを稱して此の篇の探偵小説的方面といふ。但し第七回に本篇中の花形役者たる民之助の出現せしより第十一回までは正に紅葉得意の艶舞臺にして、「秘密」の一縷は僅に草蛇灰線の運命を保てるのみ、此の際に不思議なく凄凉の感なく同情

不言不語を讀みて感を記す

七四

の涙なし、あるものは唯春光融々花飛び蝶舞ふの歡樂郷なり。作者の本意は或は此の光明を假りて彼の暗黒を寫さんとせるものならんも、主客の分轉倒して、讀者は眞に笑の底に湛えたるの涙を認むる能はざるなり。第十二回より結末までは掉尾の大波瀾にして、紛糾し來たれる秘密の解釋とも見るべく「笠原家の鉅萬の富をば旦那様に襲せまほしき御心の迷より御家督なりし兄様の御遺子をば陰に毒害し參らせしをその乳母の獨り知りて病死の際に旦那様に密告せしより然し心ならぬ御不和は起りしなり」といふに至りて探偵小説一部の首尾全し。

次に失敗せる方面、すなはち悲劇の側より本篇を論ぜんか。最もよく本篇を讀みて、深く主人公の悲哀に同感するものは侍女環に如くなし、今渠れが同感の模様を案ずるに、或は夫に疎んぜられて「腸断れぬべき思を唇に咬緊めつゝ秋の草葉よりも繁く露の宿る眼」、或は此方よりは「かくまで深く思はせ給ふものを如何なる御憎悪のありてか知らぬども旦那様のなされ方の餘りや鬼々しきが我れまでも怨めしき程なる」、或は「不圖御心の惱劇しき折節は御顔の凄く蒼白めて涙を合せ給まひ時ならぬに身悶あそばし今にも轟然と起ちてあらぬ事など口走らせたまふかど見ゆるまで」なる或は「實に我身ほど世に淺ましきは無し合手にせんとて頼みたる其方をばやがて看病人に爲むことはかねて此の身の身の願なり（中略）其方を看病人に頼むからは逐次一七日の香花まで氣毒ながら其方の手に懸りたき意ぞと我面を懐しげに瞞めたまひて嗟我は此世に死ぬるより外には何の望もあらぬ身なりと其聲太く顔ひて」顔の蒼めたる、或は胸底の秘密を問はれ慄然として人にいふべき事ならず人の聞くべき事ならず逆も因果の我れひとり苦むる覺悟と坐にも堪へか

ぬる氣色、或は叢竹の風に鳴るを赤子の泣聲と聞き桃色絹の手帕を産衣の寝姿と見るなど、之等のすべてが環をして不便、氣の毒と想はしめしものなり。一般の讀者もまた面のあたりかゝる事情に會してはそゝる哀れと感ずべし。まかも此等の一切は因縁なくして結果あるの事情なり、因縁なきにあらざるも讀者の知り得ざる底の事情なり、首尾通徹せざる一時限りの事情なり。此をもて之れに同感することあるも、輕浮なる當座限りのものにして、譬へば婦女子の些細なる涙話にも泣きて同情を表すがごとく、到底深刻なるを得ざるべし。蓋し此の篇の悲哀を描ける詩として人を動かすの命根は、人間の運命に同感を求むといふ點にあらざして、單に刹那のセンチメンタリズムを目的とするにあり。言ひかふれば、人に同情せずして事に同情するを此の篇の悲劇となす、吾人は二たび三たび讀みかへしたれども、篇中たい悲むべく憐むべき事柄を認めしのみにて、一も悲哀の人間を見ざるなり。茲に一婦人ありて、其が性格の趣向または境遇の自然に制せられ、夫に對する愛のため、乃至其の他の事情のために罪過を犯し、夫に疎せられ、良心に呵責せられ、さりとて退きも進みも得せで、ひとり心中に苦悶すとせよ、罪過に陥るまでの經行をつぶさに描きてこそ、罪過後の主人公が内心外の悲惨の光景と映發して罪業應報の理をも深く感得るなれ。さるを本篇はことさらに此の前半を隠して、後半に筆を密にせり、此に於てか隠れたるを探らんとする探偵的興趣をば贏ち得たりといへども、遂に人間の運命を描きて全幅活動の妙致あるを得ざりき。之れ豈「不言不語」の悲劇として失敗せる所以にあらざや。而してかく悲劇的方面に於て人に同情せずして事に同情するの感は探偵的方面に於ける慘凄荒涼の感と相通

不言不語を讀みて感を記す

七六

じて、環の心象に「氣味悪し」との念と「譯は知らぬど氣の毒」との念とを留めたり。されど唯之れのみ、若し篇中より一重に秘密を探知せんとするの興味、即ち知力上の美を引き去らば、剩す所は此の外になけん、「不言不語」の價值知るべきなり。

假に悲劇を以て罪と罰との關係を描くものとせば、其罰の後半を寫して罪の如何なるものなるかを語らず、以て人の好奇心に訴へ傍ら悲劇の効を收めんとするは、近時一種の作家間に見ゆる風潮なりといふ、即ち探偵的と悲劇的との両面を一に抱合せしめんとするなり。詩の究竟目的よりいふときは、斯かる計畫は甚だ喜ぶべきものにあらざといへども、眞に之を成じ得ば、必しも咎むべきにあらざらん、憾むらくは紅葉の「不言不語」の失敗に終りしことを、されどまた一方よりいふときは、紅葉の此の失敗は自然の數なるべきか、知力上の美と情緒の上の美と、道を分かち鏝を揚げて相狀ふなからしむるは古來人の難ずる所、知情はもと相寄り相纏綿して存すといへども、また知を主とする所に情ありがたく、情を主とする所に知ありがたきは心理上の事實なり。二端を調和し得ずして彼れに偏し此れに偏するが如きは、始より調和を企てざるのまされるに若かず。よかも彼れに偏して悲劇を成さば尙可、此れに偏して探偵小説以上に多く地を抜き得ざるにあらば惜むべからずや。况や彼れをも得ず此れをも失ひて所謂蛇蜂取らずの弊に陥るに於いてをや。

以上は總躰につきての論なり、細節にわたりていふときは指摘すべき點尙少からず。秘密々々といひながら、小兒を點出しさまゝの手段によりて暗に繼子殺しといふがごとき漠然たる觀念を

讀者に起こさしむる所、隱なるが如く隱ならざるが如く、おのづから悲劇としての全躰の結構と相應じて、作者が經營の迹を見る。たゞ此の事、悲劇に恰合すると共に探偵小説に不利なるを如何せん。また最尾の一節、秘密の次第を語り出づる條は、探偵小説として可なるも、悲劇としては輕躁且つ疎略に過ぎたり、むしろ全く之れを明言せずして餘韻を隱約の間に遺したらんには、一段の風致ありしなるべし。其の他民之助を除きては、環の言動の世慣れ過ぎたる、笠原夫人の此の罪を犯すべき性格に合せざる、笠原主人の深沈を缺きて眞趣なき人物となれるなど、本編の人物上の瑕疵なり。今は取りいで、言はざるべし。

最後に注意すべきは此篇の文章なり、
御意とあれば此指の折れむまでもと申せば大事の妹の指は折らせと愛らしき眼して我をば見たまひけり、勿体なき事ながら日頃の御情のほどに甘えて心には奥様をば姉様とも思ひて私無く冊き參らするに此誠徹かざるにや御所爲に妹を袖にしたまひて恨めしき所ありと申せば奥様は吃さなり給ひて其怨言は我方の誠こそ通らざるなれ、袖にせしこは曾て覺無し、ありさならば聞かせむと膝を進ませたまふ、我は俯きて琴の緒を緊めつゝ御主に御怨勿躰なしと思させたまへ、頭を下ぐれば、奥齒に物の介りたる其挨拶我等の間に恕す思さぬなさいふ事無し思ふよしあらば何なりとも言はるゝが結句、結しき、聞捨には爲給はざる奥様の氣色なり

以て紅葉の文の變調を見るべく、また古文研究の結果の如何なりしかを窺ふべし。吾人は斯かる文體を喜ぶものにあらざといへども、「給ふ」「ぞることそれ」などを紅葉一派の文脈に加味してさまざま目立たざるを得しは紅葉の技藝なり、鍛鍊推敲の勞想ふべし。

不言不語を讀みて感を記す

七七

新浦島を評す

叙事詩的、抒情詩的、劇詩的の三者は何の處にも存し得べき分類にして、客観なる淺膚の事柄を叙するものは之れを客観的ともいふべく、主観なる作家一個の感想を抒するものは之れを主観的ともいふべく、作家ならざる個々人の感想を純ら客観的に寫すものは之れを純客観的ともいふべし。されば人事を主題とする小説必ずしも人間を客観的乃至純客観的に描き出だすの他なきものとは限らず、時に作家が自己の感想を抒べて作中に自家の影を宿すことあるも異しむに足らざるなり。例へば地の文にあらはに作者の思想を述べたるもの、之れを主観の見えたる第一種とせば、第二種は人物の性格に作者の氣風の見えたるもの、第三種は一篇の趣意すべて作者自身の思想感情を活寫せるものともいふべし。而して我が過去の小説界は客観派、叙事派乃至第一種主観派の臭味を帯べるもの滔々皆是れにして、此の以上に援んでて眞詩趣をたもてるものは極めて稀なりき。吾人は露伴が作の幾分かこの稀なる地歩を占めたるを見て、平生私に重きを露伴に置きぬ。『風流佛』の如き『五重塔』の如き、其の主人公なる珠運、重兵衛等の性格中に作者が詩人的狂熱の面目躍々として現せるは勿論、周囲の人物事件一として作者の感慨を反映せしむるの用をなすにあらざるはなし。曩に『國會新聞』に出で、今『文藝俱樂部』に出でたる新作『新浦島』の如きまた此の點に於て同轍なり。醜猥卑陋の社會に厭きて仙を欲し、却りて魔道に入れる浦島家百代の當主浦島次郎の性格は、露伴みづからが一點の靈火によりて熱沸々仙に逼り魔に逼り、人を

も世をも焼き盡くして、此の人の前には、人天すべて一團猛火と化せんとす。其の他次郎の父母も侍魔も情婦も毘奈耶伽王も必竟露伴自身が感慨を抒するの道具たるに過ぎず、魔王は是れ露伴の魔王、男女は是れ露伴の男女、否魔王も男女も露伴の化身分身のみ、燃ゆるが如き作者の息はやがて作物全骸の生命なり。されども此等はこれ例の俗おどかしの癖と共に露伴が作の全般に涉れる特色なり、『新浦島』の他と異なる所は別に之れあり。

まづ其の結構につきて觀よ。『風流佛』『五重塔』などの描ける所は、露伴の人間ながらも尙人間の事たるを失はず、即ち肉と靈とを具へたる日常聞觀の人間界外に出でず。然るに『新浦島』に至りては形骸の羈絆を脱越し想像の翼を羽うちて自在に超人間界不思議に翱翔するの趣あり。他の諸作にも不思議を不思議として寫せるものなきにあらざといへども、其は此篇の初より不思議を不思議として描き出だせるとは別様なり。それたゞ不思議を可思議とす、此に於てか尋常一様の世相を以て足らずとし、徑に人間以上の仙道魔法に指を染めて怪ます。ミルトンの『パラダイスロスト』に於ける、ギョオテの『ファウスト』に於ける用意は知らずといへども、露伴は此の篇に於て魔道の通力を假り最も自在に自家の感想を發揮したるものといふべし。其の『いさなとり』の彦右衛門が海上に妖を見、『風流佛』の珠運が木像の活ける聲容に接せるなどの不思議の、一念凝つたる人にあり得べき事實として寫されたるものなる即ち之れによりて却りて自然の人心の微妙なるの作用を描けるものなる趣を異にせる所以明なり。

斯く『新浦島』は結構に於て他の諸作と異なりて超人間の趣を具す。されど結構の超人間的なると

共に想もまた超人間的なりとは勿論言はれず、此の篇の想も、等しく一個の人間が或境遇に應じて感じ想ひ欲する所を描けるものなるに於て他の諸作と異なる所なし、想の異同は別に之れあるなり。蓋し彼れも此れも共に人間を主題とはすれども、彼れは露伴の人間を主とし彼れは露伴みづからを主とする點に於て差別あり、『五重塔』の重兵衛に或は露伴の影あるべし、しかもこれ露伴が作れる他の露伴的人間なり。露伴的人間が露伴以外の境遇に處して露伴以外の活動をなす、此に於てか性格の底に露伴の影ありとは知りながらも尙讀者は作者露伴といふ名を忘れて之れに同感す。すなわち此篇には露伴なくして重兵衛あるなり、前に擧げたる第二主觀派に屬して眞の詩境に到れるなり。然るに『新浦島』を讀むに及びては、誰れかまた露伴を忘れて次郎に同感し得るものあらん、此處には露伴ありて次郎なきなり。次郎の名は記しつゝも、氣昂り情暢ぶに際しては覺えず詩中に咄々露伴の聲を聞く、露伴みづから露伴の境遇に處りて、或時は感愴し或時は憤慨し或時は怡々として眉を展ぶ、此等の感情思想を擲りて一揮、文字に附與したるものは此の篇の詩想なり。而して其の情の騰奔する所、直に之れを小説と結象せしめて、十分遺すところはきを得んには、材を人間以上の事に取るの最好方便なる所以も詢に本篇の如くなるべし。塵世の煩はしきに厭きて「足りて足らなからぬで足りよ」の淡生活を望むの心をあらはすは浦島次郎乃至老夫婦が朝三暮四の尋常事を以てするも事足るべけれど、一躍して輕佻浮薄なる現世の罪惡以上を身を置かんと願ふの情は、作者の想像を驅りて仙界魔道に脚を着くるの已むを得ざるに至らしむ。かたはら、世に人間以上なる不可知の勢力ありやなしやの問題に考到して、作者はまづ老夫

婦の死に不思議を見せ、尋いで紅白の舍利に神符祈禱の不思議を見せ、毘奈耶伽王の出現より同須の分身に至るまで、歩一步人世外に游離して、遂に全く魔界、むしろ夢の如く幻の如き空想界に入り了はんぬ。この空想界にては既に不可知の自在力を前定したるが故に、人は想像の脚によりて縦横に奔馳し、如何に不思議の所行も曾て不思議とならず、愆前に敵者なく愆前に理網なく聖賢も斫つて捨つべく人倫も焼いて滅ぼすべき魔道の甲斐なさは、貪噴愛惡を離るべき身を以て、反りて瑞相女妙相女に取り纏られ勇菊が昔の戀に着きまつはれ、到底自業の果を受けて自ら紅蓮洞の石と化し永く生死の境を脱するの外なきに終る。即ち是れ、無悟の悟は眞の悟にして佛を願ひ魔を願ふの間未だ轉迷開悟の域に一關を隔つるものなる所以を具象的に言表せるものなり。電光影裡の春風、生死巖頭の大自在、作者が一旦忽然として悟りしもの若しあらば此れに外ならざるべし。

要するに『新浦島』の想は、露伴といへる一人が現世の汚濁と戦ひて醜りて知足淨土を願ひ仙を願ひ魔を願ひし悶々の末、遂に眞の悟は仙を願はず魔をも願はず生もなく死もなき處にありといふとを認めたる心の経過を詩に描き出だすにあり。而して其の結構の超人間的なるは、必竟想の幽にして大なるがためにして、斯かる感想を曲ぐる所なく發揮せんには、全然抒情歌の躰を藉るの外は、勢ひ本篇の如くならざるを得ざるに由るか。吾人は此處に露伴の哲學を叩きて其の思想の健全不健全を問ふが如きことなかるべし。たゞ此の作が抒情歌に入るべき想を捉らへて強いて一部の小説となせるものなる事、及び其のため形の頗る常律以外に馳せたるにも拘はらず、讀むもの

新體詩の形に就いて

八二

をして能く形を忘れて想に同感せしむるの詩的生命ある事に於て『新浦島』が近來の佳作なるべきを信ず。珠連や重兵衛や、彼等は性格に於て露伴の脈を受けたり、譬へは露伴の子と謂はんか、此の意味にて『風流佛』『五重塔』は主觀的なり。『新浦島』は乃ち、露伴自身世に處して得たる幾條の感慨を、象を假りて詩化せしめたるの故をもて主觀的なり。單に小説といふもの、標準よりいふときは、前者或は優るべし、後者の妙は一種の別味として妙なるなり。且つや後者の、乾燥なる議論、寓言、比喩談の類となりて詩的價値を失ふは往々凡作者の上に見る所、『新浦島』の然らざるを得たるは露伴の技倆なるべし。以上の外、細節に渉るの評は省きぬ。

新體詩の形に就いて

(一)

文學博士外山正一氏の自ら稱して新體詩といふもの、其の近著『新體詩歌集』中に見えしより、文壇復た新體詩形を如何にすべきといふの問題を論ずるものあらんとす。蓋し氏が所謂新體詩の形の如何にも亂雜なると、其の自序中の議論の甚だ覺束なきとは、讀者をして自然疑をこの際に挾むの已むを得ざるに至らしめしものか。吾人は詩の形想關係論に論着するに先だち、之れにか、

はる一二論者の説を聞かんとす。

外山氏の序文の一節に曰はく

明治十年代に新體詩を創始せるものは明治廿年代に亦新體詩を創始するの特權あるものと自認し數年前より又一種の新體詩を試作することゝ勉めたり本書に載するは即ち斯くの如きものなり云々予が斯くの如き新體を用ふるは他の故あるに非ず予の思想予の感情を感情的に語る爲の方便なきものなり七五若しくは五七の調は抵抗少く平穩に輕々舌の動く爲に便利なるも種々の變化ある思想及び情緒は到底斯る一定窮屈なる體形を以て常に適當に云ひ表はし得べきものに非ず却て種々の變化ある體形を使用すること適當なるべけれ云々

新體詩を創始するの特權は、よし姑く外山氏の占むるにまかすとせんも、其のいはゆる變化ある體形とはそも、何の謂ぞ。五七、七五の舊調のみが、複雑極なき今人の感想を吐露すべき唯一の形にあらざるは勿論の事なれど、さりどて翻りて一切の韻律を排し盡くし、散漫無規律を以て規律となさんとするに至りては、一大誤謬の其の間に伏するものなからんや。由來韻律的詩形の上に於て、變化といふこと、體形といふこと、が如何なる關係を有するかを、外山氏は知れりや否や。氏が將來大に行はれんと信ずるの詩形はこれ、通常いふ所の詩形、即ち韻律ある詩形にあらずして、一種の散文體なること、今また多言を須たじ、すなはち、律語の範圍に於ける詩形の詩形たる本色は既に亡じたるものなり。外山氏若し微塵だも韻律あるものを以て抒情的詩歌即ち所謂新體詩の本體と認め、而して自家の近作が其の埒内に於て能く從來の詩形の單調子を救ひ得たりと考ふるが如きことあらば、其は大なる僥倖なるべし。蓋し音の抑揚に基ける律格に平起、仄

新體詩の形に就いて

八三

起、抑揚、揚抑等の變化あるが如く、音數に基ける律格にも亦た五七あるべく七五あるべく、一
 二三四乃至八九音の何れもあるべし、真情發露の自然の節奏にだにかなはば、此の間にいかばか
 り複雑の變化あるも固より怪むに足らじ、唯之れをして變化あらしむると共に益々一律に歸せ
 しむるの工風は必ず無かるべからず。全局の音に律ありて而も自在に長短句を用ひ得るは、律語
 の律語たる所以の價値なり、此の意味にて五七、七五の舊形以外に新體形を要すといふに、誰れ
 か異議を挾まんや。然り、七五、五七以外の變化は吾れ人共に望む所、しかもこれが爲に直に律
 語といへる根抵の軀形を捨てんとするに至りては、寧ろ無謀の嫌なきを得ざるなり。七五、五七
 の外を許さずといはばこそ、僅々二個の材料を以て限なき變化に應せんこと難しともいふべけれ
 ど、調諧し得んかぎり三音、四音、五五、七七、長短抑揚のいづれをも自由に抽き來るを得とせば、
 何を苦みてか匆卒にも強ひて異を樹て、東西三千年の歴史が實存を證せる詩の根本を覆さんと
 はするぞ。或はあもふ、論者の意は如何なる句法を以てするも到底音數を本とするの律には十分
 變化の餘地なしといふにあるか、若し然りとせば、吾人は斯かる結論に到達せる論者の説を聞か
 んを願ふと共に、更に韻法、抑揚法の如き他の豊富なる律格を擇ぶの順當ならざりしかを疑ふ。さ
 もあれ此はこれ選擇の上の論のみ、韻法、抑揚法は所詮我が國語に適せずとして、又は他に若干の
 理由ありて、これをも斥けたりとせんか、歸する所、論者は、我が律語の範域に於ては變化と統
 一と到底并行し得ざるものと断定し、變化のために統一を犠牲にして、論者のいはゆる變化ある
 體形、即ち韻律なき體形を採るに至れるなり。それ藝術界にありて變化のために統一を害し、統

一のために變化を没するは、凡庸手腕の已むを得ざる所、常人の見て矛盾となす此の二原理を融
 和せしめて、一個渾然の美相を成ずるは、玄妙なる天才の陶冶に俟たざるべからず。今外山氏は、
 單に十年前に新體詩を創し得たりといふの故を以て、輕々此の難問題を解し去り、律語は新體詩
 の變化自在を妨碍するものとす、吾人を以て之れを見れば、頗る早計に似たり。私に疑ふ、外
 山氏は、此の論斷を形づくるに當り、嘗て種々の變化と一定の軀形との如何なる關係を有するも
 のなるかに想ひ及びしや否やを。
 然れどもまたあもふに、外山氏の意、或は夫の具象的コンクリート・イメージ一元論の本旨と其の由つて來たる所とを曲
 解して、ひたすら形式美の意味を亡みせんとする一派の極端論に援取する所あるにあらざるか。
 若し然りとせば、これ詩形を全く内容の奴隸となすの論者なり。惜いかな、氏は斯く一切の體形を
 斥くべき地に立ちながら、却て自ら創する所の新體形を以て他を律せんとするの、自家撞着に
 陥れるものなるを。若し一切の形式を豫定することなく、たゞ／＼題に應じ人に從ひて隨時に之
 れを擇ばしむべしといはば、否、既に擇ぶといふも不可、詩想をして自ら之れを作らしむべしと
 いはば、氏は何を以てか其の所創の口演體、朗讀體をして將來大に行はれしめんといふか。詩形
 の豫定を拒むものは、自家また一軀を創して他を制するの權利なきなり。嘗に他を制すべからざ
 るのみならず、自家といふも豫め一定の形を設けて之れを律するの必要なし、何となれば、想
 はふのづから其が恰好の形を擇ぶべければなり。又以爲へらく、外山氏の新體形は律語以内の體
 形にあらずして、無律文すなはち散文界に於ける一種の文體ともいふべきもの、隨ひて、體を創

め形を定むといふも、律語界にての意味とは異なりて、や、外山氏の文體を定むといひ、外山氏
 的段落法を定むといふの義に近し。されど、其の文體たり段落法たるの故を以てこれのみ、前記内
 容論の矛盾以外に立つを得べしといふの理由はあらず、一定普通の形を豫定するの無用なるは、
 詩形も文體も嘗てかへることなきなり。外山氏は、果たして斯かる撞着の論に坐して顧みざるも
 のなるか。

而して、世には此種の議論をすら、己が學ぶ所の學理に牽強して、敢て曲庇の辯を試み、世の心
 盲の徒を威嚇せんとするものありといふ、驚くべきの至ならずや。吾人は稿を續けて、近刊『帝
 國文學』に見えたる、林斧太(高齋林良と同じ人の隠れたる名か)と名のる人の論旨を評し、而し
 てのち希臘の昔より近世獨乙の一元論に亘りて依然決せざるこの形想關係論に言ひ及ぶべきな
 り。

(二)

前段の論をつぐに先だち、明め置くべき事二あり、通常新體詩といふの意義、これ一、通常詩形
 といふの意義、これ二。まづ其の新體詩といふの本意に就きて説かん。

そも、新體詩とは何ぞや。今日わが國にて詩といふ語の、漢詩以外に廣く美を目的とする文
 字の總名となれるは、言ふまでなき事實にして、シエルクスピア、ゲーテ、ユーゴー、ゾラ、シェ
 レ、タルソナルスなど、漸く將にわが文壇の通り名たらんとすると共に、國詩に劇詩あり、小

説あり、漢詩、和歌、俳諧はいふに及ばず、新體詩また其の一に加はんぬ。新體詩とは發句、長
 短歌、今様等の舊律格に對し、同じく律語以内にて別に一格を創せんとするものなり、舊體な
 らぬ律語詩なり、之れ世間の同意する所、されどもこれのみにては未だ盡きず。和歌は即ち五七
 五七七音を以て一篇を成すもの、又は五七音七五音等若干を重積して一篇を成すもの、發句は五
 七五音を以て一篇を成し漢詩は漢文法漢律格にしたがひて作らる、而も此等みな律語詩たるに於
 ては、嘗て新體詩と差別なきなり。劇詩といひ、小説といひ、物語といふたぐひの區分はた之れ
 に準じて頗る不備のものたるを免れず。斯かる分類は、通俗なる一種の分類法として便利なると
 なきにあらざれど、精確なる理論の上には甚だ益なし、吾人は顧みて他の分類法に參酌し來たらざ
 るを得ず。凡そ詩の分類法の重なるもの四あり。第一は之れを質の上より見て敘事的、抒情的、
 劇詩的の三となす、されど此は彼の律語詩内に於ける敘事詩、抒情詩、戯曲詩等の分類と混じ易
 き恐あり、只詩の全体につきて其が實質上より見たるものなるを忘るべからざるのみ。第二は、
 同じく質の上より見たる主觀詩、客觀詩の別是れなり。第三は上の二者と異なりて、單に形の側
 より見るもの、律語詩、散文詩といふの目は之れより來たれり。第四はすなはち、前に挙げたる
 小説、劇詩、新體詩などいふ、極めて漠然たる極めて通俗なる區別にして、之れまた形の上の沙
 汰なること言ふまでもなし。それ然り、しかして今の場合に要すべき結論は、此等諸種類の中の一
 なる新體詩といふことが、他の分類法に對して如何なる關係を保つか、主觀詩に入るか、客觀詩
 に入るか、律語詩、散文詩の何れに如何にして交渉するか、といふ點にあり、これ新體詩の性質を

明にする所以なり。おもふに廣義にいふ詩を、其の主とする所の質にしたがひて、敘事的、抒情的、劇詩的の三とするとき、新體詩は當に其のいづれに屬せしむべきか。其の人と事とを併寫して全人間相を活描するを主眼とする、劇詩的のものにあらざるは勿論なるべし。また單に事件の發展を先にして、その間に個人の性格をも認めねば作者自身の之れに對する感情を揮灑し來たるにもあらざる敘事的のもの、之れも新體詩の本色にはあらざるべし。稱して新體詩といふもの、第一義は、其の抒情的なる所にあるに似たり。勿論抒情的といふも、其の範圍廣大なれば、夫の修辭學者等が形の上より又は題の上より分かつときの敘事詩は、之れを抒情的といふ中に編入して不可なく、(劇詩は抒情敘事間接に兼ね至るものなるがゆゑに單に抒情的といひ難きと共に抒情的ならずとも言ひ難し)小説物語などの敘事的なるものとは自ら別様の色を帶ぶ。「實用修辭學」の著者クラルクが數へし敘事詩の六要件の如きも歸する所は詩を抒情的ならしむるもの、若しくは抒情の範域に於て之れを運轉すべきものなり。但し踏襲の久しき、時に或は例外なきにあらず、我が新體詩に相當する西洋のゴエトリ(狹義)にてもミルトンの『バラダイス』、『ロスト』は敘事詩といふといへども猶質に於て抒情たるを失はざること人の知る所なれど、スコットの『レデー、オブ、ゼ、レーク』、『マリーミオン』の如きに至りては、頗る抒情の本意を離れて、律語的物語といふ別稱をさへ附せらるゝに至れり。事を敘するは可、之れを抒情の壺に投じて撰鍊一番するは抒情詩歌の本色なるべく、今の新體詩の根底また此處にあるべし、尙敘事抒情、劇詩の區別につきては論あれど、茲には新體詩の本領の抒情的なるべきことを斷定し置くをもて足れりとす。

されど抒情的といふの感ひ易きを恐るゝものあらば、吾人はさらに之れを主觀詩なりといふべし。主觀詩、客觀詩の別につきても言ふべき節は多けれど、要するに詩人がその作りあげたる心内の美象を、假感假象ともに客觀に圓現せしめたるもの、若しくは假象の一邊のみを物語的に描寫せるもの、即ち所謂劇詩的、敘事的、之れを總稱して客觀詩といひ、詩人が美象中の象の方を疎にして、感の一方を直に圖に上し音に上し歌ひ出だせるものを主觀詩といはゞ、略々足るべし。美象中の象と感とを圓具するものを劇詩とせば、之れを引き離して、象の方を物語るに重きを置くは敘事的也、感の方を歌ひ出づるに重きを置くは抒情的也。新體詩の面目は直に感を歌ひ情を抒ぶるにあるの理、試に古今東西の妙詩の、暗に今の新體詩に比類せらるゝものを取りて、諷誦し來たらば、または此の種の詩の始めて人間に發生せし所以に考へ到らば、おのづから明なるべし。詮ずる所、新體詩の實質は主觀詩的なり、抒情的なり。さらば更に之れを形式の上より見て、律語詩か散文詩かといふ、其の韻律諧和のものたるは多言を須たざるなり。固より將來常に斯かるべきか否かは本問題の眼目にして、論の終に至らざれば知りがたしといへども、此れまでの文壇にありては新體詩と許さるゝものは、凡て律語の形をもてり。されば吾人は爰に内外をすべて、新體詩といふときは、主觀詩の質を具して律語の形を被れるものと斷言するを憚らざるなり。抒情的の想は主として律語の形を擇ぶべし、律語詩は常に抒情的の想に嫁すべし、敘事的のものには、作家が修辭の才をためんために律語を取るは自由なれど、最も適當なる形は物語體散文體なるべし。外山氏はすなはち、其の新體詩といふものに於て、質は流石に抒情的主觀詩的本領を

離れざらんとしたれど、形はわざと律語的ならざらんとしぬ、此に於てか、想と形との關係、すなはち抒情的詩想と律語との關係、本問題の中堅として現れ來たる。一言以て之れを掩へば、曰はく抒情詩的詩想を圓に發揮する最好方法は律語にあらざるか、又は、律語は抒情詩の場合に於て想と同等の價値を有することなきか、讀者請ふ吾人が論の發足點の、常に此處にあることを忘るゝ勿れ。

新體詩の意義以上の如し、またがひて、詩形とは何ぞといふの問題も、既にこれに連りて提起せられたるを見る。尙審にいはんか。美術上にて内容といひ外形といひ、想といひ形といふは、その義極めて廣漠にして、主觀の心内に成立する美象を内容とし、之れを客觀に實在して停留せしむる材料を外形とするも一説なり、作物中の形式美の方を外形といひ、内容美の方を内容といふも一説なり、意味名目を凡て外形に下して其が含蓄せる理を内容と稱するも一説なり。されど此等の細論は後段律語と抒情的想との關係を説く條に譲り、此處には普通なる詩形の種類を一言すべし。芭蕉が「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」の句に着きて言はんに、其が定式の律を有して散文ならざるところ是れ一の詩形なり、その律の五七五音にして其の他の音數ならざる點に於ても一の詩形なり、其風格の何處となく閑寂の趣を具するに於ても一の詩形なり。即ち詩形は、第一之れを律語と散文とに分かつべく、第二之れを律語中の種々體に分かつべく、第三之を作者の文致と題の性質とによりて分かつべし。其の他用語によりても分かつべく、長短によりても分かつべく、題目によりても分かつべく、要するに雜多なれど、斯かる分類の學理上に用なきは、前にい

へるが如し。而して上に陳べたる三種の詩形中、第三者は到底前以て取捨選擇を加ふべきものにあらず、人は各々其の特有の文致を題に應じて發洩し來たるべく、想をして自在に之れを作らしむるの外なし。隨ひて此の意にての形は本問題と直接に相關することなし。また第二なる律の種類も、先づ律か非律かの問題決せられたる後に來たるべき論點として、まばらしく之れを措き、當面、新體詩に必要なりや否やと問ふの詩形は、第一なる律語に外ならず。新體詩想は必ず律語によりて現すべきものにあらざるか、否、新體詩想を現すに最も恰好なる詩形は律語にあらざるか、繰り返していふ、是れ本論の主眼なりと而して外山氏は議論の上にては兎も角も、實際の上にて、之れを少くとも我が邦に不適當と斷じたる人なり。

一步を進めて、理論の上より全稱的に律語を否定せんとするものを、林斧太といふ人の論とす。其の意にもへらく、形式は内容の必然自然の發表なるが故に

(一)凡て形式を以て詩の特質となすものは誤れり。(二)若し假りに從來の詩が此の一定の形式を有するの故を以て歸納的に是の形式を以て詩の特質となしたりせば、是れ實際的時の方便としては或は不可なきも素より以て詩學上に根據せる原理となすに足らず、(三)ましてや文化の進歩と人心の發達に伴ひ思想發表の手段に於ても亦不斷の變遷を見るべきは素より見易きの道理なるを以て一定頑固の標準を以て之れを束縛するは將來の詩歌の進歩を阻害するの虞れあり。(四)之を要するに形式は内容の自ら之れを擇び之れを造るに一任すべきなり

と。何ぞ其の論の無造作なるや。詩の本來が内容にあることは、げにも論者の言の如くなるべしと云ふもこの内容の趣くまに／＼現れ來たる詩形、論者のいはゆる内容の自々の發表は、本問

題の律非律といふときの詩形にあらずして、寧ろ前掲第三種の詩形に近きものならざるべからず、然るに論者は深く詩の内容といひ外形といふの意を究めず、淺膚なる論文家の用例にならひて漫然語をやり、遂に一大謬論に陥れるに似たり。吾人は普通にいはゆる詩想詩形の外に、一段深く詩の内容外形の由來を研究せざるべからず。

「我邦將來の詩形を如何にすべき」これ論者が提出せる第一の問題なり。その所謂詩形とは何の義なるか。脚本も詩なり、小説も詩なり、脚本には脚本の形を要し、小説には小説の形を要す、言者の意は恐らく此等の凡てを一括して、さて將來之れを如何にすべきかと問へるにあらざるべし。前後の關係より案ずるに、此に詩といへるは明に、從來新體詩に屬せる種類の詩を指せるなり、随つてその形とは、新體詩に特有なる韻律の謂に外ならず。詩形を如何にすべきといふは、やがて新體詩の律格を如何にすべきといふの意に歸す。嘗に然るのみならず、仔細に考ふるときは、新體詩の律格を如何にすべきといふ中にはまた、第一、新體詩の律を如何に定むべきかといふと、第二、新體詩の律格は本來必要なるか否かといふとの二義を含めり。第一項に對しては、論者はまづ七五、五七等の「其用語如何に妙なるも、其配列如何に巧なるも、所詮今日の人情を表白する適當の詩形に非ざることは今や國民が多年の實驗によりて殆ど争ふべからざるの事實なりと普く信ぜらるるに至り」たる（未だ必らずしも然らず）由を言ひ、別に國民は十年一日の向上的熱心を以て新體詩を慕ひ求むと説きぬ。これ事實なり、國民が十年一日の熱心を以て憧れ求むる所は、實に新體詩の新律格にあると、滿天下の認むる所なり。律語の範圍に於て、如何にせば最も適當

に感想を發露し得べきか、小説は之れあり、劇詩は之れあり、缺くる所はそれたゞ抒情歌、吾れ人は何によりて此のミューズの靈音を調べんか。實際上目下第一の研究はこれに外ならず。然るに論者は此の點に於て突飛しぬ。論者は七五、五七の適當なるを斷ずると共に、顧みて他種の律格に考へ及ぶことなく、直に一躍して律そのもの、根柢に立ち入り、或る論據によりて、天地間一切の律語の領分を奪ひ了んぬ。あはれシエレー、バイロンのともがらを始とし、世界の文學史に頭をつらねて累々たる律語詩家等は、論者のために其が半生徒勞の愚を笑はれんとす。聞きたきは其の斯かる結案に到達せる理路なり論據なり。新體詩に律格は必要なるかといふの疑案に對し不必要と斷するはそもく如何なる前提ありての事なるか。論者答へて曰はく、他なし、たゞ詩の形式は其が内容によりて定まるべければなりと。復言すれば「詩の形式はすべて前定すべきものにあらざ、律語は前定すべきものなり、故に律語は詩の形式にあらず」といはんが如し。論果たして當たれりや。

吾人の見る所を以てするとき、この論は形式といふ語を濫用して誤謬の結案に終れるものなり。論者は詩形は凡て前定すべきものにあらずといふの前提、すなはち形式は常に内容の奴隸なりといふの第一斷に於て、いみじき錯誤をなせり。形式と内容との意義を極むるときは、或る意味に於ては、實に内容に従ひて僅に定まるべき形式もあるべし、此種の形式は内容の萬殊なるにつれて殆ど普通の性を有せず。然れども又或る意味にては、形式は内容と同等の位置を保ち、否、むしろ別なる形式に對し二者合して内容の位置を保ち、以て一團の美を全うす。論者は此等

新體詩の形に就いて
九四
の區別に心を潜めざりしため、全稱ならぬ命題を全稱に取りなすの弊に陥れり、水は凡て流動體なりといひ、而して凍水は流れざるが故に水にあらざると強ゆるの類、論者之れに近し。吾人をして、更にこまかに内容外形の論を悉さしめよ。

(III)

詩とは、いふまでもなく、美象を言語文字に結び付けたるものなり、されば詩人の技倆は、まづ美象を主觀のうちに形づくり、而して之れを、言語文字の手段を假りて及ぶべきだけ圓滿に發表するにあり。更に之れを分析すれば、先づその美象を形づくるに於て、幾等の階段あるべく、幾様の種類あるべし。或るものは、深く現世の罪惡に感發して、此に若干架空の人物を設け、事件を編み、これを美的現象に醇化して、一團の美象を成す。或るものはまた、現世の罪惡を悲むといふが如き定着したる感想の代りに、一事件一人物の運命に同感しては、悲劇の落想を此に得、斷烟廢墟の景、林泉幽清の趣に興を發しては轉々詩情の切なるを覺え、さてのち、心織意匠の効を積み、個の美象を作り出だす(簡單なるものに至りては、此等の階段を、殆ど一時に經過することもあるんか)。今、かくして成れる我が心内の美象のみにつきて、内容といひ形式といふべきものありやと問はれ、吾人は答へん、およそ甲乙丙丁四種の内容外形ありと。

時としては、上に擧げたる階段中の、第一發奮の感想を取り出で、之れを作家の理想といひ、作の趣意または想といひて、暗に内容の地を與へ、之れに對して此の想を宿すべき人物事件景色

などの結象的要素を、形といふことあり。「想は佛教的にして形は花鳥風月の外に出でず」などいふは此の意味なり。又は、覆載間の萬物はすべて自主獨得の性を有し天職を有し、各々その本然を發揮して、以て唯一眞宰の手に支配せらるるといふを、造化の理想の姿と假定し、而してこの理想を成ずる有様を、萬物の特性的といひ、美の根柢を此處に置くとすれば、斯の美すなはち造化圓滿の理想を小天地的に模寫して表する美象を、其の統一主宰の點より見て、想といひ内容といひ、相寄りて此の想を成就する種々の分子を外形といふことあり。これも前者と相通ずるの論なり。以上を甲種の内容外形と名くべし。

次に乙種の區分法あり、上に言へる美象の二面、すなはち統一主宰の面と個々差別の面とに論なく、甲乙黑白といふが如き定着したる名目(意味)を有する邊を、すべて内容と稱し、これら内容の全體上の形式の邊、すなはち美象中より意味ある象を抜き去りたる邊を(假に此の如く分かち得べしとして)之れに對せしむるもの是れなり。幹あり枝あり、花を着け葉を芽ぐみて、茲に箇の樹といふ美象を作り上げたりとせよ、其の獨自圓滿の姿をなせる箇の樹といふ意味、及び幹枝花葉といふ諸多の意味、これらは凡て斯く理解せられ名付けらるゝ點に於て象の内容と呼べるゝなり。而して件の幹枝花葉が有機的關係により、相助け相成して一箇の樹といふ小天地的、特性的の相を形づくるにあたり、其の中より、樹といひ幹枝花葉といふが如き一切の名目を抜き去り(得と假定して)、單にその有機的、小天地的、特性的の全形、すなはち直感せらるべき邊のみを取り出で、云々するを、象の形式といふ。夫の美を二大別して内容美、形式美とするの根原は

此の區分法にあり。

次は丙種の區別なり、此にては、一美象内の諸分子を、内容といひ、此れが相寄りて作り上ぐる一團體を形式といふ。前の例にて言はし、幹枝花葉の諸材料は内容にして、此の上に成立する箇の樹は外形なり。されば美象の特性的は、其が材料たる内容の豊富なるにしたがひて、次第に高等のものとなるべく、一般の人といふ類想は一個特殊の人といふ個想よりも内容貧しきの故を以て、特性的結合の度少し。復言すれば、部分の複雑なるだけ、有機的關係に成る全體の組織高等なり。而してこの複雑なる部分は即ち内容にして、高等なる全體は即ち形式なり。審美學者が、美を、その結象の度によりて、逐次形式的より結象的に進むとやうに分類するは、一面この原理に基けるに外ならず。

次に、丁種の内容外形とは、美象中の象の面を内容とし、之れを圍繞する情の面を外形とするの謂なり。山あり水あり、日常差別の我れと利害の關係を脱して、假象中のものとなる、之れを稱して美象の半面なる象と呼び、之に伴ひて生ずる維多の假情を稱して、美象の他の半面なる情といふときは、此の山水は内容にして、之れに對する維多の情は外形なり。

以上はすべて美象以内の區別なるが、一步を進め之れに實質を與へて、外界に現存せしむるに及べば、此に戊種の外形内容を生ず。詩の上にては、詩人の主觀に現前せる美象と、其を客觀界に定着し留置せしむる音聲的記號と、一を内容といひ、他を外形といふべし。本論に最も關係深きは、此の意にての内容外形なり。

内容外形の別以上の如く其れ維多なり、吾人はさらに之れを、本論の眼目たる内容と外形との關係より見ざるべからず。まづ、甲にありては、内容はすなはち主想にして、外形は之れを寓する諸現象なるが故に、二者固より價值の上に輕重の分なしといへども、詩人が之れを作り上ぐるに於ては、先後の次第あるを得べし。時としては眞詩人の資なきものが、熟練の餘に得たる才能を運用して、製作に従事するにあたり、意匠脚色先づ成りて、後に主想を之れに附加することもなきにあらざれど、此等は論外とし大抵は、前に内容ありて、外形は之れに恰好なる限に於て結撰せらるべし。(結撰の方法が半意識、半無意識の詩的想像の力に因るべきものなるは、言ふまでもなからん)。次に乙種の内容外形の關係は如何。此所にいはゆる内容、即ち意味的存在と、外形即ち全局の姿趣關係とにつきては、由來前後輕重の分を説くべからず、内容相寄り内容的關係によりて内容美を成すとき、形式はおのづから之れに伴至し、之れと同住し、内容の外に形式なく、形式の外に内容なければなり。次に丙なる内容外形の別は、詮ずる所乙と同様に歸すべく、隨つて其の内容外形の關係に於ても、先後輕重の別なきこと乙の場合に如し。たゞ此方にありては、實在上にも形式のみを引き離して現せしめ得るの差あるのみ、次に丁にありては、外形は美象の半面たる情にして、内容は他の半面なる想、又は象なるがゆゑに、完全なる美象の兩面、象と情との間に、輕重の分なきは勿論の事なるべし。但し生起の次第に前後の別を附するは不可なきに似たり、就中、鋭敏なる詩人の頭腦には、象のみを受くるも直に情を繰り出だして之れに鹽梅するを得て、心理的に多少象前情後の順序を定め得べければなり。此の點にては、外形即ち情の色

合は、内容即ち象の色合に従ひて定まるものといふを妨げず。若し夫れ、象、情併せ寫して、美術品が夫の無趣味なる記事文、寫眞畫と異なる所以を明にし、象に常に情の靈火を加へて、以て塵世の風に凍り果てたる凡夫の靈性に、一脈の春温を附與するは、洵に詩人の本懐なり、また要務なり。象なき所に情あるを得ざると共に、情なき所に象あるを得ず。否、情なき所必ずしも象なきにあらざるといへども、斯かる象は美の約束にかなはざるもの、隨ひて審美界には、情なき所、象なしといふも不可なきなり。殊に詩にありては、象、情、遂に偏重すべからず、時としては情のために象の明瞭を犠牲にすることもあるべく、時としては象のために情の幾分を減殺して顧みざることもあるべし。此の點にては外形は内容の奴隸なりとも限らねば、内容は外形に制せらるべしとも限らず。願ふ所は、二者共に圓現して微翳なからんにあり。果たして然らば、象を寫し情を寫すの道如何。此に至りて、論はあつからず、戊の内容外形説に移るべし。

戊は、音聲を外形とし、美象を内容とするものなり、隨つて、その内容といふうちには、前段に論じたる内容、外形のすべてを含むべく、外形はさらに此の外にあり。されば、此の際に内容外形の關係如何と尋ぬるは、やがて、美象中の内容、外形と音聲との關係を究むるに同じ。美象中の内容外形は、要するに幾類に分かる、か。甲と丙とは、本論と相關せざるが故に、しばらく措き、乙にありては、意味即ち象に屬する邊を内容とし、之れに對する全局の虚なる關係、むしろ全美象の調子を外形とす。美象の象、美象の調子、これ美象の二義なり。而してさらに之れに丁種の内容外形を混和するとき、丁は、情を外形とし象を内容とするのゆゑを以て内容のみ乙と

合躰すべし。即ち、内容一義、外形二義となるなり。又は一、美象中の象、二、美象中の情、三、美象全局の調子の三面より、美象を論ずべきなり。さてこの三面と音聲との關係は如何。第一、象を音聲に結び付くるの道は、言ふまでもなく言語にあり。音聲をば、其が第一義たる音そのものとして用ひず、之れに他の心的活動を連絡し置きて、一音到るごとに音自身の印象と異なる象を、心に印せしむ、之れなべての言語の性質なり。此の場合に外形たる音聲が、内容即ち其の表出する意味に對して先後輕重を争ふべき些の權利なきは勿論の事なるべし。第二、情を音聲に寓する事、第三、全局の調子を音聲に託する事の二件は、所謂聲調の作用によりて達せらる。聲調とは、言語以外に、音聲其のもの、固有の性質を利用するの謂也。蓋し、遠く人間が心の活動を聲音に寄せし始に溯るときは、言語は單に知にのみ隸すべきものならずして、却りて情の自然流露の結果なりし事もあるべく、なべて知、情の界限なき、漠然たる心象を表するが常なりしこともあるべし。されど斯くして出で來し言語も、襲用久しく、人智漸く發達して知情別途に趨くに及びては、復た往日の態を保持する能はず、言語はやゝもすれば、知の一方に傾かんとするに至れり。詩人乃ち種々の方法によりて、言語に情の分子を荷はしめんとす、夫の修辭術の示す所に從ひて、極めてサセステープの語句を擇び用ふるが如きも其の一なり。聲調はた之れと同様の任務を帶ぶ、言語が示す當面の意味以外、人心の秘密を不語の際に語るは、實に聲調の力なり。或はあもへらく、象情既に一躰なりといはれ、何ぞ忠實にその寫し得べき象を寫して、情のあつから之れに伴ひ來たるを待たざると。これ一を知つて二を知らざるの論なり。靈妙にして殆ど無限

に近き心内の働を、有限不完全なる物質界の産物、言語といふが如きものに托して表出せんとす、或は能くせんも、斯くして得たる象の記述は、これ死象のみ、既に箇中の生趣なし、知性の餌とはなり得んも、情必ず之れに伴ふべしといふべからず。到底詩にありては、音聲は、象の意味を傳ふるかたはら、別にこれを美的、情的ならしむるの用を兼ねざるべからず。此れ紅、彼れ紫、言ひ得るものを言ふは容易の業なれど、其の奥に潜める心の妙調は、遂に言説すべき限にあらざるなり。詩歌はいふに及ばず、散文といふとも、凡そ古今の詩的述作が、其の妙所に達する毎に、朗々として金玉の聲をなすは、聲調の美に外ならず。以上言語と聲調とを、戊種外形の二面とす。

而して聲調といふに更に二義あり、一は、音そのものが、種々の關係よりして、直接に種々の情緒を挑發することなり、之れを稱して聲格といふべし。聲格は多く吟誦の際に發するものにして「秋山のもみぢ哀にうらぶれて入りにし妹は待てど來まきぬ」といふときは、これらの語が直接間接に傳ふる悲涼なる事柄すなはち意味の外に、一句の語音の抑揚、開閉、長短によりて、無限の情緒を附加するを得べく、聲によりて直に我が心の琴をしらべらるゝ心地すべし。是れ決して、一派の論者のいふ如く、意味の上の作用を聲格の作用と思ひ誤れるにあらざるなり。夫の外山氏の朗讀文の、文としてさしたる妙味もなきに朗讀を聞けば悚々人を動かすに足るものありといふが如きも、必竟聲格の理を證せるもの、詩の要義は、この聲格に客觀的價値をたもたしむるにあり。

されば、聲格といふとも、これのみ意味以外に獨立して存すべしといふにあらざるは勿論なり。聲格が傳ふる所の情は即ち當の語意、句意、題意があらはす所の象に適應すべきものならざるべからず何となれば情はもと象に後れて至るもの、象にしたがひて定まるものなること、前に言へる如くなれば也。この意義にては、聲格はまた他の外形たる言語の後に定まるべきものといふべし、言語の方面を先にして、而してのち其が聲格の面を吟味す、これ自然の順序なり。但し、象を表するの言語は即ち、情を調ぶるの聲格にして、二者もど一躰なるが故に燃ゆるが如き詩人の想像の之れを撰ぶにあたりては、殆ど前後の別なきことあるべしといへども、理はすなはち上の如し。詮ずる所、聲格は聲格みづから情を勝手に挑發し得べしといふにあらざして、言語の傳ふる象に恰合すべき限り之れを許すといふなり。言語としても、象を傳ふると共に幾分の情を惹くことなきにあらねど、聲格はこの幾分の情を外より助け長ぜしめて、十分十二分の情を有たしむるを目的とす。この故に前後の別はありとするも、言語と聲格とに決して輕重の分なきこと、猶象と情との場合の如くなるべし。若し、十分の言語と十分の聲調と相捍格することあらば、場合によりて、語意明瞭を缺くもむしろ聲格の十分なる擇ひ得ること、詩の特權なり、内容外形の關係上詩の達意を主とするの文と異なるところは此にあり。

聲調の他の一は、律格是れなり、律格とは音を組み合わせる上に一定の規律を立て、以て全章の種々音を一律に歸納せしむるの謂也。換言すれば、音聲の、言語としての外なる、他の半面、即ち音そのもの、上に、形式美の原理を應用したるもの、これ律格なり。律格の價値は其の形式美

の原理に根ざせる所にあり。されば、律格の詩に對する關係はまた、形式美の美象に對する關係に外ならず。形式美はそもく、如何なる點に於て美象を發揮するの用をなすべきか。吾人は、前に既にこの問題の一端を解釋しぬ。必竟するに形式美とは主觀の美的活動の輪廓を、自然界に獨立存在の價値なき色、線、音等の材料に藉りて、形式的に寫し出だすの謂なり。他語にて言はば人心の美的活動の調子を、或は空間的、或は時間的に模するもの、之れ形式美の由來なり、而して其の性質をいへば、廣き意義にての變化理の統一、統一理の變化、差別即平等、平等即差別、又は有機的、小天地的、特性的結象の形式なり。其の所在をいへば、人巧によりて色、線、音等の上に、之れのみ假現せしむるをも得べく、人巧天産の別なく、内容の上に覆被せられ、内容結象美として存するをも得べし。前者は當然形式美といふべく、後者は、嚴には、内容美といはんよりも、結象美といふを當たれりとす。何となれば、後者は形式の發達して有意味に結象せるものとも見らるべければなり。さらに、形式美の效果につきては、其の由來すでに人心の美的調子を寫すに於るが故に、之れを他の人心に觸着せしむるときは、人心の普通の方面に於てまた、始めこれを寫せしときと同一の調子を起さしむべし。同一の調子とは即ち美的活動なり。美的活動の形式一たび定まるときは、極めて劣等にして、殆んど情緒的の價値なきものはしばらく措き、音樂の如き高等のものに至りては、之れを感受するの人心は、美的活動を挑發せらるゝにつれ、一音／＼の快といふが如き賤劣の美をば打ち忘れて必然此の全形式に恰好すべき維多の情を連起し象を連起し來たるべし、心理學上に所謂、情より思に連なるの作用これなり。形式美の効

果は單に感覺を喜はしむるのみならず、進みて人心を美的に整調するにあり、シヨオペンハウエルが口を極めて音樂の妙をたゞへたるも、畢竟此の消息に外ならざるべし。形式美の原理以上の如し、されば律格の詩に於ける地位はた之れに同じ。外形の上にて言はば、言語は象に訴へ、聲格は象と同至すべき情に訴へ、律格は此の美象全軀の調子、即ち全關的美情を鼓舞して讀者の心に美的活動を盛ならしむ。而して以上の三役は、すべて音聲が荷ふ所の要務なり。前來の論の要旨を圖示すれば下の如し、

戊種の内容外形



吾人は以上の論據によりて『帝國文學』の論者が詩の一切の外形を輕じ去りたる論の當否を判せんとす

(四)

論者が、詩のすべての形式を價値なきものと斷ずるの理由は、極めて粗雜なり、今その要點と見ゆるもの二三を拾ひ上ぐれば、(一)形式は素と内容の自然の、又必然の發表に過ぎずといふ事、(二)

内容は内容みづから形式を有し、形式は形式みづからの内容を有すといふ事、(三)形式と内容とは哲學上に於ける二元と等しく矛盾すといふ事、(四)人心の發達と共に詩の形式は變遷すべしといふ事、およそかくの如くなるべし。此等の言は何ほどまで眞なるか。

(一)形式は内容の自然の、又必然の發表に過ぎずとは如何なる意味か。立論の趣意及び結案より察するときは、論者は、此の理由によりて詩形の一面たる律格を排せんとするなり、平仄七五といふが如きものを排せんとするなり。されば、此に形式といへるは言ふまでもなく、其の排せんとする律格が屬する所の外形、すなはち音聲、すなはち吾人のいはゆる戊種の外形なるべく、之れに對する内容とは、主觀内の美象なるべし、別言すれば、形式は内容の自然の、又必然の發表なりといふは、聲音は美象の自然必然の發表なりといふに異ならず、これ一解なり。果たして此の如しとせば、凡そ音聲が美象の命のまゝに發表の任を盡くすべしといふに、天下また異議を唱ふるものあらんや。音聲そのものは、微塵だも美象の命令以外に馳するの自由なく、形式は常に内容の必然の發表なるべきこと、殆ど自明の道理なり、之れにつきて喋々するは畢竟贅辯のみ。試に思へ、今の時にあたりて新體詩に指を染めんほどのものが、假りにも音聲を美象の發表以外に使用し得べしと信ずべしや。世の新體詩人等が、一篇よみ出づる毎に、律格の末に苦慮する所以のものは、少くとも、律格を以て論者のいはゆる「内容の發表に對する必然なる方便」と認識せしによらずんばあらず。律格は美象の發表には益なきも、詩の先天的形式なるが故に是非なく之れに従ふといふが如き愚見を懐けるもの今の詩を論ずるもの、中にありといふに至りては、誰れか

誣言の甚だしきに驚かざらんや。

要するに、上の如き意味にては、論者が律格排斥論の根據として提出せる前提すなはち、外形は内容の必然自然の發表なりといふの一命題は正當なり。唯此の一命題のみは正當なり。

既に外形は内容の必然の發表なりとせば、之を理由として律格を排するは、論の當を得たるものなりや。音聲は美象を發表する限に於て使用せらるべし、たとへば、之を言語としては象を表し、之を聲格としては情を表すといふが如し。然らば、之れを律格としての音聲は何のために用ひらるゝか。こたへて曰く、形式美の性質にしたがひて、人心の美的活動を助けんがためなりと、所謂形式美の原理之れなり。一定の平仄あり押韻あるものが默讀音讀に拘らず、凡て讀誦の際に漠然たる一種の快感を生ずるは、争ふべからざる事實にして、或は之れを口調善しといひ、或は之れを流麗といひ、優美といひ、名はさまざまなりといへども、歸する所は、我れの美的想像力の活動を刺戟するの謂に外ならず。之れを唱歌の伴はざる音楽を聞くに譬ふ、初は音そのもの、快不快のみ耳だてど、急絃緩絃、次第に曲の妙所に近づくにまたがひ、我れは限なき無語の妙語を聞く心地して、其の曲の性質のまゝ、或は夕殿孤螢の思となり、或は天涯淪落の情となるべし。たゞこれのみにては、心内に現は來たる美象の象の面、甚だ漠として定着せざるのみ、若し之れにほゞ相應すべき幾分の定まりたる意味すなはち言語の分子を附加して、之れを導くを得ば、情は導かるゝまに／＼象に追隨して違背せざるべし。今はこの順序を轉倒して、言語即ち象を先づ作ると共に、之れに纏綿する情を豊富ならしめん爲に聲調を利用し、聲調の中にも、聲格の上に律格

新體詩の形に就いて

106

を重用して情の美的活動を滑ならしむ、律語詩は此の如くして成り立つなり。されば詩に律呂あるは、内容を限らんとすべからば、既定の内容以外に他の内容を加へんとすべからず、却りて既定の内容を助けて、其の美を容易に感受せしめんの方便なり。試に天下の律語詩人に問へ、彼等の誰れかは、律語を内容の發表に必要な方便とせずして用ふるものぞ。夫れ既に律格も内容の發表に外ならずとせば、前段、外形は内容の自然の又必然の發表に過ぎずといふの故を以て律格を斥くるの論は、成立せざるにあらざらば。

他の解は此の場合の外形内容を吾人のいはゆる乙種また丁種の外形内容と見做すにあり。之れはた、美象内にありては、外形は内容の發表、又は外形は内容について至るものといふを得べし。されど此は未だ之れを音聲界に附託せざる以前の事のみ、一たび之れを音聲に結び付けんとするに及びては、必ずしも美象内に於て先至せるものを先とせざるべからずといふの理由はあらず、抒情の詩歌にありては、寧ろ後至せる情を先とし、之れを整ふるの聲格律格を、言語よりも重なることあるべし。これ、言語の不完全にして、到底情の一面を傳ふるに足らざるより來たる結果にして、如何ばかりの天才といふとも、此の際に多少の意料を用ひざるを得ざるは當然の事なり。即ち論者のいはゆる内容外形を、本段の意味に解するも、之れによりて律格を否定するの理由はなし。縦し幾分の理由ありとするも論未だ之れに達せず。

或はあもふ、論者は「自然の又必然の發表」といへるに力を置きて、律語は自然ならず必然ならずが故に適當の詩形にあらざるといはんするか。果たして然らば、吾人はまづ、其の自然といひ

必然といふの意味をたしかめざるべからず。所謂自然の發表とは何ぞや、人巧をまたずしておのづから表はれ來るといふの意か。所謂必然の發表とは何ぞや、何の場合にも遍在すべしといふの義か。而して律格はすべて此等の條件に違背するが故に非なりといふか。若し此の如くんば、論者は、自然ならずといふに於て律格の性質を解せざるなり、必然ならずといふに於て詩中に差別あることを認めざるなり。更に精しく論ぜんに、律格の性質につきては、律格は論者の考ふる如く不自然のものにあらず。むかし抒情的詩歌の始めて發生するや、未だ今日の如く定まりたる律呂はあらずと雖も、その内自然に律呂の萌芽を含みたりき、後人乃ち之れを醇化して、ます／＼律呂の本性を發揮しぬ、所謂律格これなり。韻脚といひ平仄といひ五七言といふ、畢竟美的感情の自然の發露につきて、之れを彫琢したる形式に外ならず、故に學者は律語詩を稱して實に自然の語ともいふなり。たとへ律格の半面に人巧の跡はありとするも、自然を助くるの人巧なるに於ては何ぞ之れを累とせんや。斯かるたぐひの人巧をも、人巧なるが故に非なりといふは、美術上の技術と意匠との何物たるを解せざるの言といふべし。次に律格は必然的ならざるが故に非なりとは、固より理なきの言なり。シェークスピアの作に於て、情に訴ふるを主とする所と然らざる所との別に從ひ、律、散の錯綜自在なるを證言するの學者は、また抒情的ならぬ詩の散格にまたがひ得べきを證すると共に、抒情的詩歌の自然に律語的ならんとし又必然律語的ならざるべからざるを證するにらざるや。激烈なる日常の實感そのまゝを現はすに於ては、或は聲格のみにて律格を要せざることもあべく、また律格と相調和せざることもあるべし、何となれば、此の種

新體詩の形に就いて

107

の感情は美的約束に従はざれば也。されど一旦美の世界に入るに及びては、如何なる感情も、其の活動の全形式に於て決して形式美即ち律格と相背馳せず、蓋し、形式美は美の原理の關係の上に現れたるものに外ならざるの理、前に論ぜし如くなれば也。要するに、律格は、抒情的の範圍に於ては、必然的なるべし、過去の事實と上來の論とは、之れをし證て餘あり。抒情的ならぬ、例へば叙事詩の如きものといふとも、尙も美象の發表なる限は、本來律格と相戻るの謂なく、天才の手には、律格を以て叙事詩を飾るを得たる例もあるべしといへども、既に叙事といふ以上は、事すなはち象を寫して餘さざらんために、勢ひ言の繁に流るゝを免れず、言の繁なるは律の成りがたき所以にして、叙事詩の極意とする所と律格とは、音聲といへる物質界の材料の有限なるに制せられて、相背き易きに終る。この際には、言語と律格と、彼れを抑へて抒情詩に近づくも可此れを略してまず、叙事の本意を全うするも可、律格は必然の性を有せざるなり。之れを要するに、外形が内容の自然の、又必然の發表なるべきは言ふまでもなし、たゞ、百の内容もし百の殊相を有すると共に百種一様の性をも有したらば、之れを表するの形式も百の殊相と一の通相とを具ふべきの理ならずや。言語、聲格は即ち、内容の殊相の面に應ずるの形式なり、律格は即ちその通相の面に應ずるの形式なり。形式上既に通通の一邊ありとせば、之れを豫匠し製作を容易ならしむるに何の妨かあらん。内に其の素あり、外より着意の一指頭を觸れて之れが进出を容易ならしむ、形の豫匠する所はすなはち内容の趨向せんとする所に外ならず、美術家の三昧はむしろ此にあるべし。夫れ律格を難ずるは形の豫定を惡むが故にして、形の豫定を惡むは

形に一定普通の所なきを信ずればなり。形に一定普通の所なきを信ずるものが、之れを證するの理由として、形式は内容の發表なればなりといひて已む、論の徹底せざるを見るべし。あもふに、詩形に一定普通の所なきを證せんとするものは、當然たゞちに其の内容に立ち入りて、美象の上に普通の所ありやなしやと尋ねべし。即ち此所にては、論の肯綮は移りて、吾人の所謂乙種内容外形の關係にあるなり。換言すれば、美象は一面に於て千種萬類なると共に、千種萬類すべて一定の形式を有するが故に美なるにもあらざるか。ます、差別的なるはます、平等的なる所以なるの原理に於て萬古不易の姿あり以て初級の形式美より結象美の頂上にまで一貫するにあらざるか、且象的一元論の價値は形式を拒排せずしてむしろ之れを取り入るゝ所に存するにあらざるか。非律格論者は宜しく重ねて此の點より論着し來たるべし。吾人は斷片的ながらも、本論に必要なる限り此等の點に吾人が見る所の解釋を下したりと信ず。其の他、(一)人心の發達と共に詩形は變遷すべしといふは、變遷すべき形式を知りて變遷せざる形式を知らざるの論なる事(三)内容は内容みづからの形式を有し形式は形式みづからの内容を有すといふは、詩形を論ずる上に無意味なること猶一枚の紙につき裏は表を有し表は裏を有すといふが如きものなる事、(四)形式と内容とは哲學上の二元論の如く矛盾すといふの不當論なる事等は、上の論によりておのづから明なるべしと信じ、此に絮説せず。

終りに小説脚本の詩なることを知れる社會は、詩に散文詩あることを認めたるの社會なるに、自ら科學に對する時の詩と散文詩に對するべきの詩と、語義に二ある所以を思はずして、漫に詩と

詩ならぬものとの別を論ずるの無意義、形式は内容の發表なるが故に内容を本とす、何となれば内容と形式とは矛盾なれば也といふの奇論法、これらさへあるに、シラの詩に律格あるは、其の獨乙人が獨乙的思想を歌へるもの、若しくはシラ的思想を歌へるものなるの結果なりといふに至りては、吾人復た言の加ふべきを知らざるなり。(完)

絢爛と平淡

蘇東坡が姪に與ふる書中に文を論じて漸熟乃造平淡といへる、『隨園詩話』に大巧之朴、濃後之淡を説ける、此等の論ありてよりこのかた、和漢の學者多くは、絢爛の極即ち平淡に歸すといふをもて作文の眞諦となせり。其の跡に就きて言ふときは吾人はた同意なり。然れども、此の説往々初めて文を學ぶものを誤まるを思はし、其の裡に似て非なる道理の混せるを知るに難からじ。學者動もすればおもへらく、平淡と自然とは文の極なり、宜しく一切の彫琢を廢して、一氣奔放に慣るべしと。若しくはおもへらく、文を爲りて之を彫琢するは、絢爛華麗の光澤を銷して樸素に歸せしめんの用意のと。要するに彼等は始より文章の鍛鍊を拒まんとするなり、又は鍛鍊してことさら淡々水の如くならしめんとするなり。此をもて其の弊を生硬粗雜。然らざれば平板にして些の活氣なき文字を連ねて得たりとなす。知らず、作文者の本意は斯かるべきものか、案ずるに然らざるべし。粗樸より出で、絢爛に入り、而してのち復び平淡に到る、これ作文の常道にして、

世の文章家とたへらるゝほどのものは、恐らく經驗に徹して然りと首肯かん。いはゆる平淡は絢爛なきの平淡にあらずして絢爛の極、頓足一旋、無方無涯の本然に還れるの平淡なり。平淡は絢爛に倦めるものゝ目的とすべき所、未だ絢爛に入らずして、始よりひたすらこれを希はんは、垂髫の兒童をして大人の儀容に嫻はしめんとするが如し、青年の活氣を殺しせば幸なり。粗樸にありて絢爛を冀ひ、絢爛にありて平淡を冀ふ、人心は常に一端より他端に向かひて動き、一往一反おのづから三段開發の次第をなす。文を學ぶ者この大則を破り第一境にありてみだりに第三境を望むとせば、其の弊に陥る怪むに足らんや。嘗て作文のみならず、人事此のたぐひの弊多し、調和は天地の眞理なるべしといへども、未だ矛盾の兩端を経ずして先づ之れに到らんとせば、其の結果圓滿を得ずしていたづらに曖昧疑似を得、夫の無定見を以て超主義となし、無心を以て大悟となすものゝ如きは此の例。彼等は必竟鵠を刻みて鶩に類せしむるの徒なり。始めて文を作らんものは勇猛精進到らん處に到るべし、絢爛を重ね彫琢を凝らすも、苟も達意を害せざる限りは、吾人之を谷めむ。まかも絢爛を極むればおのづから平淡に歸らんこと自然の理なり。

絢爛極まりて平淡に歸るといふ、其の間如何なる關係あるか。文を屬して絢爛に重ぬるに絢爛を以てし、積みて千萬篇に至るも、絢爛は終に絢爛のみ、平淡直に絢爛の極にあらざるや勿論なり。惟ふに一より他に移るの消息は之れを作文者の心の上に求むべし。天地の眞相はもと絶對無限、到底吾人の知量をもて盡すべからず。人心の本然また此の性を享けて、表面に事物の明割ならんを欲すると共に、裏面に私に神秘不可思議を樂ふ。蓋し一方より見れば、美の根底此にあり、ラ

戦争後の國文學
 一二二
 イブニツツの半解をもて觀美の要件とせるも、多少の道理なしとせんや。殊に東洋にありては、此の種の思想廣く行はる、古歌に「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に若くものぞなき」といへるがごとき、審美の訣はこれに盡きたり。人心の本然既に斯の如し、此を以て其のはじめ、ハミルトンのいはゆる無智の出立點より一步するや、小慧細智至らざるなく、綵を剪りて花を作り、石を蒐めて山を築き、以て天地の美、宇宙の眞を隻手に束ね了れりとなす。されば美や、眞や、彼れもと絶大無限、終によく區々の人巧を以て之を掩ふを得ず、巧を弄して愈、拙、奇を街ひて益、妙ならず、漸く繁縷の厭ふべく、不自然の惡むべきを知りて、醜りて秀靈自然の極致を慕ふ。珠簾玉櫺の眺に鑿きて都門を出づれば、雨後の青山當頭に起こり、鞋底の白水一段の趣を寓するのたぐひなり。文を作るもの、絢爛に鑿きて平淡に還へる、實に此の理に外ならず。斯くして蔗境に入らば、文味はちのづから熟せん、要は脩養にあり、世間滔々として似て非なる論理に誤まらるゝの今日、吾人豈に徒に辯を構ふるものならんや。

戦争後の國文學

歳序改まりぬ、請ふらくは吾人をして明窓の前、淨凡のほとり、しばらく一切の妄念を鎮めて我が文學の前途を觀せしめよ、孤心耿々たりといへども、衷情また喜ぶべきなからんや。何をもち喜ぶべしといふ、東風度りて南枝綻び、日本文學渾成のいとぐち、年とゝものに開けんとするの

故をもて。

顧みて歴史消長のあとを想ふ、人心もと忽然として動くものにあらず、人事はた倏爾として生滅起伏せんや。彼れ此れを喚べば此れ彼れを誘ひ、因々果々、環の端なきが如く、四時の勤れざるに似たるは物質界と思想界と相互作用する所以の實相也。さればまた、人事の多様にして世波の曲折なるに驚くもの、誰れか其の奥に人心の活動雲時も止まざるものあるを思はざらん。國家興亡の樞機社會變遷の命根は、擧げて思想の活動に繋れりとも謂ひつべし。精くし言はんか、凡智が示す所、天地は常に兩儀に象る、しかも人心は兩極を避けて一に合せんことを樂ふ、彼れは相對の姿なり、此れは絶對の趣なり、それ唯絶對の趣を追ふの心をもて相對の天地に處す、此に於てや欲望限ならして満足長永に到らず、陰は陽に往き陽は陰に還り、一正一反端より端を趨ひて止むことなし、思想活動の原則疑ふらくはこゝにあるべし、此の原則を因とし外境の事件を縁とし、因縁和合して雜たる斯の世間相を現す。之れを物質界にしては維新の大變もと曠古絶世、されど其の由來を釋ぬれば、徳川氏の社會に於ける反動的思想の結果に外ならず、而して維新の事一たび成るや、累年の屈抑一時に伸び、人心は決河滔々の勢を以て歐米の文化に向へりき。その果は如何なりしぞ。幕府の壓制を解きて内に自主獨立の地を固めたりといへども、外更に文明の鐵鎖に縛せられ、殆ど自家に創思創想の自由權利あるを忘れたらんが如くなりしもの、之れ豈維新に次ぎて來れる思想の大勢にあらずや。乃ち一波は一波を起こし、原動は反動を招きて、西歐心醉、國粹保存の聲漸く響き渡りぬ。案ずるにかの國粹保存論者、動、もすれば一念他を排してわが

佛尊しとのみ執着するが如く解せらるれど、其が本意はさにあらじ。たゞ奈何せん、雪に點するの炭は益、黒からざるを得ず、拜歐の餘に激せられて勢、排歐攘夷の色を帯ぶに至れるを。されば斯がる主角あるの思想は、何時か漸く琢磨せられて、對外硬といひ自主といふが如き稍、圓舎のものとなれり。世の論客或は國粹保存の自主にあらざるを辨せんとすれど兩者の到底一系に屬すべきは、思想運行の理之れを證す區々の辭を以て誣ゆべからざるなり。さて國粹保存といひ對外自主といふ、これら積漸の勢をもて壓し來れる思想の潮流は終に坦々溶々流れ去りて跡なかるべきか。蓋し人心は鬱結する毎に常に事に發してみづから伸ぶ、磅礴たる此の氣、虧隙の乘ずべきを外にせんや。征清の事に會して一瀉千里、汨々として四百洲の山河を浸さんとするものは此の思潮の餘勢也。

吾人が征清事件の動機を解するは是の如し、されど動機は凡て目的にあらざ、また結果とも別なり。政治家は言ふ、征清の目的は吞嚙にあらざして膺懲啓發にありと。吾人は此の點につきて必しも多説せず、直に一躍してかゝる征清の目的達せられたりと假定し、さてその人心の上に及ぼす結果如何を觀んとす。およそ何れの國たるを問はず、新に戦ひ勝てる國民が自家の優等を自識して満肚の豪心禁じ難き思をなすは、當に然るべきの理、個人の上に徴するも怪むに足らず、既にまづみづから自家を優等の地に置く、此に於てか胸宇朗郭おのづから大人の風をなす。夫の勝ちて益、驕横、他の長を容れず己れの短を改めざるもの、如きはもと算外として更に今日の情態に徴するに征清事件の原動たる自主獨立の精神は、戦勝の一關を境として内外の兩面に展開すべし、戦争以

前にありては、彼れまづ内に向ひて自家の地位を明めまくす、而して戦争を経て此の希望一たび成ずるや、彼れは進みて外に向かひ自家の長所を執りて他を化せんとす。之れを他語にて言はば、一面、差別の一分たる己れを重ずるとともに、他面、己の武を布き文を施して、自他慶福を偕にする平等の致をなさんとするに至るもの、之れを戦争の結果となす。自主の思想をして圓滿の發達をなさしむ、到達する處はこの他に出でし、國民といふの眞義はた然らずとせんや。

吾人は本と文學を論ずるもの、今征清事件の始終を討ねて、國民的思想の變遷を叙するに忠なるは、文學の深く之れに根柢するを信ずればなり。それ思想の隆替を明むるときは文學の盛衰隨つて知り難からず、維新の後殆んど二十年、西歐崇拜の俗天下を風靡するや、文學また其餘弊を受けて、詩歌小説乃至文體文字の末に至るまで、擧げて歐化せられんとしき。吾人は之を模倣時代と呼ぶべし。而して國粹論者の反動起これるにつれ、久しく高閣に束ねられたる和文學、漢文學勃然として復興し、つぎて東西文學調和の聲も聞こえき。蓋し調和は折衷の義にあらざ、折衷とは漫然異分子を結合するの謂なれど、調和とは此等を鑄化して改めて自己の所産となすの謂なり、されば調和文學の説は自から政治の方面に於ける自主の説と相通じて、當代社會の思想を現せるの最もむきあり。論じて此に至れば戦争後に於ける日本文學の趨勢を察するを得べし、おもへらく、内日本國民の天稟の決して人後に落つべき者にあらざるを信じて畏避逡巡の陋習を脱すると、も外歐の英を咀ひ米の華を嚼み、渾化鎔成して別に世界に誇るべき日本國民固有の文學を創設せんとする、之れ戦争後の文學の傾向ならんか。語を切にして言はば、模倣にあらざ、折衷にあらざ、

自國民を主とし他を従とする殊特の國民的文學を創成せんこと之れなり。吾人は宗教に於て早く既に創作期に入らんとするの傾あるを見る、近日の哲學また然らんとす、文學豈ひとり之れに漏れ本て可ならんや。かくして燦爛たる日本文學の光、能く八表を照すの曉は、庶幾はくば日本國民が其の天職を成ずるの始ならんか。日本國民の天職とは何ぞ、吾人は信ず西文東漸の波を迎へて、却りて東文西漸の巨浪を捲き返へすにあるを。

日本文學將來の大勢は以上の如し、されまづ如何なる點に於て件の進歩を始むべきか、日本國民を中心とせば日本國民の精髓は何れにあるか、一言以て掩へば、日本國民の日本國民たるべき生命は何ぞ。歴史は答ふらく、武士道也、大和魂也と、げにや斯の一道の氣、千古萬古に徹して渝はらず、往くものとして化せざるはなく來るものとして容れざるはなし、日本文學をして日本文學たらしめんもの、之れを措きて他あらんや。若し夫れ科學の手を伸べて此の上に解剖の刀を加へんとするは吾人の意にあらず、昔は十八世世のはじめレッシング未だ出でざるの前、獨乙の國文學は混沌として其の形を成さず、上流社會はた自國文學の何物なるかを知らず、舉世滔滔として外國文學もしくは上代文學に頭を埋むるに際し、國王が政治上の大功業は端なくも間接に國文學の恩人レッシングを起こして軒昂せる國民の感情を歌はしめき。今やわが國情恰も之れに類す。空闊腸を斷つ處、征鞍骨を委ぬるの邊、吾人必しも詩題をかゝる表面的のものに求むべしと言はず、されど征清の事に觸れて發越し來たれる日本國民の感情は陰に陽に今後の日本學文が依りて立つの地にあらずとせんや。我がミンナ、フォン、バルンヘルムの成るはそれ何れの時ぞ。

詩人と實驗

吾人をして冒頭まづ一案を斷せしめよ。何ぞや。曰はく、詩人は模倣者にあらず、また發見者にあらず、詩人は創造者ならざるべからずと。審に言へば、實際世間に起伏する人情の委曲を経験し觀察してこゝに斯くく之美あり、かしこに爾かくくの妙ありといひ、而して之れを臨模し、之れを醇化し、之れを結合す、ハルトマンが美術的作業の最下層に置けるは是なり。然れども詩人の能事豈此の如くして已まんや。經驗を博うするは善し、之れによりて詩人が天稟の才を琢磨し、以て美を結構するは、おのづから經驗その物と別なり。經驗界にも當然美あるべし、まかも詩人の作れる美は、經驗界に存せし美其の物の模寫なるべからず、此の意にて詩人は創造者なり。詩人に於ける實驗の價値はこの點より打算し來たるを得べき也。

實驗を喜ぶものは以爲へらく、人事の微妙にして多趣なるや、深さに於ては、記録、話説の上の智識は實觀の確なるに如かず、實觀の確なるは身みづから事に當たれるの切なるに如かず。更に廣さに於ては、向三軒兩隣の經驗は、普く世路の坎坷を涉り盡くせるの通なるに如かずと。其の極途に真心を犠牲として實驗の智識を得まくするものあるに至る。或は穩當なる論者あり、亂倫の所行に及ばざる限に於て實驗を獎勵する可ならずやといふ。吾人も能ふべくんば之れに同意せざるにあらず、然れども、其の此の如く實驗の必要を認むる所以の根底に於て差別あり。實驗論者

の多數は、實驗によりて美を發見し、之れを復寫し結合するをもて詩人の任務となす、即ち彼等は其の描くべき美をまづ經驗界に索むるなり、之れ豈病の宿する處にあらずや。經驗界より來たれるものは、其の情たると知たるとに論なく、すべて我れに入るときは智識の衣を着す。而して智識の物たる、由來我れに同化せられ、我が本具の性能を琢磨して其をして新に造らしむるの用をなすに過ぎず、外より得たる智識其のまゝをもて、直に我れの使途に充つべきものにはあざざるなり。詩人の實驗に於けるも此の如し、經驗上の智識は以て詩人の想像力を養ふべし、志かも想像は直に詩にあらず。詩に入るべき想像は天才獨り之れを産すべきのみ。それ詩人の美象を造る能力は、通常分析して夢と覺と神來との三となす、夢と覺と相互作用して自由と必然とを具備したるの象を結び、其の裡に神來髣髴の理想の宿るに及びて始めて美の象を成す。實驗は僅に件の結象力の根柢を養ふの具たるに過ぎず、故に或度までは實驗の効著かるべしといふとも、其の以上に及べば詩才にさしたる所得なきに至らん、何となれば實驗の目的は想像力を助け長せしむるにありて、想像の素材を供するにあざればなり。詩人もし限ある五十年の生涯に於て、想像の素材を一々外界に求めざるを得ずとせば、吾人は其の神源の涸れたるを憫まざばあらず。しかのみならず、實驗を重ざるに過ぎて、知らず識らず天賦の詩才を汚すこと往々にして之れあり。蓋し詩人は最も感じ易きもの、隨ひて情を以て之れを動かすときは、最も其の我れを失ひ易きものなり、此をもて好みて刺戟性強き實驗界に處するときは、その實驗の健全なると不健全なるとに論なく何時しか却りて之に同化せられて、大に俗了するに至るべし。換言すれば、修養せらるべき主

人亡じて、修養の具たるに過ぎざりしもの、代りて第二の主人となるに至るべし。おもふに、天成の利器を懐きながら、境遇の我れに支配せられて、可惜半生を垢座の際に埋没し去るの詩人、定めて世に尠からざらん。之を事實に徴するも、實驗の多きを憑據とするの詩人が描ける所は、常に實感の濁を着して純潔なるを得ず今日の小説壇にも斯かる傾向あるを免れざる也。所詮實驗は或度まで詩人に要あれどそれを唯一の詩源と思はば、陋弊立地に生ぜん。實驗を思ひ浮べたる、及び之れに因縁せる想像は詩人の眞想像にあらず。詩人實驗して想像を鍊る可、之れを本領となさん非也。

氣韻生動

氣韻生動といひ生趣活動といふ、皆藝術品の美を稱するの名にして、要は事物に生命あるの謂なり。然らばすなはち事物に生命あること、其が美なる所以とは如何なる關係かある、生命は美の一部なるか、はた美は即ち生命なるか。或者は答へは否といひ、或者は答へて然りといふ。吾人はしばらく茲に「然り」といふものに代りて、事物、とりわけ藝術的作物の美なるを得るは、之れに生命あるが故なりといふの意を敷衍せんと試むべし、蓋し之れも一方の審美觀なればなり。たゞ注意すべきは、生命といふもの之れのみを抜き出だして云々するの意にあざること之れなり。審美は具象的、感覺的基礎を外にして成立すべきものにあざれば、單に生命といふも實は事物の象ありて此の上に生命の見れたる謂なりと知るべし。

シルレル以爲へらく、感覺性の目的となるものは、廣義にいへゆる生命（上に擧げたる生命と其の義や、異なり）にして、總べての事物が物質的存在をたもちて吾人の感覺に上り得るは、この生命あるに由れり。また理解性の目的となるは、一般に形、又は形式と稱するもの、即ち事物の形式的性質、思考せらるべき關係なり、而して遊戯性の目的物は、件の二者を合して活ける形式を成せるものならざるべからず、活ける形式といふときは、以て美象の一切の性質を盡くすべく、直に之れを廣き意義にての美といふを得べし。されば美は必ずすべての生活物に在するとも言はれぬば、生活物のみに限れりともいはず。大理石は無生物なれども、彫刻、建築等の藝術によりて能く活ける形式となるべし。人は生活して加之も形式を具ふれど、未だ遽に此の故をもて人は皆美なりといふを得ず、形式はやがて生命にして、生命はやがて形式なるを得るに及びて、始めて人と物とみな美なり。吾人もし單に形式につきて考ふる時は、其は生命なき抽象のものとなるべし。若しまた生命のみを感識するときは、其は形なき印象たるに止まるべし。其の形式は吾人の感情によりて活き、其の生命は吾人の理解によりて活くるをもて美の要件とす云々。こゝに活ける形式といへるは、必竟カント哲學の餘脈を受けて、理と感との調和を説けるものとも見らるべし、隨うて之れと氣運生動などいへる意と、直に同一なりとはいひ難し。されど一方よりいふときは、之れによりて氣運生動説、すなはち事物に生命あるを美となすの説を明にし得ざるにあらず。蓋しシルレルの生命といへるは物質的存在、若しくは具象的要素の義にして、形式とは此の上に廣がれる一定の組織關係即ち理といはんほどの意味なり。而して件の具象的要素と

其が組織と、換言すれば生命と形式と、我れの心に於て密に調和し、こゝに此の山は此の山として此の水は此の水として、生趣横溢雲烟飛動の妙あるを得べし、鑑賞家すなはち之れを評して氣韻生動といふ。氣韻生動とは所詮、事物が我れの心に於て活くるの謂なり、單に山なり水なりとの知識を與ふるにあらず、また單に我れの感覺性を刺戟せらるゝにあらず、兩面一に歸して一個獨立の具象的存在を成するの謂なり。山なり水なりと知らしむるは理に訴ふるものにして、事物の形よく一定の關係をだにたもたば、之れを成すこと容易なれど、之れに生命を兼ねしめんには、更に感を動かすに足るの要素なかるべからず。理解せられ（又は思考せられ）て且つ感情を刺すこと深切、此に於てか事物に生命あり、美の要件にかなひて氣韻生動すべし。或は之れを天地萬物の理想なりとも言はん。シルレルおもへらく、吾人の最高性情たる理性は、絶對地に入出して自由を愛するの餘、人間世に免がれがたき感覺と理解、偶然と必然の二元相を調和して、些も非難せられ制限せらるゝとなき眞個自由の境に優遊せんとするの傾あり、之れを遊戯性の起原とす、この遊戯性に訴ふるを主とするものは審美的なりと。

ラッド氏また氣韻生動説に近き説をなす、先づ美といはるべき物の性質を分析し來たりて、さておもへらく、審美感を起すべき此等の諸條件は、要するに生命あるもの、具ふべき條件に外ならず、されば一言以て美の性質を蔽へば、活如といふに盡くべし。而して心の上にも此の事あり。想像力を働かしむるによりて心理上の生命を生じ快樂を感ずるに至るは此の状態なり、之れを事物其のものゝ上に被らしめたるを、主觀的美といふ、主觀にありて客觀になければなり。客觀的美

にありては、物眞に活如の相すなはち生命を具し、而して心之れに應じて活如の状態となるものならざるべからず、云々。

思ふに眞に美にして觀るもの、同感を惹き得べき條件の彼の生命、活動などいふとに要すべき條件と同一なる、ラッド氏の言の如くなるべし。而して斯く事物に生命あるの原理は、シルレルの言へる如く、材料と形式、分と全、變化と統一、自由と必然の兩端が圓融相即する所にあり。生命はやがて自主存在の精髓にして、自主存在は天地の姿なり。生趣ありといひ、氣韻生動といひ、活ける形式といひ活如といふ、すべて藝術上の作物が小天地想を成せるの謂にして、事物に生命あること、小天地相とは別致なし。最も善く生命のあらはれたるものは最も善く小天地想の宿れるものなり、例へば人間の萬物に於けるが如し、故に人間は萬物中の最高美なり。生命あることが美の唯一要件なるの理知るべし。

變化の統一と想の化現

美とは何ぞや。此の一間は以て審美學の全躰を蔽ふに足るべければ、固より輕忽に之が解を下す可くもあらざれど、しばらく近時の學者が唱ふる所にしたがひて、美は想の化現なりと言はんか。あるものは更に變化の統一といふとを美の唯一要件となす。變化の統一といふと想の化現といふとは審美上の意味に何程の異同あるか、本論の研究せんとするは主として此點にあり。

美を解して想の化現なりといふの説はヘーゲル派を以て之れを代表せしむるを得ん。本來ヘーゲル哲學は人も知る如く天地を理の發展、想の化現と見るにあり。而して斯く理想の發現するに正反合の三境ありて、我れの此の理想を感識するにまた三様あり。其の最下層は現象界即ち觀るまゝ、聞くまゝの事物の裡に絶對理想の潜めるを感ずるなり、之れを美の世界となす。やゝ進みて此の理想が己れの想像に髣髴として上り來たる所は宗教なり。更に進みて此の理想を思想上明に捉らへ得たる所は哲學なり。眞といひ神といひ美といふ、畢竟は一の絶對理想が、或は本躰を露呈して吾人の思想に上り、或はおほるげに形をほの見せて吾人の想像に上り、或は全く色聲の厚化粧に本性を隠して吾人の五官に上るの差別に過ぎず。しかも審美界にありては件の厚化粧に魅せられて其の奥を窺ふ能はざるものを惡む、何となれば斯かる徒は耳目の欲に溺れ造化が匠める甚深の理想をいたづらに差別界の奴隸となすものなればなり。審美は一面明々地に官覺的現象を感得し知得することにも、他面冥々の理に直覺的絶對理を觀得するものならざるべからず。元來我れの心に凡そ三面あり、外界より來たる刺戟を第一に感受するは五官なり、年處と共に之れが經驗を繰り返へし而して統同辨異の作用を加へて事實の概念を作るは知識なり、此の二面の上に自々生々の妙相を直觀し善惡美醜の價値を與ふるものは最高性情なり。官覺はたゞ外來の刺戟に應じて動くのみ、比較的所動の境といふべし。我れより發動して之れに統同辨異の働を加へ概念を作るは差別の我れを衛らんの本能に出づ、即ち其の初め自衛の必要より來たるものなり、知識は必竟主我的産物といふべし。官覺、知識の二者を超絶して其の上に平等旨を成せんとするものは理

性なり、理性は來たるものを在りのまゝに照破するのみにて自ら作らんとせず故に此の方面より見るときは所動的といふべしされど單に來者に從ひて動くのみにあらず、他方に自家の準繩をとりて事物の圓滿に近き度すなはち美醜善惡の價値を判断す、故に此の點より見るときはまた能動的といふべし。今人心のこの三界によりて上の説を辨ずるときは、花の紅、柳の綠なるを見て單に其の紅綠に執するは官覺乃至知識に停滯するものにして未だ審美的なるを得ず。紅綠の眼に遮ざると共に直に理想の我が心に感應するものありて、恍惚として忘我無心の境に入り、或時は人間と共に泣き或時は天地と共に笑ふ、此の如くして始めて美を娛むを得たりと謂ふべし、蓋し此の際の我れの心は最高理性の同情に安住するものなればなり。所詮美とは種々森然たる斯の法界に平等普遍の理の、其れと姿を顯さずして宿れるものなり、紅なるもの綠なるものは我れ之れを知れども、其の裏に寄宿せる妙理は、たい／＼我れと感應し瞑契すべし、知るべからず、思べからず。他語にていはば、五官を動かすべき種々の刺戟すなはち知覺し得べき差別相と之れに反して最高性情が直感し得べき一如の相と、調和したる所之れ美なり。

今若し斯かる妙現象を記號によりて客觀に出現せしめんとせば如何にして可ならんか。以爲へらく、その最も手近き方法は色、聲、線等の材料を利用して變化ある形を描き、まかして其のうちおのづから整然として一律に歸納する所あるが如く匠むにあるべし、所謂形式的美とは之れなり、また變化の統一といふも之れに外ならず。高低長短の變化ありながら其の旋律諧和して移るべからざる一曲に歸するは音樂に於ける變化の統一なり。直線曲線縱横錯綜しながら尙其のう

ちに規則正しき所ありて全圖揆を一にするは圖紋に於ける變化の統一也。山容水態變化の妙を極めながら一幅は自ら一幅の中心ありて千山萬水之れに朝するの趣あるは畫の圖取に於ける變化の統一なり。これらはすべて形式上美の要件にかなふ、何となれば其の變化の邊は美界に於ける官覺乃至知識の對境即ち現象の方面を代表し其の統一の邊は同じく直覺の對境即ち現象上にあらはれたる造化の理想を代表し、相對相と絶對相と同一不二なるの美趣(小天地相)を記號によりて表出したればなり。然れども形式美はこれに満足し止息せず、形式美は更て直覺的、非知識的を本來とする統一の方面をば、其の本來にしたがひて、出來得ん限り露骨ならざらしめんとす。換言すれば到底知識の産物たるを免れざる記號によりて之を表出するに拘らず、及ぶべくは直覺的なる統一相を、直覺的なるが如く知識的ならざるが如く現せんため、變化を極めて繁くし殆んど目のあたりには見えざるまでに統一を其の底深く藏さんどす。之れ形式美といへども複雑なるものに至りては、往々内容ある高等の美と等しく、一見變化あり不規律ありて規律も統一もなきが如くなる所以なり。

之れを要するに美は種々の現象界に平等絶對の理想の隱然化現せるものにして、其の外形を抽象的に説明すれば變化理の統一なり、又は統一理の變化なり。單に此の兩端相即の形式のみを記號的に描出するものは形式美なり、之れに造化の意味を加へたるは内容あるの美なり。たい形式美にありては變化の面と統一の面と共に五官乃至知識に上り得べきも、内外具足の美にありては其の統一の面ともいふべきものは直覺的、絶對的なるが故に知識の餌となることなし。されば内容

變化の統一と想の化理

形式具存の高等美の場合に強て知量の上より統一何れにあるかと求むるときは冷なる哲學上の問題と化し了らん。之を要するに想の化現といふことと變化の統一といふことを根底相通ずるものなるの理は以上の所説によりて明なるべし。



雪之巻(終)

月の巻

自序

こゝに輯めたるもの、中にて美妙、紅葉、露伴の三作家を評論せるは明治二十七年、早稻田の文學科を出づる際にもものせる卒業論文の一部也。今より見れば世間知らぬわんぱく小僧が口幅たきこと云ふに似て、かたはら痛き節も尠からねど、這を改めしとて本來の瓦、玉となるべきやうなし、寧ろ此の儘に打ちすて置き、我が穢き心の變遷史たらしめんには如かじ、と僻見も謬説も全く刪正を加へずして梓にのぼすことになしぬ。『柱曆』の評は坪内逍遙先生が『評釋天網島』の鑿みに倣ひて、心に浮ぶまゝを筆に任せてものし

たれど、是れはた今より見れば附會の嫌ひある所なきにあらず。其の餘のもの、多くは一時の感懷をやりしもの、大方に示すに足らざるや論なし。性格論の如きも、當時の評家が餘りに性格を論ずるの輕卒なるに激し、聊か所思を抒し、のみ。斯かる美學上の難題を解釋し得たりとは、當時に於ても信じらるるにはあらず、唯自ら疑ふところを提起して江湖有識の士に教へを請へりしのみ。

宙外志るす

丁酉四月

風雲集

月の巻

後藤宙外著

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す (明治二十七年六月稿)

社友宙外生が美妙、紅葉、露伴の三作家を評論せる論文は近來稀なる精細の論文にて頗る玩讀するの價值あるものなり就中其の序論に於て詩美を論じたるあたりは論者の最も得意とする所なるべくまた其の識見學問の最もよく現れたる所なるべけれど本誌に掲載するものとしてはあまりに長きに過ぐるの恐あれば論者の許諾を経て割愛し序論及び美妙子に關する評論だけは左に梗概のみを擧げ紅葉、露伴二子の細評のみを掲ぐることをせり讀者をふこれを諒せよ。(早稻田文學記者)

序論及び美妙齋論の梗概

論者は緒言に於てまづ哲學、宗教、美術は大宇宙の大元を觀する三道、眞善美は同じ家棟の下に住ふ姉妹なりと云へる古人の説を引き、三者が相提携して發達せる蹟に就いて考ふるに、此の説我れを欺かず、特に近世に至り三者共に、從來重に客觀界に注ぎたる眼を主觀界の方に轉じ、空

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す。美妙齋論の梗概

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す。美妙齋論の梗概

二

想を逞うするを後にして、事實の研究を先にするが如し、即ち趨勢自ら一なりと説き、美術の版圖に屬して詩の一躰なる小説の如きも、此の大勢の外に出づる能はざればにや、取扱ひ方にこそ異論はあれ日々に實を重ずるの勢を増し、形(容看)の美を寫すに専らなりし筆法を一變して漸々神(主觀)の美を發揮せんと力むるの傾向あるは内外共に然らざるはなし、輿論必ずしも眞とは云ふべからざれども、氣運の向ふ所は概ね争ふべからざるものあり、故に此の氣運を代表せりと看做さるゝ、我が邦現今の所謂寫實小説を研究するは、吾人に取りて有益にして、亦小説の神髓を覺るの捷徑と信じ、美妙、紅葉、露伴、四迷、及び春廬舎五氏の作を取りて、此の派を代表せしめ、是れが研究を試みんと考へたりしも、期迫りて止むなく、纔に、前三家のみを評すること、せりと辯じ、最後に詩人は美の開鑿者なり (Poets are pioneers in beauty.) と云へば、將來奈何なる美の版圖を開拓する新小説家の出でんかも測り難きに、小説の定義など杓子條規に定めて、其の前途を壅塞するに忍びず、余は偏へに作家の特質を發揮し、作中の隱微を闡明するに力む可しと云へり。

さて本論に入り、美妙を論ずるの冒頭に曰はく、詩人が詩中に人物を活現するには、靈妙なる想像力に加ふるに、神來と狂熱とを要するは論なしと雖も、此等は或材料を待ちて始めて動くものなれば、別に材料を取聚めて之れに附與するの力なかるべからず、即ち深刻なる洞察力と強大なる同感力とを備へざるべからず、同感とは同感に依りて愈々深く、同感に依り愈々廣さを加ふと論じ、シエイルプの語を引きて地歩を固め、更に圓滿なる洞察には同感自ら伴ふべけれども、偏

狭なる洞察には必ずしも伴はざるべし、されど兎に角、二者相待ち相輔けて、詩人が萬象を明晰に視ひ得る二箇の窓をなすと説き、不幸にも美妙の眼前には、此の二箇の窓、殆ど鎖されたるが爲め、失墜墮いで起これり。即ち、鋭き洞察に依りて、始めて觀破し得べき人心の蘊奥、虚靈の流行をば見落し、直接に物質上形骸上の勢力に動かさるゝ人心の部分と、實驗にて一見の下に知り得べき外相のみを認め、同情に缺くる所あるが故に、氏が觀察の中に入り來たる所のものは、重に人間の脆劣陋劣なる部分のみにして、森嚴高潔の所は殆ど空し。人間の脆劣陋劣の邊のみを看たるゆゑに、勢ひ作中の人物に對して、嘲罵筆誅を忍ぶ能はざるに至りたるも自然なり。然れども、新潮流の中に住める氏に取りては、道理上、作中に單純淺膚の人物のみを出だすの妙ならざるを、有意識、若しくは半無意識に覺らざること難かるべく、茲に於てか、氏は推理分析、更に徴し、傳に考へ、幾多の概念を得來たりて、秀吉を造り、直義を造り、やがて、尊氏をもち子姫をも組み立てたるならん。即ち、具體的に活現し能はざる所は註釋、記述、説明などを藉りて、補ひたる趣ありと評し、進みて氏が諸作に涉りて精査し、一々其の本文に就いて、その立言の誤らざるを證し、大體の上より、一般に氏が作中の人物及び其の取扱法に就いて左の四箇條の斷案を下せり。

第一、人心の脆弱陋劣なる半面を寫し、或は是れに満足せずして、高尚雄大の他の面に着筆を試みたることあるも、概ね結果は、人心の直接に物質上、形骸上のものに交渉する部分にのみ躊躇する事

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す。美妙論の梗概

第二、實驗の可及的圈内（志保子などの場合）にては皮相的半面的ながらも、流石に性格の遍性、殊性の調和あれども、一度其の圏外に出づるに至れば、其の調和は破れて、屢々撞着を惹き起し、人物は遍性を缺き概念の排列に過ぎざるものとなれる事

第三、往々人心の微妙幽玄の邊に筆を下すも、抽象的に記述し、或は推理、分拆の器械に依れる事

第四、作中の人物には毫も同感せずして、動もすれば嘲罵愚弄を加へたる事

それより此の四箇條の事柄が、如何なる影響を讀者の心に及ぼすべきかと問ひ、四者共に興味索然たるを覺えしむるに外ならずと斷じ、更にかゝる結果は、何故に生ずべきかを考究して、逐條詳細に論じたり。今その要點を掲ぐれば、第一の事柄の興味を損ずるには二の理由あり、一には讀者をして、實に遠しと思はしむるの媒となりて、美的幻象を破却し、實と美との關係には、大議論のある所なれども、兎に角、小説の美を樂むには、姑く假作たるを忘れて、實境に入れるの思ひ、心の何邊にかなかるべからず。二には醜（俗をも含む）は獨立しては美術の範圍に入る能はず、美に融化したる分子（Suspended moment）となりて入るか、若しくは、美の對照（foil）となりて入るより他に道なきが故なり。蓋し脆弱陋劣の邊のみにて成れる人間は、實際には看ると難きがゆゑに、疑問讀者の心に起ると共に、美的幻象を損ひ、且如何に描寫し得て妙なりとも、一點同情を着く可き所なき程に、殘忍、若しくは陋劣の塊ならんには、讀者は不快に堪へずして、巻を抛つに至る可し。要するに美妙が作中の人物に接しては、これを眞の人間として吾人が心象に

現さんとせば、尙他の或性情を具へしめざるべからずといふ考へ必ずや中以上の讀者には、起こらざることなかる可しと云ひて、テーン、シエイルズ、ハント、ヒューム、など諸家の説を引いて詳論せり。第二の事柄が興味を損ずるにも二の理由あり、一面、概念の概念として認めらるゝ程に、拙く作られたる人物に對しては、讀者はその不自然なるを意識するがゆゑに、美的幻象破らる、而して一面は、吾人の心を美的状態より理論的狀態に墮落せしむるが故に非なり。換言すれば美論家の所謂不羈優遊の樂園より、因果律の鐵鎖に叫喚し、自然法の桎梏に苦惱を受くる俗界に衝き落すが故なり。第三の事柄の興味を損すべき理由は、第二の論より推すも推理、分拆と云ひ、抽象的記述と云ひ、自ら美的幻象を破る可きものたるは明なる可し。且や吾人は作中の人物の性情の具體的に描かれたるをば、半無意識の間に抽象的に換ふる心の作用に依りて、一種の愉快、即ち性格解釋の快感を生ずるものなるが、作者が抽象的に記述し、推理分拆を施したる作に對しては、何の邊にか解釋を容れん、従うて此の種の快感は全く失はれざるを得ず。さて第四の事柄の興味を損ずる所以のものは、作者が没我し得ざるのみか聲高く名宣り出で、主人公を罵るが故に、美的幻象を傷ふ。まかのみなならず、活動の充分ならざる屍同様の人物を、作者がいとも慘酷に、鐵鞭を加ふるを看るゆゑに、讀者の胸には勢ひ逆情起こらざると難し、是れも亦美の靜觀を攪亂するものなればなりと論ぜり。終に臨み、餘論として尙二箇條を擧げたり、第一、美妙が後の作、即ち『新太平記』『いち子姫』などには、一方には、偶然の事變、奇遇非常に多く取り用ひられ、事を繁くして、局面を賑ならしめんと力めたるの痕あり、他方には、人物の不自然

美妙、紅葉、露伴の三作家を評す。美妙論の梗概

紅葉山人を論ず

六

に陥るを防がんとして、性格の一致に意を注ぎたる趣見ゆ。約言すれば、事と人とを同等に重むるに似たり。即ち、道遙氏の所謂我が邦小説の新舊二大派を統一して、新機軸を出ださんとせらるるもの、如し。然れども、此の企圖は決して成立し得べきものにあらざり、何となれば偶然の事變接踵して起る時には、境遇に依りて人物を醜弄し、終に性格活動の餘地なかる可きが故なり。斯く云へばとて、半峯居士の所謂「向ふ三軒兩隣の小説」に甘ずるの意にはあらざるなり。第二美妙が作は大躰より云へば、作者自らの議論、挿評、人物の性格に関する説明、作中の人物の議論など、抽象的、理論的の所頗る多きが爲、作をして乾燥無味ならしめたり。小説は美術の一躰なれば、美術の要件たる具體的と云へることを缺く以上は、小説として見る可からず、さは云へ、議論必ずしも小説に入る可からずとは云はず、其の人物の性情、境遇の自然より沸き出づるものならんには、吾人は議論を議論として看ずして其の人の性情活現の一面として見るが故に、之れを美とするを得るなり、例へば、蛇その者は醜きものなれども熱帯地方の森の樹に懸かれるを見る時には、其の景色を助くる一要素となることあるが如しと述べ、それより大躰を概括して、結論せり。

紅葉山人を論ず

人に詩才有る者と無き者との別あるは論なし、同じく詩才ある中にもウ・ルツォルスの人心に反映せる自然美を歌ふに長じたる、スコットが武士魂の發揮に得意なる、キーツが景物の美を描く

紅葉山人を論ず

七

に巧なるがごとき、皆自ら獨得の所あり。余が紅葉の作を研究したるの結果は、美妙とは異にして、氏は一種の詩才を有せるを認めたり、即ち江戸氣質を歌ふに最も適したる詩才にして氏も亦自ら任して江戸氣質の美を發揮せんとするもの、如し。此の江戸的詩體に加ふるに、若し大洞察大想像の力を以てまたらんには、幡隨院長兵衛が稜たる氣骨を二つ割にして、其の精髓をも發揮し得しならん。高尾が苦節の秘密をも描破し得たりしならん。然るに氏は人生の神髓に徹底する大洞察力なし、故に通常實驗し得べき種類の人物、即ち『おぼろ舟』のお藤、松本、『三人妻』の才藏、お艶、紅梅などは性格の一致ありて能く活動し、又外相にほの見ゆる人心の描寫、景物の美等は能く眞を傳へたれども、是れに反して、容易に實驗し得べからざる種類の人物、即ち『伽羅枕』の佐太夫『此ぬし』の俊橋などに至りては、性格の一致を失ひ或概念の團躰となれり。而して筆若し人心の奥妙なる邊に及ぶ時には、忽ち描寫するを止めて、簡潔なる敘述をなすを例とせるも自然なるべし。此の事物の外相に眼光の限らるゝ點のみを云はゞ、ほゞ美妙に相似たり、されども甚しく異なる所一面にあり。美妙には全く同感の缺けたりしも、紅葉はよく深遠の所を見ざるまでも、其の見る所には充分の同感をなし得るが故に、其の範圍に於ては能く隱微を穿ち、能く活動を與へたり。而して氏が描ぎ出だしたる人物は、概ね江戸氣質を通俗に解して得らるゝ、華奢、俗俠、浮靡、瀟洒などの渾成化して全く人となりたる、或は半ば人に化して半ば概念の尾を包みかねたるにあらざるなきやと思はる。隨うて氏が作には遊女、妾、月圓ひなど、此氣質を發揮するに最も恰好なる人物を主人公としたるが多く、然らざるものも江戸氣質の或變形を活現

したるが多しと見ゆ。尙審に云へば『二人女』『巴波川』『新色懺悔』『三人妻』其他の作にては實験園内の人物の中に江戸氣質を現し、『伽羅枕』に於ては此の氣質の概念が佐太夫の假面の間より殆ど其の眞面目を曝露せんとするを見るなり。さりながら江戸氣質など云ふは、或は牽強附會の証もあらんが、兎に角、俗に所謂「華美ならざれば、いなせ、粹ならざれば婀娜」と云ふ事、氏が描き出だす人物の精髓なるは疑ふべからず。偶、此の圏外に出づるものも、終には那邊にか其の正昧を顯すに至るは『むき玉子』の蘭溪「此ぬし」の俊橋などに徴し見なば、思ひ半ばに過ぐるなるべし。更に科語にて云は、氏が抽寫する所は形骸美、及び精神美共に可憐と單純にして莊大の所は殆ど缺けたり。而して他の作者よりも衣裳、髮形、持物などの形骸美を寫すに精緻を極めたり。悲劇的のも喜劇的のも物したれど、悲劇的の方は總て端物にして結構至りて單純なり。即ち『巴波川』『南無阿彌陀佛』『おぼろ舟』の如き其の例なり、然るに長篇は『三人妻』も『伽羅枕』も喜劇的のものなり。此の點少しく注意すべき價値あらん。案ずるに氏が長篇を編むの結構法は『三人妻』『伽羅枕』などの示す所に依れば、入敷を増すことに依りて事を繁くし事を繁くして篇を長からしむるが如し。試に思へ、佐太夫を中心にして、幾多の嫖客相踵いで現はれ、それに依りて『伽羅枕』成り、葛城を中心としてお艶、お才、お角など出で來たりて、『三人妻』成れり。蓋し人心の奥底を叩けば千狀萬態、雲沸き、瀾躍り、南山の竹を罄くすも、其の一斑をだに描くに足らざれど、外部より見ゆる部分のみにては、さまで大變化のあるべき様なし、故に紅葉に取りては、一人の主人公のみを持ち通して長篇を作るは平板に陥るの恐れあるに依り、種々異様なる人物を

點出し來たるは自然の勢なるべし。然れども悲劇的の作は其の主人公が一步々々、漸を逐うて苦腦を増し、竟に大破裂に至りて仆るものなれば、新なる人物の多く入り來たるは、此の漸層の進行を妨げ、悲劇の効力を損する恐れなき能はず。氏は此の理を認識してか、若しくは、せずしてか、自然一方には此の弊を避け、而も一方には多數の人物を、纔に一縷の縁を求めて結びつくるの法に依らざれば、長篇を作るに由なきを感じ、悲劇の分は悉く端物となしたるなるべし。是れ恐らく甚しき臆測にはあらざるべきやに思ふ、斯くのみ云ひては空論に似るの恐れあれば、更に下に其の證を擧げん。

まづ氏が傑作にして、且喜劇の代表となるべき二長篇『三人妻』と『伽羅枕』とを吟味し、最後に其の悲劇的端物に及ぶべし。

紅葉が繡腸の中に磅礴たる一團の江戸氣質の至醇が、合して『伽羅枕』に現はれては佐太夫となりて八文字を踏み、散じてはお艶、才藏、紅梅の『三人妻』となりて妍を闘はし芳を競ひぬ。

『三人妻』は「張りど意氣ど」を受け持ちの才藏、「婀娜と手管」の化身なる紅梅と、「實意と大人しやか」の塊なるお艶を、同じ花壇の眺めを増させん爲めに、葛城大盡の金鎖にて三人を一纏めに寄せ集むる縁を造りたり。されば、葛城は中心にあれども從にして、开を環る三人は客に似て實は主なり、隨うて此の作葛城の死去を以て大詰としたれど悲劇とはならず。さて此の作は紅葉が最も推敲を重ねたるものなりと聞こきたりし程ありて、等しく江戸氣質の圏外にこそは出でざれ、(流石に深刻ならねども)各々特質を具へて活動するの妙は喜ぶべし。今一々其例を擧ぐる

紅葉山人を論ず

は管々しく且は他に云ふべき事多かれは、开を妨ぐるの恐れもあり、今は省きて葛城餘五郎が音羽の別荘に催したる、観櫻の歸途、馬車の中にて、夫人麻子が三妾の品定めせる條をのみ引く、

「彼三人には大抵の男は殺さるべし。女の眼より見て難を云はし云ふべき廉、無きにはあられど、紅梅は温乎として内隠く、園中に手あり、情も相應に深かるべし。お才は依にして張強く、男に我儘なる所、弄ぶに面白かるべし。お艶は無垢なる生娘、唯優しくして實あるを取柄とす。銘々の役割を云へば、お才は酒の酌、紅梅は床の口説、お艶は茶漬の給仕と笑ひて、一番の御意に入りは誰ぞ尋ねれば、餘五郎當時は物言はで、鑿て頼の邊に微笑を含み、されば、お才は確ならぬ所ありて物足らず、お艶は底にしつこりとしたる所ありながら素氣なし、紅梅こそ聞きて、さもあるへし昔ならばお家騒動の因となるべき曲者とお艶は笑ひける。

是れ作者が自評なれば、強ち信じ難きにも似たれど、此の作中の三人には、此の評ほゞ當たりたり。換言すれば、作者が望の人物は荒々ながら、望通りに描かれたり。蓋し江戸的詩才を以て江戸的題目を選び、洞察を要せざる外部の美と、人心の外貌とを氏が同感の光澤を加へて寫し出だせるゆゑ、其の成功したる自然なり。氏はよく其の天分を知れり、天分を守りて其の外に出でざる所氏が失敗多からざる原因の一に加へ得べし。

前にも云へる如く、紅葉も美妙も等しく洞察の力乏しきが故に、外部に見ゆる人の性情のみを寫して肺肝には達せず、例へばお艶が餘五郎に辱められたる後「此罪のみは懺悔にも滅せず終身徳の創となりて其癩永く墓上の石にも留まるべきを愧ぢつ、懼れつ、悔いつ、陋みつ、心裏の亂れたるに目も眩み耳も聾ひ」たる程の苦を、淡々たる叙事の筆にて簡潔に物したる、又は才藏と菊住

と再會して「お才は母の浴衣に着更へ、専三は双肌脱ぎて麻縹の涼ながら相互に別れてからの物語」も一片の儀式ばかりの挨拶に止まりて、互の誠心の見えざるも憾みならずや。『早稲田文學』第五十七號「文界現象」に作家の動靜を誌して紅葉が上に及び、

（前略）又、紫は主人公が首尾よく試験に及第するを以て完結とすき聞けり或人作者に向ひ「落第後の煩悶を寫して、いそ、いそ、面白かるべけれ」と言ひしに「さうりては露西亞小説のようになりて好ましからず」

と云へる、若し事實ならば、氏は人心の奥妙なる所を寫し得ざるにあらずして、寫すを好まずとも回護し得べきか。さりながら、余を以て見れば、寧ろ不得意なるが故に好まざるにあらずやと思はる。其故は氏が眼光の實驗圈外に出でざるをば、人物の性格を描くの邊より見たる結果に依りて、等しく實驗圈外に潜む所の人心の機密を窺ひ得ざるものと推斷するを得べしと思へばなり。されば先づ、人物の性格に於いて、氏が失敗の次第を述べざるべからず。余は茲に實驗圈の内外と云ふは必ずしも精確なる或定限を畫していふにはあらず、實驗の範圍は人に依りて廣狹等しからざれば、唯常に容易に實驗し得らるべき部分と然らざる部分との假稱と解すれば可なり。

「神系銅線のごとく血は氷の如く冷し」と作者も云ひ、當人も懲りずまに焦れ寄る龍子を強面くもてなし

（前略）百年を關に立ば立て。明日からは見事留守を使ひ了せて、一切面會せずんば、その一度に懲りて、此後は油白粉の鼻持ちならぬ、悪臭散るゝ苦根は通れん。かへすゝも不潔物め！昨夜老女のいふを聞けば、あの女子我れに惚れたるよし、惚らるゝといふは思へばうるさくて可厭ものかな。竿を齊門に執るゝ三年が、老女め新しき縷帯持て來よ後次今日も痛む紅葉山人を論ず

といひたる程の俊橘が、一度過ちて龍子が目を吹矢もて射、狼狽周章し、龍子が長々しき直接談判に鐵石の魂忽ち碎け「飛懸つて抱起し物をも言はず其眼に唇を押當て溢るゝ血を吸ひて小野龍子！妻にした！小野夫婦萬歳！」と叫びたる俄の軟化、不自然の激變には性格の一致破れたりといひ得べし。尙亦「むき玉子」の前半の蘭谿は狂熱燃ゆるが如き一個の詩人にして、忽ち得意、忽ち失意、興來たれば「喝采賞賛の聲何所ともなく聞ゆる心地して」寢食忘れて筆を畫布の上に走らし、心機一轉しては後退に挫と長椅子に身を投げて、蘭谿未熟なり我ながら愛想が盡きた」と自らを嘲けり、弟子の蘭山に「先生は書を書くといふより寧ろ裂くといはむほど畫ものも／＼心に適はずとて裂たまへば」云々と笑はれし程の男なり。是れでこそ眞の畫工なるべけれど思ひて讀みもてゆけば、後半の蘭谿は殆ど別人の如し、寛濶、自若、粹にして淡、通にして冷、少しも曩の天真爛漫にして狂熱燃ゆるが如くなりし血性の人とは見えず。そのお喜代に對する舉動、舊藩の老公への應接、洒脱、輕妙、なか／＼玄關に草をはやす男とは受取られず。お喜代が「おそる／＼圓卓の前まで進めば蘭谿べたりと卓に凭り葉卷の烟を吟みてお喜代の横顔に吹懸け」たる輕妙にして粹なる惡戯「蘭谿散亂せる雜物を親ら片附くるに（お喜代は）お掃除でござりまするか」と問へば、男寡居ゆる蛆の虫拂する所と笑はせ」たる口前など、半分以上「おぼろ舟」の松本、「三人妻」の菊住、「夏瘦」の震策など、紅葉得意の人物に成り了はれるを見るべし。かゝれば這も亦性格の一致破却せりと云ふとも誣めたりといふべからず。「早稻田文學」の南強生が「隣の女」の評に

（前略）さて此の作の譚の人物心得がたし交際ざらひ、世間知らずの男が、隨つて又ウツその物なるべき讓が、屢々似合はしからぬ通語を用ふるさへあるに、小夜と初對面の應對によつほどのアザをやる工合、中々隅へは置けぬ男と見えたり、讓平生爲永の人情本を愛讀せりと聞けど、疊の上の水練は實地の役に立つものならず、居合師の刀でも呼吸を聞いたばかりで抜けたらばグイト不思議なり

とあるも、紅葉が持前の癖を穿ちたるものなるべし。かゝる失敗を來たすは畢竟其の實驗圈外の人物を描かんと企てたる初發心も、氏が腕前未だ是れに添はずして中途に挫かれ、何時しか氏が實驗圈内の人物となり了はるに外ならざるべし。例へば氏が能く描き得たる松本、蓮田、菊住などを氏が實驗圈の地平線とすれば、此の以上に出でんとて物に絶りて攀ぢたりとも、終には腕痺れて堪へ難く墮ち來たりて平準の點に止まらざるを得じ。既に實驗圈外に飛颺するの翼なき氏に取つては、又人心の秘密藏に入りて機微を探るの忍術を覺らざるも自然にして、殆ど疑を要せざる事ならずや。

紅葉は實驗圈内にありては淺膚の患はありながら、人物活動して江戸氣質をいろ／＼の形に於いて發揮し、實驗圈外に飛揚するも、忽ち落ち來たりて氏が筆の平準なる江戸氣質に留まるが故に、氏が人物が性格の一致を破る所、即ち氏が詩腦に鬱勃たる江戸氣質が、其の光焰を吐くの罅隙を得たる所なり。されば氏は轉んでも只は起きぬ、不思議の才を有せりといひつべし。若し余をして所謂江戸通ならしめば幾多の故事、實例を取りて氏が作と對照し、随分面白く此の一段を論じ得たりしなるべきを、憾み多き事なり。

紅葉山人を論ず

俗に所謂江戸氣質は華美なり、意氣なり、いなせなり、任侠なり。或は俗人の眼に映じたる日本魂の小模型を江戸氣質なりと云ふも可なるべし。人或は日本人を以て佛人に似たりとなし、其の任侠の氣熾んにして、名を重んじ、事をなす敏捷輕快にして、華美を好むなどの點、屢々對照せられたり。此の對照すら許さるべくば、江戸氣質を當時の日本魂の至醇なりと認むるもあながち責むべきことにあらじ。それはともあれ、紅葉が江戸氣質の詩人なるは即ち日本國に於いて氏の作が多數の人に歡迎せられ、喝采せらるゝ所以なりと云ふを得べし。縦し斯く論ずるは僻見なりとするも、兎に角、氏が寫す所は艶なり、妍なり、楚々として柳の如く、清淡なるは李花に似たり、人の是等を愛するは常情なり、既に愛すれば其の缺點をも忘るゝに至る、是れも亦自然の勢なるべし。況んや審美眼を具へ、小説の眞價を鑑識し得る人といふとも、氏が作には幾多の同感を表し得べく思はるゝ節あるをや。氏が我が國の文壇に雄飛するも偶然ならず。エヴレット「詩の理」と題せる章中に曰へらく、

總て美術は、外部から内部まで、上から下まで、美ならざなへからざるが如く、凡て美術品は表面の一瞥見たに美ならざるべからず、總て段々その精髓に眼光達するに隨つて、新なる美を觀取せしめざるべからざるが如く(例へば畫は色彩として既に美なれども其の色彩に依りて現されたる者は更に美なり)詩は其の眞意を解せざる人の耳にも快きものならざるべからず。

エヴレットの説の主眼は、美術は總て一瞥見したる所だに既に美ならざるべからず、詩は聲調に於て既に美ならざるべからずと云ふにあれども、吾人は之を演繹して美術は一瞥見に現はるゝ所

だも、應分に人を樂ましむる力ありといふを得べし。而して一見人を眩する外部の美は、往々吾人の眼光の其の内奥に入るを妨ぐるの傾あるは理の許す所なり。されば紅葉が作は、縱令極めて平凡なる人間の外貌を寫し得たるのみにて、異常の人物を描きては忽ち性格の一致を破るの缺點はありながら、氏が作を緋けば、戀の病に害れ果て、女郎花の影薄けれど身嗜みに心を込めて男に捨てられまじの心中娘、お藤が「枯枝のやうなる手を合せて御母様濟みませぬ、此お詫はあの世から」と泣く聲耳に付き、あるは宗兵衛と共に田畝路に出づれば、

九月十三夜の月清みて磨きたる如し、風爽かに渡りて今結髪むすむすの髪に吹き入り、湯あびりの温肌を拭へる餘は來過し群立の情に鳴るなり。踏分くる小徑の八重葎には、月影を宿せる露のきら／＼と亂れたるが指頭に冷つき、虫の千万色前後に音を争ふなど秋節の骨體と云ふ處を我一人が物にして閑行のおもしろさ。一直線に見通しの木立一簇盛れる中に一點星の燈火の影を我宿と眺めて一風曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變りて今まで見ぬ遠景、畫を展べる如し

あるは佐太夫が突出しの道中姿

白絹の目を一面銀絲ぎんしに拾ひ、背筋は四寸巾に紅絲あかいしにて拾ひ、此に遠鷹羽の定紋を金絲にて盛上にしたるは御簾に見立ての補襦かへなり領には小形銀鈎ぎんこうを附け、五色の下絲よかりいとは地を曳くばかりなる眞藥玉まんとくを釣下げたれば、八文字の高足のツシリと踏下す毎に此玉背たませに揺め

くさまに眩くらき、あるは、才藏が二心の菊住への愛想盡かして、涼しげなる眼りんとさせ、「此の返報へいには菊住様十日と經たぬ中に此の才藏が、」と悔やし涙を吞込んで、

女で食ふ氣が、女で食はれ、今日を食ひかぬる身ならん折、菰こもを着てなりと遠慮なく尋れてござんせ。損下札の四五束は

紅葉山人を論ず

紅葉山人を論ず

面桶へ投げて進ぜましよ

と瘡ばしれども意氣な聲、宛としてそこに聞ゆるやうなり。
紅葉の人の心を魅して恍惚たらしむるの秘訣は、衣裳付き身の廻りを寫しては、其の人物の氣性、境遇をほのめかし「八文字の高足のツしりと踏下す毎に此玉背に揺め」くと晴を點じ、吳服屋の仕入帳其儘どの不快の感に陥らしめず、又景色を描きては、「風爽かに渡りて今結髪の髪に吹入り」と人心に觸るゝの面を挿みて活を入れ、人物を寫しては分拆的ならざして具體的なるの邊にあり、此等の點美妙と異なる所なり。美妙は精緻なる筆を以ていち子姫の服裝を寫し、確氷峠の景色を描き、幾多の人物を作りたれども、概ね分拆的に見たるを唯排列して一團となせるが故に、大概枯死して活動の妙を失ひ、美的幻象を喚び起すの力微々たり。
若し枝葉を議するを止めて、更に大體を考查すれば、所謂江戸氣質の種々の部分が、種々の人情と景物とを藉りて、彼れが作中に現されたることいよ／＼明なり。而して江戸氣質の精髓が殆ど凝集して一團となり、頗る著く現れたる、是れ「伽羅枕」の左太夫なり。
左太夫幼名お仙、其父西岡屋の家運傾きしや、鴨の養女となり、いたくめで鍾愛まれながら尙懷か、西岡夫婦をのみ慕ひ、榮華に心奪はれざる魂、後に左太夫となりて金にも男にも心ひかれず、義理と意氣地と情とを立て通し、松の位の君が二葉の儂能く見え、又離髪となりて鳥邊山の妙見へ早朝の日參に、其の意地いちじるしく、後に嫖客ばらが「氣性買ひ、にとて夜毎の繁昌」を極めし傾城の張ほの見えたり。「華美好」みの父、それ者のはての母親に鍾愛せられ、「諸藝の數を

盡して「尋古を勵み、餘所行きの服裝には「舞子の姿して往來の足を止め」させにし身なれば、「苦界と云はゞ苦界、玉の輿への踏臺」と勸むるを、義理ある母への孝行と思ひ、あいと泣顔せず賣られしも、蓋し境遇の感化なるべし。一度鳥水の隠居に請出されし身も、窮しては「今の身の上の志がなさや裏に針あれど襦袢の着心馴ればまた其中に歡樂」ありと啣ち「かほどの玉を冥加なや、草深きに投込み露に見まがはれて消ゆるも惜ければ」と「自負」悪念を煽る時節に、母も同腹なるを見澄まし「生娘に回るべき希望」はなし、「色を賣りてなりと母様にも安堵させ我も浮瀬に遇ひたし」と身賣の口を搜がらず中、江戸のお侍衆とききて我が實父のなつかしく、前田新右衛門の妾となりしも人情の自然なるべく、一度傾城となりし身は資本入らずの爲し易き商法、此の外にあるまじと思ひつき、又色を鬻がんの心を起し、も理と見えたり。さて新右の妾となりての心盡くしにも、其の情け深きさがは能く見え、新右死して後異腹の姉と三枚橋にて、彼れは「紙打の乗物」此方は「塵埃の中にしよんぼり立」ちてのせわしく本意なき對面」に心濁し、胤はかはらぬ石見守の女ながら、彼方は玉簾の御息女に生れ、我はかくし子の日蔭もどて下賤の土に根を持ってばそのまゝ、草花と開ける此身！羨ましきは姉様なり」と思ふにつけ、鳥水の隠居と名所見物に贅澤を盡くし、昔をしのび、姉に恵みを受けて一入「身を敢果なみの種となり」それれが因となりて「かくては何の思出ありて長命ふにや心に問はれて愧かしき事なり、我二十二歳、これよりを盛とも云ふべき身にして」と心動けば理性も自から手傳ひて

新右殿の遺念の此子を于死にせむは、我萬人に情を汚されんより、数十倍も亡夫に謝罪なき仕置なれば、我奉公して此子
紅葉山人を論ず

紅葉山人を論ず

は里に遣り、見事に成人させて細くとも前田の家名を繼がせたまじり簡、
になりて再び身を賣り、いとし子を「里親に渡して諄いほど頼みましたを繰返して」の泣別かれ、
露重げなる牡丹花が再び廓へ歸り咲きまで、無理のなきは老鍊也。やがて佐太夫となりて、

姉は大名の奥方にて、見たりや、行列の威勢は飛鳥も翼を飲めむに、我その妹として味憎巡撫て磨らむは、神ぞ、神ぞ、神ぞ、
ぞ口惜からずや、さりながら運拙くして夫を捨てて皆死なれ、これまでの萬事未凶ならざるはなく、未々の辻占悪ければ、
正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間は生れながら、真かれ悪かれ其名を唱はれずして土に返るは、蠅の夏に生れて
秋果つるが如し、芳名を傳へずば、あらぬ名にてもあれ世に知られ、其れにて姉に楯つがむも面白かるへし、

と不思議の望を起こし、は、思ふに屢々の失望に心辭み、持前の意地が世の障礙に反撥し、かゝ
る心を生せしめしものか。「大不具となりて、世間を氣味悪がらすべきぞ」「勘當張に反古の價を
下げばや、」など思ひたたる、仙と呼ばれお花と呼ばれし頃の優しく情け深きとは打つて變はり
ておそろし。これは榮華の姉を羨み、薄命の我が身を疎み「未々の辻占悪ければ」など迷信も加は
りて、憤悶のあまり自暴の心も起こり、クワツと取逆せたる隙に、生得の名聞負けし魂など手傳
ひ、實際は左程の殘忍無法をせん的心なきも、自身への附け元氣に、心の表面にかゝる壯語を列
べしか。多感の性には此の類の變珍しからず。蓋し此の一時狂とも名くべき熱情は佐太夫に通徹
す、例へば新堀左源太が父を讒訴して自滅せしめきと聞き、「おのれ畜生武士」と垂吐き懸けし、
佐藤八郎が父の放埒の意見を頼みに來りし時に「折悪しく小癩に障れる事のありて自暴酒の醉心
に浮かれて散々に罵り」し、いづれも熱情一時に燃ゆる瘡癩のわざなり。たゞし一時に沸き昂る

熱情なれば冷るもまた速なり。彼の田島が行き届く深切に感じては刑せられきと聞きて、「惘惘骨
を刺し悲嘆腸を拵れば咲誇りし花、忽ち凋れて色香を失ふこと限なく」、高阪時雄が心からの戀、
文七が主思ひの誠心に動かされては、我が貯への金をもて救はんとし、新堀左内が我れゆゑの自
殺と知りては、「記念と遺れる塗枕の其人の定紋に線香を供へて心ばかりなる回向」し、其の外遙
に父を慕うて江戸に上りしなど、暫時は满腔の熱血を惜げもなく或一事に注げど、事去るや、行
く水のまた歸らざるが如し。此の忽ち熱して忽ち冷る性情は彼れみづから意識せざる所にして、
而かも其が男をたらず第一至妙の魔力なりき。此の故に佐太夫が手管を悉く熟慮の果、工風の手
段と見るは妥當ならず。すなはち、意識しての詐謀と見るはひがごとなるべし。優人が場に登り
て劇中劇を忘るゝ如く、佐太夫も屢、虚を離れて我れ知らず實の境に入り、好まぬ客をあやなすに
も、時としては無意識の情其の心に動きて情人に對するが如き感ありしか。換言すれば些にても
客の性の美點を見ればこれに多少の同情を寄せ、屢、我れを欺くことあり、彼の疣大盡との「添臥
に大盡が満身の疣を撫でながら此の

男富貴の家に生れながら、いかなる業因か如此被服の疵物に出來て世に不足といふことを知らぬほど此不具を朝暮の惱まし
て天地を怨み父母を怨み其身を怨み嗚や世中の因果なる可し(中略)此容貌にては誰も一顧ひて何處に行けばとて、戀め
ける所には、穢多非人の様なる心扱ひせらるべく、自身にもさりき大槓は知りながら、なほ煩惱已み難くて通ひ玉ふ心中の
可哀さ、可憐さ、徐ろに不便を催しければ、佐太夫凡人の魂を入れ替へ、心を盡して大盡を持成しける
とある、又田島が「假初の御所爲の中にも非凡個所の見ゆれば五月晴れに月影を拜む思ひして羞

紅葉山人を論ず

かしながら佐太夫其所に迷ひ「身の素性あかせたく「その御所存を打明けたまはむには善かれ悪かれ其には論なし佐太夫が命捨て、露ほども御用に立つならば後とは云はず即座に相果て御覽に入れ参らすべし」と云へる、こは對手の殺しえまじきを觀破しての苦肉の手段と云ひけたばそれ迄なれど、寧ろ一時は死んでも見せん心になりぬと解する方、彼れが一時狂の特質に協ふべくや。又正助が佐太夫を頼みて石室に金の才覺をさせ石室を「白痴と云はぬばかりの口上自己は情人の所存なるを憤りて、妾の「眼には一知半解の美男よりも、實意ある蕃瓜が好ましい姿に見えます」と罵れるなど、いづれも人の難儀屈辱を見ては我が上のやうに烈しく同感し躍起となる性の所爲なり。斯く同情の強きにも拘らず、客をたらしめて多くの金をせしめしはいかに。これ其熱情の只一時に止まり、やがて忽ち冷却すればなり、同情長く續かば、無法に大金を欺き取るやうの事は爲しがたるべく、熱情久しく冷却せずば早晚間夫出来て全盛の人氣を落とすべし、さればとて全く熱情なくば、いかでかは深く男を迷し得べき。斯く考ふれば佐太夫はいとよく傾城の理想を代表せり。

佐太夫は名聞の心深く我慢の情強き爲、自ら強を挫き弱を援くる任侠の氣に富みたり、「樓主の拷問」「繩束の亂打」にも恐れず「力づくならば鉛の熱湯、切身に鹽、何にもあれ、此意地を挫くに足らぬと義理と情には人一倍の泣虫」と云ひし我慢と「凡そ人間に生れながら良かれ悪かれ其名を唱はれず」てはといふ名聞氣とが凝りて、江戸氣質の精體を禰禰姿に權化したればこそ、兎狀持の田島を保庇ひ、兎口の時雄、疣大盡を憐み、芳原「開關以來の罪作」と噂されし半之丞を手玉

に取り、「坂彦」と持て囃されし左源太の不義を罵りたれ。彼れ「居常寛濶を好み名を賣ることを專にしければ内の逼迫」一方ならざれど、それを敢て苦ともせず、七月の土用干に損料借りの禰禰、帯などをあまた吊して廓中の荒膽を抜き、南の番所に八文字踏みての道中に人を驚かす。この華美を衒ひ、驕奢を好むの氣風、また彼れが特質也。さはれ佐太夫が心はひとり任侠、情愛、驕奢などの情のみに支配せられしにはあらず、時々自己の技倆に矜り、手管其のことが面白さに要なき罪を作りしも間々あるべし、「命を捨て、も捨てかぬる遊女」とまで思ひつめし時雄を欺きて、二百兩の手切をせしめ、罪なき實意一片の俵屋幸助を、策を用ひて衝き放ちし残忍に、所謂莫連の面影も見えて、人情曲折面白し。今概括して佐太夫が性情の著きを數ふれば、

第一、暫くは情熱熾んなれども忽ち冷却す

第二、剛情と名聞氣と一團となりて一種の俠氣をなす

第三、華美、驕奢を好む

第四、男に惚れず、金に迷はず、義理人情に脆し

第五、縦横の手管

第六、手管の爲に手管を用ふる残忍の性

是れなり。是の箇條は一方に於ては江戸氣質の精髄といふべく、一方に於ては江戸傾城の精髄ならずや。すなはち紅葉は江戸氣質を打ち、一團となし、以て理想的傾城佐太夫を作りたり、案ずるに江戸氣質を發揮するには、恐らく佐太夫の如き女性を描くよりもまさる好方便なかるべく、

亦かゝる役目に適する作家今紅葉の外に絶無なるべし。紅葉曾て句あり「小判かむ音聞かせたや初鯉」と、蓋し彼れが本願は「伽羅枕」に於いて畧達し得たりと云ふべし。わはれ紅葉は江戸氣質を發揮するに於て、殆ど充分の功を奏したり、然れどもこの成功はいまだ必しも『伽羅枕』をして小説の上乗たらしむるの保證とはならず。美は美として價値あるものにあらずれば純美にあらず、或理想、或主義を表白するものとして價値ありとも、小説の本領に缺くる所あらば、いまだ無瑕の小説とは云ふべからず。

佐太夫の性情は、その熱するや激甚にして冷却も亦隨うて速なり、且や人情の秘機は杓子定規に律すべからず、意表の變化あるを許さざるべからず、而も少しく精細に觀察すれば、佐太夫が性格に不一致の缺點あるは掩ふべからざるが如し。夫れ人に記憶と云ふものある上は、如何に其の心變化すとも、往時非常に心を傾けし事柄は折々毎に追憶することのある、これ人の常情なり。然るに佐太夫が一生涯の中に最も深く心に銘しけんと思ゆる、西岡の養父母、新右との間に設けし愛兒、田島絃左衛門などの往事を、彼れ如何さまに記憶せるかと云ふに、お仙と呼ばれし頃、鴨家の養女となりて「慈愛の上に慈愛を重ね、大事の上にも大事がりて我子とてもあれほどに」と世間の人の云ひし程に寵愛受けても、一向馴染まず、「鴨の父親は不便がつて下さるか」と西岡屋が云へば「あい其はく、勿躰ないほど不便がりたまへど此家の父親母親の事は片時忘るゝ間もなし、鴨の家は可厭なれば早よう呼戻して、ヤッぱり此家の子にして下されや」とまで慕ひし程に執着の強かりしにも拘らず、一たび江戸に上りし以來は一度も西岡夫婦の事を思ひださし影もなく、

又「此子を干死にせむは我萬人の情を汚さんより」辛らしと啣ち、里親に手渡しては「諄いほど頼みましたを繰返し」

此兒の顔を見るにつけて、其輪にありし往時の事ども、一々眼に見るやうに心に浮び、露席を被てなりと素人の身にてあらましものを貧よりの不了簡より此有様、母様さ喚ばるゝ身にしてあるべきことか、この兒には舊本綿を着せながら、躬らは緋縮緬の花衣、氣蓋かしき事なりと、佐太夫の大夫職も親子の愛には落けて襦袢の袖口を油らせ

りどある程にいとしく思ふ子の上を、其の後は絶えて幾年の間、露ばかりだに思ひ出ださず、黄泉の國にありといふ物忘れ河の濁水に身をしたせばとて斯る人は怪しからずや。鴨家の榮華なる養女を嫌ひ、貧しき西岡夫婦を慕ひて、思ひやむ時なき仙と呼ばれし頃の性格は、執着いど深き生れなりしに、佐太夫となりて後は、全く別人の如く、父母の事、愛兒が上、戀しき人など、悉く忘れ、我が子を「見事に成人させて細くとも前田の家名を繼がせたき了簡」も煙の如く消え「藁席を被てなりと素人にてあらましものを」の悔恨はありながら、更に落籍を遮ぐ様子もなく、殆ど何の希望もなく、手管もて人を惱ますが畢生の目的なるが如くに、月日を送りしは、いかにぞや。自然の間に漸次情の薄れゆきし跡もなければ、さながら記憶なき女のやう見えていと不思議なり。此の作者は前にもいへる如く、實驗圈外の異常の人物を描けば、毎に性格の一致を破却す、左太夫は巧に江戸氣質の幾多の概念を具備し得たれど異常の人物なるだけに、殊性と遍性、挫の調和破れたり、あたらしといふべし。

更に結構の上より云んか、『伽羅枕』は佐太夫を穀とし幾多の標客を輻とす、而して「三人妻」は、

お艶、お角、お才が幅にして、葛城は穀なり。二者の異なる所は、前者は穀が主眼たるに、後者は幅の方、立者にして、穀は唯之れを結合する穀たるに過ぎず、恰も一本の傘を立て、見たると覆へして眺めたるとの相違あり、其の筋の運動の状より見る時は、輕き縈結と速なる解決との相交迭するさま漣波の如し。佐太夫の一生涯は土俵の中央に仁王立に身構へたる大關が、幕下二三段の輩を左右前後に取りて投ぐる稽古相撲を見るが如く、秘術は彌、出でて彌、妙なるも、常に綽々たる餘裕ありて真劍の所、見えざれば、毫も觀客をして片唾を呑んで勝負如何にと疑懼せしむる所なし。『三人妻』に於いては事柄の纏つれ、人物が畢生の大事に懸かるもの殆どなし。お艶が紅梅に擠れられんとせしが如きは、彼れが身にとりて大事ならんも、其の他の縈結は葛城が多情の出來心より成りしものに過ぎざれば、讀みて汗を握るに及ばず、ましてややがて黄金の利刀もて容易く斷ちさばかるゝが例なれば、讀む者豫め結果を推し測りて、解決の條に至りても雨後に月見る爽快の感胸に浮ばず。所詮喜劇の作の興味は人事の上に衝突ありて、さて後解除せらるゝより生ずる智力的和解に基くが故に、縈結の輕くして短き、解決の速にして豫知し易きなどは、皆興味を薄からしむるものなるべし。是れまかしながら紅葉が本意の輕淡なる人事を優美に描きて、春風に酔醒めの顔拂はする底の輕ろやかなる快を興へんとするに由るべければ、短といはい短、長といはい長所なるべくや。或目的に向かひて熱心に進まんとする路に溝渠あり、荆棘ありて、之れを妨げ、妨げられては足掻き、足掻きては轉びて、七轉八倒尙ほひるまず、其の目的に達せんと腕き苦しむ、終に難を排して本願成就の大團圓に至るが如き悲喜劇、即ち嚴正なる喜劇の眞

味は、之れを此の作者に望むべからず。紅葉が作の人物が衝突に遇ひて腕くや、死を賭して腕くもの殆どなし、遊戯三昧のもの十が九を占めたり、是れその人の致命點に衝突を起らしめざるに由るなるべし。

此の作者は如何に人物と境遇及び運命との關係を見たるか。これまた審査する價値あれど、この點は露伴の評論に入りて後、併せ論ずる所あるべし。

紅葉が悲劇的小説の技術は如何。思ふに彼の『おぼろ舟』『巴波川』『南無阿彌陀佛』など皆悲哀的なれど悲壯的の旨味を具せず、これもまた輕妙をもて勝る趣あり。もとよりこゝに擧げたる三作は、單純なる脚色に成れる短篇なれば、結構などは論ずる程の事もなし。人物の性格は『南無阿彌陀佛』のお梅も、『巴波川』のお葛も、『おぼろ舟』のお藤も、殆ど異名同人にして、等しく唯優しく情け深く、無垢、無邪氣なるのみ、戀の爲に命惜まぬ可憐の少女といへば、其の他にいふべきとはや盡きたり、多少相異なるは概して境遇の同じからざるに由れる也。さて、是等の小女の對手たる松本、上野、青木などの性格も取り出で、論ずべき程のことなし、唯注意すべきは此の作者が悲壯の美に對して云ふ悲哀の美を巧に寫し得たると Poetical Justice 以外の動機を用ひて作中の人物の運命を決したるとの二點なり、上の三作は大跡同じければ一々論ずる要なし、今は『おぼろ舟』を主として此の二點を明かにすべし、

『おぼろ舟』のお藤は活人形の天女、少し品格劣れども今様のミランダとも稱ふべし、

御覽遊ばしませ、彼御子様の初々しさ。此席へ出るまじ氣して、碌々お口も利けず、されど行儀作法の正しきこと、なかく

紅葉山人を論ず

二十六

奉公に出さう、出やうといふおはれさは違ひます。私も年來の渡世、幾百人のお子の世話しましたなれど、あのやうな容色の美しい、おまなしい子を手掛けた事は覚えませぬ。

と雇人請宿の老婆が褒めたるにても、あらまし其の人柄は知られたり。お藤は母もろどもに「枕を並べて餓死の境界」外に詮すべなければ、妾奉公も母ゆゑと少しも怨まず、やがて松本との約束調ひたる後、亡き夫の「位牌に合す顔」なしと悔む母をば「お母様、あなたの御了簡は、あの世の親父もよう御存じで御座ります。何科ありてあなたをお怒みなさるべきや。たい此藤一人の淫行にして下さらば、それにて事は済むべし……」と慰むれば、「我子でなくば拜まうものを、お藤嬉しいぞや。」と母を泣かせしにて温順にして孝心深きを知るべく、「たとひ賤き營業をすればとて、此心を正路に持たば何日か春風の吹く事あるべし」と自ら慰め、「此上はその方に貞實を竭し、後々冥利よろしき様、疎略に扱はぬ様にいたします」と誓ふによりて貞淑の心掛け見ゆ。松本が故意と口話の種持きて三谷と藤との中を怪しむ腹立ちしやうに立ち上るに、お藤は驚き、其の手に縋りて引戻すを「三谷様への御傳言か」と蹴られ

袖を噛みすすり上げ、どうぞしたのかと尋ねる言葉に、啼聲立むすれば、松本は後方より抱上げ、腋の下に手をやり、それ！それ！今啼た鳥が出て笑ふ。

と賺かさるゝ少女かたぎ、此の類の「おもしろき手管にかゝりて、命はいらぬ主さま參る、と深くはまりし淺墓、罪なく、あどなく、戀に我れを忘るゝ様憐れなり。志かるにかくまで慕ひし男は「狼が羊の皮冠」りたる優姿の薄情ものにて、忽ち棄てゝまた顧みず、お藤は目に見えぬ牙に腸裂

き破られ、怨めしくは思ひながらも「せめては一目なりと首尾して、其袖に縋りて泣き」「此の身に飽いたとたしかなる御一言を聞きし上、殺して下さらば見事我手に死んでのけ、没後までも不敏のものやと折々に思出草ともならば、死花の咲くが何よりの樂み」と思ひつめても、尙さすがに我が慾のみにはかたよらで「大事なる親を干死にはなし難し」と、悲歎の間にも我れを責め、松本に再會の折もあらば「とりかへしのならぬ遺恨は、死ぬるにも替へ難し」とまで思ひつめはつめながら「私は外の旦那を取まじよ、」とキツぱり云ひて「霜に畫ける花や、見る間にじめく」と消えしまで、總て悲哀の美を描き得てそを破却すべき利己、傲慢、復讐、憎悪、野心などの些の影だにまじへざる、これ此の作者の長技なり。『巴波川』のお蔭、『南無阿彌陀佛』のお梅も、此の點に於ては殆ど同一なり。美妙、露伴なども此の方面に向かひては竟に紅葉に及び難し。お藤は既に云へる如く孝順、貞淑、無垢、無邪氣、當世娘として比較的にいへば、まづ間然する所なし。賤業を營まん心の起こしを疵とするも、這は貧困と無教育との然らしめしものにて、自招の罪とはいふべからず。執着を缺點とせんか、女子が先天的賦性の然らしむる所なるを如何にせん。薄情なる男の胸中を看破し得ざる蒙昧を過とせんか、ひとり此の少女のみ咎むべけんや。さすれば斯く過失なき可憐の少女を無漸にも殺したる作者紅葉は、所謂 Poetical Justice の限界を脱したるものにあらずや。然り恐らくは脱したるものならん。其の脱したるは是か非か。若し之れを決せんとせば須くまづ罪なき女主人公の非命の死が如何なる影響を讀者の心に及ぼすかを見ざるべからず。(Poetical Justice) をば應報 (Nemesis) の義に限らずして美術上の斟酌によりて

紅葉山人を論ず

二十七

變形せる正義 (The Modification of Justice by Consideration of Art.) を見るの説、及び罪過の義を廣く取りて父母祖先の所業にも關係由來すと見る説などくゞあり、一概に定義しがたけれど評論の煩冗ならんを恐れて今は省きつ)。無罪の女主人公が非業の死の讀者の心に及ぼす影響の初段は、無慈悲なる浮世の浪に蹂躙せられ、右に押流され、左にたゞよひ、足掻き悶ゆる悲惨憂苦の状に對して、熱鬧、紛亂の煩しきを感じたる心が、女主人公の死を見ると共に、豁然として心狀一變し、寂靜の極、清爽の致を覺ゆるにあり。例へば春の野に出で、紅黃紫白いろ／＼に咲き亂れたる間を、蟻群の縦横に馳せ廻ぐるさまを看つめ、頭腦岑々たるを覺ゆる時、一聲鳴き破る雲雀に驚き、仰きて一碧無邊涯の天空を眺め、神氣頓に爽なるを覺ゆるが如し。天を仰ぐの一段は賢愚皆然り、しかれども天を仰ぎて見る所は同じからず。或は雲雀のみを看、或は雲を眺め、或は穹窿の偉觀を歎じ、或は天國に思を馳せ、或は更に宇宙の大元を聯想するに至る。されば又可憐無邪氣の死者に對して寂靜の感を生ずるは何人も同一なる可しといへども、更に一段高く瞳を轉ずれば、現世の福祉は無缺圓滿の慰安を與ふるものあらず、唯死こそは疾風迅雷も驚かし難き安眠、矢石刀鎗も破り難き安宅にして墓まざる花の褥、褪せざる錦繡の安樂椅子、無辜清淨の可憐兒にいとゞおはしき賜なり、といふ感起こるべし。そののみならず、死ぬる者には尙其の上に特典あり、

墳墓は一切の過失を埋め、一切の失敗を蔽ひ、一切の怨憎を滅却す。墳墓の長閑なる胸底より浮びいづるものは切なる哀傷の情を優しき追懷の情のみなり。誰れが仇敵の墳墓をだに侮蔑し得るぞ。誰れが今我が前に横はる此の一物の塵埃を

争戦せしことを悔恨せざる。

アルボン

お藤の病、危篤と聞き、「旦那取が過ぎての戀病」かと嘲りし松本の冷なる眼にだに熱涙潜々として流れたり、これ死の威力の大なる證據ならずや。又思ふに女主人公が死の因縁は境遇にも基きたり、蓋しお藤が家貧ならずして教育はた具はりたらば彼れいかで妾など云ふ賤業に就かんや、さすれば松本の如き輕薄無情の男兒にあざむかれて非命の死を遂ぐることもなかりしなるべし。すなはち其の悲惨なる終を遂げしは對遇の然らしめしものともいふべし。又更に「偶然」の勢力の大なるを見る。試に看よ、たとへばお藤は百舌屋を請宿として妾奉公に出で、松本も百舌屋に依頼して妾を求めきども、一時早く他の客がお藤を手に入るゝか、松本が一時遅く來たりて他の女を聘せしならば、彼の悲劇は竟に起らざりしならん。「人は譬へば樹の花の如し、同じく發き、風に隨うて同じく散る、或は籬を拂ひて齒席の上に墮ち、或は籬に關はりて糞溷の中に落つ、」偶合偶離、萍と漂ひ蓬と轉じ、定なき所に運命の樞軸存す。更に一段を進めて觀ずれば人間の性情は運命の金輪なり。見よ、お藤が執着と松本の輕淡洒落とが相接觸したる結果如何に悲惨なる劇と成りしぞ。二者の性情冷熱宜しきを得たりしならば、かゝる慘劇は起らざりしなるべし。シヨペンハウエルは曰はく

悲劇は人生の長るべき方面、即ち人間の憫哭、偶然と過失との專權、正義の滅亡、惡逆の勝利を表現す、斯くして吾人の欲望を撃破するの世相を看せしむ、此の光景に對するや、吾人は生活の樂欲を厭離し、之れに愛着するの念を斷つべしと促さるゝを感ず。

紅葉山人を論ず

紅葉山人を論ず

ど、げに時としてはかゝる感無きこと能はじ、され此れら境遇や、偶然や、性情や、順逆顛倒や、そも如何にして人間に流行するぞ。何者が此等のものを措置配分するぞ。件の大勢力は何ぞ。之れを盲目の意志と解せんか、或は全能の神業とせんか。はた自然の勢力か。

悲劇の衝突は人意と人意との間にありといはんよりは寧ろ人を経て活動する大勢力と大勢力との間にあり。人は自尊自制するが如く見ゆさ雖も實は其の背後に立ちて人を経て活動する大勢力あり。人は流れに泛ぶ泡なり。看るものは以爲らく輕忽に奔り、快活に躍り、狂ふが如く旋轉するのみと、あはれ開は唯外面の泡のみ、開を驅りてを翻弄するものは其の底に流るゝ黒きおそろしき流なり。

エヴレット

上に述べたる幾多の思想は何人にも必ず起こらんと云ふにあらず、又かゝる順序を追うて起こるべしと云ふにあらず、唯詩的正義を株守せで無辜の死を描くとの讀者に及ぼす影響の廣く且大なるを畧示せるのみ。若し紅葉をして露伴の如く詩的正義を固守し、且之れを狭く解して、罪過と應報との人爲的結合と看做し、作中の人物に對して賞罰を嚴にするの主義を奉ぜしめば、無量の妙想を吹き出だすべき泉源は塞がれて人生の妙相なかば闇黒の中に埋没すべかりしに、此に出でざりしは此の作者の爲に喜ぶべし。應報の理は、げに世の大部分に流行す、されど此の一理を狭局に解して以て宇宙の大迷語を解かんとせば、誤謬多からざるを得ざるべし。人生の大秘密は悉く評發せらるべきにあらず。

“There is something in this more than natural. If philosophy could find it out.”
論じて既に數千言に及びにたれど、願て一考すれば、尙此の好作家の特質は只半面のみを現じた

るの感あり、何となれば眞地目なる世相を寫す紅葉のみ見えて、滑稽談話を擅にして人心の他の半面を描く紅葉尙遺りたればなり。蓋し充分に紅葉を評せんとせば此點に就いても頗る評論すべきものあるべし。まかれども限ある紙面は予に此の自由を與へず、まばらしく其の面影の大略を『早稻田文學』第二十四號「滑稽家」と題せる文中に見出ださん。曰はく、

紅葉山人が諷刺の本事は吾人之れを『我樂多文庫』時代に些影を認めたりし外には『都の花』の『二人女房』に於て見たりのみ其の伎倆の如何に優なるか未だ詳悉する能はずと雖も吾人が見る所大なる誤なくば東西の美を折衷せる小説家劇作家として明治の文壇にユーモリストの名を擅にせんもの此作家の外にあらざるべし『二人女房』のみによりて窺ふも客觀的記叙の節にして能く盡したる、諷刺の皮肉の原素妙うして愛嬌のこぼれざる、無邪氣なる戯談の毎に人情に纏綿したる、皆ユーモリストの秘訣に合へり殊に滑稽の筆の輕妙なる時としては落語めく嫌ひなきにあらざり抄なくとも小さん圓遊以上の口吻、モリエールが滑稽の落語めくを咎めずば豈ひまり此作者の筆のみを咎めんや(下界)

と。要するに紅葉は美妙露伴に比して頗る多面的の作家なり、若し露伴を以て紅葉より高き所ありとせば、紅葉は露伴よりも廣きに於いて優ると云ふべし。

幸田露伴を論ず

詩人が世相を看る二の眼は、洞察を右にし、同感を左にす。美妙は此の二の昏かる爲に、人間の脆弱陋劣なる半面、爾も其の皮相のみを看、紅葉は右眼殆ど眇したれど、左眼は明なるが故に、觀察頗る偏せざるに近し。露伴に至りては、未だ完全ならずと雖も、洞察同感二ながら具足し、

露伴を論ず

人心の卑猥陋劣、猷らしき所も、高尚雄大、神々しき邊も、一括して眺め、尋常の實驗圈内に踞踏する輩の視ひ知る能はざる人心秘奥の琴線に相觸れ、往々にして切々嘈々、微妙の靈響を洩らすことあり。此の琴線や、美妙が彈ぜんを欲して指短く果たさざりしもの、紅葉が我れ觸るゝ能はざるにあらざり、好まざるなりといはんとせしものなり。露伴が二氏よりも深遠なるは此點に由る。人若し直に人心の堂奥に飛び入るの靈翼を有せんか、誰れか藩籬の罅隙より僅に内を覗ふが如き手段に縋りて人心の秘密を推し、零碎なる臆測の斷片を綴ぢ合せ、以て人間を描寫するの迂をなさんや。必竟、古今許多の庸作家は洞察同感の兩翼なきが故に、或は其の迂を意識し、或は知らずして、愚策を反復せり。抑、或人物の或事情境遇に接觸するや、忽然として或事相惹き起され、其の事相また直に一躍して因縁となり、更にまた他の事相を醗釀す。因縁果の關係は斯くして環の端なきに如し。さればシヨオベンハウエルも、

人の性と人の生活とは概念にては確に相分ち得べしと雖も之れを再現するや到底分ち難き程に相密着す何となれば境遇、

運命、出來事ありて始めて人物をして其の性格を表せしめ、性格ありて始めて出來事を惹起すべき所業生すればなり、

と云へり。げに事と人とは相關係して因果をなす、暫くも離るべからざるもの也。然れども凡そ小説家の人間を觀じて直に内心に入る能はざるものは、概して事の邊より二者の關係を看、直に入り得るものは心の邊より二者の關係を盾る。志に於てや等しく人を主題としてそを描かんとしながらも、主觀の邊より人と事との關係作用を狀寫するものと客觀の邊より事と人との關係作用を狀寫するものとの二派を生ず。若し心より離して事のみを見んか、甲の事と乙の事とは其の關

係殆どなく磊々たる河原の石の如く見ゆべし、蓋し事と事との脈絡は人に依りて繋がる、其間、因果の關係、密にして嚴なり。而して此の關係は心を視ひて後に始めて其全軀を知り得べきものなり、心を看ざらんか、事と人との關係到底明瞭なる能はざるべし、隨うて事と事との聯絡も嚴正には窺ひ難し。故に客觀の地に立ちて人と事との關係作用を狀寫せんとするも、勢ひ事のみ著く見えて心は明に寫しがたし、又人事相因果するの關係も明には知るべからず、凝ふらくは或事變に觸れて閃一閃する斷片的性情のみ見らるべし。されば美妙は主觀に羽うち入るの翼なくして心を寫さんと企て、而して抽象的敘述に陥り、紅葉は自ら之を好まざると分疏して敢て入らんとし、も試みざりき。然るに露伴に至りては飄逸としてひとり主觀の境に遊び、此の方面に立脚して人事の關係を寫さんとせり。これ實に此の作家の特質也。若し逍遙氏が曾て「小説三派」に用ひられたる名稱を借りて云はば、美妙と紅葉とは性情派にして露伴は人間派の圈内に入りたるものか。露伴が深く主觀を洞觀せる結果として著きは、第一、人と事との因縁果報の關係を詳に釋ね得べきやうに世相を寫せる事、第二、常識もて一見すれば超自然とも思はるゝ幽靈、前兆、及び其の他幽玄なる人心の機微を洩らせる事、第三、美妙紅葉の作には殆ど見えざる無意識の言動を寫して最も注意すべき人間の妙相を發揮せんと力めたる事、是れなり。もとより此の他にも注目すべき點若干あるべしと雖も今敢ていはず、まづ此の三條の果して當たれりや否やを、彼れが作に就て精檢すべし。と今露伴が作の特質を發揮するに當たり、傑作と聞こえたる『いさなとり』と『五重塔』を主として研究し、傍ら『風流佛』、『一口劔』、『辻浮瑠璃』、『寐耳鐵砲』、等をも参照すべ

し。たゞしこゝに云ふ所は大體に止まらざるを得ざるべし、何となれば『いさなとり』の如き多趣の作は、そのみにても細評せんとせば、數十葉を費やさざるべからざれば也。

『いさなとり』の彦右衛門の性格は首尾一貫、まづ自然的といふ一贊辭を博するに足る。其の「北國船の船頭に、汝は齡に似合はぬ高慢云ふてもまだ京都も見ず江戸も見ぬ奴、火の熱いといふと水の冷たいといふこと知たが不思議」と笑はれて奮激し、「男見一匹譯もなく草木と共に腐つて仕舞ふは厭なり」とて、十四の春下田港を宛もなく出奔せる、已に能く後年池月島の「羽指」となり、或は「一番萬鎗の手柄をなし」、或は「暴れ鯨」を追打ちの「羽矢鎗」の手柄に仲間を驚かし、「船の舳先の茶筌に浪の當らぬとはあれ彦右衛門の鎗は功名のあらぬとなし」と噂せられたる大膽驚愕の「金剛力士」たらん兆を示せり。而して扱参り仲間の久太郎が島原にて拾ひし財囊をその主に返さぬを憤り「むしやぶり付き」、仲裁に入りし佐十郎爺が「貰ふたる此錢を分配あふとかなんぞから我に我にと互に慾張つて末は喧嘩はむめたるか扱もく情ない世の中」といふを聞きて「突然後より此馬鹿爺め」と罵りし峭直剛勁、物に激し易き、げに此の勇なればこそ可愛がつて遣りたる女房の「大それた不義三昧」を見、「其上奸夫に刃物持たせて立向はせられては」赫と怒り「骨刺斧」を揮うて淫婦奸夫を立地に斬り殺したる、無理ならず見えたり。又其はじめお俊の色香に迷ひて不義を行ひしも、翻然悔悟の心を生じ井桁屋を出奔し、後奸夫奸婦を屠りて心惑ひ、一度海に身を投ぜしも、浮み上りし一刹那に、心機又一轉して醜然死を思ひ止まる、蓋し事に觸れて豁然頓悟する性質也。彼れが井桁屋逐電の途中、お俊に似たる「中年増」に衝突たり、全くお俊と思

ひ違へ、「何とでもせよ、つまらぬ我を」と地上に搭と坐したるを見よ。狂熱燃ゆるが如き多想像の性歴然たらずや。後にお俊等の亡魂を看て懊惱煩悶せるも性の自然なりと感ぜしむ。或は佐十郎にお蔭参りとは云ひながら「縁も由縁もない人に塵一本なりとも絲一筋なりとも譯なしに貰ふといふは男兒の耻ではないか」と窘められて「顔真赤になり腋の下に汗流」せる、よく其の廣島町に在りし頃「我が腕の油を食ひ我が額の汗に着るべし」と壯語せし獨立獨行の氣風と符合す。すなはち主人公が性情始終一貫して凡て活動す。されば彼れが如き性情の因が彼れの如き境遇の縁と相合はれ彼れの如き業果を生ずること、蓋し争ひがたかるべしといはざるを得ざるべし。さて更に主人公に取りて重なる縁の地位に立てるお俊、お新の二人に就いて看、且主人公と此の二人との交渉を見れば、露伴の技倆は尙一層明なるべし。

お俊は「幼稚時より父親の膳の前に坐りて、強ひて褒らるゝが面白半分、顔しかめて飲むを面白半分、飲み飲まされし酒に慣れ」、夫庄兵衛が酒量弱く「とても敵手にならざるより女房は是れに亭主を飽す思ひ、亭主是れに女房を苦々しくおもひたり、蓋し兩親獨り娘の愛に溺れ、只甘やかして有て上げ、女の作法身の嗜みなど嚴かには教へざりし也。又庄兵衛どの情誼はた早う破れんとしたりし也。庄兵衛が尙奉公人なりし頃だに、お俊は「親の眼を盗んでは彼方の隅でこそく鼠色の薄暗い所行」ありし噂あれば（我儘育ちも手傳ひたらめど）其の本來の浮氣推して知るべし。さるほどに夫庄兵衛が不圖遊女狂ひをはじめ家付きの妻を粗略にす。あはれ「家内の者喚ひ醒せど尙お俊をば其儘寐かし置きし」往時の深切とは裏上の心變り、お俊怨めしく嫉く、腹立たしく、

露伴を論ず

三十六

一時の悶を遣る自暴酒仇となりて、生得の多情厄をなし、常はそれとも思はざりし彦右衛門が男に惜しい愛嬌も目に入り、此所に始めて煩惱の芽を吹きしに、彦右が主思ひの立ち働きに念々憎からぬやうになりて「え、きびきびとして可愛奴め」と思はずも口走る程になり、彦右を呼びて肩癢うたする親しみを庄兵衛醉眼に邪推して、悶絶する程彦右衛門を蹴倒し、無法の所業見るにつけ、全く夫に愛想つかし、「罪なくて氣失ふまで蹴られしも畢竟は妾に親切なりし故起りし」と憐の情も手傳ひ、彦右を慕ふ情愈々嵩じ、酒と偶然どが助をなして愈々煩惱増長し、二人とも不義の人となり了す。所詮お俊が墮落の跡を尋ねれば、其の多情の性質因をなし、教育の不長、夫の放埒などいふ、事情境遇が縁となりて不義の業果を生ぜし筋道、掌上の紋を見るが如し。主人公が墮落の跡は如何。既に云へる如く、彼れは悔悟し易き性質なれども、一旦情に眼昏めば無謀のふるまひをも仕遂ぐる性也、而して當時年やうく十七、無分別勿論也。主人床兵衛の廓遊にゆきし夜

窓の戸の戸袋より後の一枚出で難きにお俊が獨語く聲まで店口に見ゆれば、彦右衛門何心なく小奴締めませうと早足に座敷まで来て見れば、月半分開きたる窓よりさし入れて、微風に揺る蚊帳、翠の浪を打つ傍に白地の浴衣着て今日結ひ立の髪美しく黒く、細帯姿すつきと立てる後つきしほらしうおもはれけるが、此の方少し振りむいて、此處はよし妾が締むればと云はれし時顔見合せて、白玉のやうな面に柳葉の如き眉平日よりは一段奇麗に覺え

たる、これ既に彦右が心に自覺せざる不義の念の芽まゝ時也。さて其の次の夜再び「お俊を不圖見るにほらくと燃ゆる火の映りて顔赤やかに、瑠璃色の黒眼、青みざしたる白目の光り流るゝ

露伴を論ず

三十七

ごとし、此の形容の彼れが瞳に刻せらるゝや、不義の業火を燃やすべき薪に油の注がれたり。お俊が挑みしは僅に一點火を加へしに外ならず。されば彦右衛門が性情は因たり、お俊の挑みたるは縁なり、而して不義の業果は生じたる也。お新が性質は如何。思ふに彦右衛門が金四郎と争ひし折、彦右衛門とは初対面なるに馴れくしく「栢植の小櫛」を抜き取りて貸さしに、如才なく慎み深からぬ性見をたり、开を「柔和き女の情」と速断せしは生真地目にして婦女に對する經驗少なく、生得、情に脆き彦右衛門が自然の性也。お新は身の上を語りながら實をあかさず、こは彦右に身を寄せんの下心ありての欺のみならず、「悪事は必ず爲ぬと我意を張り通すことの出来るほど、潔白な生まれにもあらねばなり、また耻づかしさやら、さまり悪さやらより、一切我が上を正直に言ひ放つと」難く、所詮男らしく我が身はいまだ「西海屋の傳太郎といへる滅法美男の聞え高き男」と内縁切れずといふ能はず。ウソ半分の身上話、此の身の上話が二人が悪縁の緒となり、後に悲惨の繩つれを引起す、是非なしといふべし。彦右との間に新太郎といふ子までなしたる身ながら、お新は前にも云へる如く慎み深き性ならねば、飽かて別れし先夫の傳太郎の情けに絆され「悪いとは知りつゝも男に逢へば再び來るなども断然断絶りかねて」不義の娯樂に耽けりしを「他の不義を憎む心普通より烈しく」一徹短慮にて怒れば我れを忘るゝ彦右が之れを覺り、奸夫もろとも骨剝斧の錆とせし、自然の結果也。情性の因、事情境遇の縁、錯綜纏綿して終に殺戮の慘劇をなす。お新の母が殺されしも彦右が之れを殺しも自招自致也。陽に諛らひ陰に誹る表裏反覆の老婆と、眞率剛直奸を悪むと甚し

露伴を論ず

三十八

き彦右が心とは相容れず、早く無覺中に殺機は造られたり。而して此の機は奸夫奸婦密會するに及びて完成し、「見す／＼不義を許したる輕薄老婆め覺悟せよ」の一喝斧と共に下りぬ。『いさなとり』には性情、因となり境遇事情縁となりて事變生ずる趣よく見えたりと雖も、尙彼の作は頗る複雑多端なれば、間々明瞭ならざる所あり、餘韻嫻々たる所あり、然るに『五重塔』に至りては事情境遇單純にして變化少なき爲、性情と人事との關係因果、あまりに明なる程に露呈せらる。

『五重塔』の主人公十兵衛が朗圓上人に塔建立の請負を願ふや

御覽の通り、のつそり十兵衛と口惜い渾名をつけられて居る奴でござりまする、然し御上人様、眞實でござりまする、仕事は下手ではござりませぬ、知て居ります私しは馬鹿でござりまする、馬鹿にされて居ります、意氣地のない奴でござりまする、虚言はな／＼申ませぬ、御上人様、大工は出来ませぬ、大隅流は童時の時から、後藤立川二人の流儀も合點して居りまする、爲せて、五重塔の仕事は私に爲せていたゞきたい、それで參上しました、川越の源太様は積りたしたは五六日前聞きました、それから私は寝ませぬ、御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は爲る、死んでも立派に名を残さるゝ、あゝ羨ましい大工となつて生きてゐる甲斐もあるさうなもの、それに引代へ、此十兵衛は鑿手斧もつては源太様にだに誰にだて打つ墨繩の曲ることはあれ高が一にも後れを取るやうなことは必ず必ず思へば年中長屋の羽目板の繕ひやら馬小屋箱溝の敷仕事……源太様は羨ましい智慧も達者なれば手腕も達者、あゝ羨ましい仕事をなさるか、我は源太様はよ、情無い我はよ、羨ましいがつかひ高くて女房にも口きかず泣きながら寝ました

露伴を論ず

三十九

といふ。其の機訥にして自信深き、我が業に熱中し我が技倆を現さんとするの外他念なし。一念凝りては五重の塔を夢み「狼狽て飛び起きさまに道具箱へ手を突込み」鑿鑿につゝかけて怪我をし「晴れて居る空を見ても燈火の達かぬ室の隅の暗いところを見ても白木造りの五重の塔がぬつと突立ちて」已れ「を見下して居」るを見る、彼れこゝに至りては我が技倆を現して名譽を得んなどいふ俗境は己に遙の後にあり、只偏に我が業と共に生死し、斯道に献身せん無意識なる義務の念、肺腑に徹し、塔と我れと殆ど一軀渾融の域に入る。彼れは不羈獨立の硬骨漢、人に依りて功を立てるを好まず、朗圓上人が「長者が二人子」の諷諭の「慈悲は充分了つて居」ながらも源太と協力して建築せん心なし。「五重塔は二人で建てう、我れを主にし汝否でもあらうが副になつて力を假してはくれまいか……まあ厭でもあらうが源太が頼む」と同職の棟梁が穩便なる計らひも「厭でござります」と云ひ放ち、女房が涙ながらの切諫も耳に入れず、更に源太が「え負けてやれ斯様して遣らう、源太は副になつても可い汝を心に立てるほどに、さあ／＼清く承知して二人で爲うと合點せい」と折れて出づれど「一ツの仕事は二人でするは(中略)心になつても副になつても厭なりや何しても出来ませぬ」と膠なき挨拶、これ皆「馬鹿でもものつそりでもよい、寄生木となつて榮ゆるを」屑しとせざるに因る也。蓋し十兵衛が我が天分をおのが業の上に發揮するを畢生の素願とし、人に依りて事を成すを終天の大辱と思ふが故に、恩ある親分の源太に恃り、慈悲ある上人の教示に背きて、尙志を枉げざる也。されば雅量ある源太が悉く十兵衛に歩を譲り、剩へ秘藏の繪圖面を「見たらば何かの足にもなると自己が精神を籠めたるものを惜氣もなしに」貸

露伴を論ず

四十

さんといふを、「別に拜借いたしても」と「心は左程になけれども言葉に膠なさ過ぎる返辭」し。「他の巾着で我口濡らさじ」と我を張る、此極端なる不羈率直は幾多の苦悶を自招し終に源太に見限られ、清吉に復讐の刃をあひせらる。因果歴々たり。さて源太が心の本尊は十兵衛とは異也、「男兒」を立つるにあり。されば塔を半口十兵衛に譲らんとしては「強いはかりが男兒では無い」「じつと堪忍して無理に弱くなるも男兒だ」と自ら勵まし、又十兵衛が溝板でもたいて一生を終りませう親方様、堪忍して下され、私が悪い塔を建てようとは既申しませぬ」と恭るれば「汝一人に重石を脊負つて左様沈まれて仕舞ふては源太が男になれるかやい」第一源太が折角磨いた俵氣も其所で磨て仕舞ふし汝は固より此蜂取らず」といひ、又或時は上人に「嗚呼氣味のよい男兒ぢやなど真から底から褒美られては」「お蔭で男兒になりましたか」と男泣きに打なく、十兵衛が「白木造りの五重の塔がぬつと」我が前に塞がりてそれより以外に世間を見る能はざるとは非常の相違也。此故に彼れは潔く仕事を子分十兵衛に譲りたるのみならず、木道具の世話、圖面の貸與、齋への交渉までしてやらんと云ひいだしぬ。要するに源太は度量あり、俠氣あり、敏捷周到、世智に長け癖はあれども人情あり。されば十兵衛も源太も共に愛すべき人物なり、爾も其の性情の異なるや相衝突し、相苦悶し、心中刺戟の慘劇、これ人間の妙相ならずや。夫れ人は縱令善良の性なりども、個性を有する限は圓滿に善美なる殆ど難し、多少の不具あるを免れず、特に悲劇となるべき衝突を惹き起すが如き人物は偏に我が見る所の狹隘なる理想に執して直前突進、少しも他を顧ざるが故に、我れとその外境との調和如何を思ふに遑なく、知らずく災禍を自招す。

露伴を論ず

四十一

悲むべき哉。十兵衛が我れ一人にて塔を建てずば生き甲斐なしと思ひ、義理人情は知りながらも、調和せん心なく、爲に源太と衝突す、而して源太は、男を磨くを命とすれば、尙衝突を煤すべしとは覺らずして繪圖面を貸さんとし、齋への渡りをもせんと云ふ。性情の固有に發したる偏見が相觸れ相纏れて惡意なき個人間に仇讐怨敵の幻影を造り出だすさま、その幻影に脅されて、或は憤り、或は泣き、或は腕く人間の狂態「五重塔」を齋味すれば歴々として心に浮ぶ。げに世相の一面を觀ずれば群盲偶々相觸れて相擠するの圖に似たるかな。「五重塔」の末段暴風に依りて人と自然との衝突を現したるもその裏面は源太と十兵衛とが心の衝突を暴風を縁として表現したるものとすべし、即ち潜勢變じて顯勢となれる也。

以上簡なれど此の作家の特質は如此、又其の美妙、紅葉よりも人間を描くに一段深き由もほゞ之によりて知られたらん。蓋し小説は美術の一様なれば、他の美術に同じく、差別の中に平等を見えしめ、殊相に依りて道理を覺らしむるを高しとすべし。ハルトマンが小宇宙想を現したる美を以て美の最上に置き、シヨオペンハウエルが詩は殊を通じ例に依りて「プラトニツク、アイデア」を知らしむるものなりといへるも、推し極めなば終に差別の中に平等を見るの心に歸すべし。

更に露伴が美妙、紅葉の二氏よりも深く人心の秘密を聞きたる著き點は、常識もて一見すれば超自然と思はるゝも尙最近科學の妙理に乖かざるの邊を描き得たるにあり。吾人は科學の狭き檻内に詩人が妙想の大翼を縛せんとは夢にだに願はず隨うて科學の膝下に跪きて偏に其の指揮を仰ぐ

露伴を論ず

四十二

詩人に懐たらざる者也、否科學に偏せんとする世に露伴の如き作家を得たるは、大早に雲霓を見し程の喜びなき能はず。

『いさなとり』の彦右衛門が奸夫奸婦を老婆と共に討ち果たし、後、壹岐を目指して逃れんと沖に小舟を操れるや、

雨は瀧の如く下り来て風ひさしほ烈しく浪も狂へば木葉の如く舟くるくろと廻り漂ひ今にも破れん今にも沈まんとする途端黒の虚空に何物か閃めき光りし者ある様におぼえて、彦右衛門おもはず振り仰向けば眼瞼唇痛きはごの雨ばかり酷く洗ざかりて、空は空さも云へぬ黒さも恐しい雨、京都の井桁屋騒げ出せし時に逢つたる雨のやうな思ふが早きか船底叩く浪の聲は庄兵衛が聲して汝彦右衛門逃すべきかといふ耳廓を吹きて音さする風はお俊が聲音して、妾は果敢なく斬り殺されしに妾振りすて、何所へ行かうや情なき男の暗き世に伴はではと叫びいだす、さすがに是れはと打驚き、何を大喝する時、水の面にちらりと燐火起りて汝の爲めに淺猿しくも双にかかりて恨を呑み常闇の世に入りし妾が、汝を伴れに來りしぞやと體の方で確に云ふ、振りかへり見れば青白き三尺ばかりの人影蹠蹠と浪に沈みて、螢のやうな燐火且つ消え且つ燃ゆるに奇怪至極と罵り憤り權ふりあげて水を打てば何とも知らず白き手をいだして權をつかむものあり

又『風流佛』の珠運が、お辰が心變りを憤りて「移ろひ易き女心、我を侯爵に見替て汝一人の榮華を誇る」と罵れば「情なき仰せ此辰が」と聲は聞こえて彫像の外人もなし

珠運も何の操なきものに未練殘すべき其生白けたる素首見るも穢はしい身動きあらく後向になれば、よよと泣聲して、それまでに疑はれ疎まれたる身の生甲斐なし、さてもの事方様の手に惜からぬ命捨たしと云ふは、正しく木像なり

此般の怪事、遽に考ふれば、超自然なるが如く、如何にも奇怪のやうなれども、彦右衛門、珠運

等の如き多想像にして情熱なる徒にはかゝる事どもは間々あるべく、而して心理學者の説明し得べき所也。聞くならく、ヤオオテは少しくうつ向きて凝視し空中に白薔薇の咲けるを看きとか。露伴は此點より見るも、美妙、紅葉の二氏より、實を寫すと深しといひ得べきに似たり。科學の真相を覗はずして科學の威力に怖れ、些の不可思議、些の幽玄だに小説に取入るれば乖理の非難あるべしと憚るは、我が今の寫實派の弱處也。夫れ事實は理論に先んず、詩人はむしろ事實の妙相を描破して科學に難題をも與ふべき重任あるに、却りて科學の後塵を拜し、否科學の隻影に威嚇せられてその真相を叩かで降り、敢てその妙理を咀嚼して我が詩囊の一藥味と爲すとを思はざるもの比々是れ也。淺しとせざらんや。

“There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamed of in our philosophy.”

露伴は人心の玄妙を發揮したる點に於ては今の作家中冠たらんとすと雖も、氏も亦科學との衝突を平然として看過する能はざるの痕あり、これ其の玄妙を寫して往々平凡に墮落せしめたる所以なり。例へば彦右衛門が幽霊を看、珠運が木像の聲を聞きしは、其の性情境遇より推して、實に自然の事なれば、何の防誹線を張る要もなきに、彦右衛門をして「ゑゝ業腹なり我が心迷ひし故に怪異を見しか」と覺らしめ、尙お俊の存命せるを後段に見せ、又珠運をば「妄想の影法師に馬鹿にされ、有もせぬ聲まで聞きし思さ」と後悔せしめ、尙「彫像が動いたのやら、女が來たのやら問ふは拙く語らば遅し、玄の又玄、摩何不思議」と云ひて、その次に「珠運は自が歸依佛の來迎

露伴を論ず

四十三

に辱なくも救ひとられて」と綴りて珠運が空中に聲を聞きし時に、お辰は戶外に潜み居りしやうにほのめかしたれば、彦右が見しは一時の幻影、珠運か聞きしは壁越しの實聲たり、「世にも不思議なし」といふ理を説明せんとせる痕歴々たり。かゝる用意は、なくて却りて興趣深かるべきに。

露伴が他の作家よりも人間を知ること深く詩人たるの資に於いて優れる他の一例は、劇道の通語に所謂 Dramatic Forshadowing 即ち「前兆を取入るゝこと」是れなり前兆といふこと或は背理ならん、而も人間が過去の史中かゝる信念を證するの事跡多し、人心の一奇觀として詩人が之を棄てざるは其の當を得たるものならん。「五重塔」は此の種の現象二三を呈せり。十兵衛が子猪之助が「怖い人が」大きな鐵槌で「十兵衛の」頭を幾度も打つて頭が半分砕れた」夢は、暗に十兵衛が清吉に手斧を以て肩を割らるゝ前兆にして、又猪之助が「四分板五分板の切端を積んで現然と真似て建てたる五重塔」は十兵衛が生雲塔建立成就の前兆と見るべし。さはれ露伴がかゝる前兆を用ひしは、我が在來の芝居などにて濫用する前兆とは同じからず、一方より説明すれば毫も怪しむべき所なくして、而も事柄の前途を暗示し讀者をして、且付度し、且疑懼せしむる所に興味あり。紅葉山人もまた幽霊前兆を『伽羅枕』の綾左衛門が死を國元の女房が知る條に用ひたれども、彼れのは餘りに不合理に過ぎて同日に談じ難し。

今一つの他の作者、特に所謂寫實家が等閑に附する人心の妙所に露伴が注目したる點あり。即ち人間の無意識若しくは半無意識の言動の如何に事變の大動機となるかを寫せることは是れ也。其著き

例は『さかんなり』の中に

躍り込む彦右衛門が、さては好夫と悟るに怒火心頭より發りて勢鋭く追ひ逼れば夢さも現さも分らぬ心となつて何の分別もあるではなしにお新動轉の餘り板間の隅にありし骨割斧をまつて男(森夫)に遞與す此時遅く彼時早く猿臂を伸ばして領首引攪む彦右衛門、絶体絶命斧を揮つて横に薙く傳太、外太腿よとこさらされて血はさつと進むに汝おれも斬りしと忿怒一段激して

彦右衛門終に三人を屠るに至る、以て其の一斑は見るを得べし。他は煩を厭ひて省く。

要するに露伴は幾多の點に於いて美妙紅葉の二氏に優れり、さはれ此の作家はむしろ嚴格なる意味に於いての理想家(概念と區別したる理想)なるが故に、我を小説の上に顯し、我を挿入し來たること美妙、紅葉よりも遙に著きを見る。もとより露伴が本願は各種の人物をして思ひ／＼の活動をなさしむる底の客觀を描きいだすにあるべく、且或範圍までは此の本願を成就し得たる趣きあれども、更に瞑目して考ふれば、氏が作中の主人公に於いて、性格の一致を保ち、能く活動して宛然血肉あるものゝごとくなるは、概ね作中の主人公に限らるゝの傾向あり、而してこれ等主人公は、表面は『辻淨瑠璃』の道也の如く放逸なるも、『五重塔』の十兵衛のごとく樸訥なるも、『いさなどり』の彦右衛門の如く剛毅なるも、『一口劍』の正藏の如く因循なるも其皮を剥ぎ、肉を去りて、深刻に檢し來たれば、いづれも一旦奮起するにあたりては、我が業とする所、我が天分と信ずる所、我が志す所に献身せんとする百折不撓不退轉の大勇猛心の化現たる本質に外ならず。且や孰れも皆情熱多想像の文字なき詩人なり、換言すれば作者と從兄弟位に肖よりたり、今一々舉例引證せずと雖も、こは皆人の認め得たる所なるべし。又露伴が人物は總じて他の作者のよりは

個性も具はり、活動の妙も見えたれど、其の作中の主人公ともいふべきものに比して、第二位以下の人物は甚だ見劣りせらるゝの氣味ありといふとも、皆人思ふに同感ならん。特に氏は婦人を寫すに拙にして、その逼性ともいふべき柔婉便嬾の態殆どなし、『寢耳鏡袍』のお方は手管にかけては頼光の渾名ある色道四十八手の奥義極めし遊女なるに、其の云ふと思ふと重々しくして稜立ち、此所紅葉ならばと齒痒ゆき所慙からず。

露伴を客観詩人として見れば、時としては紅葉に劣れる所慙しとせず。されば紅葉の客観的と見らるゝは、技倆の露伴に優れたるにあらずして、或は「我」の露伴より弱小なるが故なるかも知るべからず、又露伴の主人公は縦令「我」の變形せるものとするも、露伴は紅葉に比しては「我」を知ると深く、「我」を表現すると巧みなりと云ひ得べきやも計る可らず。必竟ずるに深く我れを内觀して巧に之れを表すは相對的にいへば價值なしと云ふべからざるも、また絶對的の價值ありとは云ふべからず。シヨオベンハウエル曰はく

大詩人は其の現す所の各人物に我れを化し去るこゝ、復活術家の所爲の如し、忽にして英雄となり、忽にして無邪氣なる少女となるも、等しく自然にして眞實を失はず。シエークスピア、ギョオテの如き是れ也。第二流の詩人は其の現す所の主人公を我れに同化する、而してその餘の人物は往々生活なきものとなる、是れバイロンに於いて見る所也、平凡の詩人の作に至りては其の主人公すら生活なし。

望むらくは露伴子の一大躍して第一流の詩人たらんことを。今の露伴は客観詩人たるよりは主観詩人たるの傾あり、自家の思想と感情とを作に挿入するを得意とする趣あり。氏が其の思想感情

を發表する重なる方法は一種の抒情詩を挿入すること、應報主義に依りて作中の重なる人物の運命を決することは是れ也。前者の最も好き例は『五重塔』の暴風を「飛天夜叉王」に擬したる一段ならん。誰れか彼の一段を讀みて豪宕峻嚴逸氣奔湧の一大抒情詩たるを感ぜざるものあらんや。而して氏が應報主義に依りて重なる人物の運命を定むるは少しく氏が作に注目するものは皆知る所ならん。『辻淨瑠璃』の道也は放蕩遊惰の報によりて乞食にまで墮落して幾多の苦楚を嘗め、心を悔めて再び出世し、『五重塔』の十兵衛は親分に背きて偏執を押し通し、報にて清吉の爲に斧にて斬られ、その業に精勤篤志なるより奏功の善果を結び、『一口劍』の正藏が因循にして酒色に耽りし過失の爲めに妻に見捨てられ、三年苦心の鍛錬によりて名刀を作り得たるを思へ。特に因果應報の理の明に見えたるは『いさなとり』なり。彦右衛門が人の妻たるお俊と不義せし報にて我が妻のお新を傳太郎に竊まれ、又お新傳太は不義の罰を受けて忽ち白刃の鏑と消え、遊蕩に身を持ち崩したる庄兵衛は淺ましき死を遂げ、不義の娛樂を擅まゝにせるお俊は誰れ介抱の仕事もなく、無慚の狂ひ死をなし、彦右衛門は我が罪業の報を甘受して、苦を忍び、徳を積みて、終に罪科を滅し、安穩の終を遂げたり。露伴は應報の理を持つること嚴にして、一度罪を犯すものは必ずその償として相當の罰を受けざるべからず、その罰を甘受して苦を堪へ忍びて奮惡を悔い悔め、善根を積めば、終に清淨の身となり、其の報として安樂に世を送り得べしとの旨を示したり。是れ余が擅なる解釋にあらず、明に氏は『いさなとり』の中に

作り物語の因果應報は餘りに巧く循環るものながら實際は作り物語より尙巧く善惡の報それ／＼にあるもの也。近き例が牛露伴を論ず

露伴を論ず

可愛がる牛飼は牛の爲に護られて荒山野宿の夢安し、幾屋の小兒は酸の怨念でさいふ譯にはあるまいけれど多くは眼耳など満
足ならず天地の機關奇妙不思議の活動にて死靈も祟り呪咀も必ず驗くに相違なし何も此世が厭になりました冥土から彼奴が
招んで居るに違ひないなんぞと、自惚一切の茶にする男などの了解るこゝにあらす

と云へるにて明なるべし。又松富の隠居が彦右衛に諭し、言葉の中に、

最少し堪忍さいふをかして自分の苦惱に耐へ、惡業の報を果して善根の種を蒔け、雨ばかり降つて居る月もなければ寒くば
かりある歳もない、見やれ弱い草が自己が弱いために早く腐つて剛情な樹が遂には花も開き實も結び天晴大木となつて死ん
でも棟木となるではないか、自分で仕出かした事に萎むで退くやふな事ならば何日往生が出来るもので

とあるに依りて、忍苦して自業の報を甘受し、罪障消滅の爲に善根を植うれば、花咲き實結ぶ樂
しき春秋を過ごし得べき由を教へたるを見るべし。尙作者みづから「嗚呼淨瑠璃の文句ではなけ
れど眞實は忍耐ひとつぞやと明け暮れに氣を静め情を馴らし行くほどに夏は鬱陶しくおもひて伐
らんとせし山漆の樹の秋は紅葉に美しき色をなして艶なる風情を人の眼に示すが如く萬事時來た
れば忍耐の徳あらはれ、我につれなかりしもの、我に情あるやうなり來たりて、世もまた左程厭
なものにも思はずなり、人もまた左程憎むべきものゝみにも見えずなり從來天地が我を惱ますよ
う覺えしに何日となく雲の色も鳥の聲も我れを慰め勵ます親切ものゝよう」に彦右が思ふに至り
し由を誌して愈々是の説を確めたり。げにや輪廻應報の理は世を支配する大勢力、忍苦償罪は福
を轉じて福となすの妙法なるべし、露伴が此の理法を説きて衆生を濟度せん志はいとめでたし、
且又應報の理によりて運命を決すると同時に性情因となりて運命の決せらるゝをほのめかし、二

者の調和を程よくしたる、是れ此の作者の非凡なる技倆なり。されども氏が應報主義は、氏が作中
に於てすらも、主人公以外の意志弱く忍耐に乏しきお新、お俊、清吉、お蘭などに適用する時に
は、他の理によらざれば其の運命を説明しがたきを覺ゆ。何となれば苦痛に耐ふるものは能く償罪
の道を得べしと雖も、稟性脆弱のものは終に滅罪享福の運に遇ひがたかるべければ也。然るに賦
性の強弱は先天的のものなれば、其の配分の權を握るものは誰ぞ、その配分の標準は何ぞ、此等
を知るを得ずば、終に應報は正しき應報にあらずして不公平、もしくは偶中と解せらるゝも止む
を得ざらんか。此の點尙予の慊らずとする所也。

結論

美妙は、同感洞察、二つながら乏しき爲、人間の皮相の醜き面のみを看、紅葉もまた洞察の力乏し
き爲、等しく皮相を看たりと雖も、一方に於て同感の力饒かなるが故に、人間の醜き邊のみを見
ずして美なる面をも併せ觀む。露伴に至りては、いまだ完しとは稱し得ざれども、同感洞察二
ながら具へ、人心の美醜善惡の精髓をうかひたり。然れども露伴は一面に我れを標本として作
中の重なる人物を造るの點に於いて限られ、一面に應報主義によりて運命を決するの點において
限られ、他の二家に比して頗る深き所ある代りに、偏局の病無き能はず。紅葉は、江戸氣質に依り
限られたれども露伴が「我」を主とせる如き程には狭からず且又美妙が人物を描かずして直に論ず

るの弊にも倣はず、能く泣き、能く笑ひ、能く怒り、能く悲む。露伴は（美妙も或は）落想着眼、紅葉より高し、然れども泣き、憤り、悲むこと多く、殆ど笑ふことなし。美妙に至りては論じ、罵り、嘲けるのみ眞の涙もなく、眞の笑顔もなし。此の故に露伴は深く、美妙は細しと云ふを得ば、紅葉は二氏よりは廣しと云ふを得べし。之を要するに美妙は細かなれども描く能はずして論ずるの傾あり、紅葉は描寫の筆廣けれども淺く、露伴は深けれども狭しいふべくや。例へば美妙の作は阡陌井然として碁盤縞を織り出だし、其の間に赤煉瓦の烟突黒煙を吐き、和風の家、洋式の樓相混じながら整然たる新開の小市邑の如し、紅塵十丈、騷人詞客を棲ましむるに足らず。紅葉に至りては秋の野の千種の花の咲き出で、見渡す限り彩波亂れ、をり／＼に天來の妙音を洩らす蟲の音も聞こえ、優にして美なり。露伴は是れ屹として聳ゆる冬の山か、水白く松高く、峭嶮として巖壘せたり、絢爛目を奪ふものなしと雖も、是れに對すれば莊高清絶の感あつから生ず。三氏は共に是れ前途多望の作家、各々得易からざる獨得の奇才を抱けり。以上の評論の如きは單に三家の過去に係るもの、讀者こそもて三家を評盡せるものとす勿れ。予はむしろ（幸にして予が説に大謬無きも）駁々として三作家の進歩すると共に、此の評のすべて不妥當となりゆかん日のあらんを今より鶴首して切望する者也。

『戀八卦柱曆』を讀みて所感を述ぶ（明治二十八年八月）

『戀八卦柱曆』は近松が世話物の中にて、他の心中物とは趣變り一異彩ある名作なるは、遍く人の知るところなり。予この度此の作を取りて、モールトン等が、沙翁が劇を研究せる體みに倣ひていでや解釋的批評をと思ひ立ちしが、更に考ふるに、兎に角、巢林子は我が國劇詩壇の泰斗、そが名作を攷究するは決して一朝一夕の業とすべからず、如かじ今はたゞ讀過の際感を得たるまゝ、を誌さんには、と我が心鏡に映れる影をゆがみなりに、此所に復寫することゝはなしぬ。

先づ此の作の血肉を去りて、そが骸骨の組織のみを看んか。三つの嫉妬の團塊が、茂兵衛を中心として恰も三巴の如く相追随し、竟に二つの偶然が媒介となりて、其の中心に立てる茂兵衛の上に、重なり合ひて衝突し、一場の悲劇となれるなり。詳かに事柄に就いて指示せんか。其の筋の上より考ふれば、主人公おさん茂兵衛を、死地に擠れたる原因は、おさんが實父の難儀を救はんとて、夫をさし置き、頼むまじき手代に、金の工面を頼みしと、茂兵衛が承諾し得ざる身上を忘れて、安請合ひまたる爲に、主人の印判を白紙に捺すに至れる、と云ふ兩人が淺慮の過失に外ならざるやうなれども、這は縦かに機關車の組立を説明したるまでにて、之れを運轉する内部の火力は、外にあるを見落としたる沙汰なり。おさんが亭主をさし置いて手代の茂兵衛に我が里方の困しき事情を打ちあけ、金の才覺頼みしも、おさんが切なる言葉に感じて、それを輕々しく引請けしも、由來は概ね其の性格に根ざせるならん。されど此の點は今云はじ。試みに著しき表面の事柄の上に、

戀八卦柱曆を讀みて所感を述ぶ

其の破裂の動機を求めなば、第一以春が玉と茂兵衛とに對する嫉妬、第二助右衛門が、おさんと茂兵衛とに對する嫉妬、第三おさんが以春に對する嫉妬の三者が、互に因縁をなし、互に纏れあひて、おさん茂兵衛の兩人を「夢にだに戀せぬ中の戀と名」らしめ「京洛中に畜生の名を流」すに至らしめたりと云ひつべし。

茂兵衛が白紙に主人の印判捺せしを、助右衛門に見咎められ、旦那以春の前に引きずり出されて、打擲され、悔し泣になくを見て「以春も流石なじみの下人、いか様二十年見落としもない奴が、俄に悪心ある筈なし」と疑ひ漸く解けかゝりしを、以春が日頃焦れ口説くをふり通ほせし下女の玉が、茂兵衛を庇護ひたる爲、嫉妬の情抑へ難く、氣色俄に變りて、烈しく怒り、茂兵衛が運命の軸を聞き方に一回轉せしめぬ。玉がおさんへ語る言葉にも「おさん様の前なれど、さもしい、きたない、卑怯至極な旦那様(以春)のお心、茂兵衛殿へのあたりは、皆愷氣から起こつた事、わたしに、きつう惚れたとて、隙さへあれば抱きついたり、袖ひいたり、暇を取つて此所を出よ、餘所にそつとかこふて、在所の親も養はふ、小袖やらう、銀やらう、うつるさや、いや、聞きともない事ばツかり」たび／＼云ふを何時も強面くしてゐる「所に、わたしは茂兵衛殿の肩を持つたゆゑ、扱は二人が密通か、禁中の御役をして、侍ひ同前の大經師が家で、不義者めとの憎くしみは愷氣の當たり、丁度割符が合ひました」とあり。是れ此の劇の表面に見えたる動機の第一なり。又助右衛門は、おさんに惚れ「腰元のかやをだまして」艶書の取次ぎを頼みしを、玉が覺りて、妨げたる爲、それを「たねに思ふて、針を棒に取りなして、おさん茂兵衛を全くの不義者に、志

おほせたり、と中編岡崎村の場、玉が助衛門を罵る條に見えたり。且上編の初めにも、所々おさんが蔭で、茂兵衛をば褒めそやしながら、助右衛門をば善く云はぬところなど、考ふれば、二人に對して愛憎の別ありしなるべく、愛憎の情内にあれば、ツヒ包みかねるが女子にはありがちな事なれば、自然茂兵衛には優しうするを助右衛門は、邪推にて、我が戀叶はぬも、茂兵衛めがある故など思ひしなるべく、發端のところ、何の理由もあらざるに「茂兵衛めが戻つたら、替はらうと存ずれど、何處にのらをかわくやら」とさも憎々しく云へるなどにて、常に茂兵衛とおさんとの間よきに、嫉妬心を差挿めりし、と解するは、さまで無理なる推量にもあらざるべし。さればこそ、二人が過ちて罪に落ちしを、飽まで憂き目見せんと力めたるならぬ。偕てこの助右衛門が嫉さの胸の煽は、茂兵衛が白紙に主人の印判捺すを「背に目のなきうたてさ」助右衛門に見あらはされたる偶然の出來事を得て、萬丈の猛火となりて、おさん茂兵衛に焦熱地獄の苦を受けしめき。是れ此の劇の表面に見えたる第二の動機なり。又おさんは、夫以春が玉の寢間に毎夜志のんで來る由を聞きて堪へかね「あんまり女房を、阿房にしたふみ付けたしかた、涙がこぼれて腹が立つ、なう此上に無心がある、そなたとおれが替つて、爰におれを寐させてたも、(中略)夜のあくまで抱いて寝て、内どの者の見るまへ、幸かこさま泊つてなり、いき耻かゝせて、本望どげたい」と云へるは、論ずるまでもなく、嫉妬がさせし策畧にて、これが爲に、茂兵衛を開ゆゑ夫と思ひ謬り「肌」は合ひながら、心へだゝる屏風の中、縁の初めは身の上の仇の始めとなりしと云ふべし。されば道行きの條にも「おさん茂兵衛に云ふやうは、よしなき女の愷氣ゆゑ、

戀八卦柱層を讀みて所感を述ぶ

五十四

何の科なきそなたまで、あれ不義者とあやふ日とあり。是れ此の劇の表面に見えたる動機の第三なり。さて此のおさんが嫉妬より出でたる以春を懲さん爲の策客は、おさん茂兵衛が悪縁の結び目にて、之れを結ぶの媒となれるは、偶然の出来事なり。おさんは夫以春の忍びくるを、耻かきせんとて待ちうけたるに、茂兵衛は夢にもそれとは知らず、玉が寐てゐるのみと一圖に思ひ、二年このかた口説かれて、強面くのみわしらひしを「女心に怨みもせず」我が罪を身に引き受けて、かばひだてせし「仇を思なる詞の情、耻づかしくも面目なし、たとへ此のまゝ死するとも、一生に一度肌ふれて、玉が思ひを晴らさせ情の恩を送らん」と忍び寄りて、意外にも不義者二人ここに出来たる、實に運命の機關は、何處を何うして操つるやら、たゞ測り知り難しと歎せんのみ。おさんが願ひは夫の悪性を懲さんになり、茂兵衛が心は情を以て情に報ひんに外ならず、いづれも左まで罪ある所作ならぬに、忽ち花蔭に蛇ありて、思ひも寄らぬ罪過となる、げに運命の早業は、笛を吹いて鳩を飛ばし、マッチ箱から龜が出る天一正一が奇術より、まだ人々を駭歎せしむ。

されば事件の聯絡を主として見る時には、茂兵衛一人が以春、助右衛門、おさんの三人の、嫉妬の火箭にて三面攻撃の的となりしともいふべし。おさんが嫉妬の結果も、他の二人と等しく、茂兵衛を死地に擠れたる力なりしには相違なけれど、素とより、其の本心を探ぐれば、全く彼れと同じからざるは辨ずるまでもなし。

上に述べたる所は唯これ、事實を指摘したのみなるが、斯く三つまでも嫉妬を此の作に取り集め

たるは、そも何の故なるか、はた亦二の偶然の出来事に依りて、件の嫉妬を大破裂に至らしめたる、抑もまた何故なるらん、知りたきものは此の間に於ける近松が底意ならずや。されど此は願へばとて詮なし。翁が意はさて措き、評する方より看れば、實に至妙の着想とたふるの價値あるやうに思はるゝなり。嫉妬は本来、人の情の中に、尤も複雑にして亦尤も激甚なるもの、他の愛を失はんことを疑ひ且恐れ、他の變心のきざしに對する怨み且憤るなど云ふ、色々の情緒、錯綜しあるがゆゑに、忽ちにして絶望の淵に沈み、忽ちにして希望の光をみとめて狂喜し、苦しく且樂しく、憎しさて戀ひし、諦めたくまた棄て難き煩悶至極の心狀なり。斯かる複雑激甚の情に心藏るゝや、さらぬだに缺點多く、眼光鈍く、一秒時の未來だに達觀するの明なく、苦みの種を蒔ながら樂みの實を希ふ淺猿しき人間は、ますく愚昧の度を増し、玉が寢所に忍び入る茂兵衛ならざるも「目は開きながら盲目の杖を失ふ如」くなるべし。さればこそ、以春は嫉妬の爲に、良妻忠僕を失ふを覺らず、助右衛門は嫉妬の爲に、主家を騒がし戀人を死地に陥らしめ、其の身も刃に罹るを思はず、おさんも亦嫉妬の情に驅られて、思ひも寄らぬ不貞の名を負ふに至らんとは夢にだも知らざりしなるべし。狼狽ゆればこそ、六尺ゆたかなる大男も小石に躓きて倒るゝなれ、心惑亂したる時なればこそ、さもなき偶然の出来事も、大破裂を促すの力あるなれ。おさん若し「昔の井筒の女とやらは嫉みほむらに提の水が湯となつた、男の恨みに身がもえて。寒さつめたさ厭はぬ」と自らも云へるが如く、嫉妬に心も半狂亂、逆せ上りて眼くらまざりせば、縦令闇の中なりとも、夫以春と茂兵衛との見分け難き道理。いかであらんや、嫉妬を以て目かくしをう

戀八卦柱層を讀みて所感を述ぶ

五十五

ち、偶然の陥穽を穿つ、轉頓煩悶の状のづから現はれざるを得ず。近松が用意の周到なる、その一斑はこれにても窺ふを得べし。

おさん茂兵衛

五十六

おさんと茂兵衛 (全 上)

『戀八卦柱曆』のおさん茂兵衛が運命の樞軸を闇黒界の方に、第一の回轉をなさしめたる直接の動機らしく見ゆるは、茂兵衛が白紙に主人の印判捺せるを、助右衛門に、見つけられたる偶然の出来事なるべく、さて又其の第二の回轉をなさしめたる直接の動機は、おさんが、玉の寐間に、ひそみわたるを、それとは知らずして、茂兵衛が、しのび寄れる偶然の出来事なりと見ゆるなるべし。されど、斯く機械的の方面より看たるのみにては、未だ近松が作の妙を闡明し得たりとは云ふべからず。斯く偶然を以て、人事の成敗を決する唯一の勢方なりとやうに解する時には、人間は運命の手遊にて、何時どんな目にあふや知れず、其の峻嚴なる命令の下るを、肅然として待つの外なく、一寸先きは眞の闇にて、一步前には千丈の懸崖あるか、はた淵あるか、落ちこむまでは知らんすべなく、茂兵衛が、玉が寐間にしのび寄らんとて、「柱をさすり壁をなで、目はあきながら盲目の技を失ふ如く」なる有様は、正しく是れ人間五十年の闇中旅行の縮圖と見るべし、その表面の道理を會得するのみにて、其の間に人間の靈動するを見落とすの憾みあるやうなり。されば更に人間を主として見たる方面より、一考せしめよ、
おさんは、情つよく、氣の勝ちたる性質にて、幼時より嚴格なる家庭に養はれ、女の道と云へる

こと、深く心にしみ居るらしく、先づ何處やら凜どしまり、相應に心も廻り、情も深く、下女下男にまで、評判のよき妻君なりしなるべし。夫以春は、輕薄なる多情ものなるは、中居の玉を捕へ「汝ゆゑに此の以春名をかへて、かまたりの大臣、玉をとる思案ばかり」など云へる、輕口にして誠なき口説き方にも充分見え、又玉がおさんへの物語にも「私にきつう惚れたとて、隙さへあれば、抱きついたり、袖引いたり、暇を取つて此所を出よ、餘所にそつとかこふて、在所の親も養なほう、小袖やらう、銀やらう、うるさや、いや、聞きともないことばかり、わたしが身さへ、清ければ、御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申しませぬ」とあり。おさんが夫の薄情不埒の段々を、明に聞きたるは、此の時が始まるべけれど「隙さへあれば」玉を口説き「大方毎夜」その寐間にしのびしと云へば、年若とは云へ、鈍ならぬおさん、うす／＼それどかねてより覺りわたるなるべし。されば「男畜生とはつれあひ以春殿」あんまり女房を阿房にした」とは玉に委細を聞いて始めて起こりし怨みならで、口にこそは出さざりしなるべけれど、心の中にてはその以前より胸にこたわりし思ひなるべく、夫以春をば頼み甲斐なき人と面白からず月日を送りわたるなるべし。偕てまた夫以春の誠なきに、ひき換へ、手代茂兵衛は「物やはらか」で「出過ぎぬ氣立」なる上、律義にて忠義一圖の男、特に萬事に深切なれば、折に觸れては、斯う云ふ人を旦那に持ちしことならば、斯うした苦勞はすまじなど、浮氣からではなく、夫の薄情にひき比べて、自然茂兵衛を憎からず、思ひしこともありしなるべし。兎に角おさんの心には、自分の惡縁を歎きそれにつけて茂兵衛を慕はしき男なり、と思ひたるは事實なるべし。されば、

おさん茂兵衛

五十七

上編以春宅の場にも番頭助右衛門がみく／＼云うて、表に出でし跡見おくり「同じ物の云ひやうでも、茂兵衛のやうに、物やはらかにいふても、事はどいふ（中畧）何と助右衛門男にほしいか、肝いッてやらうか」と玉を擲れば「エ、おさん様、いやらしい事、おしやんすな、あんな男持たうより、牛につかれたがまし、同じ手代衆の内でも、茂兵衛殿のやうな、かりそめに物云ふも、愛想らしうていつ腹を立つ顔も見せず、ほんにあのやうな男持つ女子は、果報でござんす」と云ふを押し返して、そんなら茂兵衛を媒妁してやらうか、と云ふが尋常なれど、おさんは不斷我が悪縁を悔み茂兵衛を慕はしと思ひあるゆゑ、今玉に我が常に云はんとして云ふ能はざりし所を云ひ當られて胸さわぎ、すぐに擲ふ餘裕などはどこへやら「ほんに云やればさうぢや」と心底からシミ／＼と同感して言葉を續ぎ「猫にも人にもあひ縁奇縁、隣の紅屋の赤猫は、見かけから優しう此の三毛（猫の頭を撫で）を呼び出すも、聲をほそめて耻づかしさうに見えて、こいつが男にして遣りたい、（中畧）こりや三毛よ、わるい男持つなよ、灰毛猫が濡れかけたら、一度が大事、ふッてのけ、此のさんが従者鯨、よい雄猫添はそいへ」と我れ知らず、事に觸れて胸中の秘密を洩らせり。「ほんに云やればさうぢや」の一句、此の作に於いて千鈞より重し。玉への媒妁口、三毛への訓誡、すべて配遇に關することにあらざるなし、特に三毛を捕へて「悪い男もつなよ」と云ひ、「一度が大事ふッてのけ」と云へるが如き、暗に悪縁を悔むの述懐、心にそまぬ男をもちて、痛恨忘るゝ時しなれば、畜類の上にも、深く同感して、斯かる言葉も自然出でしなるへし。近松が此の邊の意匠の周到なる、三毛にお三を對照し、影に據りて形を釋し、

響を以て物を證する附かず離れぬ微妙の關係を、それとはなしに知らしめたる入神の筆法、げに歎稱するに堪へたり。

おさんが心の奥底には、夫忌はし、茂兵衛慕はしとの考へ、我れだに明かに覺らざれど、常に胸裏を去らざれば、貞女雨夫にまみえずの信仰と、多少冥々の中に衝突し、自然小波瀾を腦裡に起こせるなるへし。茲に於いてか、女猫の逃れ去りし時、思はず口を衝いて「ヤイいたづな者、大ぜい雄猫の聲がする、あの中へいてなんとする、エ、氣の多いやつぢやな、こりや男持つなら、たッた一人持つものぢや、間男すれば、磔刑にかゝる、女子のたしなみ知らぬか」と云ひ「ヤイ間男しの、いたづら者、栗田口へ行きたいな」と云へるが如き、いづれも表は女猫を罵るの言葉なれど、實は心の動搖を我れ知らず、自ら警戒したる良心の囁きなるべし。此所をひとへに、後に不義の罪犯して、栗田口へひかるゝ前兆と解する時には「後の我身を魂がさきに知らせて」とある本文には、いと能く適へど、一筋に前表とのみ解するは、慊らぬふしあり、寧ろ自分が胸中の秘密を、思はず云ひ出だしたるが、やがて前兆となりしと、兩方かねて見る方、穩當にして興味も深かるべし。

他に嫁ぎし女の、頼みとするは、天にも地にも夫一人なるに、其の頼みとすべき夫以春は輕薄卑怯の浮氣者にて、便りにならねば、他に依りて立つ姫蕨の、程よき枝を力草、よりかゝるは自然の勢ひ、別に不義の心はなくとも、おさんが茂兵衛を二なき者に、便りにしたるは、其の性格にも因るべけれど、外圍にかゝる縁あれば、免れ難き數なるべし。おさんが耻を忍びて、父親の難

儀の事情をうちわけ「家一軒を兩方へ、質に入れたが願はれては」一分すたぬとて、父が泣いて歎いてゐる由を、茂兵衛に語り、一貫目の才覺を、茂兵衛に頼みたるは、正直にて情深きを知り「頼むはそなたばかり」と心そこから思へばなるべし。以春様に云ふたればつい埒はあくけれど、兩親が「聳に無心云ひかけては大事の娘にひけが付く」と云ふゆゑ、夫に相談し難しと云ふは、茂兵衛の手前を繕ふ通辭なるべく、實は斯かゝる願ひごとなど、云ひ出されぬ間ど、なりぬたるべし。萬一實際兩親が娘にひけを取らせぬ爲に、聳への無心を拒みたればとて夫婦の間睦しくば、兩親には知らさぬやうに、奈何なる工夫もつくなるべし。然るに「我夫をさしおいて、手代に云ふは何事と、結句物に尾齧がつく」と承知しながら、手代茂兵衛に頼みしは、一方には、以春との間が極めて冷かにて、無心など云ひ出されぬ關係になりぬたるを見べく、他方には、茂兵衛を奈何ばかり信任し且たよりにせるかをも窺ふに足るべし。極めて、柔和なる性質の婦人ならんには、夫は奈何に不義放埒にても、たゞ従順を主として、心に不平も起こらざるべく、側に奈何なる氣違よく、深切なる男ありとも、露ばかりも其方に、心を向けざるべし。おさんの性質はそれと異り、情熱あまりありて、氣の勝ちたる方なり。されば、一貫目の才覺を、茂兵衛に頼む條にも「エ、無念な、男の身ならば是式に、親達に苦はかけまい、娘生んだ親も損、女子に生れた身も因果」との激語も吐きたり、又夫の不埒を玉に聞き「男畜生とはつれあひ以春殿、女房ひとりまぶつてゐる男とては、なけれども、あんまり女房を阿房にした、ふみつけたしかた」と罵しり、又「今宵は玉のなびきやる顔で、夜のあくるまで抱いて寝て、内

どの者の見るまへ、幸か、さま泊つてなり、いき耻かませて本望どげたい」と穩かならぬ企てをなしたる、下編丹波の場にて、捕縛られたる所にも「おさん涼しき目の中にて、助作をはったとにらみ、エ、さもしい土百姓、おのれ少しの欲にめで、よう訴人しおったな」と云へるあたり、都て其の氣象の意地ありて、情つよく、氣の勝ちたるを證するに足るべし。既にかゝる氣象にて、以春が如き輕薄卑劣、誠心なきを夫とすれば、不平心に絶えざりしは當然なるべし。されど、中編岡崎村の場に「道順が娘ならば、拵へいらぬ、みやげいらぬ、育てた親に見込みあり、娘の心がみやげぢやと、またはれた根性に、畜生の魂が、いつのまに入ればか」とあるを見れば、道順が家庭の教訓は、嚴格なりしなるべく、隨うておさんが心にも、貞女兩夫に見えずの本文、銘じぬたるなるべく、之れによりて不平を抑へ、夫はよかれ悪しかれ、貞操を守るつもりにて、居たるなるべく、尙凡婦の眼よりは、殆ど理想的なる男、特に婦人を魅する、深切と云ふ魔力に富める茂兵衛を朝夕見居ることゆゑ、其方に心の我れ知らず自然に傾きて、精神上の結合は此の時既に成立てりと云ふべし。之れを成立たしめし者は、以春が薄情と、茂兵衛が深切とが縁となり、おさんが勝ち氣にして、熱情の性なるが、因となりてなるべし。おさんは本來（矯めなば撓む性はありながら）直なる竹の操あれど、既に以春、炭火となりて、之れを炙り、茂兵衛、弦となりて之れを撓めぬ、曲らざらんとすとも得べからず、戀神が弓はこゝに成り、弦上に箭は既に置かれて放つの機會待たれしのみ。

おさんが一旦偶然の過誤にて、茂兵衛と不義の戀を遂げたる後、何故に二人は連れて逃げしや、

十一月朔日より、翌年の正月上旬まで、凡そ三四十日の間、夫婦の如く片時離れず暮らしたるや、是れ頗る怪むべきことなり。縦令不義の名は雪ぎ難く、罪科また逃れ難しとするも、一點心にくもりなくば、世間に對し以春に對し、何面目に二人手を取りて逃るゝを得んや、また互に顔を見合せても、氣耻しく胸悪ろく、對坐するだに堪へざるべし、且や以春の怒を幾分か和らげ、少しにても世間の疑ひを薄くする手段としても、二人離れゝに潜むは、至當の所置なるべきに、少しもさる企てのなかりしは何故なりしぞ。

おさん茂兵衛が同衾の夢、以春が歸りて戻たゝ音に破れ、助右衛門が提げて出る行燈に驚かされ、「ヤアおさん様か、茂兵衛か、はあ、はあ、」と仰天して二人一所に逃げ出でしは、實に咄嗟の出來事にて、思慮分別の暇もなく、げに現なき所作なるべし。さて程遠く逃れ、跡より追手ども見えざる頃には、二人は我れに歸り、顔見合せてホツと息、これから先は何う去やうと思案にくれ、二人一所に逃るゝは、以春が怒のみならず、世間の悪評も増すの道理、と氣はつきても、おさんはやう／＼年十八、世間見ずの姫育ち、立ち寄る親戚はなし、路銀はなし、一人衝き放されては、何うすることもならず、と云ふ一と通り理由に、つけ加へ、不潔き心は、微塵なけれど、唯何となく慕はし、とかねてより思ひあたる茂兵衛、と今はただ二人、此の廣い世界に取りのこされ外に頼りのない身となりては、一段とまたいとしうなり、離れどもなく、何うせ免罪の身ではなし、死なば一所に死にたい、との願ひも、ツヒ起こりしなるべし。思ふにかゝる考への起こりしは、おさんが女の道と云へる倫理思想は、父の口授にて、そのまゝ覺えるたるのみにて、自

ら深く感入し、同化したるものならざりし故なるべきか。一度過つて貞女の道を破れど、變に應じて節を全うするなどの考へは、斯かる年若き女子に求め難きは勿論なり。倫理の羈絆すでに破ぶれたり、多少意馬心猿の狂ふも自然なるべし。茂兵衛も亦、おさんに切に、連れて逃げてと頼まれては、天性情に脆きゆゑ、強ひて女一人衝き放して、我が身を屑うするに忍びざりしなるべく、ツヒそれなりに、手を取りて走りしなるべし。されど二人は本來、意あつて不義せし間ならねば、始めの程は「夫婦にあらぬ夫婦のさま、神佛にも、人間にも、うとまれはてし身の上や、どたがひの心耻づかし、顔打ちあけて、顔と顔見合はせ、顔あかめ」しも無理ならず。此所かしてを彷徨ひて、力になりつなられつして、段々馴れ睦む間には、いよ／＼茂兵衛の誠ありて、情ぶかく、慕はしき男なるを、感ずるの機會多かりしなるべく、偶然の過誤が媒介にて悔しい汚名を受け、餘儀なさの道行きとは云ひあながら、陸ゆく鴛鴦の離れぬ間、かりそめにも、夫婦のやうに斯かる人と暮すは女冥利と、竊に喜び十が一だも願ふことの叶はぬ世に、斯うなりしは傍倖と、之をせめてもの心遣りに、大絶望の中に小満足を見出し、之れを種として身の薄命を諦めたるなるべし。斯かる事情あればこそ、其の身の不幸を歎き、無念を訴ふるの言葉も、始ど見當たらざるならぬ。おさんが如き、情熱熾んなる女子にして、毫も悔恨悲痛の聲なきは、内部に之れを抑制するに足る事情なくては、あり得べからざる事なり。之れを絶望の緘黙、と解釋するも、一説ならんが、二三日の間ならばいざ知らず、奈何に絶望したりとも、絶望のみにては、三四十日の長き日月の中には、愚痴は女の癖なれば、身の不幸を歎き悲しみ、且悔むことなど、折々あるが當然なるべし、

然るに毫もさる事なく、偏へに我が爲に、犠牲になれる玉を氣の毒におもひ、両親に命のある中、今一度遇ひたし、どの願ひの外には、殆ど何事をも心に懸けざるは、死生一如と見る大悟の人にあらざれば、望み難き程のよい覺悟なり。されどおさんが斯かる禪味を咀嚼し得たりとは、想像する能はず、彼れが脚下まで、寄せ來たる死海の怒濤に動せざるは、瞳を戀の一點に集め、その外をば顧みざるが故なればなるべしと外思はれず。中編岡崎村の所にも「なう茂兵衛殿、とてもわしらは、今日あつて、あすない身、命を命と思はねども、いとしや玉は、どうなりやツた、と案ずるは、是ばかり、只ゆかしいは、とッ様かゝ様、なんぼ思ひあきらめても、逢ひたうござる」と云ひ、夫以春が事などは、露云ひ出さぬを見れば、ますます上來の解釋、眞なるに近きが如し。おさんは茂兵衛と離れともない、とても死ぬるものならば、一所に殺さるゝが本望、と心の底に思へばこそ、両親と岡崎村に遇ひし折にも、別段その心の潔白なる分疏もなさず、却て母に「ア、悲し、また死ぬ用意ばツかりを」と叱られし程、思ひきりよく、死に支度もしたるならぬ。又茂兵衛がおさんの命助けたき爲ばかりに、生存へてゐた、と道順夫婦に云ふを抑へ「ア、おろかしい事云ふ人ぢや、我れひとり生きながらへ、言ひわけが立つ程なれば、二人生ても同じこと、取りがへやうがどうしやうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寝たは定、かたちは生まれかはつても、此悪名は削られぬ、其方はいかう狼狽が來たさうな」と少しも自分の罪は包まず、未練氣もなく自若として、年上の茂兵衛を諭すは、年十八の女にしては、理由なくては、出來にくい覺悟なり。之れをおさんの性義理に明なるに歸し、茂兵衛の狼狽ゆるは、之れに反するが故

なりと云ふ人もあるべけれど、恐くは正鵠を得たる沙汰ならじ。おさんが死を見て恐れざるは、理性に依りて悟れるならで、情が教へし決断なるは、前に云へるが如くなるべし。茂兵衛は、おさんと異にして、二十年來奉公に越度なく、玉が二年此方くどけど、靡かぬ程の堅氣の若者なれば、唯一筋に主思ひの心より、印判を白紙に捺して、逃れぬ罪を犯し、玉が我が強面かりしを怨みもせで、我れを庇護ふ仇を思なる誠づくしに感激し、「玉が思ひを晴らさせ、情の恩を送らん」と云へる熱情仇となり、意外にも主人の妻と不義したれば、露ばかりも、始めよりおさんに對して、道ならぬ考へなど、起こせしことあらざりしなるべし。本來茂兵衛は謹直にして、忠義一圖の男なれど、情に脆くして分別深からず、されば、おさんに金の才覺頼まれて前後の思慮なく、輕々しく請合ひ、又玉が情の恩に報ひんとて、情に驅られて其の手段の甚だ誤れるを知らざりき。斯かる人物なるが故に、一旦おさんとあるまじき事までかし、狼狽して逃れ出づるや、おさんに頼まれては、理の當非などは深く考へず、二人駈落ちもしたるなるべし。やがて「夫婦にあらぬ夫婦のさま、神佛にも人間にも、うとまれはてし身の上」となり、世間に誰たよるべき者なきやうになりては、自然に二人の間に、一種の情交も成立ちて、茂兵衛もおさんが捨て難くなれる趣もありしなるべきか。されども、忠義といへる我が理想、全く破却せられたる苦悶忘れ難く、主の妻と不義せしを悔むの情去らずと見え、始終愚痴の繰言絶えざるは、おさんが洒然と諦めたるは、宵壤の差あり。下編丹波の場にて、捕手が圍つて逃れぬと覺りし條に、茂兵衛は「日頃申す通り、悪縁と思ふて下されませ、私ゆるに、大事のお身を捨てさせました」と涙ぐめば

おさんご茂兵衛

六十六

おさんは「また同じ事ばかり、それは互の因果づく、ただ忘れぬは、二人の親、わんざんざんは幼なじみの以春様、こなたも私も、みぢん濁らぬ此心云ひ分けて死にたい」と覺悟の中に、此の時ただ一度夫以春がことを言ひ出だし、少しく愚痴になれるは、例外のやうなれど、是れも亦自然の人情にて、縦令愛想のつきたる夫とは云へ、長くつれ添ひし男ゆゑ、我が身の死期の近しと思へば、以春に對し多少なつかしの情起こりなるべし。

おさんが不幸を怨まず不義を悔まず死の近づくを見て煩悶せざるは、眞に悟りて然るにあらで、前に云へるが如く。寧ろ戀に迷ひて他の憂苦を忘れ、茂兵衛と共に殺さるゝは、本望を遂ぐる趣あるが故に動せざるならん。其の諦めたるの理由を、「互の因果づく」に表面は歸したれども、是れおさんが一片の口實ならんのみ。否、罪を因果（運命といふ程の意ならん）に歸して、其の身非を覺らざるなり。驅落の初めより、粟田口にひかるゝまで、三四十日間のおさんが本心は、大抵斯の如しと思はる。然るに臨終の際になりては、人間の靈性、その本然の光を放ち、玲瓏一點塵を止めざるに至るの例に漏れず、おさんも「強きおきめに粟田口、けあげの水に名を流す」一段に至り「おさん、茂兵衛にいふやうは、よしなき女の悋氣ゆゑ、何の科なきそなたまで、あれ不義者とあやふ日、ついに命のほろぶ日」と云へり。茲に至りて始めて迷霧一掃、その罪は前世よりの因果にも天命にも非らず我が心に由來するを知り、天をも怨みず、人をも尤めざるの大悟の域に入れり。既にこの穢罪入ればおさんは、前日のおさんにあらざ、全く別人となれりと云ふも不可なけん。この上に尙極刑を加ふるも益なく加へざるも應報の理を破るの虞なし、天が黒谷

の東岸和尙をして、之れを千死の中に救はしめたるは、實に至妙の配劑なり。

批評法のおまぐ

(明治二十八年五月稿)

批評は一種の散文的抒情詩、人めいゝの思はくにて、素とより神業にもあらず、己れが持前の性分、又は來し方の經歷など、歪み態に批判の尺度と我れ知らずなるが多かるべし。美學の牙城堅固也ども、動搖つねなき心が土臺の建物なれば、是れはた時に崩るゝことあり、附け入る隙あり。されば大抵の人は、さはすまじとは思ひながら、多小好き嫌ひに動かされ、或は其の折の氣分、はづみ、筆拍手にて云ひ過ぎること足らぬふし、是れまた免れざる弊ならずや。眞を寫す鏡すら、曇るれば歪めるもあり。冷熱つねなき情の容れ物、陰霽定めなき心のぬし、いかで嚴正明確、些の誤解なく、些の遺算なき批判など爲し得んや、唯心して成るべく正しかれど希ふが、我等が當然の望みなるべし。されば下に掲ぐる批評法のおまぐ、必ずしも世を嘲けらんとてのみ、物せるにあらざ、我が心のぬちくれ易きを防がんとて、思ひ出でしまゝを書きつけ、己れが般鑑に備ふるなり。若しまた己れを當擦るなどと思召す人あらば、それこそは一舉兩得、そのやうな覺えのある方は、同じ過を再びせされ、

一墨色にて一代占ひの事

吉凶禍福、一代の身の上、何なりとも、サー一を斯うひきさへすれば、占ッて進ぜる、見料はタ

批評法のおまぐ

六十七

批評法のみまぐ

六十八

ツタ三錢五厘との切口上、咳拂ひ、古い禮帽勿體らしく、衝袖の爺さん、毎度柳原で見かける。彼の流儀でナモン、古人を批判して御覽じろ、ちよいとお手輕で重法なり。近松の書いたものには、心中物が仰山にあるによつて、其の母さる男と情死の砌、割腹の瘡口より生れ出でたと渠が傳記の開卷第一に特筆致す、イヤサ其のやうな無駄は二の町として、それ此の眼鏡に斯う映るぢやテ、厭世觀と申す卦が出た、そこで巢林子は泣男たるや、蓋し斷然、確乎、寸毫も疑ふべきなしと罷り成る。西鶴は願で蠅を逐うてゐるとは争はれない實事となる、沙翁はリア、ハムレット、オヘリヤを物した妙さ加減を見ると、一度は笹を擔いで、小供に馬靴をふるまはれたと見える。人殺しも少しは經驗致したに相違ふるまいとの宣告も下る、まて見ると炭團屋の小僧は黒人で、鮎屋の亭主は粹で、牛店の妻さんは額に角が絶えないと云ふ譯かとの、御議論に及ぶ御人もあらッしやらうが、雑踏ますから靜に〜。

一 逃げ上手の事

美論、ドロン、畢竟逃げ上手が勝ちの世の中、三十六計の奥の手とは、古人中々嘘は申さぬ。對手は大薩摩で本舞臺へせりだす「我ア身どもがまんみに對し、過言不禮、不届至極、ひッ返して勝負致せと襟首掴む。ぶる〜ッ」と顔へながら、平氣の體で、「よしやれ放しやれ鍔がきれるの鼻唄、對手が呆氣に取られる、隙をぬらつて烟になる。

一 表面ばかりの事

淺草仁王門にある魚がしの提燈を、珊瑚と間違へたは古いお咄、賣出しの飾附に、アツと魂消、

貝ずりの卸鈕を、イヨウ十錢銀貨有難いと、雀躍してソツと拾ふやからもある。皮一重で人を迷はす狐、狸、娼妓に強ち秘術あるでなし、障紙一枚見透かせぬ人間の目の玉。紙背を讀めときめつけるど、あてゝ見やうか、驚くなヨ、此れア王子出來ぢやあるまい、光澤があらアと云ふもあるべし。てにをは省けば、イヨウ西鶴そツくりとの聲が懸る。横町で若い者が「ゆきね〜」との話を聞いて、ウム馬琴熱心だナと、ボンと膝を敲いた批評家もないでもなからう。懸け言葉を使へば何でも近松の再來と心得、白ばかり並べたが、ドラマと相場ときめ、の雛壇ひツくり返したやうな小説を見てアア艶麗〜、大詩人々々々の喝采が起ころ、兎角賣物に、花ぢや〜。

一 大家いための事

驥尾に附すれば千里もとある虻蜂蜻蛉の文壇のまらくも頭、番頭の帳尻をほちくる格で、大家の揚げ足、乃至小股すくひの頭顛倒、とは參らずとも、何處でもかまはぬ滅大打、道具外れ小手外れ、痛めつけるが功名手柄、名のある首は拾ひものでもとは敏捷い魂膽、筆執るやからにも津田三藏、小山豊太郎の輩長へにつき。

一 讀まざ評の事

何サあの手合の作ならば、讀まいでも積りがつく、さら〜として好し位に評しめされ、難はあるまいと主筆先生の仰せ。畏まッていど、半分聞いて委細承知のなぐりがき、ヘン奈何なものだど、そんなよ其所らにぶらつく鼻、三日たてば糸瓜でも二寸のびると先生知らずや。

一 闊討の事

批評法のみまぐ

六十九

批評法のさまじく

盲人とはよう云うた、我が輩の著述一向賣れぬと本屋の苦情、容れられずして而して後、我が道大と、云ひかけたが、實は巷路の借屋住ひ、米屋薪屋の陣備へ厳しくして、中々我が道大どころでなく、肩と共に狭きことおびたいし。満腔の不平行ると申して屑屋も是れは願ひさげ、假にも大家が發憤縱横の快文字、筐底に捨て置くもあつたらものと、書肆より御自身がきつう惜まされ、世に著す『當今作家十番斬』大人氣ないと云はれては、アソレ大家の面目も奈何、人の怨みこれもつらし、其所で黒頭巾、黒裝束、闇夜にきらめく秋水三尺、金平もどきの大立まはり、目に物見せんの大りきみ、ヤンヤの懸聲を、氣にしての引込み、よろしく、

一細かい事

搔撫の評はかりの中に、何うだエ、驚いたらう。己さまの精到綿密な批評には……成程々々、臆鐵砲は無理口説の反動、喜びは悲みの反面、たいした御發明でゐるてや。特に的々々々雷の音をさせる所などは音楽に合はせたら、一段でゐらう。エ、何々娘がサット顔報らめる、是れ生理的に云へば、血液沸騰、化學的に申さば愛と恐れとの和合、はた婦人が緋縮の襦袢の裏が反射したか因の遺傳、之れに加ふるに天使の賜、戀と唱ふる靈玉の光も其の一要素を成すとある、ハテ分析解剖、斯うなうては、蚤の心中、風の道行など逆もく評されまい。

一ゆき過ぎの事

それ餘り無學なも困りものなれど、博學過ぎると都々逸の註釋を法華經で致すやうになる。随分と力負け買ひかぶり、または眼光紙背に透り過ぎて、机の理紋をかき込むためしもあるとやら、幾

遍云ツても宜い程がよい程なり。

一招牌に捕まへて講釋の事

コレ／＼小僧さん、お前の前歯が振れてゐるナ、是れはソレ齒の妙藥、咬へてさへゐれば直る、無代だヨ／＼と立して置き、ヲホンと一段高い所へ戻つて、是れは金瘡の妙藥、咬の膏、既に先年上野東叡山に於いて、彰義隊奮戦の砌と、揮り廻はす居合師の大刀より、まだ／＼長い故事來歴の御講釋、乃至縁も因もない述懐の繰言、ともすると牽強附會の審美論、聽聞さすは此の機會、こゝが千歳一遇だと捕へたら滅多に放さず、招牌に取られた詩歌小説または演劇はよい災難、釣られてゐる讀者のつらさ、立たせられた小僧さんではなけれど足が麻れてならぬ／＼。

一假聲にてごまかしの事

批評と病人と間違へるとは延喜でもなし。神韻綿渺だの、文辭雋敏だの、ヤレ艶麗竊幻だ、ソレ幽婉清空だ、落想浩然だ、落筆灑然だど、いろ／＼な藥名附箋の百味筆筒備へつけホラ來たと手取早く抽斗から摘みだす萬病に用る葛根湯の匙加減、お見立てもいづれ危険し。總じてお幫間醫者の懐中には、附鬚百眼、何時も離さぬものとは聞き及べど、眞逆かに唐人の假聲まで斯うつかへるとは知らなんだ。

一威嚇の事

武家の方にはあてみを食はせると申すこともあり。文學の方でも囂喝一番、對手の膽を奪ふこと肝腎なり。されば鐵拳にちなむ榮螺文字、の獨逸文字附かぬ所で角目立つも文壇の亂世、切取強

批評法のさまじく

批評法のまま

七十二

盗が習ひとある今日此の頃の嗜みなり。何でもかまはず西洋のえらさうな人名をやたらと並べ、僕にはハルトマンと云ふ叔父さんが附いてゐるヨと、澄ます位の度胸なくてかなはず。

一問ひ返されて存せぬ事

あこでもねへ、斯うでもねへ、と厳く七六敷い御議論、それでは何うか、判然落ちつき所が教へて戴きたいと、一本突込む。さうサ、實に何うも今日は暑うムるテと、拳で逆に額の汗を押し潰すえらい大家もあるが、中には私も實は存せぬが、其所をソレ若い者に工夫させたさの難題ぢやテと、見かけよりは正直なるのもなり。

一如才なき事

片隅を敲いて片隅でもちあける、道路普請から割出した石橋をたゝいて渡る安全策、是れでは何う轉んでも、怨まれッこなし。何うでも解釋のつく謎のやうな事云うて、自惚な作者に嬉しからせ、世間には笑はせる、是れは少々罪つくり。手がむづこく程素刃ぬきたいが仇討が恐さに當らず障らずの如才ない批判、これが却て公平無私ともてはやされるも、異なるものゝ、儲けものなり。

一情實の事

人間もし公平一點張であらうなら、衣通小町とちどり膳でなければ、飯が咽喉に通らぬ筈だが、其所がソレ腫のあかぎれに花咲き、見どころない丸顔を、三五の月と見立てるゆゑ、世はお芽出度くごされる、驕らせやうの反逆心、または筆先の幫間、占めた、有難い、此所だぞ阿諛をすり

こむ灸所は、などと思ふは下々の戯作者輩、強ちさうは思はずとも、それからそれへと縁の糸、ひツからまりては、腕も縮み、筆もすくんで動かぬとか。此所が理外の理でがなわらう。自慢の直筆、唯一度の面會で玩具のサアベル同様、ぐんにやりと曲つたのもあれば、親しき仲間が互にふり撒く嬉しがらせ、乃至共褒樂屋褒、是れもまた人情でがなムらう。相見互と申すこと、豈にたい武士の上のみならんやとは、實に尤もの御議論、はやく稱讃同盟會を起したらば、作者の面々高枕で寐られやうと存ずる。

一骨盗みの事

骨盗みと申して、火葬場へ強盗が押込んだ譯ではなけれど、死人に口なしと、多寡を括つて、古人の議論の骨をそっくり抜き取り、お手製のまづい文庫の皮をかけ、己の創見卓説みてくれとはすこい膽力、でも此等はまだ罪輕し。生き馬の目の玉どころでなく活きた人間の骨盗人、そこらあたりにも幾等も見當る。ウンニヤ是れは剽竊ぢやない暗合だ。ハレヤレ、昨日今日の新聞物、乃至ずんど古くも五七年前の著述、又しても暗合かと呆れる。何さ創見の邪魔ぢやに依て、己一向他人の著述は讀んだとがないてテ、とあれば暗合の理合も分つて面白し。

露伴『あがりがま』を讀む

(明治二十八年一月稿)

露伴久しく二堅の膚となりて、文壇一入淋びれたりしが、舊冬の末つかたより漸く其の毒手より

露伴が『あがりがま』を讀む

七十三

露伴が「あがりさま」を読む

放たれ、再び詩國に歸りて以來、『國會』紙上に始めて『あがりさま』を物せり。子はその自叙に、病後は嗜好全く一變し「小説つくることなどには、心も往かず氣も馳せず」なりしも、稿を屬する中に「興の風と發し電と閃」めかんことをのみ頼みに、「忍耐刻苦」して筆を執り、「如是しても若し歎息の外得るところ無くば……此の筆を投じて此の詩の國より我と退くの正しかるべきを認められんことを望むのみ、實に此篇は自ら試みて自ら決せんとするために綴るのみ、此はこれ最後の試なれば二度はせじ一度せんのみ」と云ひたれば、實に此の作は子に取って輕ろからざるのみならず、我が國の文壇より一驍將を得ると失ふとは此の篇に繋るとも云ひつべし。されば之れを評するもの元より慎重綿密なるべき筈なれども、題を改めて尙稿を繼ぐ由なれば、未だ充分に品定めすべき場合ならじ。今は唯『あがりさま』に見えたる所にのみ就きて、こゝかしこ、思ふ節を述べ、全躰の細評は他日に譲らん。

女主人公阿このが浦和在の草の舎に糸繰る手わざに疲れ、榮えし昔にまはし歸りて、錦屏繡褥にあたりかゝる魂、忽ち宋安が「榮華の夢でも見て居なすつたか、乞食の夢の二の膳つき、さめたら悔しく淋しい事だらうよ」の一語に破られたる、夢覺暗合云ふもの心なうして、聽くもの胸に一矢深かるべし。そがまた家來筋の勇藏が無躰の戀慕を憤りて深き物思ひに沈みしを、伴榮太はそばより、何としてさうは鬱さ給ふと問ひたけれど叱かれやせんと、靜まり返つてチンと据はる。

此淋しさを我物顔の風情しや、物咬む音させ頼ては壁の隅の孔よりちろりこ出で、人の前を突き走りて行く音するに、矢よ

り映く音生ッこの鋭き(おのの)叫の一聲

は靈劍一閃、妖魔の影を斬つて、その實を斃す憂然の響ならずや。亦榮太が人心の頼み少なく、世の味氣なきを啣ちて、死なんと思へるその刹那に、云ひ合はさねど、おこのも同じ思ひに死を決したる、いづれも玄妙不可思議、我れこゝに鏡奩を開く時、東峰玉兔をかしこに孕むに似て靈機偶發、照應冥合、彼れは此れの影に似て影ならず、是れは彼れの映りしにもあらず、虚か、實か、夢に似て夢ならず、此の間の消息縹緲として釋ぬべからず。人生の幽玄はその幾分を露伴に依りて茲に聞かれたるを悦ぶ。さりながら、同じ筆法をかく再三用ひたるは屢々開帳して尊像の威徳を輕ろからしむるものども云ふべくや。不可思議の事は屢々あるべからず、あるべきやうなき事を繰返す時には、終に技巧の痕蔽ひ難からん。

榮太が千住に姉を尋ねて遇ふことならず、絶望の餘り、
「みゝとう矢張死ぬるばかりか、生きて居たてて仕方は無い御父様は亡し、姉様は行衛知れずたゞ一人の母様は寢められて今死なうさして居られる、悪黨どもは金持にもなり、威張つても行く、詰らない世界だ樂みはない」

と生死の間に迷ふ途端、俠賊蠣崎十郎に遇ひて衝き倒され捨てありし廢鎌に臂を傷け、その鎌執つて猛けり立てる、絶望の勇氣の凄じさを見せ、なべての人の強面さを、その片割れに報ひんと、刃向ふとは、我れだに明かには覺らざる、人心妙微の働きを寫したる、露伴ならではつひぞ入り難き妙境なり。更に榮太が無慈悲の人と思ひし十郎が意外にも世に稀れなる情けになつきて相ひ宿し、不圖十郎がもてる大金を見て心惑ひ「いくそばくその愛き思ひも皆金のため、金のた

露伴が「あがりさま」を読む

露伴が「あがりま」を讀む

七十六

め、嗚呼金が欲しい、金が欲しい、澤山でも無い五十兩ばかり有りさへすれば憎くてならぬ勇藏が面へ擲きつけて、母様の苦勞はぬけるものを……あゝあの中には五十兩を三ツも四ツもあるものを」との心より、既に盗まんとして、見現されたる我が過ち、それだに強ち咎めぬ慈悲、からみあひては退くに退かれず、盗賊の手先に心ならずも使はるゝ、是れは善心より邪路に入り、そを使ふ十郎は、榮太を「拐帯して汝等(警官)が眼の中の砂粒」としたれば、おこの親子に盡くせる義侠も大半は悪業に縁りて出でたる善なり。榮太が膽氣は蝸崎に知られて盗賊の前楯となり、十郎が土藏破の餘光は、おこの親子が九死の關を照破したるまで、順逆の因縁、纏つれ合ひてなか／＼に解き易からず。おこのが父の遺言に背き、道ならぬ戀を遂げし報いの幾艱難、喜藏が家業大事、主思ひ、道ならぬ道踏まぬ受報に、身榮え家富みたる、此所には應報の理いと明かに、かしこには孝女すまが身の薄命、忠僕喜藏が怨を思もて返さんの誠心も、ひよんな事より横にそれ「おこのには往時の馳報をせしかと思はれいと遠く恨まれ、卑まれ、二十年前の宛また新に結び増したる」如き因果のことわりを疑はしむる條も見え、紛糾錯綜の裏、理路おのづから辿らるゝかと思へば、また忽ちに迷途逶迤たり、是れや浮世の實相なるべし。されば此の篇のみにて云へば露伴が從來の作の餘りに應報の捉敵しかりしに比して、幾段の興味を添へたりと云ひつべし。篇中の人物、おこの、おすま、榮太郎、いづれも何となく凜として撓まぬ氣節の見ゆる所、激しき狂ふ趣、露伴そのまゝなりなど評する人多しとかや。或はさもあらん。されど此の三人の氣性相似たるは親子の遺傳、家庭の教育より來たれる結果なりと見るに何の差闕をもなければ、斯く解する方趣ありて面白かるべし。

露伴が從來の作の特質としていと名高かりし抒情詩的のところ、此の作には全くなく、且子が得意の挿評、はた例の因果説も始と見え。されば此の作にて露伴は客觀詩の方に更に一步を進めたりとも評し得ん。もし露伴にして眞に客觀詩人たるの天才あらんか、今後の作はいよいよ妙境に入るべし。あはれ子が天職は抒情詩を諂ふにあらば、之れを棄つるの結果は月を捉らんとて流れを濁すのたぐひなるべく、世は再び『五重塔』に跳梁し、江湖の大喝采を博せし「飛天夜叉王」の影だに見ることなかるべし。

弦齋著『櫻酒御所』 (明治二十八年二月稿)

此の作は相摸國新井の城主三浦道寸が猶子、荒次郎と、隣國金澤の城主樂岩寺種久が女、小櫻姫とを主人公としたる戦争七分に戀三分の小説なり。一と昔前方に行はれたる『何々武勇傳』『何々水滸傳』など云へるたぐひの少々若やぎて出でたるものと心得なば大なる間違はなかるべし。その文章は、

對手は擡げぬ小櫻姫大難刀を取直し微塵になれと撃下す、此方も開ゆる剛の者鎧の秘術を顯して千變萬化に戦へば鎗の穂先と難刀の刃より火花飛び散つて四邊目ばゆき計りなり、上には吹ける山櫻、颯ひの烈しさに風も無けれど花散りて小櫻姫が黒髪にバウ／＼と落ち、世に美しくしき姫君が大難刀を打振りて櫻の下に戦ふ有様、敵も味方も其姿た見惚れけん茫

弦齋著『櫻酒御所』

七十七

『片まぐほ』に就きて

然として酔へるが如し

などあるにて大躰を推すべし。何處を看ても篇中の人物に絶えず花がついて廻るは柳に幽霊、氣違ひに笹、これもなくてならぬ對照とあれば致し方なけれど何となくうるさし。なべて事柄に重きを置く作には人物の性情の活現など深く望むは無理にして、又出来得べき事にあらず、されど同じく叙事の作にても偏へに唯甲冑、馬具、刀鎗の入り亂るゝさまのみを描かず、自ら當時の武士魂を見えしむるやうに物するを得ばいとめでたかるべきに、此の作者の着眼こゝにあらざるは惜むべし。

スコットが十八世紀の末に生れ、將に地を拂はんとする封建時代の武士魂を、流石に尙遺れる口碑、俗語、または故老の物語より摸索し得て、之れを彼れが瑰麗の詩に謠ひ雄魂毅魄をして長へに朽ちざらしめき。我國今日の地位は實に當時の英國に似たり、封建時代の武士魂（大和魂は長へに滅せざるべきも）全く摸索し難くなりゆくの日も遠からざらんとす。されば今日一スコットの現るゝを望むいと切ならざるを得ず。

紅葉 『片まぐほ』に就きて (全 上)

此の篇を曾て『讀賣』にて見たる某は「なんの事はない品のよい探偵小説サ」と云へり。予は此の評を疑ひながら讀みもてゆくに此の警句ヒシシと胸に答へたり。作者はお節と云ふ生國も素性

も一切さだかならざる美人を所謂天上より落とす來り、年若き春日といふ書生が師の命により、此れも如何なる關係か更に分からぬ、能本の垂水方へ此の女を送りとくると云ふ艶のある紀行の小説なり。その「長き旅路を二人連の夜晝、肩掛一つに裏りし瀛車の内、一枚の毛布に添臥の船の中、首尾には埴浦の一軒家」或は難船にあひて「兵子帯解きて抱附き、體二つをぐるぐる」の條などきわどき所を折々見せて讀者に此の末どうならうと安き心させぬが花、こゝらが眺めどころなるべし。

「打見よりは心、淡泊と男に無頓着なる」お節とは知らず、小心の春日が髭殿との間を疑ひ獨心を惱ますあたり少しは人情の閃めきを認めた。り餘は概ね盆池の金魚をこゝに躍らせ、かしこには築山のこぼれ椿さらりと繪師がはかなき筆のすさびと見るの外なし。

その日限りの新聞小説は此の後はくと讀者を釣り込むが上乘の秘訣とかや。されば専ら人の詮索心に訴へ、是れからどうならうと先きへくとどかしながらするが趣向なり。此の向きでの總本寺探偵小説今も榮ゆるはことわりなりとは云へ、

倍 解ぬはお節機の上なり、當人始め先生(春日の)も奥様も大に秘密にして人に知らむ事を懼れたまふ是れ不審の第一なり、

處女か、妻か、或は素人か、妖婦か、今日まで此見界のつかぬ、是不審の第二なり、

そも直江津の前は何所よりの船に乗し其は分られぬ、北陸邊より東京まで織弱女子の獨旅は是不審の第三なり、

如何なる用事のありてか知られぬ海山越えて西の鼻、名も恐しき熊本まで、是不審の第四と數ふる

『片まぐほ』に就きて

に至りては念入過ぎたる道志るベチトいかくなるやうなれど文壇の迷ひ子此れにて救はるゝもあ
るべし

或人云ふ。紅葉もなか／＼近頃は如才なくなれたり。此の度『讀賣』に出である『不言不語』もどう
やら此の『片まぐぼ』のゆき方に似たり寄つたりなり、あれでは讀者が配達を待ちかねる譯なり
ど、知らず紅葉此の評を甘ずるや否や、

性格と片輪者

(明治二十九年四月稿)

近來、小説界の隆昌なるにつれて、批評はた熾くなり、之れと共に、品騰の方法、漸く濫に流れ、
自家一時の感情に任せ、檀に褒貶する向も尠ならず、特に主人公の性格を論ずる點に於て、此
の弊甚だし。纔に人性の影のおぼろげにのみ見えたるもの、或は、單に平凡庸常なる對問の排列
に過ぎざるもの、または、人の名はありながら、二三概念の結合に過ぎざるものを捕へ、某々の
性格は、靈動すといふもあれば、描破し得て至妙なりとたゞふるもあり。人間は、一面、常に矛
盾の大塊たる趣あるを知らずして、人物の云爲に、些の撞着あれば、輕卒にも、性格の一致破れ
たりとて、直に之れを擯け、少しく異常の人物を描くものあれば、己等が狭き經驗を唯一標準と
して、這は不自然なり、這は人間にはあるまじきとなりなど、再思に及ばずして速斷するもあり。
性格、豈にさしも容易く批判し得べきものならんや。

一個の性格は、之を四面に分ちて見るを得べし。千萬人の心は是れ一人の心のみ、といふもの
は、通性の側を指せるならずや。紂の臣三千人、而して三千の心あり、といふは其の殊性の側
をいふなり。通例、美學などにて、殊性といふ時には、もとより通性をも包容せるもの
なれど、茲にては、通性を除却していふ也。殊性と通性とは、是れ性格の體に於ける兩面にし
て、此の兩面が、圓融一轉を成せるもの、之れを個性とす。性格の體は、斯くの如しといふと雖
も、其の實は、性格の發展活動の跡に就いて、歸納したる結果に過ぎず。活動の方面より、性格
を見んか。體の場合と同様に、二面より成るべし。三つ子の魂百までといふもの、それが一致の面を
説きて、簡明なるもの、君子必ずしも常に君子ならず、儒夫時には蹴起することあるは、それが變化
の面にあらずや。されば約めて云はれ、一個性とは通性を含める殊性が、一致の中に變化するも
のとも云ひつべし。通性の範疇を脱したる殊性は、怪物にあらざれば木偶となり、特性を缺きて
存する通性、こも亦竟に活人間たること難し。苟も性格を論せんとする者は、此の四方面より觀
察して、人物描寫の成功と、失敗とを判せざるべからず。

通性の擴充してあらざる殊性、根抵の一致を保たざる活動の變化、これ皆自然の人物にはあらざ
るところ、若し小説戯曲に斯かるものあらば、それを不自然なりといふとも、誰か誣ひたりとせん。
然れども、上に説ける四面は、單に性格の形式にして、内容にあらず。今實際に就て、それが内容を
誓査し、殊性と通性との領分の廣さ、及び二者の境界は奈何、變化と一致との關係は奈何、と問
ふ時には確答を得ること至りて難し。若し殊通の別、黑白の如く一見直に知り得べくば、小説

戯曲の性格を批判するにも、通性に於て何分の缺あり、特性に於て何分の不備あり、故に個性を具へて、自然の人物たるには、更に通性にて何程か、殊性に於て、何程かを補充せざる可らず、と明晰に指摘するを得べし。又變化と一致との関係も、全く機械のやうに、甲の性格にては、七の刺激に對して、五の變化を一定の度とすれども、乙のは、六の刺激に對して、八の變化を一定の度とするなど、精細に知るとを得べくば、此の標準に比擬して、性格活動の變化が、一致を失へるか、否かを判ずる、易々たらんのみ。奈何せん、此等の希望は、今日の人智にては、未だ達し難く、殊性、通性の領分境界、いとおぼろに、變化一致の關係も、亦精細には辨へ難し。試に思へ、ハムレットに就きて、そが殊性を發見せんとし、情熱の熾なること、果斷ならざること、狂氣めきたること、懷疑に陥り易きことなど、幾多の箇條を擧げ來たとせんか。斯かる箇條をば、縦令、幾百條算ふるとも、斯かる通性を具へたるは、世に其の人渺なからじ。されば天下一ありて、二ありざるハムレットの殊性は、此の種の手段にては、到底指摘し得ざるや明けし。いづれの場合にても、吾人が名狀し得るものは、都て通性の部分に過ぎずして、殊性の殊性たるところは、言説に絶し、唯神契默會の境なるが如し、是れ、性格分拆の結果也。更に、概括して、大幹の上より見る時には、奈何なる拙作の人物にも、殊性はあるべし。蓋し同じ作者が、同じ人物を描くとも、全然同じものは、恐らく得られじ。故に枝葉の點を捕へて、強ひて辨ずるに方たりてや、何の人物にか、特性認められざらん。之れを要するに、都て、小説戯曲の人物は、一側より看れば、通性の團塊となり、他側より看れば、皆殊性を具ふ。何故に然るか。思ふに、通性

と殊性とは、決して截然、相分かれて存するものにあらざ。吾人が、所思を直露するの大膽を咎めざらんか、則ち云はん。殊性とは、通性を離れて存するものにあらず、無數の通性(例へば喜怒哀樂愛惡慾などの類ひ)が、結合上および分量上の關係より生ずる差別に、命じたる名に外ならず、而して個性とは、件の無數の通性が、結合上及び分量上の關係的差別(殊性)の自然に協へるを云ふなりと。例へば、數千條の糸をもて、一段の錦を織るを看よ、經緯の關係に依り、流梭に隨つて、金鳳舞ひ、銀蛇走り、赤麟麒麟、經緯をほどいて、此等のものを求むれば、其の行く所を失うて、影だに止めず、織り成せば始めて紋章あざやかにして、經緯其の形を潜むるならずや。殊性通性の關係は、經緯と紋章とに酷似す、個性は織り成せる錦が當初の意匠に協へるものとも云ひつべし。

一步を進めて考ふれば、更に性格批判の愈々困難なるを感ぜざる能はず。通性の數は、殆ど無數(この辨證は略す)なれば通性の結合上、および分量上の關係的差別より生ずる殊性も亦その數殆ど無數なり。さて、個性は、殊性(通性の關係的差別)の自然(人間全幹と同義なり)に協へるものを、いふものなれば、這も亦其の數無限なるべく、且は個性非個性の標準は、殆ど究め盡くし難き自然なるが故に、嚴格なる論理の立脚地よりは、過現未を悉く達觀し得ざる間は、或作中の人物を批評して、個性見えたりとも、見えずとも斷言すること能はざるべし。若し判斷を下せば、そは一片の臆測に過ぎざるものならん。

又、性格の一致と、變化との關係の如きも、奈何なる個性が奈何なる外境に對して、奈何なる影

響を受くべきか、精密なる數學的解答を得ざる間は、一致を破れる變化なるか、否か、活動（變化）を失はざる一致なるか、否か、竟に斷言するを得じ。例へば、海賊に遭ふ以前のハムレットが性格は、兎に角遲疑緩漫なりしに、其の以後は、殆ど生れ變りし程、敢爲勇往の人と爲れるが如き、之れをば性格を破れる變化と看做すべきか否、何によりてか判斷するを得ん。唯、自然に協へるか奈何、實際の人に、さる激變あるか、奈何、と問ふの他に道なからん。而して自然は廣し、人間の種類や殆ど無限、そが境遇に對する關係はた無限なり。吾人が有限の經驗は、常に自然の一局部を窺うて、全軀に及び難し、何を以てか、性格の變化と、一致との、自然なるか否かを斷言するを得べけん。

性格批判の最後の標準（標準といふは寫實に偏するの弊あらば、起點といふも可）は、自然（實際の人間）なれども、自然の一斑を見て、全豹竟に窺ひ難し。かるが故に、人は各自の經驗の相違、眼光の利鈍に應じ、彼れ此れ自然の解釋を異にし、性格批判の標準も人と共に動搖を免れず。さればこそ、ライマアはポープに當時英國第一流の批評家なり、とたゞへられし人なれども、沙翁の劇を讀みて沙翁は没分曉沒理性の狂人なり、と云ひたるなれ。さればこそまた、近松が世話物の中に、或人は、多くの個性を發見すれども、他の人は、熱はあり飽はあれども、不具なる類性（通性の圓滿ならざる團塊）ならざるもの、幾許もなしと思ふなるべけれ。

斯く推究し來れば、嚴格に云ふ時には、吾人は都て、性格批判の充分なる能力なきを認めざるを得じ。さらば、爾後批評家は性格を論ずるとを全く思ひ止まらざるべからざるか。圓滿に自然を洞觀

する曉までは中止せざるべからざるか。按ずるに然らじ、究極の所に至れば、天地間、何物か能く吾人が明答し得るものぞ、豈にひとり、性格に於て然りと云はんや。されば、吾人は性格を論ずるの頗る困難なるを知ると共に、此の困難に屈せず、力めて輕佻を戒め、慎重なる準備を要する所以を覺悟し、眞に個性なるか否かの判斷は、よし到底爲し得ずとするも、出來得る限り、人間を深く且廣く研究し、成るべく精到嚴密なる審査をもて、眞に近き批判を下し得るの地に、至らんことを期し、偏に勇猛精進する、是れ吾人が望むところなり。はた吾人は自己の資格奈何を顧み、心して輕斷を避け、常に將來研究の餘地を、存し置かざるべからずと信ず。

濫評の流行と共に、近頃の文壇に於ける、新現象とも認むべきは、片輪者を小説の主人公とすることなり。這は西洋思潮、我が文壇に入りてより、性格論の喧くなれること、各々新機軸を出だすに急なること、讀者の同感を惹き易きものを選ぶことなどが、重なる原因なるべきか。詳しく云へば、片輪者を主題とする時には、常人に異なる際立たる點あるが故に、それを捉へて描くは比較的易く、その結果たるや、個性を現む得たるらしく見えしむるの便あり。蓋し通性に於て缺くるところあり、隨うて殊性著くあらはる、この著きものを描くが故に、よし自然に協はず（個性ならず）とも、既に材料が不自然のものなれば、斧鑿の痕を蔽ひ易く、はた一般の讀者には、尤も徵驗の判斷を下し難き領分なれば、缺點を觀破せらるゝことも亦尠なし。元より今の作家は、かかる理由を明に意識して片輪者をものせるにはあるまじ。花あるも花なきも、春風駘蕩の景色を眞に描き出すには、等しく靈腕を要すべし、唯花をあしらひてものするは、春景色なりと合點

せしむる點のみにて云へば遙に易すきところあり。今の小説家が片輪者を描けるも、性格論の刺激にあひて先づ成功し易げに見ゆる者に、着手せるにはあらざるなきか。維新以前の稗史小説には、多く理想の人を描きて、片輪者などを主人公とするはいと珍しかりき。然るに、寫實といふこと唱へられ、之れに加ふるに、古人の足跡を踏まじとの負けじ魂、はた名を成すは、奇抜なるを、ものするに利あり、など云ふ考も、片輪者流行の一因なるべし。今一つは、片輪者は憫むべきものなれば、之れを寫さば、讀者の深き同感を買ひ得べしとの魂膽、これ亦斯かる變相を文界に誘致せる動機の中に加ふべし。

小説戯曲などを讀みて、個性靈動するものに對すれば、吾人は殊相の中に、通理を觀ずること多し。この通理に緣りて、その中に同胞の影を認め、やがて我が儔をも髣髴の間に見るの氣味あり。茲に於てか、作中の人物と、我れとは融合一躰（美を觀するの境界は常に如斯くなれども）全心の同感を之れに注くを得べし。然るに片輪者（特に心の不具なるもの）は、一般の人間に弘通の性を缺くがゆゑに、比較的、讀者の同情を得ること難し。吾人は寧ろ片輪ならざる人間が、幾多の事情境遇に際會し、運命の譚弄に遭ひ、一波動き萬波應ずる心海自然の運動を見んことを望む。植木屋の手に、捻ぢゆがめたる盆栽よりも、野生の松の方吾人の目には遙に美なり。若し片輪者を真に描かんの志あらば、非常の靈腕あるか、然らざれば、それを副位に置きて、そが親もしくは、そが妻などが、之れに對する方面より寫さば、或は成功することあらん。さもなれば、恐らくは徒勞たらん。

小説界の前途

（明治二十九年四月稿）

昨年以來、我が文壇の一新現象として悲慘小説、觀念小説の流行を論じたるは、其の人既に多し。吾人が重ねて之れを云ふは陳腐の嫌あれど、當來は現在と離れて存せず、小説の前途奈何の問題は、そが當眼の形勢を窺はざれば、解くに道なし。聊か之れに涉るも、強ちに無用の言にあらじ。悲慘小説、觀念小説の流行は、天籟海を渡るの勢をもて、小説界を風靡せる趣あれども、這は緩かに上層の震盪に止まり、下層に於けるそが半面は、依然、弦齋、浪六、涙香、桃水等が作の占むるところなるを忘るかべらず。思ふに、改革はなべて上層に起りてより、下層に浸潤するまでは、多くの歳月を要す。且又、いづれの國にても、社會一般に賞翫力の平等に發達するはなく、觀美の眼識にも、あつから高下あり。されば我が小説界にも、容易に新風潮に動かされざる一部多數の讀者あるは、怪むに足らず。されば此等の版圖も、早晚そが上層に起これる變動の影響を多少受くるは免れざらん。而もこの方面は、改革に對しては、概ね所動の地位に立つが故に、前途の形勢を制するの力に乏し。吾人がこの方面に就て、今多く云はざるは之れが爲なり。

悲慘小説、觀念小説流行の因由は、二三にして足らじ。先づ讀者の方より云へば、重に材を女學生、小間使などに採れる飯事的戀愛小説の單調に饜きはてたること、翻譯家、批評家に依りて導かれたる泰西思潮、漸く傳播し、我が小説の輕淺浮靡はこの對照に依りて、愈々明になれること、

生存の競争日々に激甚を加へ、生活の困難なるにつれ、一般に自國の位地を多少反省するとは避け難く、隨うて人生の意味を自問し、隱然そが解答を何邊にか見出さんと欲したれども、當時の小説は、殆ど之れに應じ能はざりしと、本來悲劇的趣味の要求は、深く人心の奥底に根ざせるものなれば、縱令姑くはこの缺乏を忍び得べしと雖も、長くは堪へ得るものにあらず、然るにこの要求を充たすべき適當の新作なかりしこと、精査しなば尙他にもあるべけれど、主として此等のものが、讀者を動かし、はた讀者を代表せる批評家を動かし、從來の纖麗浮靡に馴れたる家作に、一轉歩の縁を與へ、はた悲慘小説、概念小説頻出の風潮を誘致せるならん。譯りて作者の方より云へば、以上列舉せる理由に依り、讀者批評家が、當時の小説を千篇一律なり、膚淺輕薄なりなど非難し、泰西の學說ならびに名著に比擬し、人生の解釋運命の默示、性格の描破などいふ色々の注文を提起せること、又當時小説界の流行兒を以て目せられたる作家の多數は、青年なりしかば、學校生活または之れに接近せる極めて狭き經驗の範圍に、材料を摸索して作るに慣れたれど、社會は漸く之れに鑿けるの色あるとともに、己等も年を経るに隨ひ、幾分か世間的知識を得、人生の恨事、世途の坎坷に、多少の趣味と同感とを寄するやうになれること、佳作を得んとして先づ古人の作を追想すれば、不朽の名篇として傳へらるゝは、悲劇的なるが多きこと、尙この外にもあらんが、斯かる動機主となりて、之れに上にいへる讀者批評家等の要求と、内外相應じて因縁をなし、こゝに悲慘小説、概念小説流行の端を開けるならん。悲慘小説即概念小説の場合も多かりしかど、必ずしも然るにはあらざれば、こゝには特に二名目を掲げたり。

内外の刺激に駭かされ倉皇まづ舊立脚地を發足し、新版圖探檢の途に就けりきと雖も、その結果たるや、或者は悲慘即全世相とやうに誤想し、只管人生の暗側を寫すを事とし、或者は、えらげなる概念の見えたるをばこよなく高き作と思ひ、竟に昨年より今春へかけて、悲慘小説、概念小説の榮昌となりぬ。此の現象の反響は、およそ三種ありしと覺ゆ。第一は、重に此等新小説の崇拜者の間に行はれたる説にて、要は人生の秘蘊も、人心の機微も、此等の作によりて、曲盡せらたりと思へるもの、第二は明に此等の作の缺點を認め、その不健全なるを責め、暗側に着くるの筆を投じて、明側を描けと呼べるもの、第三は、悲慘小説必ずしも非ならざれど、概念小説は好まじからず、力めて客觀的描寫の方向に進むべし、と勸誘せるものなりき。

第一の評家の如きは、その眼の偏狹なるは、言を待たじ。深刻と殘酷とを同視し、理窟の露骨なる作をば高しと看、音調つよき文字の排列をば、直に雄渾勁拔の妙文と思へるなど、此の派にはその人尠なからざりき。彼等が見得たる世界と人心とは、奈何に狭く、奈何に淺きものなりしぞ。少しく社會の裏面をものしたる作に接しては、人生の眞趣こゝに盡きたりと驚き、少しく人情の機微に入るものにあへば、心界の秘蘊あますところなしと讚歎す。吾人はかゝる輕忽なる斷案には服する能はず。第二の評者のいふところは、一理なきにあらず。社會は醜汚暗黒の一面にて成るにあらず、偏へに此の一側に泥むは、小説の理想が、もし圓滿なる活人間想を現するにありとせば、元より其の道を踏みはずせるものならん。さもあらばあれ、一篇の中に明暗兩面を合せ描きて成功するは、非常の靈腕に待たざるべからず。又明暗兩側を自在に達觀し、能く之れを活

性格に就いて疑者に答ふ

九十

現するの作家に至りては更に得易からず。悲惨小説にして、若し詩美上の價値あらんには、特に之れを抑ふるの要なけん。愈々之れを誘接して圓滿の域に進ましむるの傍ら、明側を描寫するの作を促すをもて足れりとすべし。蓋し悲惨小説を防壓して、偏に悲惨小説を奨勵するの結果は、枉を矯めて、曲に歸するの弊あるべければなり。第三の評者のいふところは、吾人の希望に契合す。現今の悲惨小説に慊焉たらざるは、悲惨なるが故にあらで、作家の小理窟が、強ひて捏造し出だせる悲惨を厭ふのみ。手製の痕跡、歴々たるを憾みとするのみ。彼等が見て悲惨と思へるもの以外に、幾多の大悲惨のあるを知らざるを慨するのみ。吾人は更に作家の眼界が擴大を加へ、明暗兩側を達觀し、渾然たる小宇宙を見るが如き作の出でんを切望す。我が現今小説の潮流、この方向に流れゆけば、前途は眞に多望なるものあらん。されど有力なる評家にして、尙眼光、觀念小説以上に抜く能はざるものあるを見れば、客觀詩的小説の機運の至るは、尙前途はるかなるべし。

性格に就いて疑者に答ふ

(明治二十九年五月稿)

『日本』の懷疑生、予が前々號の本誌(早稲田文學)に掲げたる性格論に對し、三問を提起して難ぜらる、其の一に曰はく、

個性とは無数の通性の結合上、及び分量上の關係的差別(殊性)の自然に協へるを云ふと、殊性の自然に協へるは如何に通

性も自然なり、殊性も自然なり、何ぞ獨り自然に協ひたるの殊性あらんや、

と末文何ぞ獨り以下、文意不明疑者の問ふところを確知するに困む。されど、前後の關係より推すに、多分、

通性も殊性も、等しく自然たるを、特に殊性の自然に協ふを云ふは、論理不備ならずや、

との意ならんか。果たして然らば、疑者は吾人が先きの論文を、熟讀せられざりきと見えたり。何となれば吾人は、

殊性とは通性を離れて存するものにあらず、無数の通性(例へば喜怒哀樂愛惡慾の類ひ)が結合上、及び分量上の關係より生ずる差別に命じたる名に外ならず、

と云へりき。此の立脚地より見れば殊性を離れて獨立せる通性は、單に抽象的のものたらざる能はず、之れを劇曲小説の上に描き出して、果たして自然に協はしめ得べきか、殊性を缺ける人間、果たして自然界にありと云ふか、吾人は之れを知らず。疑者が通性も自然なりと云ふは、若し吾人と共に、劇曲小説上の性格に就きての言なりとすれば、其の意、竟に解すべからず。請ふ説あらば聞かん。

更に思ふに、殊性は通性を離れて存する難し、故に、殊性が自然に協ひて茲に個性を現するの場合には、通性はそれが要素として、間接に自然に協ふ。此の意味にては、通性を自然なりと云ひ得べし。疑者、吾人が通性の自然を説かざるを難するの意、もし此の見解より來たれりとせば、それが放てる箭は空を射たりと云ふべし。何とならば、先きに吾人が殊性は通性を離れて存せずと云へ

性格に就いて疑者に答ふ

九十一

性格に就いて疑者に答ふ

九十二

る立言には、明に自然に協へる殊性(個性)の中に、通性の含まれたるを表せるものなれば、疑者が「殊性の自然に協へりとは如何」の問は、文の勢に依りて考ふるに、「何ぞ獨り、自然に協ひたるの殊性あらん」と云ふ意の、殆ど餘波に過ぎざるが如し。されば、上に答へたるどころにて第一問に對する辯解は、既に盡きたりと云ひ得べし。されど、尙誤解なかあんが爲に、吾人が殊性の自然に協へるを、個性とするの意を復言せん。吾人の所謂殊性と通性とは、凡庸の作家の手に成る、彼の誇張畫的人物にも具へ得難きものにあらざるは、曾て論せしが如し。而も誇張畫的人物は、自然の人物にあらず、恰も是れ、ポンチ繪の肖像には、人間に弘通の點も、はたそが特有の點も兼ね具ふれど、竟に、自然の人物を描けるものとは云ひ難きが如し。此等の場合に於ては、自然に遠きこと甚しきが故に、何人も容易に、自然、不自然の判断を下し、毫も、そが標準などに思ひ及ぶことなし。されども、稍々巧みに殊性(通性を含む)を描き得たる場合には、深く自然の人間を知れるものにあらずるよりは、直に、そが不自然の點を發見し能はざらん。經驗に乏しく、觀察眼も亦鈍き輩は、爲に欺かるゝこともあるべし。而して、自然ならざる殊性は、竟に個性たる能はざるは、吾人曾て之れを詳述せり。かるが故に云ふ。個性、非個性の判断は、到底自然の人間に根據を求めざるべからずと。疑者或は再び難じて云ふならん、自然をもて戯曲小説中の人物を律すると、斯の如く嚴ならば、是れ模倣に陥れるもの、寫真に墮落したるもの、竟に美術の外道たるを免れざるべしと。此の説、遽かに考ふれば、理あるに似て、實は頗る誤れるものなり。吾人は美術の境界に屬するものは、戯曲小説は云はずもあれ、繪畫も、彫刻も美化し醇化する

の邊に、そが生命の懸るを知る。されば、美化、醇化は、空に據りて成るものにあらず。先づ實を得て之れを我が理想の飾にかくるなり。さすれば、個性批判の場合に於ても、理想活動の餘地は、吾人甘じて之れを與ふるを吝まず。唯裏面に伏する自然の箝制を脱離し、擅に活動するを許さるのみ。語を換へて云へば、小説戯曲の人物は、決して實際の人間を直に摸寫せざるべからずと云はざれど、そを理想化し醇化するにも自然を師とせざるべからずと云ふのみ。故に個性、非個性を判ずるの標準も亦自然なり、實際界に於ける人間の性格なりと云ひ得べし。別言もて之れをいへば、實際の人間を醇化せるものか、はた全く架空の構造に過ぎざるかを問ふを要す。さすれば、若し此の場合に自然を吾人が批判の標準と云ひ得ずば、少くもそが起點は此に存ずと云ひ得べし。

第二問は、殊性通性の圓融一躰を成せるを個性と云ふと、殊性の自然に協ひたるを個性と云ふとは、同義なるかと云ふにあり。吾人は同義なりと答ふるに躊躇せじ。また此の場合に於ける自然の義も、前に同じと答へ置かん。唯前者は個性を分かちて説き、後者は個性を合せて論じたるの差あるのみ。

第三問は、殊性を以て通性の結合、及び分量上より生ずる差別相とすれば、之れに對して、殊性の結合及び分量上より生ずる平等相なるべからずと云ふにあるが如し。這は殆ど無意味の問にあらざるなきか。何となれば、吾人の所謂殊性は、通性の關係的部面に附したる名にして、別に獨立の存在あるものにあらず。さすれば、殊性が單獨にて分量上及び結合上の關係を、奈何にして

性格に就いて疑者に答ふ

九十三

再び性格を論じて歸休庵(鷗外)に答ふ

作ることを得べき。更に一步を進めて、通性の結合上及び分量上の關係的平等なるものありやと問はれ、始めて吾人はありと答ふべし。這は先きにほのめかし置けるところなるが、疑者の推察の如く、之れを類性と名附くるも不可なるを見ず。疑者は夢幻劇中の人物は類性なりとて、それを奈何に命名すべきと問はれたれど、類性ならば類性と呼ぶに妨げなからん、這は毫も吾人が性格論に關係なければ答へじ。

再び性格を論じて歸休庵(鷗外)に答ふ (明治二十九年六月稿)

『めざまし草』の歸休庵余が性格論を評す、その言、嚴精われに教ふるもの多し。禮に於て答ふる所なかるべからず。歸休庵いはく。

宙外性格を論じて情慾さし、情慾の種別量別とす

と。余答ふ、斯かる説を、誰が、いつれにて何時吐きし、本誌(早稻田文學)第十號に、

殊性とは通性を離れて存するものにあらず、無数の通性(例へば喜怒哀樂愛惡欲などの類ひ)が結合上および分量上の關係より生ずる、差別に命じたる名に外ならず、而して個性とは件の無数の通性が、結合上および分量上の關係的差別(殊性)の自然に協へるを云ふなり、

と論ぜるを誤解したるならん。此の誤解は、わが文の正しからざる爲めにあらず、讀まれし方の精からぬに由る。余が七情を擧げたるは、單に例として、無数の通性の中より、假に一斑を示せ

るに過ぎず、這は「無数の通性」と特に呼びたると、括弧に圍みて「例へば」と云ひ「などの類ひ」といへるにて明なり。之れを解して、或情慾は通性なりとは云ひ得べきも、之れを凡ての情慾は通性なりとは云ひ得じ。况んや、凡ての通性は情慾なりとは、奈何にしてか解するを得ん。歸休庵は奈何なる讀書眼をもて、假に擧げたる例を目するに、我が論據の全分を以てし、却て、無数の通性といへる我が言をば、見落としたるやらん、はた奈何なる論理に據りてか、一部即全眸といへる結論を得られし、先づ第一に教を請ひたきは是れなり。

余が分量上の關係といへる、之れを量別とせる尙可なり、結合上の關係といへるを解して、種別とするは、牽強曲解の甚しきもの、余が無数の通性といへる、之れを種別とする或は可なり。歸休庵はわが結合上の關係といへる立言をば、事實上全く見落せるものなり。種別量別のいづれにも、結合上の關係といへるもの、含まれざるは、少しく科學的腦髓あるもの、皆知るところならずや。歸休庵はこゝにても確に誤解せり。その責はわが負ふべきものならぬは勿論なり。されど誤解ならずと云はれ、更に教を請ひたき第二のものとして數へ置くべし。

歸休庵は、右の如くわが論據を全く誤解したれば、この誤解を前提に掲げて得來たれる斷案、みな正鵠を誤れるは必然の數のみ、今その重なるもの五箇條を得たり。

- (一) 縱令全汎通の約束あらむも、喜怒哀樂愛惡欲の情慾を以て性格とすことを得べきか。
- (二) 單に情慾(通性)の種別及量別に名づけて殊性といふか、さらば殊性は個物に特殊なる義にして、論者は個物に特殊なる情慾の種別及量別を以て個物性格とすか。

再び性格を論じて歸休庵(鷗外)に答ふ

再び性格を論じて歸休庵(鷗外)に答ふ

九十六

(三) 通性は抽象的にして自然に協ふ、こゝ能はず、個性の要素として自然に協ふのみ、こゝふは非也、情欲は本來實相なり、されば、情欲は又本來合自然也。

(四) 個性は通性と殊性と圓融せり、こゝなす、情欲をもて通性をなし、情欲の種別及量別を以て殊性をなしたり、情欲既に種別と量別を具して、いかにして更に情欲と圓融すべきか。

(五) 所謂類性は情欲(通性)の種別及量別(殊)の關係的平等なりと、疑ふべし。

余は上の五箇條を一括して答へん。情欲をもて性格なりとも、通性なりとも、はたそが種別量別をもて殊性なりとも曾て云へることなし。此等は、都て論者が誤れる論理の礎に築きあげたる蜃氣樓のみ。これに登りて聲高らかに奈何なること叫ぶとも我が關するところにあらず。そが反響は自家の頭上に落ち去らんのみ。斯かる場合に、歸休庵をして、我れと地を換へしむれば、必ず云はん、「譬へば贓品を人の行李に押し入れて、誣ふるに盜を以てするが如し」と。

我が性格論の要領を、少しく、こゝに詳言せしめよ。吾人が物を觀するに二途あり。理知(Rational knowledge)と感智(Sensuous knowledge)是れなり。感智の前には、物みな具象的となりて殊相を現す。我等が戯曲を讀むに方りて、二者いつれかに頼る、問ふまでもなく感智なり。之れを作中の性格に應用すれば、吾人が認め得るものは、不自然の殊性と、合自然の個性とのみ、類性の如きは、この立脚地を嚴に守る間は、竟に見るべからず。勿論著作者の挿評、解釋、説明の類は、讀者を感智の埒外に驅逐して理智の境に陥らしむるもの、元より別論に屬す。かゝれば嚮に性格論を草するや、殊性個性の説として、通性をば説きたれど、竟に類性には及ばざりき。

『日本』の懷疑生が、個性に對する平等相何ぞ、と問ふに至りて始めて之れに答へしのみ。小説の性格論にわれは類括を意味し、模型を意味する所謂類性、類想などといふ抽象的の語を採るに意なかりき。何が故に然るか。性格の類括といひ、模型といふ、いづれか理智に訴へて抽象を経たる結果ならざる。既に理智に依り抽象す、これ美術鑑識の道に違ふ。故に性格もその真相を没して見るに難せしむ、而してそが窺ひ得るものは、たゞ通性と類性とのみ。

我が所謂通性とは何ぞ。人間には思想上殆んど無數に分ち得べき共通性ありと認む。これが箇々を指して通性といふ、這は智、情、意の全部を蔽ふは勿論なり。何故に無數といふ、心的現象の種類は、最近の學理も之を分拆し悉くさすといふを以て也。此の雜多の種類ある通性が、色々異なる分量をもて相結合す、此の關係的差別即殊性なり、この關係的差別の自然に協へるもの之れを個性となす、實際界にては存在即自然なれば、この場合は殊性即個性なり、戯曲小説を論ずる時には、斷じて殊性即個性と云ひ得ず、蓋し天才の手に成る傑作のみ稀に自然に協へる殊性を現す。

余は個性に對して類性を立てたり。類性には殆ど無限の段階あり、即ち通性二箇以上結合せるものを最下とし、人類全軀の類型たるものをもて最上とす。通性が二箇以上結合して感智の前にあらはるものこれ殊性なり。此の殊性が個性に至るまで殆ど無數の段階あり、這は類性の段階と相應ず。斯く理論にては極言すれど、實際の場合にては奈何なる拙き戯曲小説にても、二箇の通性より成るが如き單純の人物をものせるは見るに難からん。試に我が個性、類性、殊性、通性の

再び性格を論じて歸休庵(鷗外)に答ふ

九十七

再び性格を論じて歸休庵(鶴外)に答ふ
九十八
關係を圖解すれば左の如し。但し重に分量上の關係は見ゆれど、結合上の關係は充分あらはし得ずと知るべし。



圖式にては、殊性が自然に協ひて個性に變ずる一關を描くに由なし。はた通性が原素として殊性、個性、類性のすべての内に含まるゝ趣をも示し得ざるを憾む。歸休庵いはく、

殊性は通性の關係の部面の名にて、獨立の存在なきものならば、殊性ならぬ通性ありて、通性ならぬ殊性ならむ、かくては、論者は全然個物の純獨性(絶類性)を撥無せるなり、

と。余答ふ、假に思想上通性を一箇つゝ分ち、互の關係を斷ちて考ふれば殊性ならぬ通性ありと云ひ得べし。又通性の結合に依りて成らざる殊性なきが故に、通性ならぬ殊性ならぬとも云ひ得ざるにあらず。これには稍々語弊あれば通性を離れて殊性存せずと言ひ換ふるを更に妥とす。

れど通性ならぬ殊性なしといふ前提より、奈何にしてか、全然個物の純獨性(絶類性)を撥無せりと結論を得られし、論者は特殊のものの中に汎通性を認め得ざるか、論者が師とあがむるハルトマンが哲學を何とて呼ぶ。われは具象的(コンクレット、モメント)一元派と稱するを聞く。具象的(具象的)一元説とは何ぞ、分を含める一、差別を包容せる平等をもて世界の本体とするものにあらずや。測らざりきハルトマンに精通せる歸休庵にして、かゝる平凡なる思想の解釋に迷はんとは。通性を含める殊性が、通なると共に殊なるを得べく、通なるが故に殊の滅することなきは、殆ど自明の眞理ならずや。實際界に於ては存在即自然なれば、殊性即個性なるは勿論なり。歸休庵いはく、

個性は殊性の自然に協へるものとすれば、殊性に合自然なる個性と、不合自然なる非個性殊性とあるか、又殊性は皆合自然殊性は皆個性にして、その特に個性とふいは殊性の合自然なる性質に名づけたるに過ぎざるか、前者ならばわれその非個性殊性の何物なるか詳にせず、後者ならばわれ殊性と個性との二目を立つる必要を認めず、

と。余は前問にはありと應へ、後問にはあらずと應ふべし。論者は先づ合自然不合自然の論は自然界を離れ戯曲小説などの上にて始めて起るべきを領くならん。さらば、此の立脚地よりは合自然の個性と、不合自然なる非個性殊性以外に、われは殆ど何ものをも見ず。歸休庵は怪まん、類性を認めざるかど。されど、尙然りと答へん。何とならば、類性は理智に訴へ抽象して始めて得來るもの、縦令不自然なる戯曲小説の人物にても、具象的たることは強ち難からぬと共に、多少他に比類なき特點をも何邊にか具ふ。されば、之れを評するに抽象的模型的の義ある類性の語を再び性格を論じて歸休庵(鶴外)に答ふ

再び性格を論じて歸休庵(鶴外)に答ふ

百

用ふるは妥ならざるが如し。若し理智に照さんか、沙翁が傑作中の人物にて個性活動すとたへられたるものにも、遽然類性と化し去るに驚かん。例へばボルシアをば、快活温良にして情濃かなる才女の類型、オヘリヤをば柔和純潔なる處女の類型、リアをば、智慮深く情に溺れ瘡癩つよく狂氣じみたる王の類型、リチャード三世をば、人界の悪魔ともいふべき、遠謀果斷にして且勇猛殘忍なる政治家の類型なりと云ひ得ざるにあらざ。何となれば奈何に精練なる解剖をなして形容詞をまた累ねるとも、此等はすべて汎通性たるを妨げず。歸休庵よく理智の立地を離れずして個性の個性たる精髓を摘抉して示し得るか。若し得といは、謹みて教を聽かん。されど、感智、即ち直觀の立地に移らずして、恐らくは個性の精髓をば觀じ得じ。さらば、立地を理智に選みて沙翁が傑作中の人物をも類型なりと斷ずるか。此の必然の結論に陥るの勇氣ありて、始めて作中の人物を類性の語をもて評し得べし。若しまた理智を去り感智に就かざれば、性格の真相窺ひ難きは沙翁の場合にて、諦めたりと云ふか、類性をばこゝよりは立つることを得じ。歸休庵は二者いづれをか採らんとすらん。類性は理智に照せば、つねに實際界の個物にも作中の個性にもはた殊性にも一側として具し得べきもの、個性たる能はざるものを類性と呼ぶは吾人その正しき所以を知らず。

按ずるに不合自然の殊性は、その内容、個性に比すれば、自然を遠ざかるに隨ひて單純とならざる能はず、單純なるものは、複雑なるものに比して他と融通し得る範圍ひろし。故に此の著き點に専ら着目すれば汎通の側のみ明也。之れを類型の名をもて蔽はんとする必ずしも理なきにあらざ。

されど、焉ぞ知らん、他側には天下決して二あらざる特點を具ふるとを。ギンケルマンが哲學この理を説明して餘蘊なしといふ、是れ必ずしも余が私見とのみいふべからず。余が戯曲小説の性格を論じて、個性、類性の外に殊性の目を立てたるの意こゝに存す、異を樹て奇を銜はんとにはあらず。

歸休庵いふ、殊性の文字に「インヂヂヂユアリチー」の英語を附したるは誤寫ならざれば誤植ならん。然らず、余が此の假名をふりたるは、「通例美學などにて」との斷りを附したれば、殊性、個性の別を立てたる我が説の用語ならぬは明なり。譯語未だ一定せざる今日、Individuality に殊性の文字をあてたりとて何の不可あらん。

『めざまし草』第五卷「三人冗語」の中に「或る境遇の Miss に於ける個人を寫すはひとり立ちて特色ある個人を寫すより更に難し」とあり、境遇を離れてひとり立てる個人といふは奈何なるものぞ。歸休庵の與らざる所ならんも知れされど、性格に關係あれば、ついでながら之れにも教を請ふ。

小説と片輪者

(明治二十九年三月)

去年より此の春へかけて、小説界にひどく片輪者の跋扈するは何の兆ぞ。少々學者がつて表を作れば、

小説と片輪者

百一

思ひ出づるまゝ、
盲人を主人公「香魚山人著」「俄替」、水蔭著「夏の館」、
にせるもの「水蔭著」「雪折竹」、
片目を主人公「薄氷女史著」「黒眼鏡」、柳浪「黒蜥蜴」、
とせるもの「天知著」「のろひの木」、
吃りの主人公「忍月著」「吃軍曹」、天知著「のろひの木」、
狂人の主人公「水蔭著」「狂詩人」、
其の外の雜種「天外著」「どろく」「姫」「奇病」、柳浪著「龜さん」、

今はざつと記憶せる所だけを列べたるなれば、此の外にも澤山あるべし、縁日物の盆梅、妙に
ねぢくれた親の因果が子に報ふ章魚娘の評判奥山に高し。釣り込まれ易い氣まぐれ者が、性格論
にドギマギして、狼狽したキヤラクターの捏ねこぢれた餅子細工、手輕くきり出す花椿、鉄にの
らぬ秋濤は、西の梅にサラリ〜と、駄洒落で逃げる是れが原因といふでもあるまい。何しろ素
人の我等には、此の脈は取れぬわい。民友社の諸先生方が、近頃の小説は不健全だ、などとドク
ドルがらるゝも、此所から割出した匙加減でがなごさう。追々これからは三ツ目小僧、大入
道、轆轤首など傑作となつて世人を喫驚させ、氣の弱い讀者は一命危いことごさうぞ。其様
なツた曉には、差詰小説家の顧問には、香具師がならねばなるまい。

思ひ出づるまゝ、 (明治二十九年三月)

近頃の批評家のやうに、深刻の文字を不斷につかはい、駿河臺の井戸にとび込んで心中すると云

ふ筋のが出たらば、何の語をもて評すべきと聊か心配、更に海底旅行の小説あらはれし時には、
何うするつもりぞ。深々刻々ではぢや、馬と雌雞のかけあひ見たやうで妙ならず。

イヨウ深いな〜と井戸を覗いて始めて歎ずる、今の批評家には、一朵の董花にも、造化が甚深
の意匠のこもれるをば説くべからず。詩人の着眼は、須からく高かるべし、と云へば、マツと隣
家の乾場を看詰る類のが多きに呆れ。文壇の前途遠遠と溜息つくを、御心配あるな、何マイルあ
るかは知らねど、いづれ鐵道が出来ませう、と云はれぬだけが頼もし、

作を見て、作者の人格を評し、はた其の世界観とやら、理想とやらを、當て推量するは危うし、
瓶をつくる者、顔がまるいと云ふでもなし、船大工必ずしも浮いた男にあらず。

機械熾んにして英雄衰ふと、蘇峯先生が歎息せられたは、ソレ先頃のことであるが、成程、文壇
も其の通り、萬事が機械づくめ、道具づくめ、古い修辭書位をやつと覗いた手合までが、片假名
澤山の美論、詩論、劇曲論、鳥渡見の外擲ばかりは立派なれど、是れは出來あひの舶來物、中味
は手細工のいびつな重箱、揚技でほぢくる詮議に及ばず、シツクリと箝まらぬが、何よりの證據
ぢや、日蔭町物の古洋服、違つた肩で風をきり、ヘン何んなものだい、誰れが目にも學者だらう
どは、イヤハヤ、どんと果れも志ない。

蚤にさされた程けなされても。絶躰絶命と氣違眼で騒ぎまはり、親族會議を開かぬばかりなるが
今の作者仲間には多しとか、執念深きことは、蛇よりはげしく、何かで其の評者に復讐とはあさ
まし、お座なり一片の褒め言葉にも、天國にのぼつた程の大恐悦大満足、不俱戴天の仇も、これ

が爲には、帳消しとなる時は、是れはまた了簡の程が情けなし。多感は詩人の常とあれば、是非のない次第なれど、拙作でも、悪作でも、褒めさへせねば、悪口ぢやそねみぢや、と思ひひがめ、壯士をつかつて、傑作と云はさではといふ、凝りに凝ったやからもある。成程人は情の容れ物、悪く云はるゝより、褒められるが、心持のよいこともあらうけれど、鳥渡考へても御覽じろ、新聞雑誌の大批評家に僧正坊直傳の羽團扇で、何程、煽ぎたてられたにしろ、死後十年二十年と、持ちこたへる名は、幾等もなし、五十年記憶せらるゝは尙以て稀なり、彼等多数の名は、手拭引札でひろめたるものと、壽命に於て何程の相違がある、若し百代の名とあらば、一と思案すべきなれど、這は我れに天分なくば、汽車に帆をかけても追附くものにあらず。

筆まかせ (明治二十九年四月)

爪あれば引掻き、牙あれば噛む、黑白鳥渡わけかねる灰色毛の犬猫にも、聞いて見れば一と理屈あり。窮した時の遁げ道は豈にたゞ斑がくくいる垣根の穴のみに限らん。や矢叫びの聲、響の音、今ぞ文壇の戦國、群雄四方に割據の城廓旗章もさまざまなり、中にも一際目立つは閱歴の二字を染ぬきし馬轂を鼻頭にひらつかせ、實驗の劍を揮り廻し、底に實のない山吹の髓より軽い見聞を澤庵の重石と重んずる片荷する偏頗な御託きいた山葵は鼻からぬけ、聞えぬ理窟は耳からぬけ、残るはほんの糟ばかり、チョッピリ摘んで味へば、酔漢が負けずかぶりに、酒を呑み給へ世界が轉ると

いふ理合ひも、酔はない奴には知れないからと云ふ類ひ、實驗を振り廻はす今の作家に多し。と云つて繪、にかいた牡丹餅、三年看詰めても、甘いか、辛いか、味の知れやう等なし、書物箱を掻きまはし、世界は何處だ、オツと人生を、仕舞ひなくした、チョッ、抽斗が違つた、など、周章てゝ其處ら尋ねても、オヤと指頭で、蠢魚を押へるやうに、爾無造作には捉まらず、矢張海の物は海、山の物は山と知れば間違が甚なし。劇曲小説などの賞翫に、根本の着眼が違へば、枝葉を争ふは無駄となり。斯う無闇と墨をつかはし、洛陽の墨價では、チト語呂があるけれど、と頬を抑へて心配する向もあれど、他が冗漫と思ふもの、却て作者がそこを命とするもあるべし。花のみめずる小供もあれば、葉も枝も合せ見たり、と願ふもあるべし。人さまざまの心々、えり好みは是非なし。艶ぼいどころのみを拾ひ讀みずる、人或はすばらしく強いこと、残酷などのみを悦ぶ人、ともに其の以外をつまらなしと思はん。作中に、或概念を見出さんとするやからは、明にさる思想の透徹せざるをば、なべて平凡と見おとすなるべし。唯一二種の色系で、ツヒ鳥渡した編物とは人間の組立は譯が違ふ。幾千萬種といふ無限ない系で、出来たものなれば、その中より赤紫など、目に付きやすきを拙き出して樂む輩には、眞の人間に近ければ近き程、その作に無駄なところ多し、と見ゆるは當然にて、致し方なきことならずや。

觀念小説

(明治二十九年四月)

近頃、流行の觀念小説といふものを讀むと、我等は何となく、鐵道馬車の馬に成つたやうな心持がする。八方ぎりの人間の眼に、遠慮なく目かくしうち、新道やら、横町やら、作者ばかりが都合點の一筋道、矢鱈と逐ひ廻はさるゝはつらし。中には、社會に罪あり個人に罪なし、とあるベッキ塗の大標札目的に、泥溝とも云はず、川とも云はず、一算に逐立てるもあり。人生の目的は、戀ぢやとある紅筆の跡うるはしき標札に、トンダ荆藪へ、挽きこまれる讀者もあり、自由に山河を跋渉するが大好物な我等には、その窮屈さが溜らず、馬あつかひの中は、まだよけれど人間の運命に神戸行、青森行など、勝手な札附けの荷物あつかひ、讀者もし之れにかぶれて、ヒョソソな所へ送りこまれ、迷ひ見にならねば、仕合せなり。

『ひとり寝』及び『雲の袖』を評す

(明治二十九年十二月)

『きくの濱松』を讀みし時には、思ふ女に振棄てられ、喪神憔悴、見る影もなき久四郎が爲に同感の涙を濺ぎ、お初が薄情にいと憎く、思はれしが、此の巻を繙くに至りお初が隠居に口説き落とされし次第を讀みもてゆくに、何時しか、先きに憎かりしお初が爲數滴の涙を惜まらずなりぬ。人事の両面、人情の秘密かほどに描破し得るもの此の著者ならではと思はず感歎せり。されど、

吾人が慊たらずと思ふ節の一つ二を擧ぐれば、作中の人物いづれも餘りに人生を洞觀し過ぎ、人情を諦め過ぎ、又警句を吐き過ぎるところ妙に似て却て妙なはず、例へば久四郎が覺めたるが如く、迷へるが如く、痴なるが如く、痴ならざる如きはいとよし、されども其の感懐を述ぶるあたりは情熱し語激ならざるにあらざれど、何處となく冥目坦懐の間より得來たれる人情哲學講述の臭味なしとせず。されば、此の作の内容をば高しと深しとして推尊するに躊躇せざれど、其の云ひあらはしの法式に於て稍々憾ありとす。兎角作者が自家觀世の所感鬱勃として些の間隙にあれば、發洩し來たらんとす、かるが故に、作中の人物を往々蹂躪して露伴化するの弊あり。隨うて、讀者に對する説法、じみる所も屢々なり。斯く吾人が多少の不満足あるに拘らず、現今の他の諸作家に比するに、此の作者程サセステイヴなる所あるものなし、

『雲の袖』は『ひとり寝』に比して數等遜色あり。是れ露伴が病後の作にて、曾て國會に出でし時に、そが緒言に「小説つくることなんどには心も往かず氣も馳せず」なりぬとて歎息の中に執筆せしもの、斯かる事情ありし故か、忌憚なく云へば、前半の如きは殆ど此の作家の筆に成れりとは思はれぬ程、血なく、熱なく、趣向はた陳腐、往々ありふれたる芝居の型をその儘應用せるが如き節もありて、讀むにつらく思はるゝ所もあり、されど、蠣崎十郎を寫すの一段に至りては、作者得意の人物だけありて他人の企て及び難き妙所あり、はた末段おこのが喜藏の好意を知らずして怨むあたり、及び第十四回榮太郎が廢鎌を捉つて俠賊に躍りかゝる邊は中々面白し。序に云ふ『微塵藏』の細評を本誌に掲ぐる由豫告せしことありしが、未だ完結に到らざるものを評論するは、其

月の巻(終)



『ひより寝』及び『雲の袖』を評す
當を得難き虞あれば、全部結了の後まで延期することにせり。

はしがき

風の音、雲の幕、こんな時の附け景氣には大薩摩がよいやら大ざつばがよいやら知らず、當人まことに物凄くも恐ろしけれ、と切つて落し、三段返しの下の巻なれば、「花」とは假りに名づけつれど、色もなし、香もなし、志なびたるばかりが本草家のラボラトリーにふさはしき乾製の野花、それは研究とやらの助けともなれど、此は神農どのが嘗めさせ給ひても薬にもならず、毒にもならず、宙ぶらりんの日覆ひの釣り枝、すゝけて樂屋風呂の煙と消失せざりし赤恥を茲に晒すのみ、と、當る酉の

年、本物の櫻ごき、大久保の青々園志るす

はしがき

二

風雲集

花の巻

青々園 著

馬琴の小説史

『温知叢書』第五編に収録したる『江戸作者部類』は巻首に蟹行散人といふ名を署するのみにして、明らさまに記者の誰なりやを知る能はずと雖も、予私かに其の曲亭馬琴が匿名の稿ならん事を疑ふ、文牒のいたく『八犬傳』の『回外餘録』若しくは『いはでもの記』に似たること、其の證の一なり、馬琴の事を記する條下に往々一人稱を用ひ、馬琴を指して直ちに「余」或は「吾」と書するもの、其の證の二なり、同じ條下に、篠齋の註と記者の解答とを掲げたる、其の文氣によりて考ふるに記者と馬琴とは全く同一人物なるが如し、是れ其の證の三なり、前に述べたる篠齋の註の外、又本文の中に黙老の語を引く所數となり、馬琴が友人にて松坂に殿村篠齋あり、高知に木村黙老あり、是れ其の證の四なり、本書平賀源内の没せし時、記者の年十三歳なりきといふ、然れば記者の出生せしは明和四年ならざるべからず、當時操觚の士にして其の年に生れしは、曲亭馬琴と山東京山との二人なり、是れ其の證の五なり、前にも言ひし蟹行散人の義を按ずるに、馬琴の名は解

馬琴の小説史

一

馬琴の小説史 著述の目的

にして、其の號は篋民なり、解篋の音は蟹行に通ず、現に山東京傳が言行録を綴りて『いほでもの記』と題したるは、「言はずとも」云々の和歌に據れるが如しと雖も、其の實は京傳が通稱、岩瀬傳藏なりし故、岩傳をもじりて斯くは題せしなりけり、其の他この流の命名法は、馬琴が小説中の人物に於て常に慣用せし所のものなり、是れ其の證の六なり、本書既に題して『江戸作者類』といふ、而して馬琴が事最も詳しく、其の三分一以上を占め、京傳の事これに次ぎて稍々詳に、其の他、三馬、一九、種彦の輩に至りては、僅に二葉の隙を塞ぐに過ぎず、是れ其の證の七なり、京傳の叙事、洒落本の沿革、等は全く『いほでもの記』に載す事實と同しくして、毛蟹の異説あることなし、是れ其の證の八なり、以上の八證に據りて之れを考ふるに、『作者部類』の記者は馬琴なり、と言ふに大なる過なかるべきか、尤も疑はしきは、首卷署名の下に、「天保五甲子の春蚊身田龍唇窟に稿す」とあること是れなり、按ずるに、蚊身田は神田にして、龍唇窟とは龍ノ口のことなるべし、馬琴は始め深川に生れて東海道に流寓し、中ごろ飯田町に住し、同明町に轉し、終に四谷に身を歿せり、天保五年の頃は正さに同明町に住し、龍ノ口に居りし事を聞かず、或は當時子息琴嶺が松前侯の醫官たりし因みを以て、暫く此の邊に起臥せし事ありしにや、

著述の目的

卷首所載の目次に據れば、著者の意は享保より天保に至るまで、江戸に顯はれたる戯作者流を列叙し、尙ほ淨瑠璃作者、畫工、筆工、厥人に及ぼさむと欲したるが如し、されど、今日坊間に傳

はれるものは戯作者の部のみにして、卷を累ぬること僅かに二、之れを區分するに、赤本作者、洒落本及び中本作者、讀本作者の三類を以てし、一々此等諸種の小説の由來する所を詳にし、併せて作者の傳評に及びたり、或は著書中ごろにして筆を措き、自餘の諸卷を完うするに及ばざりしか、或は其の書既に成りて、空しく蠹魚の餌となりたりしか、今日に於て知る能はずと雖も、江戸文學史の材料としては、此の存在せる二卷を以て既に充分なり、彼れ馬琴は何の故を以て此の著ありしか、本書の序文は乃ち曰はく、

善碑官小説は鄙事也、名を好むもの、なす所、是を兒戯の冊子とす、後に傳ふべきものにあらず、さほれ和漢の大才子、佳作能文あるときは、後にあらせしむ欲するとも、必ず好事者流の爲におさく、その名を稱せられん、彼の泛々の作者の如きは、後世誰かこれを知るべき、その憐れずば、いかにして此筆すまみに及ばんや

即ち彼れ此の著述の目的なりと自白する所は、彼のアーベングがウエストミニストルの鐘聲を聞いて、群籍の末路亦斯の如きを嘆じたと同じく、所謂「泛々の作者」が一時の空名を博しながら、物變はり星移つるに従て、其の著書は其の人の名と共に空々の裡に消え去るを憐れみたる、一片の至情に出でたるが如し、然れども更に一步を進めて、仔細に彼れが心事を洞察せんには、彼れ遂に斯くの如く凡庸作者輩に仁なる者にあらざりしを知るべし、假りに此の著をして、果して序文に自白するが如き目的に出でたりとせんか、彼れ必らず此の「泛々たる作者」を叙する爲めに、懇篤の筆を用ひざるべからず、而も本書の記する所は全く之に反せり、前にもいへる如く、彼れは馬琴の條下に於ては千言萬句、縷々として尙ほ其の詳細を盡さざるを憾むが如きに拘はらず、

其の他の作者に於ては輕々一筆に叙し去り、或は不當にして且つ過酷なる短評をさへ加へたりき、是れ豈に序文に謂ふ所のものならんや、蓋し著者が欲する所は、彼の「泛々たる作者」の爲めにあらざりて、單に馬琴自家の爲めなりしのみ。

『作者部類』の出でしは實に天保五年にして、當時馬琴は既にその「五大奇書」と呼ばれたる『弓張月』を了り、『八犬傳』、『巡島記』の稿を半ばにし、『美少年録』、『俠客傳』、また一二輯に垂んとせり、彼れ自家の名、天下に籍甚するを見て、氣揚り、意驕り、加之、彼れが晩年に於て大凶事たりし琴嶺が死は尙ほ一年の後にあり、さなきだに矜伐侮慢の癖ありし彼れは此の大得意の境遇に立ちて、群小の作者を睥睨し、以爲へらく、方今天下の奇才たるもの乃公にあらざりて誰れぞ、吾が筆以て、百世の下、尙ほ此の奇才ある事を傳へしむるも亦可ならずや、と、是れ此の著ある所以にして、彼の京傳以下の作者に至りては、馬琴自家を稱贊するのオサキに使はれしに外ならざるなり。

馬琴すでに自家稱贊の目的を以て此の書を編す、先づ赤本作者の中に、「馬琴」「傀儡子」「仙鶴堂」「達竹齋」の名を記して、其の赤本に關する畧傳を掲げ、讀本作者の部に於ては、其の紙頁殆んど本書三分の一を割きて、其の著述詳細を載せたり、蓋し彼れが名を成せる所以のものは、主として其の讀本にあればならん、なほ洒落本作者の部に於ては終に彼れの名を掲げずして曰はく

只馬琴のみ始より洒落本を作らず、當時利を以て薦めて、稿本を乞ふ者多けれども、馬琴肯せずして云らく、戯作は好む所なれども、利に誘引て洒落本を作らば、後に子をもたんと時、何をもて子に教んや、再び請ふ事なかれさて、つれなくいふて

返せしごと

蓋し洒落本は素と「誹淫の艶史」なれば、馬琴が口を極めて之れを罵り、自ら著作する事なきに誇りたるは善し、然れども事實に於て夫子も亦た此の作ありしを如何せん、即ち寛政の頃になりし「銀猫金猫」といへる私娼の様を寫せし『猫じやらし』の一書は、作名を署して「正徳馬鹿助」といふと雖も、是れ馬琴が戯名に外ならざりしなり、

洒落本一變して中本となる、馬琴の中本を憎むこと亦甚し曰はく

洒落本の絶板せられしより以來、叫化子のすなる浮世物眞似といふこゝめきたる根なし話説を、いとおかしく綴り成したるもの、各一二巻を一編とせしな、中本と唱へたり

三馬が『浮世風呂』一九が『膝栗毛』など、今も『八犬傳』と併び稱せらるゝものは悉く此の中本なり、馬琴が此處に言ふ如く、果して「乞食のすなる物眞似」なりや否やは姑く言はず、たゞ笑ふ可きは馬琴亦此の「物眞似めきたる根なし話説」を著はし、事なり、流石の彼れも此の一事は、前に述べたる洒落本の如く抹殺し能はざりしにや、讀本作者の部に於て左の如き辯解を試みたり、

此年(寛政十年)仙鶴屋の主管忠兵衛が乞ひよりて小冊鹽梅餘史一巻をつくる、新作の落語なり、曲亭作の小冊は、只是れのみ、當時洒落本禁止せられて、浮世物まねめきたる中本、また流行せず、よりにて、此處に録す

彼れ自家の名を中本作者の中に籍するを耻ぢ、事を左右に托して讀本作者の部に記す、何ぞ其の強辯の甚しきや、

馬琴と京傳

その赤本作者の部及び讀本作者の部に於ては、連りに馬琴の著述の售れし事、梨園に演ぜられし事、書肆に強いられて自意に満たざる著作ありし事、當時に聲名の高かりし事、往々徳行のありし事、などすべて馬琴を賛賞して止まず、他の作者の條下に於ては、數々其の缺點を摘發するに拘はらず、徹頭徹尾、馬琴に就いて惡聲を出たさるるは、即ち夫子自からの爲めにすればならん、而して前に述べし如く、讀本の著述を記する事最も詳かにして、年代、書工、發賣の書林、刻板の賣買までを掲げ、其の他大小の經歷擧げ盡さるるはなし、此等は假令作者が自家賞賛の爲めにしたるにもせよ、文學史の材料としては一廉の價値ありといふべし、馬琴が自傳自評は暫く之れを措き、此の書の最も價値あるは、彼れと同時代の作者を評したる條これなり、蓋し彼れが力めて他人を抑ゆるものは、即ち間接に自家を揚ぐる所以なるのみならず、或は當時の文學に於ける彼れが意見の一斑を窺ふに足るものあればなり、此の書叙する所、馬琴に次いで稍々詳なるは山東京傳が事跡なり、馬琴が京傳を叙せしものは、此の書に先たつこと十五年、即ち文政二年に成れる『いほでもの記』ありて其の詳細を盡くせり、本書に言ふ所、概ね其の事實をそれより採り、聊か省略する所ありと雖も、未だ三馬一九輩を叙するの簡なるに似ず、其の批評も亦往々寛大の筆法を用いたり、例へば、其死せし事を惜みて、

物の本を好むもの、かゝる作者は亦得たしめて知るも知らぬも是を惜みき、

といへるが如き、其の讀本の售れし事夥しかりしを記して、

京傳は世に名を知られてより、印行の冊子、其作として、よく賣れざる物なかりき、其中に孔子一代記、四季交加、浮牡丹

双蝶記、此四種のみ賣れざるの書也、俗に云ふ上手が手より水の漏りたるものなるべし、

といへるが如き、彼の一九種彥等を評して刻薄なる者と頗る異なるものあり、蓋し京傳の馬琴に於けるは先輩なり、京傳年齢馬琴に長すること僅かに六歳に過ぎずと雖も、馬琴が始めて『用盡二分狂言』を著はしたる寛政二年の當時に於ては、彼既に戯作家として一門戸を張りたり、而して馬琴の名を成せしは彼れが死せしと同時に、若しは其の以後にして、彼れが存生中に在ては名聲常に馬琴の上に位せりき、然れば馬琴の彼れに於けるは、其の三馬種彦に於けるが如く競争者の關係にあらずして、全く先進後進の關係たりしなり、思ふに、馬琴の彼れに寛なる所以のもの亦此處に存するならん、

然れども、馬琴の京傳に於けるは、單に先輩たるのみにあらざるなり、彼れは實に馬琴を文壇に導きし大恩人なりき、而して馬琴は果してその彼れに負ふ所のものに酬ふる所ありしか、始め馬琴が匿名の下に『いほでもの記』を著はすや、既に彼が弟京山の憤を買ひたり、京山が之れに憤るものは、家兄の誹謗せられしよりは、寧ろ自己が其の嫂を虐げし事を摘發せられしに由ると雖も其の恩人の私行を發きたる馬琴も亦不徳の譏を免るゝ能はざるなり、而して、本書は更に京傳が私行を發き、其の書肆に約することの信ならざりしが爲め、板元の破産せし事を記して、

馬琴と京傳

そも板元の不幸にして、時運によるはいふ者から、其本を推す時は、作者も徳を害ふことなからずやと評し、尙ほ馬琴自己が然諾の徳ありし事を記して、

一旦編述をたのまれて、その刊刻に及ぶ折、約束を違へ稿し果されば、發兌のいたく後ろしことあり、その板元の不便いふべうもあらず、この故に産を破るに至るものあり、彼山東をそなたのためして、後悔そこに先だつふしなりし住吉屋政五郎の如き是也、吾はこの義を思ふを以て、既に潤筆を受くる時は、約束を違へる事なし、又乞ふもの多くして速にその需に應しかたき板元には強らるゝまいへとも、已前に潤筆を受けず

云々といへり、馬琴の小心なる、此のこと實ならん、而して現在の恩人を執らへて其の私行を發

くは不可なり、更に之れを以て自家稱賛の具となすに至ては、陋も亦甚しといふべし、其の他、書肆西村屋與八が驕慢にして作者に下らざりしに、京傳種彦が自から「印行して玉はれ」と請ひし事を記し、馬琴一人は節を屈せざりしを稱したるが如き、唐來三和が言を借りて、京傳馬琴の戲作を比較し、

然れども、京傳はさまざまもなき趣向にても見てくれを旨とし、よくかき活るを以て、人其拙に心づかず、馬琴は臭草紙といへ、よく根據を堅固にして、勸懲を正しくす、なれども其京傳は戲作の行はるゝ馬琴より五六年先たちたるに、且年歳も兄なれば、世の人并書買をも、此を以て甲乙を定むれども、吾おそらくは、後世に至りて論定らば、我團扇を馬琴の方に揚らんといひしとぞ、

と記したるが如き、三和果して此の言ありしや否やは暫く措きて、其の言ふ所は真に近しと雖も

故さらに馬琴の筆によりて褒貶を私するはひとり大人氣なきの譏あるのみならず、却て馬琴が名を潰がすもののみ、畢竟此等に關しては天下自から公論のあるあり、彼れ馬琴たる者何をか苦しまんや、

馬琴が京傳に對する失徳はひとり此れのみならず、彼れは卑劣にも例の抹殺主義を用ひて、其の京傳に負ふ所の恩義を塗抹せんと試みたりき、彼れが「いはでもの記」を著はすや

此年の秋、馬琴初めて京傳に逢ふ一見して舊知己の如し其好む所同下ければなり、と畧叙し、尙ほ本書に曰はく

寛政二年の秋、戯れに壬生狂言の臭草紙二巻をつりて、京傳に見せしに吾にたまへ、吾序なものして泉市へつかはして我が怒りの責を塞ぐべしと、かたの如くに計らはれたり、その後、泉市の需に應じて、鼠婚禮塵劫記と云ふ三冊物を綴りしを板元の好みにて、京傳が序を書たり、

又曰はく

鼠婚禮塵劫記の序を京傳が書て、曲亭某郷に予が隠れ里に寓居し、ひまつ皿の油を嘗て友と善し、さいひしは彼京傳が寓居の折、馬琴が止宿して久しく思ひ、且この折は臭草紙の代作さへしたればなり、

と既に京傳が家に寄食せし事を明らさまに記しながら、一言の京傳に負ふ所ありしをいはざるは何ぞや、現に彼が「戯れに」綴りしといふ「二分狂言」には「京傳門人大榮山人」と署名したりしを、後年に至り、此の「京傳門人」と記るしたる草紙を買集めて、口を滅したるが如き、所謂耳をふさいで鈴を盗む者にして、馬琴が陋なること愈々出で、愈々甚しといふべし、されば、京傳が遺弟京

馬琴と京傳

山が『蜘蛛糸巻』の中に馬琴が秘事を發きて曰はく、

寛政二年の春馬琴自ら深川仲町の裏家に住めるなりきて、京傳の許へ來り門人たらむ、こゝを請ひしか、謝絶し、但心安く話に來るべき由いひたりしが、後卜筮を解すれば之にて錢を得んきて神奈川宿に抵り、寛政三年再び京傳の方に來りて、食客となりしが、其世話にて地本問屋の店者となり、此の奉公中始て小説をば書たり、

馬琴既に名を知らるゝに及び故ありて終に京傳と交はりを絶せり、『いはでもの記』によれば、彼が『胡蝶物語』に遊女と妻と等しく思ふものを譏りしより京傳の怒りに觸れ（京傳は二度まで娼婦を娶れり）、京山の和解によりて交はり始めの如しと雖も、志す所同じからざるを以て、來會年中に兩三度に過ぎざりきとなり、片言獄を決す可からずと雖も、彼れが隙を生ぜし所以は恐らくは此の類ならん、京傳既に死して彼れ其の葬儀に臨まざりしのみならず、京山とは全く往來を絶しなから、天保七年、彼れが七十の賀に書畫會を催ふすに及び、自ら京山を訪ひて配り物を贈り、出會の事を請ひたりしが、當日、種彦、春水、馬馬、等の出席せしに拘はらず、京山は湯治に托して出づるとなかりき、馬琴既に京傳の恩義に負きながら一朝にして其の弟の門に媚ぶ、彼れが節操の士にあらざるを知るべし、况んや本書私かに京山を短りて、

抑京山は文筆に才あるのみならず、貨殖の事にも疎からざるにや、世と共に昇降す、是をもて風流の友には、尊大なれ共、勢利の爲には、しがらみ、但戯作は、兄に及ばず、といふに於てをや、

馬琴と種彦

馬琴すでに其の前輩なる、而も輔導の恩ある京傳に對する事かくの如し、其の他、種彦三馬の如き彼れと同時代に顯はれて、互に文名を競ひたる輩に至りては、概ね罵詈訾評を擅まゝにして、勉めて自家の名を其の上に置かむと欲せしもの、異むに足らず、彼れは先づ種彦を評して曰はく

文化丙子の新板、正本製といふ合巻物、時好に稱ひて數相續て出でたり、此合巻、文を少くして畫を言さず、其畫精妙、本文に勝れり、

馬琴が此の文意を味ふに、正本仕立の行はれし所以は作者にあらで、書工の伎倆に在りと云ふに外ならず、蓋し種彦は小事だも忽かせにせざりし人なり、彼れが書を著すや、先づ家人に讀聞かせて、文意の通じ難き所あれば直ちに筆を執つて改竄したりき、而して此の如く彼れが用意の周密なるは、獨り其の行文脚色の間のみならず、圖案、編帙の如何にまで及び、現に彼れが門人に語りし言葉にも、中村秀鶴が始め平凡なる地位に在りし時、舞臺にて穿つべき衣裳を日々丁寧に疊みて敷を延ばしたれば、同列の役者の中にて自ら衣裳の際立ちて見えしより、追々看客の眼にとまり、遂に八兩取りより千兩の立者にまで昇進したり、作者も其の通りにして、挿畫の模様、仕立の善悪は些細の事にてはあれど、未だ世の中に名を知られぬ中は注意すべき事なりといひし程なりき、此等は畢竟童蒙に詔ふるまでにして、著述の本分とは謂ふべからずと雖も、作者の名を成すに汲々たる、此れ程の事は有りがちの話にして、彼の京傳が手拭を神社に奉納せし事、およ

ひ馬琴が京都より壬生狂言の來りしを機として『二分狂言』を著せしなど、同日の談ならむ、而して種彦が正本仕立を以て、本文、畫に及ばずといふは尤も失當の言なり、惣べて種彦が文の特色として富麗花の如き章句は之れなしといへども、暢達水の流れて窮まりなきが如きは、彼の馬琴が唄淨瑠璃めきたる四六文に比べて孰れぞや、加之、種彦の正本仕立は彼れが當時に於て完全なる戯曲家たりしを證すべきの著作たり、即ち獨り誦讀の間に快味を促がすのみならず、直ちに之を舞臺に上ぼせて一個の好劇を演ずるに足れりしなり、是れより先き、所謂戯作者の著述を梨園に演ぜしもの、京傳が『うとう安方』『稻妻表紙』『醉菩提』を始めとして、馬琴が『皿々郷談』『弓張月』『八犬傳』等に至るまで、比々皆然らざるはなしと雖も、悉く一旦戯曲専門家(狂言作者)の手に依つて改竄せられ、増補せられ、始めて一部の劇たるを得たりき、就中馬琴の如きは其の『石魂録』後篇に於て、極めて脚本の趣に擬したりと雖も、演劇の際に當つては尙ほ改竄を被るを免れざりき、種彦が正本仕立に至つては即ち然らず、其の舞臺に上りて劇子に演せらるゝに及びてや、一章の改竄する所、一句の損益する所、殆どなかりしなり、此の如きもの何ぞや、馬琴は彼れが脚色の根據を發きて曰はく、

萬き義大夫本數十種を藏弁して、戯作の種さし且西鶴が浮世本八文字屋本なども多く藏めたりと云ふ

種彦が「舊き義大夫本」を藏せしは實なり、又是れによりて立案の基とせしも實なり、予之れを聞く、三馬が種彦と親しきに及び、種彦の藏する院本を借りて、又自著の材料としたりと、又種彦が作に『歌舞伎物語』といへる冊子あり、予が實見せしは概ね斷篇零冊なりと雖も、彼の村山又

三郎、右近源左衛門時代の脚本を小説本に書直したるものに外ならず、種彦が立案の根據すでに斯くの如しとすれば、彼れが作の院本或は脚本に近づきしは必然の事なりといへども、其の脚本に轉用せられて一字の損益する所なきに至つては、別に原因する所なくんばならず、原因とは何ぞや、彼れが梨園に關する智識と經驗とこれなり、蓋し戯作者にして多少梨園の情に通ずるは、今も古も同じき事にして、京傳は茶番狂言を演ずるに巧みなりきといひ、三馬は其の中本に於て特に梨園の情を描きて『素人狂言』『客者評判記』等の作あり、馬琴だも『戲子名所圖會』を著して當時の俳優を批評せりき、然れども未だ細を穿ち微に入ること種彦に及ぶものなかりしなり、予亦た之れを聞く、三馬晩年に及び、梨園の事は已れ種彦に若かざるを知りて、大に彼に讓る所ありきしとぞ、彼の馬馬が衣鉢を襲きて劇通に誇りし三馬にして斯くの如し、種彦か斯道に造詣する所推して知るへし、『戲作六家撰』また云ふ、種彦の容貌、當時の名優坂東三津五郎に似たり、三津五郎は彼れの最も愛するところにして『自ら三津五郎に擬して劇を演ぜし事ありきとぞ、以て益々種彦の本領を見るへし、

戯曲家としての種彦は、別に言ふ處あるべし、正本仕立の外、種彦の傑作となすべきは、誰も知りたる『田舎源氏』にして、今日と雖も、或る人は『八犬傳』『浮世風呂』『膝栗毛』『梅曆』と共に、之れを本邦五大小説なりといふ程なれば、如何に馬琴の意地わるき嫉妬に觸れけん、彼れは直ちに例の毒筆を用ひて

又文政十三年の春の新版、田舎源氏と云ふ合巻冊子、世評噪がしき迄に行はれたり、こも畫は

國貞にて其繪ます、妙なれば也、既に數篇に及べり、是れもて當今臭草紙の巨擘と稱せらる、其身に於ても自負甚しと云、此人させる學力も無けれど、狂才は餘の作者の白眉たるを、世の婦幼の評する所也、(中略)思ふに元祿年間より源氏ものがたりを俗文につゝり更て、婦幼の玩物とせしも多かり、そは女五經、あかし物語、風流源氏、若草源氏、雛鶴源氏、猿源氏、此餘なほあるべし、田舎源氏は竊に是等のを父母として作り設たるなるべし、本を知らず末を取るは、なべての世の常なれば、きのふ今日は某源氏など云中本物出で種彦物の鑿に倣ものありと聞きにき、かばかりの作者にだも及ぶもの、なきを思へば實に才難しとふべし、

『田舎源氏』の『源氏物語』より脱化し來りしは疑ふべからずと雖も、未だ其の原作を剽竊すること馬琴が『弓張月』の『雨月物語』に於けるが如きものならず、たゞ『田舎源氏』の『源氏物語』に於けるは、『八犬傳』の『水滸傳』に於けるが如きのみ、若し馬琴と同一の筆法を用ひて其『八犬傳』を評せば、是れより先き『水滸傳』を國文に翻譯して婦幼の玩物とせしもの、竹田出雲の『忠臣藏』を始めとして、綾足が『吉野物語』振鷲亭が『伊呂波水滸傳』京傳が『忠臣水滸傳』など數多あるべし、而して馬琴の『八犬傳』特り其名を擅ま、にせしは何ぞや、彼れが能く原作を咀嚼して、自家の材料に歸せしめられたるのみ、種彦の『源氏物語』に於ける亦此の類にして、到底短すべき所以にあらざるなり、

馬琴と三馬及び一九

その三馬を評するや、京傳種彦を評するよりも尙ほ酷だしきものあり、蓋し三馬は數奇の人なり、彼れ十八歳の若年に當たりて、既に文壇に頭角を現はしたりきと雖も、生を享くる僅かに四十八年、戯作者の生活を過すこと長からず、隨て其の得意とする著作も亦多からず、當時文界一般の偏見は、只管虚想を尙ひて現實を陋しむ、歴史的の傳奇を重んじて、社會小説なるものを見ること輕かりしを以て、三馬が風來より出で、風來を凌ぐの諷刺、全交より出で、全交を駕するの滑稽、および京傳より出で、京傳より巧みなる寫實は、空しく士君子の爲に擯斥せられたりき、されば、或る宴席に於て、一書林が京傳には「京傳先生」と呼び、三馬には「三馬先生」と名乗り掛けて盃を指したるを憤り、「純粹の江戸作者われを外にしては誰かあるべき」と絶叫したる當年の彼れを想へば、彼れ亦平常平ならざる所ありしならん、斯くの如く彼が得意なる中本物の所謂士君子の爲に斥けられしにも拘はらず、世の好んで書を読むものは、往々双手を揚げて彼れが著作を好遇したりき、現に三馬が日誌にも、途上の露店に「三馬でも京傳でも」と呼びながら古版の書籍を賣捌きし事を記るせり、京傳に比らべて全く一世をおくれたる後進の彼れにして、斯の如く并び呼ばれしは、當時に於て彼れが如何に虚名の高かりしかを知るに足るべし、『八犬傳』の著者之れを見て其の嫉心を刺激せられしや明けし、乃ち其學才とて性行とを擧げて曰く、

手迹は惇信様にて拙からず、書は學はされども頗る出來たり、學問はなげねども才子なれば、自序など綴るに能く故事を取まはして漢學者の如く思はれたり、只其人に憎みあり、性酒を嗜み人と争鬪せしこと屢聞えたり、絶て文人の氣質に似ず、又商賈の如くにもあらず、世の俠客

馬琴と三馬及び一九

一六

に似たること多かりしに、既に初老に及びてより醉狂を慎みて渡世を旨とせしと云（中略）馬
馬豊國等と友として善し、京傳馬琴と交はらず、就中馬琴を忌むこと警敵の如しと聞えたり、
いかなる故にや、己れに勝るとを忌む、胸狭ければならん

又その『浮世床』『浮世風呂』を評して曰はく、

（前略）されば皆膝栗毛の二の町にて、等類を脱かれがたかり、畢竟淺草の奥山にて、留藏が落
語に聞はれて、長き春の日の暮るゝを知らぬ看官を一の得意とすなる冊子にあなれば、好悪褒貶
なき事を得ず、（下略）

中本を以て『留藏が話』に比らぶるに至つては不當も亦甚しといふへし、三馬が始め『浮世風呂』
を著はすや、三笑亭花樂が落語に錢湯の趣を語れるを聞きて、想を設けしと自記せり、思ふに馬
琴のこの評言も、其の邊より來たりしなるべけれど、若し果して馬琴のいふ如しとせば、馬琴自
家の讀本も亦柳原あたりに張扇を叩く講釋師の謔語に外ならざるべし、

三馬が一代の傑作なる『浮世風呂』『浮世床』を以て、「膝栗毛の二の町」とは何たる偏見ぞや、
『浮世風呂』『浮世床』の短かきは『膝栗毛』の編を累ぬること數十なるに及はず、その滑稽また『膝栗
毛』の讀む者をして願を解かしむるに及ばずと雖も、能く人情を描寫し、世態を穿鑿するの妙に
至つては、到底一九の及ばざる所なり、特に一九の『膝栗毛』の如き長きは即ち長しと雖も、現に
馬琴が此書に於て言へる如く、

はじめ一二編は新案を旨とせしが、編を累ぬるまゝに古き洒落などもまじへ、且相似たる事

多けれ共、看官は其處らに意をとめず

况んや一九が滑稽、往々鄙陋の域に陥り、彼の萬象亭が洒落本を評せし言葉の如く、「尻を出して
見物を笑はせる類」多きをや、然るに馬琴の鑑識に於て、彼を重しとして此を輕しとするは何ぞや、
想ふに一九が無邪氣なる性行は殆んど彼れが嫉妬心を激するに足らざりしならんか、さればこそ
彼が三馬種彦を罵るに似もやらず、一九を評しては連りに其の著述の售れたる事をいひ、單に著
作を以て口を糊せしものは一九一人なりといひ、又その性行を叙して

性酒を嗜む事甚しく、生涯言行を屑とせず、淨薄の浮世人にて、文人墨客の如くならざれば書
買等に愛せられて云々

即ち一九は「愛」せらるゝの人なりしなり、彼れが「文人墨客の如くならざりし」とは即ち矜伐の癖
なかりし謂にして、斯の如くんば、彼の大傲慢家なる馬琴と雖も、何を以て之を憎むとを得べき、
其の一九に對する筆法の寛大なりしは蓋し此れが爲めなるべし、

結論

馬琴曩きに『いたはでもの記』を著はして、其の恩人なりし京傳を裏切りたりき、而して彼が後半生
の惡徳たりし傲慢は尙ほ之れを以て足れりとせず、又この『作者部類』を著はして一代の戯作家
を裏切り、各自の著述を罵り、その失行を發いて己れ一人を揚げんとするに汲々たりき、マコウレ
イ曾てボスウィルが『ジョンソン傳』を評して曰く「其の書益々貴ばれて其の著者益々賤まるべ

し』と、『作者部類』の後の文學史を編む者に益あることは既に述べたり、而して予また私かに其書の貴ばるゝに従つて、馬琴の名聲益々下らんことを恐る。

近頃世に一種の人あり、馬琴を尊びて大文豪なりとし、大學者なりとし喧々稱賛して止まず、其の大文豪なりといふは可なり、大學者といふは不可なりと雖もなほ可なり、其大徳行家なりといふに至ては妄又妄なるものにして決して可なりと言ふべからざるなり、(明治廿一年七月)

當世後言

立川馬馬、依田百川を懲らす

ある日、向島なる學海居士の別荘へ、八十ばかりの老人、豆本田にたぶく股引といふ當世には稀なる扮装にて入り來り、拙者は本所の足袋屋なるが少々御主人のお眼に掛りたしと言ひければ、學海居士も大きに怪みながら、廣やかなる座敷へ通し、先づ御身はそもく何人なりやと問ふに老人はいと落附き顔にて、拙者は文化の昔に身まかりたる立川馬馬なるが、近頃そこ許の「演劇改革談」といふもの『早稲田文學』とやらいふ雜誌にて見受けたるが其に就き一言申したき事あつて、遙々推參致したり、先年吾妻座での失敗にも懲り玉はで、相變はらず野郎の卵のやうに「かいらようく」とせき込まるゝこと、先づはお達者なこと、愚老ほどく感心仕りぬ、と始めかちけなしてかゝるに、固より氣早の居士、さては平生大嫌なる劇通の本尊めが、自分を遣込めんとて來をつたか、と少しく氣色を損じ、シテ又貴老のお話とは如何なる事かと問ひ掛ければ、馬

馬老人莞爾と打笑みて、さればなり、先頃の改革談、あれではまだ其許の意見が充分のみ込めぬ所もあれど、第一芝居を成べく實際にせよとの仰せ、誠に以て存外の誤迷論なり、これは狂言の脚色、役者の仕打、衣装、道具、囃子、まで一切をくるめての論とは存ずれど、全く寫眞の通りに油繪をかけと言ふやうなもので、本元の寫眞さへ實物と寸分違はぬやうには參らぬ所を見れば、いよく以て此論は御無理千萬の誂へと申すべきか、一躰美術は美術なり、實地は實地なり、おながち實地をそのまゝに似せたりとて、それにて美術の神髓を得たりとは申されまじ、成程拙者として餘り牽強附會の脚色を好むにはあらねど、其れも狂言なれば是非のないなり、早い處が沙翁の劇曲なるが、拙者も冥府にて彼男とは特更熟懇に致し、毎日色々の話も聞きもし語りもして居り、其許とて先年馬琴の事を東洋の沙翁など書きし事あれば、全く御存じないとは義理にも申されまい、そのまた沙翁の劇曲にも、無稽の脚色はいくらもある例にて、譬へばハムレットの父が死したる後に姿を現し、ホルシヤが男となつて裁判をするなど、此等に比べては、其許の非難し玉ふ熊谷が我が子の首を身代りにするくらゐは何でもなきことなり、さりながら今日沙翁をほめる者こそあれ、こんな事で非難する者さらくありとは覺えず、又曾我の對面の祐經の御講釋も一應御尤もの様なれど、只今申したる如く、沙翁の狂言でさへ彼國にて悉皆其の時代の扮装とは參らぬとの事、今其許は無暗に「上流社會」を振りまはして、今日の芝居は野卑なりとの玉へど現在上流社會を得意とする英國の大芝居でさへ此の通りなれば、况してや我邦今日の境界にて、衣装を時代に叶はせよとの御託宣などは言ふべくして行ふ可からざる事と申すべし、此外花道を廢

めよ廻舞臺を改めよとの御注文などに至つては、取るに足らざる屁理屈にて、若しいよ／＼其許のいふ通りにしたくば、野原の場にては、小屋の天井を外して青空を見せねばならず、板敷の上
に山のある筈なれば、遂には舞臺の床を剝がして築山を持つて來る事とはなるべし、これ逍遙
大人の所謂何處までも際限のなき話にて、猶ほらつけうの皮むいて／＼盡きざるの類なり、素
より「なるべく」といふ豫防線は張られたれど、何處まで成るべくの境にや、それこそ雲を攫ん
で風を食ふやうなもので、此邊に於てはそこ許の改革談も曖昧模糊、イヤ前後撞着の嘲りなきを
得んや、其上戦争も切腹もあどさきの景況ばかりを見せたしの御名論、マサカ箱根八里の駕かき
ではあるまいし、それ程あどさきがお好きならば、狂言の主公となるべき人の赤子宙で幕の開く
生湯の場と、一ツ鐘で收まる葬式の場ばかりにしたらば、一層の妙ではあるまいか、そも吾が邦、
芝居の始まりは物真似狂言盡しと稱へ、踊所作事にて世態人情を真似たるものが、漸々進歩して
先づは今日の歌舞伎となりたるなれば、真似るといふも前に申した寫真どほりに油畫をかけたとい
ふやうな譯ではなく、假令煮豆の木のぼりでも樹立の形に見ゆれば其れでよいとしたものなり、
さればこそ昔の名優の言葉にも、誠の酒を飲まずして酔つたと見物に見せるが藝の極まり、舞臺
で本物の飯を食ふなどは愚の至り、だと言ひし例あり、我邦芝居の精神は先づ此邊にありといふ
べきか、又近松の評論も全くの無鐵砲、一種の幫間などとは何の嘖語ぞ、如何にも當時の流行に
媚たるはさもあるべき事ながら、凡そ東西古今の差別なく、戯曲家にあれ、小説家にあれ、誰と
て時好のために左右せられぬ者あるべき、それを今更の様に近松一人を責め玉ふこと随分の偏見

といふべく、そこ許とて苟くも筆とる身分は相見互、この邊の察しがないとは扱々呆れも返らぬ
話なり、特には近松とて全く卑俗に陥らざりし證據には、『世繼曾我』の道行にて「馬方いやよ」と
いふ文句を、時の語り手、故と馬方の言葉を其まゝに語りたれば、近松晩年に及んで人に向ひて
二十年の昔、今も思出して汗をかくとて恥入しとなり、又劇曲でもなき『源氏』や『竹取』を持出して
近松は遙か之れに劣るとは飛んだ月鑑論、よしんば九いと四角と比べられるものにせよ『源氏』と
て趣向の尻尾切れなる處あり、『竹取』にも月宮の美人假りに人間と化けて、再び富士の山から宙
乗をするなどは、其許のいはれし實際にありそうな事ではあるまじ、又黙阿彌を捕へて譯も分ら
ぬやつとは却てさう言はつしやる御當人が譯も分らぬ方なり、其上最も笑ふべきは、聖人の教は
禮樂を主とするなど、途方もない痴氣筋を持出して、因果應報の四文字を狂言の眼目のやうに心
得らるゝは如何なことぞ、盜跖壽を以て終り、顔回卒に早く天す、天道非か是か、と太史公さへ
疑ひを遺した事が、何よりの證據、それでも因果應報が實際に近いどの玉ふか、物べて此度の御
議論、何とやらん劇界には福地以外の人を入れぬ口惜紛れに、焼けの勘八、八ッ當りに當たり散
らしたやうに見受けられ、出版して賣れず、芝居にては受付けずとの述懐、尙更お腹の底が見え
透かされて大きに御仁躰を落されたり、但し其鬱憤もさる事ながら、飛んだ傍杖、劇評家の天窓
に落ち掛り、主として新聞屋の劇評家連を蹴飛ばさねばならぬとの大氣焰、いやはや御盛んの事
共なり、然しながら本來が子曰くで出來上つた其許なれば、案外うぶな所があると見えて、團十
郎などが御名論に感服して、新富座の『漂流談』は其結果で御座るとの昔自慢、感心とは言ひたけ

れど、茲に御一考を願ひたきは、愛嬌が家業の役者藝人、昔は吉原の幫間が歳前客の河東節を聞て妙々と手を拍つた例もあれば、腹の中では素人の癖に何を言ふぞと思つても、折角の御教訓早速さう致します、と世辭をいふが役者の當然、夫を眞事と心得るが野暮の骨頂なり、御氣の毒ながら、彼の『漂流奇談』は其のとき丁度菊五郎左團次どもに田舎廻りの留守中にて、役者は無人なり、芝居は不入りなり、詮方なしの窮策に、幸ひ横濱まで來合はせられた西洋役者を招寄して、間に合せに蓋を開けたのだといふこと、これも昨年拙者の所へ尋ね來りし黙阿彌が話で能く存じ居るなり、又改良の手段として今の芝居を入のない様にすると御名案、萬一首尾よく不入とならばそれこそ芝居町の難儀なれど、幸ひにして天道人を殺さず、調伏の人形は立役に堀返されて、「サアンレハ」の線上になる事、鏡にかけて見る如し、其許如何ほど自分の脚本世に用ひられねばとて、自ら三枚目の愚を學んで、器量を下げ玉ふは大に心得違ひなり、兎角せいては事を仕損ずる、先づ緩くりと氣を鎮めて思案を仕直し玉ふべし、其折にこそ重ねて見參に入り申さん、さらばさらばと言ふかと思へば、今まで在りし馬が姿煙の如く消え失せりけり(明治廿七年五月)

明治廿七年の梨園

余は茲に昨年に於ける梨園の沿革を叙するに當りて、これを前半期及び後半期の二節に區別するの必要を感じたり、何となれば彼の社會の有らゆる事物特に梨園界に甚からざる影響を及ぼし、征清の大事は、恰も昨年の中央に起りて、斯の前後兩半期の間に一大陸界線を劃すれば也、

即ち前半期に於ける梨園は全く無爲の中に経過したりき、若し『歌舞妓年代記』的の瑣末なる記事を除けば、殆んどの叙すべき事なしと謂ふも不可なかべし、但その間の小波瀾として少しく記臆を要するものは、或る二三の文學者が演劇改良に關して啄を容れたる事これなり、故に余は此の前半期を名けて假りに『改良論の時代』とす、

蓋し我邦梨園の關門鎖すこと固くして、所謂狂言作者以外の女士を容れざるや久し、明治以來不完全ながらも我が文學の進歩したる餘勢は、彬々たる女士を驅りて孰れも此の關門を打破するに餘念なからしめ、特に櫻痴居士が僅に其の小隙を潛入りし事は、愈々彼の二三子の熱望を熾んならしめたるのみならず、之れに加ふるに名聞と利慾との二點は益々彼等の野心を煽動して、此の文壇の別天地に垂涎すること恰も當年の白哲人種が絶東の黄金島に於けるが如き觀ありし也、是より先き一昨年未、『早稲田文學』は其の終刊に於て山田美妙齋主人の消息を齎らして、彼が此の三年の歲月を梨園觀察者として経過せしこと、又斯の如くして觀察したる結果は將に文壇に何等かの光を放つべき事を云へり、果然、明治廿七年の早春に於て、其の新作の脚本『村上義光』は一書肆に依て出版せられ、次いで其の『梨園の内幕』は『早稲田文學』の紙上に續載せられたり、但し此等は唯識者の失笑と冷罵とを買ふに止まりて、未だ甚しき効驗を來たすに及ばず、越えて四月に至り、依田學海翁は新たに佛國より歸來して、西洋の劇に通じたりと稱せる長田秋濤子、及び彼の美妙齋主人と連合して、演劇に關し大に爲す所あらんとし、翁の『演劇改革談』一たび『早稲田文學』に出で、急激なる寫實主義を主張するに及び、識者は啞然として其陋なるを笑ひ、

劇評家は怫然として己れを評するの酷なるを憤れり、其の「改革談」の如何なる論旨なるかは茲に繰返す價値なしと雖も、

劇界には鐵門堅く鎖されて、福地以外には何人も入るとを得ず、……所詮今の所にては、書籍として出版しても賣れず、さりさて芝居にては尙受け付けず

と云へるが如き、暗に今の野心深き文學者の述懐を代表したるも可笑し、學海翁の「改革談」に次ぎて、文壇の或る一部分に「脚本會」の起るあり、櫻痴居士また其の中に伍して、會員の作を劇場に上ぼすに斡旋すべしとの事なりしが、其れさへ幾もなく立消の姿となりて、茲に「改良論の時代」は過ぎ去りけり、

此の間梨園それ自身は、各座ともに例に依て開場し、入不入あると亦例の如し、就中櫻痴居士が歌舞伎座の五月狂言に、「日蓮記」を物して左したる成功の無かりしこと、明治座の興行毎に竹柴其水の新作を演じて、巧みとは謂ひ難き代りに却つて大入を博せしこと、糸八一派の女優が分裂せしこと、市村座の新築成りて舞臺開きの興行ありしこと、又左團次が或る事情の爲め俳優取締を辭して權十郎之に代りたることなど、此れ重立ちたること事の二三なり、

忽にして霹靂一聲、朝野の耳目を奪ひしものあり、征清出軍の令是也、梨園は是が爲め大恐慌を來たし、俄かに其の舉行を中止する者あり、偶僥倖を期して開場する者も多くは失敗がちにして後半期これより生まれり、予は假りに「壯士劇の時代」といふ、壯士劇川上一座この時に當り、「日清戦争」を演じて大に時好に投じ、在來の歌舞伎芝居、春木座、歌舞伎座、明治座の大劇場を始と

して、滿都の劇場皆これに模擬せざるものなし、然れども世評は孰れも川上一座の右に出づる能はず、就中歌舞伎座の如き、櫻痴居士の新作を以て尙は大失敗たるを免れざりき、是に於て壯士劇を賞賛し、舊劇を非難するの聲は劇評家の間に起れり、關根默庵子先づ此事を論じて曰く、

壯士芝居亦自ら其の長所あり、在來の歌舞伎亦自ら其の短所あり、例へば徳川時代以上の事を演ぜむとするか、時代物にあり、世話物にあり即ち歌舞伎の得意とする所にして、壯士芝居の不得意なる所なり、其の維新以來の事、世話物の中にて所謂散髪物を演ぜむとするか、即ち壯士芝居の得意とする所にして、歌舞伎の不得意とする所なり、……日清戦争は所謂散髪物なり、而かも最も新しき事を材料としたる世話物なり、然れば壯士芝居に取りては最も得意なるもの、はた歌舞伎に於て最も不得意なるものなるや論を俟たず

とて、將は舊劇に於ける作者の拙劣なる事、俳優の無學にして技藝の精神を缺ぐ事、且つ其の昔に比して不熱心なる事、等を以て舊劇追歩の原因なりとし、終に

若し此勢を以て將來をトせば、予私に所謂壯士芝居が終に中原の鹿を獲んかを恐る
とまで論じたりき、櫻痴居士また恰も此時を以て其の「國民之友」に投じたる「演劇秘密談」に、殆ど此と相似たる説を述べて

思ふに團菊左三名優百歳の後、それが後動たるべき者は、今の俳優中殆ど無し、強て之を求めば現時の壯士芝居俳優中より出づるならん

と言ひ、「やまと新聞」の好劇漁夫（條野探菊子？）亦川上一座が他座に超絶せしものを數へて、協同

交際、勉強、分方（損益を金主と共にすること）の四なりと言へり、而して『早稲田文學』また『劇海の風潮』と題して、稍公平なる觀察を下して曰く

壯士劇はもて一種の雜劇、其の技術幻、其の脚本尙甚だ粗、彼れを美術と稱せんこと難く、此を美文と名けんこと難し、而も新感想を表白して、所謂寫實の面影を現する物としては、尠くも題目の書生紳士等に関する限は彼れ徃々にして歌舞伎に勝れり、……今や時勢の潮流は觀者を驅つて二者を併觀するに至らしめ、隨うて壯士劇の特質やうやく廣く認められ、舊作者及び舊俳優の或點に於ける甚しき不能は俗衆の目にだに歴然たるに至れり

と、蓋し歌舞伎狂言起りてより三百年、この間其の發達驚く可きものなきにあらずと雖も、而も其の發達の區域は極めて偏頗狹隘なるのみならず、或る定度に至りて遽かに進歩を中止し、此より後は、唯秩序的、保守的、また模倣的たるを免れず、此を以て其趣味の千篇一律にして變化百出の妙を缺くと共に、時勢と相伴ふて面目を改むること能はざる也、苟くも今の時の古の時に非ずして、歌舞伎は猶依然たる古の歌舞伎、しかも千篇一律的なるものなるを知らば、向後に於ける彼等の命數は語らずして自ら明らかならん、余は或は明治時代に於ける歌舞伎狂言は、猶ほ徳川時代に於ける能狂言の如く、僅に前代の遺物として一局部の好事者流に弄ばるゝに過ぎざるなきかを恐るゝ也、現に此年の春、歌舞伎座に於て、團菊の名優を集めて『妹背山』を演じたる時の如き、好劇者は之を三十年以來の奇觀として贊賞措く所を知らざるにも拘はらず、世人は意外に冷淡にして、遂に座主の損耗を來したるは、他に雜多の事情なきに非ずと雖も、舊劇の既に看客に倦まれたること蓋し其の大原因ならん、

さればとて、壯士劇また今の劇評家の思へるだけの技倆あるに非ず、其の戰爭劇によりて舊來の歌舞伎を壓倒せし所以のものは、幸にして戰爭劇が最大なる同情を看客に促すの機會に出會たれば也、極端の寫實が却て俗衆に悦ばるゝの時節に際會したれば也、而かも此れ一時の偶然のみ、久しく引續くべき事にあらざる也、余は這般の競争を以て、眞に壯士劇の勝利、また眞に歌舞伎の失敗と認むること能はずと雖も、是が爲め梨園革新の時期を促せしことは決して疑ふ可からざる也、

此の他後半期に於ける現象の中にて、大小劇場合同説の稍實行せられんとするが如き、又新聞記者の劇部に入りて文字以外の事務に齟齬たる者多きが如き、孰れも輕々看過すべからざる事なりと雖も、此等は他日更めて論評する事あるべし、（明治廿八年一月）

十八大通

安永の末寛政の初、こゝに十八大通と呼ばれて、一代の榮華を極めたる者江戸の中に數多ありけり、此輩の風俗、頭は本田鬘に結びて水髪の刷毛先細く、額を三分ばかり拔上げて中刷を廣くし、衣服は薄綿の小袖を三枚重ねにして、之を三衣と呼び、行丈け長く、身幅廣く、袖口を狭くし、フキを淺くし、其色は總べて黒きを尙ひたり、紋は細輪にして小さく、襦袢は其長け五分を定めとし、長羽織の紐を根元に結び、銀煙管を脂下りに啣へ、物言ふに語のアドを誦め、游藝は江戸節を専らとして、游廓に浮かれ、芝居に遊び、花に月にいろ／＼さま／＼の戯れを盡して、身代微

塵となるを吝まず、果ては喜見城の歡樂一期の夢と消えて、陋巷に窮死せしも多かりき、其の人々の名は今に於て詳かならねど、珉里亭榮思が記せし『殘菜袋』には十五人を掲げたり、即ち大黒屋秀氏(勘四郎)、村木屋帆船(平四郎)、松坂屋左達(市右衛門)、大和屋文魚(太郎次)、大口屋曉翁(次兵衛)、同く稻有(平兵衛)、同く金翠(八兵衛)、同く有游(平十郎)、桂川甫周(森羅萬象)、祇園珉里、樽屋萬山、下野屋祇蘭(十右衛門)、近江屋柳賀(伊平次)、平野屋魚交(久次郎)、大崎雄石、これなり、又立川馬馬が作なる『基太平記白石噺』の七段目に、「通人舞」として十八大通の名寄せあり、

なるともく、此頃揚屋町のせうが標が附けた通人舞、新造さん方彈いておくれ、今爰で神おろし、末社といふも我等が名、牽頭といふも一つにて、これ此の面を斯う破り、あれにまします新造の、上若を暫く借りに着て、既に拍子を始めけり、通人舞を見さいな大通人の客選には、いつも廊へ通ふ神、ふみの文魚も走り書、男の喜十立ぬいてもの雄石の鯉藤さば、よいせきではないかいな、首尾を今日六川の、龜も八龜も文洲に、來之あれば幸先きも、よしや形よし、振りもよし原、漁長十橋羅牧十、渭洲左達に秀民眉月、照らす千里の夕げえ、祇蘭秀で、菊もけふはく、阿能待美や江戸のさち、墨河安穩千局萬川夜るの嘯柯もいさましや、太鼓末社のかみも賑はし、只今かなづる舞樂の曲、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな云々

都合廿二人にして、文魚雄石左達秀氏祇蘭の五人は、前にいへる『殘菜袋』と同じ、十橋とは大口曉翁が異號にして、時には十曉とも書き、又曉雨ともいへり、森羅とは森羅萬象の略にして、桂川甫周が狂名なり、萬川は樽屋三郎次が事にて、『殘菜袋』に載せたる萬山と同じ人なり、墨河は扇屋宇右衛門、鯉藤は鯉屋藤左衛門、嘯柯は尾張屋三之助、其他十一人は姓氏を詳かにするこ

と能はず、思ふに十八大通とは、其人必ずしも十八ありしにはあらず、其頃の所謂通人等を廣く指していへる語なるべし、上に述べたる中にて、大黒屋秀氏と扇屋墨河とは吉原妓樓の主人なり、桂川甫周は町醫者にて、平賀鳩溪に従ひ戯作者の群に入り、村木屋帆船は春海が事にして國學の大家なるは人の能く知る所なり、其他は概ね藏前の札差し、或は市中の豪商にして、就中文魚と曉翁とを一連の頭領としたりき、文魚は日本橋西河岸の材木屋にして、通稱を山城屋太郎次といへり、或る夏の日、吉原の引手茶屋にて全盛の遊びをなすべしと、前以て太鼓末社に知らせ遣りければ、名にしふ文魚様のこととて随分面白き趣向もあるべしと、各々其日の來るを待兼ねしが、扱て當日に至り、一同約束の茶屋へ起き見れば、文魚は只一人、この熱くるしき日中に、廣座敷の真中に大火鉢を据えて、さも寒げにあたり居たり、先づ「此方へどの言葉に、怪しみながら近寄れば、火鉢に盛りて灰と見えしは三盆白の砂糖にて、火の片とては一つもあらぬに、扱ては昔時の水野某が故智を襲きて土用を冬にしたる遊びか、陳腐きこと哉と心の裡に嘲るうち、文魚は人々に向ひ此の白砂糖を雪と見て、座中に雪ぶつけの遊びは面白からん、これはいよいよの殺風景と思ふ間もあらばこそ現自から彼の白砂糖を手一杯に握り固めて投げ出せば、火鉢の底より金銀大小の通貨、幾つとなくはれたるを、これも雪ぞと惜氣なく投附くるに、初め嘲りたるにも似ず孰れも席を亂して争ひ拾ひけるにぞ、同行の人も、はじめて文魚が意を曉りて、舌を巻きけるとぞ、

一とせ十八大通の面々打連れて、富士詣での企ありけり、江戸を出づるときより、文魚頸の邊りに小さき風呂敷包を結附けて、入手に渡さず、兎角して山の麓に來りければ、皆々脚半を穿き草鞋を着け、山を攀登る用意にと、努めて身輕に打扮ち、其の包も強力の男に渡し給へと勸むれど文魚いづかな聽入れず、此れは身に取つて一方ならぬ大事の物なれば、太儀ながら自分にて運ぶべしとて登山しけるが、漸く頂に達して初めて彼の包を取出すを見れば、こは如何に一管の鼠花火なり、日本一の高き處にて、此の花火を揚げたさばかりに、遙々の道程を入手に渡さざりし文魚が物好き、末代までの語り草よと人々手を拍ちて感むける、

吉原にての例に、年々の七夕には、小笹の枝に遊女どもの短冊をつけて、屋根の上に立つることなり、されば其日此の里へ入込む笹賣りの夥しきを、文魚或る年の七夕に、態と大門口の引手茶屋に到りて、一人々々呼どめ、直段に構はず笹を残りず買占めれば、遊女どもはかね／＼待設けたる笹賣りの、一人も來ざるを怪しみ、段々様子を聞けば、日頃通り者と聞えし文魚が残りなく買占めしとの事に、如何なる趣向のあることかは知らねど、毎年の吉例を今年だけ缺くといふは縁起わるし、彼の人とて滿更知らぬ顔でもなければ、譯を告げて頼まば、一本や二本の笹、よもや否とは言ふまじと、番新禿を文魚が許に走らするに、文魚は笑聲に入り、折角のお頼みなれば、随分進ませまいものでもなければ、君達の直筆を給はらではとの事に、五町の遊女われ／＼と或は手紙、或は短冊、おもひ／＼の走り書して贈りたれば、さしもの笹も一つ残りず片附きて、其代りに、僅か一日に有らゆる遊女の手跡を集め得たりし、

或る日、十八大通の會合に、文魚ひとり銀の針金もて髪を結はせて出でたり、餘の通人ども之を見て、文魚が銀の元結も今日一日の晴れなれば、さほど驚くことかはと云ひしを聞いて、それより後は平日も銀の針金にて結はせしといふ、

風來山人が「蛇蛻青大通」といふ、世の半可通を罵りたる小本に、文魚が言葉を引きたり、所々作者の文飾もあるべけれど、文魚が平生の意氣おのづから現はれて、恰も其人を見るが如し、

今の浮世の女郎買に、まだしも見ゆるものは新吾左の遊びなり、買切つた上からは、傾城の五輪五鉢は我が物と決定し、例令馴染の客にせよ買引きを聞入れず、ちつと床が不動めか、又は床廻りが悪いと、忘八を呼べと切刃まはし、あたり擁はすがなり出せば、心の内では親の敵のやうに思ひながらも、何でも一夜の賜顧なれば、おゆるしなんと、誤て小言いはるゝ右流左きに、まん／＼りともせず動ても、商賣冥利斯くする筈と、客さしふ字を真向に差置し、腹一杯に權威をふるへど、定式の入目の外、格別金が入るでもなし、又聞た風の通どもが、書人さか魂膽師さか名を付て、諸事控目に立廻り面白くさゝわて居る最中に、件の如き客が來て、差合ならば貰ふて出せと、言譯聞かず叩散らせば、まだ貰にも來ぬ先に、爰が通だど氣を通し、やア手前が客人か、つがもれエもんちきだの、シタがあんな奴が爲になる、おりやアエから動めたが、いゝ、ちんな横倒しやア座敷も明けるよ云ふだらう、口を明かせれやうに此けエ入れたがエと、うぬがオから引けを取り、氣を通す心遣ひ、誠に粹が身を喰ふさは、此等が事を言ふなるべし、この調子では、萬事けち／＼と立廻るを、色仕立と號くる由、何處の仕立屋が仕立るか、去りまは窮風な仕立やう、吾等がやうな肥滿た者には、尻がへばつて着惡し、

文魚其の後産を破りて、鹿河岸に間口二間ばかりの格子造りの家に移り、昔に變はる詫しき暮しはしたれど、潤達の氣象は何處までも残りて、去る貴人の隠居、文魚が河東節に、上手なるを聞き、

わざ／＼屋敷に招き、所望の淨瑠璃も濟みて、別間にてさまざまの馳走ありしに、其時三味線を弾きしは山彦源四郎といふ名人と、外一人なりしが、孰れも遊藝に衣食するものとして、若干の目録を賜はりたれど、流石は文魚は零落れども藝人にあらぬば、目録の代りに八丈編五反を與らしぬ、文魚即座に三味線弾に向ひ、今日はただ太儀なりし、是は寸志ぞとて、一人に其の反物三反、今一人に二反を遣はしけり、明くる日、彼の源四郎より此事を山東京傳に語り、文魚が意氣の潔きに感ぜしを、京傳が弟京山、其傍らに在りて親しく聞たりとて、其が隨筆なる『蜘蛛の糸巻』に記しぬ、寛政十二年二月廿七月歿す、七十七

其頃の文人の生涯は、戯作半分幫間半分といふが多かりしこととして、例の十八大通の取巻きに遣はれ、腹の痛まぬ茶屋酒に舌鼓を鳴らせるもありしが、中にも山東京傳は文魚の覺を最もめでたくして、若き頃は家を外と遊廻りたれど、一紙半錢も親類には迷惑かけず、悉皆文魚に賄はせし由にて、馬琴が『いはでもの記』に「自分の財を費さずして、數年遊里に樂を極めたる、亦是れ一奇と謂ふべし」などと、冷評し去れるも可笑し、

田螺金魚も此の幫間の一人にして、安永七年に出版せる『十八大通百手枕』といふ洒落本に、連りに十八大通のことを稱揚し、また『傾城買虎巻』とて、五卿といふ客が、松葉屋の瀬川に慕はれし物語を綴れるは、當時二代目の瀬川が大日屋曉雨の義理につまりて、自殺せしことを材料とせしなりとぞ、此の瀬川が自殺は寶曆八年三月朔日の事にて、其翌年、中村座の春狂言『初買和田酒盛』といふ曾我の世界に、この自害の場を任組みて大當りを取りし由、『越方覺書』といふ寫

本には見えたれど、事實果して如何にや、墮落文人が馳走酒の御禮心に、さあらぬことまで業々しく傳へたるが多ければ、此等の説も餘りに信じ難し、

曉雨とは前にも述べたる通り、御藏前の札差大口屋治兵衛が事にて、又一書には杏雨とも書けり、十曉といひ、十橋といひ、或は曉翁といひ、杏翁といひしも、皆この人のことなり、元文の頃、穢多の糸八といふ者、仲間の者を大勢引連れて、夜な／＼吉原をぞめき歩き、黒羽二重の小袖羽織に金銀造りの一腰を差し、遊女屋へあがりて、湯水の如く金銀を詩散らすに、元來穢多非人の徒を客にするは、此の里にて禁制の事なりしも、家によりては、知らず顔に彼の糸八を揚げるものありしかば、後には其の邊りの地廻りを金にて懐け、己が手下とし、親分々々と仰がせて、大手を振つて仲の町を通りながら、繁昌の遊女にさまざまの毒口をきき、廓の迷惑大方ならねども、悪く當らば如何なる返報をも仕兼まじきを恐れて、人々彼れに逆らはねば、愈々つけ上りて狼藉の事のみ多かりける、或る夜、曉雨は仲の町の葛屋にて、遊女を集め酒宴を催し居ける處へ、彼の糸八大勢の手下を連れて通り掛りたれば、曉雨は大聲揚げて、何やら甚しく臭くなりたり、是れは臭し／＼と鼻を摘むに、糸八立止り、某が此處を通りしに、臭しと申さるゝは、我等が臭う御座るか、と血相變へてねだり掛けたり、其時曉雨は冷笑ひながら、如何にも臭きゆゑ臭しと申したり、志かも只の臭ひにあらず、癩病が但しは穢多かと、言ければ糸八大きに憤りて、此奴無禮なりと、脇差に手を掛くるを、曉雨は己が穿きたる下駄の、庭にありしを左手に持ち、右手にて糸八を引寄せ、おのれ日頃より推參なりと思ひしが、時節なかりし故今日までは免したり、覺

悟せよと言ひさま取て引伏せ、彼の下駄にて散々に打据えければ、手下の者共は之を見て、皆蜘蛛の子を散らすが如く、何處ともなく逃去りぬ。曉雨やがて糸八を引起し、おのれ打殺す奴なれど、穢多一匹殺しても詮なきことなり、一命は助け遣はす程に、今後再び大門を入ること勿れ、重ねて來らんには、此の曉雨が只一打に打殺さんどて放ち遣りぬ。

扱て茶屋の者共申しけるは、糸八あのやうなる耻辱を取りながら、手を束ねて止むべきや、御歸り路の如何にも心元なければ、宵の中水道尻から密と出でらるべし、と勸むれど曉雨はいつかな聽入れず、彼れを恐れて脇道より逃歸りしとありては、後日曉雨の男立たず、と其夜も寛々と遊び、いよ／＼七ツ時になりて立歸らんとするに、人々袖を控へて、せめては夜明けて歸り給へ、といへど、何の彼等如き、恐るゝに足らず、と見送りの男さへ斷り、夜ふけに只一人、裾長の小袖に覆面頭巾被りて、大門を出で、衣紋坂を登り、メリヤスを唄ひながら日本堤に差掛りしに、果して土手半ばごろに、糸八を首めとして、同類の穢多も待伏せ居りたり、曉雨これを見て、忽ち大聲に、あら不思議や、此の土手に又もや臭きものあり、千住小塚原の焼場の臭ひでもなし、是は正しく穢多の臭ひなり、扱は糸八が宵の仕返しに、此處にて待伏せるにやあらん、いざ出でよ、踏殺し呉れむ、と懐手のまゝにて尻捲くらんとせせず、足駄踏み鳴らしつゝ、のさり／＼と歩み寄るに、待伏せしたる大勢の者、此の勢に恐れて、一人も出で合ふ者なく、曉雨は無事に家に歸りて、此より後五丁町に穢多の臭ひせずなりぬ。

其後曉雨常に言ひけるは、凡そ世上の男達なる者、尻に手を掛け、裾を端折りなどするは未其道

の心得なきものなり、されば役者の仕打にても、姉川新四郎が黒船忠右衛門、及び大谷廣治、中村助五郎が男達は、靴も尻へ手を掛るゆゑ下手なり、其の昔市川栢筵が荒五郎茂兵衛雁金文七、今の三升が助六など、假初にも尻へ手を附けず、ゆるりとしたる形にて、悪者をぶちのめす、此等こそを眞の勇者とは謂ふべけれ、廣治助五郎が藝は穢多の糸八にて、我等が仕打は栢筵三升なりと。

一説には、其頃有福なる穢多にて意休といふ者姿を變へて吉原へ通ひしを、後に其の素性露はれて遊女屋より突出さんとしたるに、兎や角言募りし故、曉雨其席に來合はせて之を打懲らしたるが、其後市川栢筵に此事を語りて、揚巻助六の狂言に仕組ませしとも云へり。

『甲子夜話』にも是れに似たる話を載せたり、或る時、町家にて口論あり、相手は鳶の者の強氣なる男なりしが、中々諸人の手に合はず、人を馳せて曉雨に斯と告げければ、直ちに來りて、己れ憎き奴かなど云ひながら、彼の鳶の者の手先を執らへて捻りたるに、さしにも強さうなりし男、あいた／＼と言ふ儘に、ねぢ伏せられたり、曉雨やがて懐中より煙管筒を取出し、其の紐にて兩手を縛り、町役人の許まで引摺りきて、此の野郎を町外れへ追放つべしとて、悠々と立歸りぬ、觀る人驚きて、曉雨年既に八十に及びて、斯る溢れ者を自在にする事よと、感せぬはなかりける、曉雨人に語つて言へるは、彼の時、われ其の口論の譯を糺せしに、僅に一星金を借らんとして、貸さうりしよりの事なり、因て彼の男の手を握りし時、密かに金五斤を持添へて捻ぢたる故、一言に及ばず自由になりたりと、思ふに、曉雨が本領は全く此邊に在りて、彼の穢多を懲らせし話

などは後人の附會傳説にあらぬか

有遊、稻有、金翠、皆曉雨が一門にして、同じく屋號を大口屋といへり、有遊は通稱を平十郎といひ、天王町代地の札差にて、世盛りの頃は、小判に極印打て通用させし程の分限者なりき、曾て橋場の邊りに別荘を設け、玄關廣間造りの大家に、庭には珍石奇木夥しく、離れ座敷への通ひ路に朱塗の橋を架け、奢侈王侯を凌ぎけるが、終に御咎めを受けて、橋は取拂ひの上焼棄てとなり、家屋敷庭木など官没せられ、代金四千七百兩餘にて入札拂ひとなりしとぞ、其の規模の大なりしことこれにて知るべし、有遊は之が爲め放逐されて、小梅村の狸庵といふに蟄居し、文化の初年に至りて死せり、

稻有は通稱を平兵衛といひ、吉原大文字屋の一もとを身請けして妾となし、一旦隠居して茶事を弄びけるに、後再び家を襲ぎて、全盛の遊びをなしとゆえ、家道終に衰へ、處にも住まひ兼ねて、房州保田の羅漢寺は先祖の建立なればとて、其邊りに忍び居りしが、曾て稻有が世話になりしお綱といふ女、江戸より尋ね來て、夫婦となり、稻有は牛に乗り、お綱に綱を曳かせ、濱邊を廻りて日を暮らしければ、所の者これを見て、似せ菅相丞に女白太夫と綽名せりとぞ、

大口屋八兵衛とは金翠が事にて、これも種々の奢を盡くし、常に淺黄無垢の小袖に綾の丸ぐけ帯を締め、純金の煙管を用ひけり、鳩の八文字を隠し紋としければ、俗に金翠が事を鳩八といへり、寶曆六年四月、中村座にて揚巻助六の狂言に、助六に團十郎、意休に宗十郎にて、例の如く、吉原より杏葉牡丹と三升の紋とを着けたる蛇目の傘、藏前よりは紫縮緬の鉢巻、孰れも幾百本と

く送りて、其の品々は毎日鬮引きにて見物に取らせける、此の時鳩八は吉原にて上總屋の揚巻といふに馴染居ければ、同じ名の揚巻が間夫の爲め積物するはいやなり、我れは意休を最負にせむとて、紫地に鳩八を白糸にて縫ひたる、對の小袖羽織を宗十郎に送りしと云ふ、

八兵衛が子、亦金翠と號し、親にかはらぬ伊達者なりければ、松有稻有と合はせて、之を十八大通の居残りとも名せり、世に藏前風とて、髮の刷毛先を細くし、短羽織を着ることは、此の金翠を嚆矢とすと云ふ、妻は本阿彌の娘なりしが、故ありて中ごろ離別に及び、更に吉原若松屋の縁木といふを根引きして、妻とせり、後退轉して瓦町より諏訪町に移り、再び諏訪町より本所法恩寺前へ移りて此處にて歿せりとぞ、

村田春海は曾て御連歌師坂氏へ養子となりしが、實家の兄某失せて、家を襲ぐ者なかりければ、坂氏を亡命の躰に拵へて實家へ歸り、再び坂氏の女を娶りて、初めは十八大通の仲間なりしも、和學を好みて、終に一代の大家となれり、墨河は吉原の妓樓扇屋の主人にして、本姓は鈴木氏、通稱を宇右衛門といへり、大通としては、さして聞えたる事も無けれど、廓内に於ける様々の式例を改めしこと諸書に見えれば、其頃吉原にての利け者なりしならん、其れまで妓樓に樓名といふものなかりしに、墨河はむめて我家を五明樓と號したるより、丁子屋を鶏舌樓、松葉屋を松葉館など、皆風流めきたる名となりぬ、墨河が妻を稻城といひ、夫婦ながら加藤千蔭が門に入りて、歌と書とを學びける、墨河一とせ京都へ上りし時永觀堂にて詠める句に

見返れば松吹く風や時鳥

墨河が抱の遊女に花扇とて、其頃全盛の名妓ありしが、寛政六年の頃、深く契りし客のために、廊をぬけ出でて、本所邊に潜み居たるを、やう／＼に伴ひ歸りしも、病氣なりとて客に出でざりければ、墨河さま／＼に之を諭し、尙ほ、

散らすとさよめし心も白梅のかげ、かり風の吹きつゝのらむ

と即座に詠じけり、女もいど、涙に暮れながら、返し、

散らすとさよめし垣根の梅の花また来る春に咲、ざらめやは

是より花扇の心惚まりて、全盛昔に變らざりしと、墨河が家法として、毎月一度づゝ、抱の遊女に褒美を取らせ、客の多少によりて、其の品に差等を設けたり、然るに彼の花扇に次いで、瀬川といへる女ありしが、いつも花扇に劣れることの多かりければ、わざと良き品の褒美を瀬川の許へ持たせ遣り、後より、今のは花扇へ遣はすべきを間違ひたればとて、更に輕き品と取替させけり、瀬川これに激せられて勤めに精出し、終に花扇と甲乙を争ふ程になれりと云ふ、墨河は寛政十三年正月十一日、五十八歳にて身歿りぬ、

安永三年の夏の事なりし、十八大通の面々、隅田川に三艘の屋形船を浮べて、唄ひつ踊りつ、與正に耐なりし比、是れも同じ仲間にて、三艘の小舟に青竹の掉さし、揃ひの浴衣に緋縮緬の細帯を締めて、綾瀬の方より彼の屋形舟を眼掛けて進み寄り、舟に積みたる肥桶を搔廻し、甚しきは竹の先きに揃ひて川へ投入れるなど、様々の殺風景を盡くせるにぞ、屋形舟も居堪らずなりて之を避けむとせし時、忽ち小舟の苦を刎退くれば、囃子方一齊に坐りて、馬鹿囃子を打始め、それ

に連れて屋形舟を運行きける、これは石町の河翠、濱町の柳歌といへるが悪戯なりしとぞ、

これも大通の中にて、其の名は逸したれど、本所三つ目に住せし七百石取りの旗本あり、初めは豊かなる暮らしなりしも、大通の爲めに家財を果たし、瘡疾を得て鼻を失へり、又一人は築地に住し、同じく官に仕へて四百石の祿を食みけり、此の男易學の心掛けとてもなかりしに、或る年の十月親しき友達の許に到り、明年七月七日には我が天命終らむ、今日は暇乞に参りたれば、随分馳走を給はれとて、それより諸所に訪づれ往きぬ、人々皆戯言とのみ思ひたれども、望の通り馳走はなしけり、さて翌年の夏に至り、我れ愈々死すべき時近づきぬとて、思ふ儘の遊ひをなし、家來にまで遺念を取らせしが、七月四日、果して急病にて、五十八歳を一期として死せりと云ふ、

又安永の頃、太申といふ者ありき、これは十八大通の中にはあらねど、其行ひの似たる廉もあれば、序にいふべし、太申は三十間堀の材木屋にて、和泉屋甚助といひ、専ら虚名を好みて數多の金を費やしげり、己が表徳なる「太申」の二字を染模様にして、之を太申染と名け、日頃馴染の遊女巴屋の豊里といふに、此の摸様の衣服を着せ、一枚繪にも豊里が其の小袖着たるさまを描かせて板行し、芝居にては中村傳九郎に太申染の衣裳を送り、やがて世上に廣まりたる頃ならんと吳服屋へ行き、太申染を見せよといふに、吳服屋の手代知らず、如何なる形ぞと問ふに、斯様なりと書いて示せば、手代よく／＼見て、これは傳九郎染と申すものなりと言ひぬ、

太申ひそかに烏石に千字文を書せて、太申と落款し、之を墨本に板行して賣らせ、又俳優の點者

となりて、五點へは銀五匁、十點へは十匁、十五點へは金一歩、かきぬきへは小判一枚を貼附けて景物とせしことあり、或は淺草寺の境内へ、數多の櫻を植ゑて、太申櫻と號け、芝居へ頼みて『太申櫻』といふ、淨瑠璃を作らせ、道中の雲介に金を與へて、「お江戸のナ、太申さまは櫻がお好き」と唄はせ、或は醫者に扶持米を送り、表札に「太申内」何某と書き呉れよと頼ければ、彼の醫者心得て、「太申内」の三字を篆字にて書き、己が名前ばかり楷書にて出せしと云ふ、文政中、御與大工棟梁中村彌太夫、後に佛庵老人といへる者、矢張り太申が亞流にして、虚名を街ふことを専らとして、弄ぶ物一つ／＼何人の名作如何なる傳來など、あらぬ物を爾言觸らすの癖あり、曾て隅田川にて天満宮の木像を拾得たりとて、之を深川法禪寺に安置し旭天満宮といへり、實は古道具屋にて求めたるを、斯る虚言を設け無益に人を欺けるなり、佛庵晩年に至り、零落して自分の屋敷など人手に渡り、幸ひ柳島に或る人の別荘のありしを、留守居を兼ねて其處に住居せしが、それも程なく五代目岩井半四郎の手に渡りて、立退きを命ぜられ、更に龜井戸川端の借家に引越せり、移轉の折彼の別荘の座敷より庭先まで奇麗に掃除し、腰張り襖障子などの破れたるを繕ひ、床の間には香爐を置き其の蓋に束ね熨斗を添へ、短冊に萬葉假名にて、

雲介の住み荒したる家なれば乞食の外に誰か住むらん

と書けり、「乞食とは半四郎が役者なるを卑みたる意なるべし、己れを「雲介」といへるは、曾て箱根にて駕夫が持ちたる杖を乞受け、之に諸名家の題詩を刻み附けたればなり、これは當時世に行

はれたる『東海道名所圖會』に銅脈が「雲介行」の狂詩を載せて、其の結句に「竹杖一本天下横行」とありしよりの思付きならん、後には別號を雲介舎といひ、天保五年正月七日に歿せり、

(明治廿八年七月)

東海道四谷怪談

「東海道四谷怪談」は誰れも知れる如く鶴屋南北が當り作にして、文政八年七月中村座に於て、三代目尾上菊五郎の爲めに新作したるものなり、此の菊五郎の養父は尾上松助(元祖菊五郎の弟子にして後に松緑といへり)とて、最も早變りに妙を得、「所謂怪談物」と稱する技藝を創めたりしが、夙に南北の文才に望を屬し、文化元年六月中村座に於て、奈河七三助立作者にて、南北は尙ほ三枚目の作者たりし時、故らに七三助を措き、南北をして『天竺徳兵衛韓斷』に筆を執らしめけるに、此の狂言果して世好に適し、七月三日より九月十三日まで七十日の久しき間興行打續きければ、是より益々南北を重く用ひ、年々歳々新作を物せしむること多かりき、斯くて松助は文化十二年に物故せしが、其子菊五郎また深く南北と相結托し、養父の衣鉢を襲ぎて連りに「怪談物」を演じけり、即ち『四谷怪談』は其一にして、南北が之を新作し、文化八年は、彼が死するに先だつこと僅に四年、實に七十一歳の時なりき、およそ南北が平生の例として、新狂言の腹案あらまし出來上る時は、先づ其の脚色の概畧を世間に示して評判を立てさするなり、されば『四谷怪談』を秋狂言に出さむとせる文政八年の春は、中村座の櫓に大なる紙鳶を懸へし、此れに女の生首が

振袖を嚙へたるさまを畫かしめければ、看る人これは必ず「怪談物」の趣向ならんと、市中の風聞
どり／＼にして、皆々秋狂言の初日を待詫ひしが、果して七月廿七日より興行の名題は、一番目「假
名手本忠臣藏」其の二番目として『東海道四谷怪談』を出だし、其時口上看板の文言は、

(前略) 盆狂言之儀種々及相談候處尾上菊五郎儀兼々天滿宮信仰にて此度心願の旨有之停松助同道仕筑紫太宰府へ參詣仕
度由暫く御當地をも相離れ候故御暇乞之口上申上度段相頼候に付き打寄相談仕る處先年私座にて元祖尾上菊五郎太宰府へ參
詣之御名殘さ仕り忠臣藏の狂言由其之助さなせの役儀相勤め御評判に預り候先例も候得者右之役儀相勤口上申上候様申聞
候處菊五郎申候者右大役にて不及儀さ辭退仕り候故團十郎始め桑三郎源之助幸四郎其外之者共端役をも不服相勤遣し可申候
様深切に申突れ候に付打寄相勤め漸く得心仕右之役相勤申候右に付菊五郎兼て工夫仕置候四谷宿お岩物語男女之怪談新狂言
六幕御座候間右狂言三幕づみ引分忠臣藏大序より六段目迄を初日の一番目と仕り第二番目世話物相添且又後日七段目より敵
討迄怪談三幕右一番目二番目二日替り狂言と仕り總座中罷出奉入御覽候 (下略)

なほ二番目名題の頭書は

御最良様より御好に任せ、古き世界に民谷何某、妻のお岩は子の年度、妹の袖が祝言の、銚子
にまどふ嫉妬のくちなわ、夫も己年の男の縁切、まかも媒に直助が、三行り半の去状は、女の
竿のいろは假名、今も専ら流行の、出雲が作へ無様も、御差圖故に書添し、新狂言は歌舞伎の
榮へ、

狂言の趣向は誰れも知る所なれば、言はず、其の場割は、

(序幕) 淺草境内橋子店の場、按摩宅悦内の場

(同返し) 淺草裏田圃の場、同裏手の場

(二幕目) 雜司が谷四谷村民谷伊右衛門宅の場、同伊藤喜兵衛宅の場

(三幕目) 砂村隠亡堀の場

(四幕目) 深川三角屋敷直助内の場、小鹽田又之丞隠家の場

(五幕目) 七夕祭夢の場、蛇山庵室の場

にて、尚ほ五幕目の次ぎ、『忠臣藏』十一段の義士討入を出せし故、口上看板には之を加へて六
幕とは言ひしなり、

又役割の大畧は、小間物屋與七實は佐藤與茂七、伊右衛門女房お岩、中間小佛小平 (三代目尾上菊
五郎) 直助權兵衛 (五代目松本幸四郎)、民谷伊右衛門 (七代目市川團十郎)、お岩妹お袖 (岩井糸
三郎即ち六代目半四郎)、按摩宅悦 (大谷門藏) 等なりき、因に云ふ、幸堂翁の『江戸好菊五郎稿』
に當時團十郎の役名は「神谷仁右衛門」にて、其後天保二年の興行に始めて「民谷伊右衛門」と
改めし、とあれど、新作の正本にも番附にも「民谷伊右衛門」と見え、前に引ける名題の頭書に
も「古き世界に民谷何某」とあり、特に新作五幕目の夢の場にて

菊五郎 「アイわたしや此あたりの民家に育ちし賤の女子でムリ升る」

團十郎 「ア、そなた 民家の娘か、民家の文字は離れども、言はゞ我等が家名にて、民家は民谷」

といふ落辭あれば、翁の説恐らくは誤謬ならん、

附言「民谷伊右衛門」の役名に就き幸堂翁の説に疑を存したれども、是より先「毎日新聞」に賢阿彌氏既に此事を言ひ、

東海道四谷怪談

四四

次で同翁の辨解も出でたる由なれば、彼の一條は茲に姑らく抹殺し置くべし、
又翁が辨解に、新作の時、お岩稲荷の持主民谷某より故障を申入れ、爲め、急に役名を「神谷仁右衛門」と改めたりと言はれしを、矢張同紙上にお岩稲荷の持主は民谷氏に非ずして却て神谷氏なれば、故障を申入る、筈なしと難ぜられたれど、余が聞く所によれば、お岩が實父は田宮又左衛門といふ者にて（此事は更に次ぎに言ふべし）、特に明治十二年十一月、越前堀一丁目へお岩稲荷を遷し、時、田宮廣宜といふ人より教導費として毎月十圓つ、教院へ寄附せり云へり、されば此の田宮氏は彼の又右衛門が苗裔にて、政府より参拜を公許されしまでは彼社の持主たりしなるべく（参拜の公許は明治六年十月なりしと云ふ）、即ち幸堂翁の「持主民谷某」と言はれしも只同調異字の訛だけに止まり、此點に於ては翁を尤むるに及ばざるべし、

一日の狂言を一番目と二番目とに別ちて、別々の物を演ずるは近世よりの慣はしにて、其昔は必ず四番續きの通し狂言に限り、降つて寛政の頃より、漸く一番目二番目と標題を異にし、一番目には時代物、二番目には世話物を出だす事となりたれど、尙ほ狂言の趣向前後互に連絡して、例へば一番目の曾我五郎が、二番目にては花川戸助六と名を變へて、吉原へ入込むといふ如き作風を尙びたれば、此の『四谷怪談』も一番目の『忠臣藏』に因み、お岩が良人なる民谷伊右衛門を赤穂の不義士となし、妹お袖の聲を四十七士の一人なる佐藤與茂七となし、大詰には義士討入を出すなど、強ひて『忠臣藏』の世界に附會けたり、此等は眞に謂はれ無き事なれど、其の時代の風習斯の如くなれば深く作者を罪するは酷ならん、
斯て此の狂言の趣向は、全く南北が架空の想像より來りたるものには非らず、少くとも三つの傳

説を基とせるもの、如し、

其一は、此の狂言に最も重要なお岩の件にして、これは寛文年中、御先手組頭諏訪左衛門の組屋敷なりし四谷左門町にて、其の組下の同心田宮又左衛門が娘お岩といふ者、嫉妬の爲め身を果し、死しての怨靈良人に祟を爲し、事を綴れるなり、

其二は中間小平次の件にして、これは菊五郎が養父松助の下男小幡小平次といへる者、もとは奥州安積郡の生れにて、後には稻荷町となり芝居へ出勤せるが、生得陰氣の性質にて朋輩より「幽霊」とまで綽名され、間もなく旅役者に落ちて故郷の奥州へ歸りけるに、其妻心良からぬ者なりし故、密夫を語らひ小平次を途中にて殺害に及びたり、松助やがて此事を聞き、怪談物の好き材料なりとて南北に計り、文化五年六月、市村座に於てお妻八郎兵衛の狂言に仕組みて大當を取りしを、南北再び『四谷怪談』に綴れるなり、

其三は直助権兵衛の件にして、これは赤穂浪人小山田庄左衛門が、後年町醫者となりて深川に住居しけるに、其の下男権兵衛といふ者、慾に迷ひて庄左衛門を殺し、後捕はれて磔に行はれしを材料とせるなり、又この権兵衛を「藤八五文」の藥賣となし、序幕に淺草境内の楊子店及び賣淫の中宿を出だせるなどは、すべて當時の流行を穿ちたる例の作者が愛嬌なり、

二幕目雜司ヶ谷の場にて伊右衛門の臺辭に、「二人の死骸を戸板に打付け、姿見の川へ流して直ぐに水葬」とあり、此の死骸三幕目にて深川の隠亡堀へ流れ來るは、地理に於て有るまじき事ならずや、と或人南北に難じたれば、其處が怪談なりとて一笑しけるとぞ、

是より先き、南北尙ほ俵藏といひし頃は、芝居よりの給金も僅かにて生計も思はしからず、漸く高砂町に九尺二間の裏店を借り、家計の事は女房に任せにして、日々筆を執るに餘念無かりしが、或る夏の頃、芝居は土用休みにて作者の懐中は時候と反對に冷たく、有りたけの家財は質屋の藏へ入れて、最早百計こゝに盡きたるに、生憎其日の米に事を缺きければ、妻なる者も當惑のあまり真人の傍へ寄り、モシお前さん、お米は如何なさると促せど、南北は耳にも觸れず、只管狂言の腹稿に心を凝らす様子なり、折悪しとは思ひたれど、言はで叶はぬ事なれば、尙ほ疊掛けて米の事を迫りしに、只五月蠅しと計りの返事に、妻はいと心せきて、五月蠅くても喰はずには居られませんと詞を返したれば、南北この一言を聞き、ムツクと立上がりしと見る間に、ガラリと戸柵を開け、もとより蒲團と一枚も無けれど、蚊を防ぐ爲め此ればかりはと殘し置きし蚊帳を小脇に抱へ、物をも言はず戸外の方へ走り出で、横町なる大黒屋といふ質屋へと赴きけるに、途中にて豫ねて知己の男に行遇ひ、俵藏さん何處へ往きなさると聲を掛けられたれど、此方は女房の言葉が小癩に障りし折柄とて、挨拶さへも碌々にせず、今殺しに往きます、と言ひたるまゝ倉皇に往かんとする其の顔色何となく殺氣を含みて、調子も荒々しく穩かならぬさまなれば、彼の男は急に南北が帶際を押さへ、それではお前は喧嘩をして仕返しに往きなさるのか、サ、立腹は尤もながら、先づ心を鎮めて一通りの仔細を聞かしのせえ、と眞面目に宥められて、南北も今更きまり悪くなり、頭を掻きながら、ナニ米の錢に困るから、此の蚊帳を質屋へ持つて往く所ですと、これにて「殺しに往く」といひし意味も解り、果ては彼の男も大笑ひをして別れけり、「四谷

怪談』にて、伊右衛門が病婦のお岩を蹴倒し、蚊帳を引たくりて質屋へ往く趣向は、實に作者自身が此の経験より來りしなり、始めて本讀を爲し、時、例の「戸板返し」の所むづかしくて、自分には勤まり難し、と菊五郎より故障を言出だしけり、然るに南北が悴は、原と役者にて阪東彦三郎(三代目)の門に入り、阪東彌藏後に鶴十郎と名乗りしが、中途より役者を廢め、深川に妓樓を營みて直江屋十兵衛といひ、傍ら作者となりて父の初名俵藏を襲ぎ、至つて道具仕掛けの工夫に巧みなりければ、南北これが助けを得て、戸板返し仕掛を雛形に拵へ、之を菊五郎に示して一々説明して聞かせし故、漸く納りしと云ふ、余が知れる老人に、南北が自筆なる横綴の正本を藏せるものありて、其中に仕掛物は悉く繪圖を以て示しありしが、今は他人に貸失ひて手許に無しと云へり、惜む可し、この鯛藏、其後天保二年八月、市村座にての興行に、大道具師長谷川勘兵衛と計りて、大詰の蛇山庵室の場へ、お岩の死靈が赤子を抱きながら、盆提燈の内より出づる仕掛を工夫しけり、初日前に菊五郎細工場へ來りて、此の提燈あまりに小さし、と言ひければ勘兵衛笑ひながら、大きい内から出で、は見物さして不思議とも思ふまじ、如何して彼のやうな小さい提燈から、出でらるゝならんと思はせねば妙ならじ、とて仕掛を見せられたれば、菊五郎も其の用意の深きに感じて我を折りしとぞ、斯くて興行中は今戸なる勘兵衛が宅より、白張の提燈を丁稚に持たせ、藏前を通りて菅屋町の芝居まで送ること日々なりければ、見る者之を指さして、あれこそお岩の提燈ならん、見たるところ尋常の拵方にて、別に仕掛の無きが不思議なり、とて愈々評判高くなり、果ては彼の

丁稚の通る道筋へは、時刻を計りて見物の群集堵の如く、随つて芝居も大入を取れりと云ふ、矢張二幕目雜司が谷の場にて、幕明きに團十郎の伊右衛門、浪人の躰にて仕入傘を張つて居るは、優が實地目撃せし事を其儘に寫せるなり、其頃青山邊の御家人にて、太く團十郎最負の者あり、時時芝居へ来て樂屋へも訪れしが、素より小祿の身分とて、役者に取つて利得ともならず、却て他の客の邪魔になる事もありたれど、當時は尙ほ幕政の盛なりし頃とて、直參の武士は將軍の威光を笠に着て、動もすれば遊所惡所場へ立入り、相手を選ばず喧嘩口論をなすの惡弊あり、彼の御家人も素氣なう待遇さば、如何なる後難も測られずと、何時も程よくあしらひ置きけり、然るに先方にては其等の事に頓着なく、稀には僅かばかりの贈物を齎らし、暇だにあらば吾等が組屋敷へ遊に來られよ、など勧めし故さすがに否とも言兼ね、或る時芝居の休みを機會として、彼の御家人を訪れけるに、主人悦ぶこと大方ならず、よくぞ來られしと、狭き家に招じ、酒肴を出だして最と篤く饗應し、扱ひへるやう、此の組頭に某といふ人、常々大の親方最負なれば、折角此處まで來り玉ひしを其儘に歸したりと聞えなば、彼の人如何ばかり残念に思ふべし、太儀ながら吾等と同道して組頭の宅へ鳥渡顔を出し玉はらずや、と余儀なき頼みに、團十郎も迷惑とは思ひながら早速承知し、一町ばかり距りし組頭の宅へ赴きけり、すべて此の組屋敷に住居せる御家人は、所謂百人同心とて三十俵二人扶持の小身者なれば、官仕の暇には傘を張るを内職とし、いづれも前庭後園などに傘を夥しく列べたり、團十郎は道すがら此等のさまを見て、何となく物珍しく、やがて組頭の宅に到り、彼の人の案内につれて、小さき玄關より座敷へ通れば、四十前後と覺し

き男、顔色蒼白く、鼻筋通り、月代の五分ばかり延びたるが、何か和らかき無地の縞物を集めてはぎ／＼にしたる古布子を着け、手拭を片襷にして傘を張つて居たりしが、團十郎の入來りしを見て、急に張掛けし傘をかいやり、親方よく來なすつた、と尻目にシロリと見し時の凄さ、流石の團十郎も思はず慄然とせりと、これより再び酒宴となりて、追々に組屋敷の誰れ彼れ入來り、果ては妻女娘子供まで集まりて、扇面の發句など望まれ、黄昏の頃、漸く暇を告げて立歸りぬ、間も無く『四谷怪談』に伊右衛門の役を取りたれば、彼の組頭の御家人こそ屈竟の手本なれど、其儘を舞臺に見せ、果して好評を博せりと云ふ、

其の翌年（文政九年）出板の評判記『役者珠玉盡』に團十郎を評して、

「誠に根づよき惡の立廻り。梅幸（菊五郎）が化の當つたは成田屋の色惡が手づよいから、お岩の嫉妬に情がうつたのだ。何をしても器用なお人、伊右衛門の惡は高麗屋（幸四郎）の上に立つくらゐだ、まかし頭取、また東西々々と叱るであらうが、チト聞いて貰ひたい事がある、近頃新板の草冊子に、團十郎といふのが澤山出るから、流石は江戸の大達者、白猿以來文道にも心をかけると思はるゝ、と思の外に拙ない作で、何ぼ子供だましでも餘まり面白く無い、樂屋の様子を聞けば、團十郎の名ばかりで、誠に女盲な奴が代作をするさうだが、江戸は格別、遠國の人も團十郎と聞けば、役者の氏神と思て居る其の處で、合巻繪草紙を見たら、知らぬへ者まで愛想が盡るだらう、江戸の名物に疵のつく事だから、あれをばどうぞ止めて貰ひたい」

また、同書には團十郎の役名を「神谷伊右衛門」と記るせり、されば、初日後に故障出來て、「民

谷」の姓を改めしとの説いよ／＼眞ならん、

されども未だ用意の足らざりし所もありしにや、初日の幕明きに、團十郎胡坐をかきしまゝ傘を張り居けり、當時秋山長兵衛に扮せし坂東善次（後に彦左衛門といへり）、幕を終りし後樂屋へ來り、親方、御家人の事は私が詳しいが、中々行儀よき者にて決して胡坐などはかかず、内職をするにも矢張り畏つてする、と教へし故直ちにその翌日より改めたり、

この善次の物語に、新作の時、おのれ秋山長兵衛にて、菊五郎のお岩に頸筋を捕へられしまゝ、引窓より抜出で、昇天する處、毎日狂言にてする事ながら、お岩の顔を見れば其の恐ろしさ言はん方なく、眼を開きて居るに堪えざりしが、其後天保五年六月、中村座にて八百藏がお岩を勤めし時おのれ又長兵衛の役なりしも、左して恐しとは思はず、八百藏不出來の所を教へたりとぞ、

菊五郎のお岩、如何に物凄く如何に物恐しかりけん、前の善次が物語に似たる逸事多かり、例の庵室の場にて、團十郎の伊右衛門に石地藏を手渡し顔を覗込みてエへ、と笑ふ仕打、まことに身の毛もよだつばかりにて、團十郎は何時顔も反けて、見合はすことを肯てせざりしが、菊五郎よりの注文に、それでは情がうつらずして悪し、明日より能く吾等の顔を見るべし、との事に團十郎も辭む術なく、明日よりは屹度其通りに致さん、と承諾に及びけり、扱翌日になりて彼の件に至るに、如何にしても怖氣たち、これでは濟まぬと思ひながら、自然に顔を反ける故、菊五郎は大きに氣色を損じ、幕の切るを待兼ねて、團十郎の部屋へツカ／＼と入來り、今日も又見ねえな、

と肝癢まじりの叱言に、團十郎は頭を掻きながら、兄貴、其様に顔を見ろと言ふなら、明日から病氣をして引込むより仕様がな、何うして怖くて見られるものか、と眞面目になりて言ひけるとぞ、また天保二年八月、市村座にて演ぜし時は、二代目關三十郎の伊右衛門にて、矢張この庵室の場に持餘し、果して中途より病氣を言立て、舞臺を引込たりと

幾回目の興行にや、菊五郎お岩の拵にて奈落（舞臺の床下）へ廻り、舞臺に出づるまで其處にて待合せ居れる時、附添たりし小の藏といふ弟子に對ひ、何うだ、此様な薄暗い處で己れと一處に居るは定めし恐いであらう、と問ひければ小の藏、ナニ、毎日の事だから、別に恐くは御座いませんと最と平氣なる答に、菊五郎も口を緘みしが、暫時して往方知れずなりし故、小の藏は大きに氣を焦ち、師匠を見失ひて舞臺へ穴を明けては大變なり、と其邊を血眼になつて見廻れるに、一層暗き處より、菊五郎のお岩がヌツと現れしに膽を潰し、一聲叫びたるまゝ正氣を失ひて其場に倒れけり、斯くて穴番の者の介抱にて息を吹返せしが、間も無く幕も終りければ、菊五郎は部屋へ歸りて、先刻汝が恐いとさへ言へば、己れも安心して舞臺へ出るものを、別に恐くも無いと言ふ故、其れでは舞臺へ出ても氣が脱けて悪いから、鳥渡脅かして見たのだ、これは眼の暈し賃ぞ、とて一分を投出され、小の藏は一旦何氣なく言ひし言葉が師匠の氣に觸りしを悔いたれど、又これが爲め思掛けぬ利得に有つきたるを喜びしも可笑し、

菊五郎は文政八年、中村座にて此狂言を出し、後更に河原崎座にて名殘狂言（『天神記』）を勤め、それより直ちに京坂に上ぼり、翌文政九年、大坂角の芝居にて之を出だし、其年十月に江戸

に歸りて、文政十年九月、中村座にて又之を演じたり、斯くて文政十二年三月、三座の芝居類焼に及びけるより、再び旅にのほり、伊勢、京都、大坂、讃岐、備後、堺、兵庫等を漫遊すること三年にして、其間に大坂若大夫の芝居にて一度、京都北側の芝居にて一度、此の狂言を出だせり、其時の評判記に、

東海道四谷怪談

五二

別して此度は評判よろしく、先年角にてお勤の通りなれども挑灯より出るは珍らしく、きつい評判でりました

とあり、江戸へ歸りしは天保二年八月にして、再び市村座にて『四谷怪談』を出だし、江戸にては此時始めて、庵室の場へ盆提燈の趣向を用ひたれども、既に京坂にて此の新意匠ありしことは、前の評判記の文によりて明かなり、また前號に、南北の倅坂東鯛藏が此の盆提燈の仕掛を工夫せることを記したれども、鯛藏は其の前年十二月に死亡したれば、此説は全くの誤謬ならん、天保五年興行の時、幸四郎は既に老衰して、舞臺への出勤も覺束なかりしが、金主江島屋より一幕にても是非幸四郎を出勤させたしとの注文に、給金の外立錢とて日々二兩づゝの手當を渡す約束にて、例の權兵衛の役を引受けしが、意外の大入を取りし故、中途より三匁づゝの増直段となり、それにて見物の客引きも切らざりき、此時隠亡堀の場、八百藏の與茂七、高麗藏（幸四郎の實子にて、後に六代目幸四郎）の伊右衛門と三人の立廻りにて、幸四郎後向きになりて見得をせしかば、幕切の後、高麗藏、あれは何故にやと問ひければ、相手の八百藏は當時花形の役者ゆゑ、それを引立てん爲めなり、と答へしとぞ、名優の心掛は格別のものなり、其後嘉永四年五月、菊五郎の實子松助、河原崎座にて小平一役を勤めしが（お袖とお岩とは菊五

郎の養子梅幸、伊右衛門と權兵衛とは海老藏）非常の好評なりしに、間も無く病死しければ、守田勘彌の狂吟に、

小佛の噂のよきが時にて役者になりし甲斐ぞありける

是 好

此外、『四谷』の役々に就きて仕打の變遷など、聞及びたる事多けれど、淺草座の同狂言も既に興行を終りし此節、あまり讀者に耳遠からんと思へば、姑く是きりに稿を了る、（明治廿八年八月）

團十郎の熊谷（明治座に於ける）

一番目『四谷敵軍記』は寶曆元年十二月に大阪豊竹座の操芝居にて演じたるが始めにて、三段目まで書き掛けし並木宗輔其の前年に死去したれば、淺田一鳥、浪岡鯨兒、豊竹其六、並木正三など、其の遺稿を繼ぎて五段つゞきの淨瑠璃にまごめしなりとぞ、今度同座にて演ずる經盛館は序の切、陣門と組打とは二の口の中、陣屋は三の切なれば、言ふまでもなく全く宗助が遺稿の中なるへし。又二番目の『銀引』は後年江戸の歌舞伎に於て書足したるものにて、天保四年七月中村座にて齋雀歌右衛門が熊谷を演じ、海老藏はスケミとして義經を勤めし時、三立目へ此の『銀引』を出だせるが始なり。是より先き寶曆九年の春、中村座にて『和田酒盛』の狂言に四代目團十郎の役名は鐵壁武兵衛實は景清、元祖歌右衛門は荒五郎茂兵衛實は三保谷にて、吉原大門口の場にて頭巾の銀引を演ぜりといへば、此の狂言も恐らくは其の變直なるへし。案より込入りたる趣向もなき離れ物なれども、形の立派なること此上なく、或人が『湖上の佳人』の一節に似たりと云へるも一理あり。中暮の『大杯鷹酒戦強者』は黙阿彌の作にして、明治十七年の秋、左團次始めて猿若座にて之を演じ、二番目の『雲上野三衣策前』も矢張

團十郎の熊谷

五三

り同人の作にして、天保年中海老藏小團次にて演下たるが始めなる由。さて此の狂言の主人公は河内山よりも戀る直侍なるを、今度は役者の都合により河内山の條だけを出したれば、之を觀ても何となく物足らぬ心地せり。大切の淨瑠璃「日待遊月夜芝居」は默阿彌の著作にして村芝居のなごけ、風呂敷を集めたる引藤、田舎訛りの臺辭など、面白き穿ちある由なれど、芝居として眞面目に評すべきものならねば、茲には團十郎の熊谷のみを評すべし。

陣門の場は小櫻威の鎧姿にて揚幕より出で、壽美藏の平山に我が子小次郎が敵陣へ一騎打ちせりと聞き、「南無三寶」と花道にて跳上る仕打、誠に坂東一の勇士の情を寫し又その裏面には豫ての手筈仕果せたりと悦べるさま見え、陣門に駈入る處も勇氣ありて良し。二度目の出に吹替の敦盛に兜を被らせたる意匠は良けれど、本文とは違ひ、敦盛に歩かせて連れ歸るは氣が脱けて悪し。此處は在來の通り人形にても小脇にひん抱きたる方勇ましかるべし。組討の場は濃き萌黄系威の鎧、黒毛の馬に跨り、紺青色の母衣を吹流して、「引返して勝負あれ」と言ふ時、鎧を踏張り反身になるは用意深し。「オ、イ、」の呼聲も竹の舍翁の評せられし如く如何にも遠く聞こえて良し、或新聞に「呼戻しの調子は耳順に近き優とて敢て高からねど」とあるは勘違ひならん。馬を海に乗入るゝ時、舞臺にて一廻り大きく乗廻はしたるも良し。敦盛を組伏せ遺言を聞く間、默然として下手の岩に腰掛け、敦盛が「忘れがたきは父母の御恩」と言ふ時、デロリと顔に向け、膝の上に置ける左手を思はず滑べり落とす仕打に千萬無量の情を含み、後の山より平山が罵る時、鳥渡耳を傾けしは如何にも遙か隔りたる音を聴くやうにて良し。かゝる細かき事にまで注意の行届けるは自ら技藝に餘地あればなるべし。トト大刀を振上げ切らんとしては切り兼ねる處、「玉のやうな御

ひ、情なや無慙や」とのテヨボに連れ、敦盛の顔を撫で、の愁嘆、倅小次郎の事を語り「心にかゝるは親子の恩愛」と臺辭をかすめて言ひたるなど其藝の妙なること殆ど神に入りたり。終に思切りにて敦盛の首打落し、「無官の太夫敦盛を熊谷の次郎直實討取つたり」と、聲張揚ぐるだけ其れだけに哀はれに聞こえ、平山の方に對ひ「か、ち、ど、き」と間を斷つて言へる注意感すべし。それより平山が引込むと共に、敦盛の首を差上げたる手の思はず垂るゝと共に、後の方へ「ダヂ」となるも良く、玉織姫の聲を聞付け上手へ來り、「ナニもうお眼が見えぬとや」と手を振つて見せる仕打、此の「眼が見えぬ」といふ臺辭にて、身替りの秘密を次の幕まで現はさるが作者の働きなれば、優が此處に注意せるは尤もなれど、其の仕打の餘り小細工に過ぎたるは如何。ト、敦盛の首を渡し、ドンチャンの音を聞き花道の中程まで往きて向ふを見渡し、再び下手へ歸りて始終あたるの様子を見廻し、此間玉織姫ひとりにて愁嘆の仕打をさすは良き手順なり。姫の落入るを見て「どちらを見ても蕾の花」の臺辭になり、「なみ／＼ならぬ人々の成果つる身の痛はしや」と言ふ時、敦盛の死骸に眼を付けたるも良し。姫の持てる首級を取る所、海老藏の型にては此處にて厨子を出し、彌陀の功德によりて姫の死骸が首級を放すといふ仕打ある由にて、此優も先年その通りにされし事ありしが、今度は只經文を誦ふるだけに畧したり。まかし其れさへ餘り道理ある事とは言はれず、彼の梅玉翫雀などの型に、敦盛の首を打つ時鎧の袖より珠數を取出して回向する仕打あるを、當時の評判記にて甚しく非難したる例もあれば、此幕の熊谷は何處までも佛具からぬが良かるべし。「悉陀太子を送りたる」と調子を沈めて言ひ、「檀特山」のテヨボになりて、馬の

首に顔を埋めての男泣き、それより手綱を取り舞臺を一廻り廻りてドゥと伏したる時、馬が前脚を蹴立て、跳上りたるは、大に悲壯の情を助けたり。此等は優の好みなるべけれど馬も亦妙なりと云ふべし。再びドンチャンの音にて起ち上がりて屹となり、手綱を控へ向ふを見込みての幕切れまで間然する所なし。陣屋の場、この控へは昔より喧しき説ありて、歌右衛門の流義は黒天の着付、或は赤地錦の上下を着る人もあり、天保二年河原崎座にて海老藏が演じたる時は、上下を黒天にし、着付は白地にて兩方とも金と銀との浪の立櫃を纏にせしとか。此優はや、ソミなる龜甲形の上下、兩手を組みて花道の中程まで來り、舞臺の方を見て手首に掛けたる珠數を袂へ隠すはよく在る型とて良し。一とせ多見藏の熊谷にて、珠數をつまぐり出で、向ふを見て氣を取直し、しづくと本舞臺へ來る仕打ありしを、當時の評判記に仕過しなりとあれど、「さすがに猛き武士も、物の哀れを今ぞ知る」といふ本文を見てもこれは良き意匠なるべし。「相模を尻眼に掛け」の處、鳥渡愁嘆を見せ、急に氣を變へ袴をはたいて二重へ上る仕打も態とならず、小次郎の手柄を語りて「脱駈けの高名、陣門に駈入つての働き」と調子を高くし、少しく途切れて「手疵少々」と沈んでいひ、「未代までも家の譽れ」と忽ち急になり、相摸が「其の手疵は急處では御座りませぬか」といふを、「それ／＼」と疊掛けて言ふ呼吸の具合、此處等は此優獨得の妙と言ふ可し。敵と呼びて切掛る藤の方を引寄せ、相摸に藤の方なりと言はれ、心付きて手を取上げ、顔を見て確と膝を打ち、「誠にあなたは藤のお局」と座を下り、大手を廣げて平伏する處派手にして良し。ト、「誰彼と鎧を削るに用捨がならうか」の臺辭にて、藤の方の立掛るを右へ避け、右手を突きたるまゝ、左

手を延ばして横向になりし形のよき。再び上手に對ひ座を正して、「戦場の儀は是非なし」とそれよりまた正面に對ひ扇を遣ひての物語、「兩馬が間にドゥと落ち」のチョボにて扇をピタリと席に置き、「年はさよよふ我子の年はさ」の臺詞も愁を含みて良し、「いと／＼尙、涙は胸に」と涙ぐみて言ふ處、觀る者は一倍の涙なりき。首實掄は萌黃の長上下、白洲梯子に片足を踏出し、制札を掲げての見得、こゝらの面白味は言ふまでも無し。三度目の出は紺糸威の胴丸、兜を脱げは坊主鬘墨染の衣に脚半掛けの袴へ、これも海老藏の創めし事にて、其の昔し坂地にては八丈袷裳の下へ白綸子の着付、錦の差貫を穿けりとか、又多見藏は本文の「切拂うたる有髪の僧」を其儘、切髪の鬘なりしとか。兎に角、坂東武者の熊谷より世を捨てたる蓮生法師に變はる處なれば、此處は形にも心にも大に工夫を要する事ならん。此優のは餘りに法師に成り過ぎ、義經に暇を貰ひ二重より下りる處など、如何にも軽くして只の行脚僧と見えたるは悪し。ト、花道へ往掛るを義經に呼止められ、我が子の首を見ての愁嘆、「十六年は一むかし、夢だ／＼」と頭を撫で、の述懐も良し、杖を捨て網代笠を被りて花道に泣倒れての幕切れ、それよりドンチャンの音を聞き、起上がりて屹となり、再び笠を被りて揚幕へ走入る氣の變はりめの明らかならぬは遺憾なりき。(明治廿八年十月)

近松と沙翁との同事異文

近松のことを「東洋の沙翁」などと言ふものさへあるに、其の「東洋の沙翁」が作に、「ベニスの商人」

と同じやうなる事實あるも奇ならずや、そは貞享八年彼れが竹本座のためにも、『釋迦如來誕生會』の三段目の切これなり、筋の概略をいへば天竺波羅那國の山奥に林丹といふ獵夫あり、夫婦のなかに般特といふ男を設けたれど、此の般特うまれつき愚の者にて、或時山鳩の窓より飛入りけるを箒にて打殺しぬ、此の鳩は提婆達多といふ王族が天を祭るの犠牲にとて、今しも獵取らんとし、なり、されば勢子の者ども之れを見て大に怒り、鳩の代りに般特を殺して渡せよ、と迫れるを「鳩も人も同じ命なれども身軀の大小抜群の相違、算用なしには渡されず、秤目きつと差引し、不足は御邊の太股でも切つて釣を取る」、「いや、差引くもむつかしい、此の鳩を懸けて見て、志やつ（般特）が身の肉きりそいで、秤目に懸け請取らん」と脚の肉を切つて秤に懸くれども、鳩より目方輕きゆゑ、たしを切つて渡せ、と迫り「ヤイちよこ、切では喧ましい、此の身を秤に懸けて見て、入るほど取つて跡をかやせ」と般特が秤の皿へ足を踏込むを、「此の秤ではおのれが身が懸からうか」、「懸からぬ秤なせ持つてうせた」、「物の懸からぬは腹秤、打折るが大法」と秤を打ち切り、勢子どもを門外へ追ひまくるといふが終なり、これを沙翁が「ベニスの商人」に比するに、脚色の單純なるは素より言ふまでもなければ、鳩の代りに肉を殺ぐといふこと、彼の一磅の肉を抵當にせりきといふに似通ひたり、

これは佛典よりの醜案にして、帝釋天が釋迦の本身たる優尸那種の尸毗王を試みんとて、巧變化師の毗首羯磨天を語らひ、毗首羯磨は鳩に變し、帝釋は鷹に變じて之れを追ひ、鳩が尸毗王の腋下に匿れたるを、返せ戻せといひければ、王は鳩の代りにおのが肉を得させんとて、股を割いて

秤に懸くれど、鳩の身は轉々重く、王の身は轉々輕し、身を擧つて肉盡くれども、鳩の身はますます重く、王の肉は故の如く輕きゆゑ、血を以て手に塗り、秤を攀ちて上らんとす、肉盡き筋断ちて自ら制すること能はず、上らんと欲して而して墮つ、といふ事實を般特と提婆達多の事になし作變へたるが近松の意匠なり、

一方に於て、『ベニスの商人』も沙翁の創意ならぬことは、諸家の考證により疑ふべからず、特に其の本源の東洋より傳來せりきと思はるゝ證據は、トーマスマンロ氏が波斯の記録に、猶太人がシリヤの回々教徒に百ダナを貸與へ、返済の期限を過てりとして、約束のごとく一磅の肉を要求して、終に『ベニスの商人』とひとしき判決を受けたる物語ありといひ、又グラッドウィン氏の著書にも一シアの肉を賭して、前と同じき判決を得たることを記し、其の他、土耳其、埃及、などにも大同小異なる傳説ありとか、加之、近きころ出版せられルネス氏の『沙翁註釋』には、或る印度人の談話、及び『マハバラタ』の中に見えたりとて、彼の帝釋天（因陀羅）の鷹のことを載せ、これ『ベニスの商人』の傳説の源なるべしと言ひき、されば此の小説、もとは印度より起りて、一方に於ては、波斯、埃及、及び土耳其を経て歐羅巴に傳はり、其處にて沙翁の筆に上り、他方に於ては、支那を通じて我が邦に入り、此處にて近松が作となりぬ、蓋し一奇なりと謂ふべきなり。（明治廿九年五月）

忠臣蔵の型

芝居の獨參湯といへば誰も知れる『忠臣蔵』の狂言は、往昔寛延元年、竹田出雲、三好松洛、並木千柳この三人の合作に成り、大坂竹本座の操りにかゝりたるが始めにして、八月十四日の初日より十月の閏を越えて十一月まで興行を續け、古今稀なる大入を取りければ歌舞伎にても、同年十二月朔日より大坂嵐三五郎座に於て開の狂言に之を出だし、翌年の春は江戸にて、森田座は二月六日より、市村座は五月五日より、中村座は六月十六日より、三座とも此の狂言を演じ、京都にても三月十五日より中村松兵衛座にて之を勤め、斯の如く三都の歌舞伎相競うて舞臺に掛けたりしが、孰れも劣らざる好評を博せるより、終には都鄙遠近にまで持喃され、『忠臣蔵』といふ標題は「由良之助」「判官」などの役名と共に、兒童走卒も之を記憶するに至りたり、さりながら赤穂義士のことを綴れる狂言は、是より先き寶永三年五月（義士の討入りし元祿十五年とは僅かに三年を隔て）、矢張竹本座にて演じたる『兼好法師物見車』并びに其の跡追ひたる『碁盤太平記』あり、これは二つながら近松が作にして「高師直」「鹽谷高貞」「大星由良之助」「寺岡平右衛門」などの役名は既に此時にも見え、其後享保十八年十月、豊竹座にて『忠臣金短冊』と題し、作者は並木宗助と丈助とにて、小栗横山の世界に「大星由良之助」といふ役名を出だせるを、翌々年（享保廿年）中村座の春狂言に之を書直し、『鎧櫻故郷錦』と題して二代目澤村宗十郎大岸宮内の役を勤めたり、また同年に市村座にては、津打治兵衛の新作に成れる『忠臣いろは軍談』を演じ、元

祖坂東彦三郎大岸宮内に扮せり、然るに宗十郎の方取分けて評判よかりしゆゑ、延享四年上京の時、中村兼太郎座にて更に『大矢敷四十七本』といふ狂言に大岸宮内を勤め、此の狂言非常の大入なりければ、翌年（即ち寛延元年）操り芝居に於て此の『忠臣蔵』を新作せるなり、特に七段目の趣向は宗十郎が作意を其儘にして、此時の人形遣ひ吉田文三郎が宗十郎の身振を入形に寫せりと云ふ。

『續耳塵集』には、大坂に歌舞伎芝居四軒ありし頃、角の芝居にて始めて四十七士の狂言を演じ、『鬼鹿毛武藏鑑』といふ名題にて、篠塚次郎右衛門の大石宮内、山下萬菊の力彌大當りなりしゆゑ、中の芝居も西の芝居も此の狂言を出だせるに、當時東の芝居へ出勤せる菅羽次郎三郎は人真似をせず、木曾義仲の狂言を作出して却て大入を取りしとあり、これは何時頃のことにか、兎に角赤穂義士の狂言は操り芝居が最初にして、中ごろ歌舞伎にても宗十郎彦三郎など之を勤めしを、『忠臣蔵』出で、より再び元の操りに歸り、それが復歌舞伎芝居に轉じたるなり、されば歌舞伎役者の之を演ぜしも、其初めは僅かに人形の身振を摸擬するのみなりしが、次第に名人上手出で、各自意匠を凝らすに及び、仕打も一層精妙となりて、終に今日の如き趣味多きものとはなれるなり、若し此等發達の順序を追うて一々考究する所あらんには、吾が劇史のため慥からざる材料たるべしと雖も、餘り冗長に渉るを恐れて茲には只その一斑を語らん。

今も『忠臣蔵』または『天神記』などに限り、大序の幕明き前に口上の人形を出だす慣はしあり、これはもと操り芝居を真似たるものにて、一とせ市村座にて『忠臣蔵』を出せる時、出勤の役者

あまり多人敷にして役のふり方にこまり、果ては座元羽左衛門が勤むべき役廻り無くなりたれば、帳元狂言方など眉を擡めて如何はせんと案じ煩ひけるを、羽左衛門いひけるは、此度の座組いかにも近年に稀なる賑かさにて、役々も各その人を得たれば、座元たる吾等に取つてこれほど悦ばしきことは有らじ、自分のすべき役なしとて他人の役を賞ひ、折角奮ひたる一座の思はくを悪くせんも心なき業なれば、吾等は只幕明きに出で、役制と口上とを述べんとて、肥前座（當時の操り芝居）の定紋つけたる上下を着け、人形の身振にて之を勤めければ、羽左衛門が口上を聴かんとて早朝より押寄する見物山の如く、これより芝居の吉例として必ず口上人形を出だすことゝなれり。

大序にて昔は師直だけ大紋を着け、判官若狭之助は長上下のことなりしが、文化六年五月、中村座にて此の狂言を出だせる時、判官に關三十郎、若狭之助に市川男女藏、師直に中村歌右衛門にて、三人ながら大紋立烏帽子の拵へなりしより、其後は何時も此通りにすることゝなりぬ、また此場の道具立は、鎌倉鶴が岡の實景を擬りて銀杏の立木あるべきを、丁度中村座の定紋が銀杏なるゆゑ、それを真似るは不見識なりとて、文政天保の頃、市村座にては己が家の定紋に因める橘の樹を用ふることなりき。

二段目の若狭之助、文化二年三月、大坂中の芝居にて坂東彦三郎が此役を勤めし時、力彌に對面の場にて、二人の近習に手燭を執らせ、小姓に太刀を持たせ、拵へは下袴の姿にて使者の口上を聴き「太義なり」と搦換して入り、それより道具廻れば羽織着流しにて坐はりながら、刀を抜い

て行燈の火影に照らして居る仕打、其時の評判記にも好き思付なりと評せり、天保元年三月、角の芝居にて市川白猿（七代目團十郎）が若狭之助を勤めし時は、道具の好みやかましく、庭の植込みは眞の生木を用ひ、舞臺廻りて佛間暇乞の場を見せ、それより本藏に松の鉢植を與へ、兼好の故事に托けて本藏扇を以て松の枝を折る件ありたり、これ全く白猿が意匠なりしとぞ。本藏松切りのところ、大坂にて三代目嵐來芝は只扇にて強く枝を叩き、松葉のばら／＼と落つるだけにして刀にて切落すことなく、また段切れに、燭火を消して若狭之助に呷く仕打にて幕を下ろしたり、彼の文化六年中村座の時は、助高屋高助本藏を勤めて、例の如く若狭之助の刀を手に取らず、自分のにて松を切りたり、嵐眠獅はカケを打たせ、摺足して松の側へ寄る仕打あり、當時の評判記に之を難じて、何事もなくツカ／＼と立寄り、松を切りて後鳥渡刀を見て主人に戻すが真しとあり、また「本藏が家來ども馬引け」といふ時、眠獅は舞臺へ馬を出さず、只樂屋にて鑿の音をさせたるは好しといへり、四代目團藏も矢張馬に乗ることなく兩手を組みて思案の體をすると同時に幕を引きたり、これは餘りに手短かしの評なりき。江戸の芝居にては、藥師寺次郎左衛門の役名を山名次郎左衛門と言慣はすことなり、これは元祿十四年の頃奥醫師に藥師寺宗仙院といふ人ありて、父を藥師寺次郎左衛門といひ、本多能登守に事へて馬廻りを勤め、二百石の祿を食みたりしが、明暦年中私の怨みにより同僚岩瀬武太夫の爲めに殺害されしを、宗仙院當時十七歳にして即座に父の仇を殺し、自分も左の腕を切落されしかば、これより醫術を學びて御直參に召出され、其の頃の利け者なりければ芝居にては親の名を憚

り、終に山名と改むることとなりしとか、以上は三舛屋二三治が『戲場書留』に見えられたれども、一説には寛政二年七月市村座『忠臣蔵』を出だせる時、薬師寺次郎左衛門に嵐龍造なりしが、御本九御徒士頭たりし薬師寺氏より、吾が家名を狂言に用ふること不都合なりとて故障を申込み、尙ほ北の町奉行初鹿野河内守へも訴訟に及びたれば、座元より平に謝罪のうへ役名を山名次郎左衛門と改め漸く落着に歸したりける、然るに又もや大御番組山名十郎左衛門より、自分の名前に紛はしとて苦情起り、終に大澤次郎左衛門と改めしとぞ、また嘉永二年中村座にて興行の時は、三代目仲藏此役にて役名を實録の通り荒木十左衛門と改め、麻上下に海老茶のシヅメ斗目張毛の鬘にて、「イヤなに由真之助かゝる凶變にて無當感であらう、相應の用事もあらば此の山名が屋敷まで、必ず心置なく」といひ、「ア、皆愁傷ぢやナ」と奥へ入るは此時始めてなり、當時仲藏最負の脇屋某といふ旗本の隠居ありて、今度の山名はこれまで型のなき事を能く思付きたり、とて譽められしゆゑ仲藏もいと自慢心にて、鬘斗目は如何で御座ります、と問ひければ、あれでシヅメ斗目でないも尙ほ好かりしものを、實録にて石堂は御目附庄田下總守とあり、布衣以上に當ればシヅメを着ても苦しからねど、荒木は只の御目附にて布衣以下なるゆゑシヅメは着られぬ筈なり、と言はれて仲藏も頭を掻きしと云ふ、「はじめに聞いたなら末代の恥はあるまじと後悔なりし」と同優自筆の雜録に見えたり。

誰も知る如く、定九郎の出生昔は大百日鬘に藁頭巾を被ぶり、ドテラに九ヶけ帯をしめ、五枚草鞋を穿くことなりしを、明和三年市村座の秋狂言に元祖仲藏はじめて今の通りに改めしなり、定

九郎はそれまで中通りにて受持ちたる役廻りなりしを、一座の中に仲藏と快からぬ者ありて、故と此役をふりたれば、仲藏もあまりの事と一旦は憤りたれど、よし／＼役柄は如何に安くとも、眼先の變りたることとして座中を驚かし呉れむと、それより柳島の妙見へ祈願を掛けて、七日の間參詣怠らざりしが、丁度満願の日俄雨に遇ひて中の橋の蕎麥屋に立寄れる時、同じく雨宿りせる浪人らしき男の、頭は五分月代にて羊羹色の黒小袖を滴るほどに濡らし、蛇の目の破れ傘を掲げたる姿、これこそ好き手本なれど、其儘を舞臺に寫して非常の喝采を博せるより、此の意匠は百年の今日に至るまで動かすべからざる典型となりぬ、されども長島壽阿彌が筆記に據れば、此事はもと五代目團十郎の工夫に出で、其父隨念が「修行講」とて、門人どもを集めて狂言の意匠を語合ひたる席上にて之を言出せしかば、それは人の悪るき武家の生寫しといふものにて、團十郎ども謂はるゝ役者が致まじきことなり、と隨念が冷評せるより終に其儘に止みけるを、仲藏丁度その席に連りて此事を聞き、またの日團十郎を訪れて、先日定九郎の拵へ御身の不用ならば吾に譲り玉はずや、とて頼がて實地に用ひしなりとぞ、此時同座の立作者は金井三笑なりしが、定九郎の役について仲藏より何の問合はせも無きゆゑ、如何するにやと訝りて初日の様子を窺ひ居りけるに、仲藏は樂屋にて顔も塗らず鬘も著けず、部屋着のままにて揚幕へ往き、風呂番の男を頼みて手桶に水を取寄せ、衣裳大小は門弟の此藏といふに言附けて故と表の木戸口より運ばせ、揚幕の中にて拵へを濟ませ本水をおびて出でたれば、仲藏われを出し抜きたる仕方なりとて、三笑の怒れること一方ならず、これより漸く仲藏を憎みしと云ふ。

文化六年中村座にて三代目歌右衛門が定九郎を勤めたる時は、五段目の道具立、後ろに黒幕を下ろして辻堂を見せ、稻叢の奥より與一兵衛系立を着けて出で、此時花道よりも三人の獵師出で、互に引違ひて兩方へ入と共に松の大木をせり上げ、此松の根に男女蔵の勘平箆笠の姿にて雨宿りをなし居る處へ、花道より歌右衛門の彌五郎、青漆の桐油合羽の袴へにて出で、本舞臺へかゝりて勘平と臺辭あり、これも左右へ分れて入る、こゝへ花道より與一兵衛再び出來り、其跡より定九郎仲藏の通りなる出立にて、與一兵衛を殺し立去んとするを、向ふより猪出づるゆゑ、大小を捨て、彼の松の樹へ攀登り、猪の往過ぐるを見て舞臺へ飛下り大小を取らむとする時本鐵砲の音聞こえ、危かりしと彈丸を避くるを、又一發ありて腹を打貫くとせり、また誰にても定九郎與一兵衛の二役を兼ねる時は、大概先づ定九郎にて掛稻の後ろへ入り、花道より與一兵衛にて出來り、彼の掛稻の下に憩ふを後ろより財布を引たくる者あるゆゑ、財布と共に掛稻の中へ引込まれ今度は再び定九郎にて血刀を提げて出づるを通例とす、此の早變りの工夫は、安永五年正月大坂中の芝居にて淺尾爲十郎が『伊賀越』の又五郎と癩病の醫者と二役を勤めたる時より始まり、江戸にては同九年中村座の春狂言『初紋日廓曾我』の二番目に、尾上松助が幸崎甚内と釣鐘彌左衛門の早變りに此の工夫を取り、それより『忠臣蔵』にも用ふることとなりしが、今日にては定九郎一役だけの時も、また稻叢の蔭より手を出だす型にてするは如何にぞや。

文化の初め、大坂の操り芝居にては、吉田千四が工夫により勘平定九郎與一兵衛の三役を早變りに勤め、大當りを取りたれば、歌舞伎にても嵐來芝これを真似て終に不評なりき。

七段目の平右衛門、由良之助が酣睡せるを見て、蒲團を掛け、書附けを枕元へ置くなど、役者によりて思ひ思ひの仕打あるところなるが、四代目團藏は半合羽を疊みて枕にさせ、刀を側へ取直して入りたり、おかるを殺す時も通例ならば刀を振上げて追廻はすべきを、此優は只引捕へて刺殺さんとせしとぞ、此の仕打見榮はなけれど力は籠れり、流石に澁團の父なりと謂ふべし。

此場にて勘平死せりと聞き、おかるが氣絶する仕打は二代目菊之丞を嚙矢とす、寶曆十三年の夏、荻野八重桐など同僚の者と船遊を催せるに、八重桐酒に酔うて溺死したるゆゑ、自ら其の留守へ馳行きて、女房に有りし仔細を語りければ、只アツと叫びたるまゝ悶絶しけり、成程夫婦の情はさも有るべきことなりとて、其後おかるの役にて此の仕打をなせりと云ふ。

前にもいへる早變りといふこと、道具仕掛の進歩したる結果には相違なけれど、一つは立役女形の區別亂れて所謂「加役」といふことの行はれたる故なるべし、されば元祖菊五郎三代目歌右衛門などは由良之助となせの二役を兼ねたることあり、また天明元年三代目團藏は、森田座に於て定九郎與一兵衛判官由良之助となせ義平文吾の七役を勤め、これより「七役」といふこと行はれたり、中山文七の言葉に、近頃六役七役など、只役柄を多くして當りを取れど、敵同士の由良之助と師直とを一人にて勤むるは如何にも氣持あし、といへるは適評なり。

これも亦道具の精巧となりたる結果として、一日の狂言を幕無しに演ずること行はれたり、蓋し大坂若太夫座の操りが嚙矢にして、歌舞伎にては寛政七年八月中の芝居より始められりとぞ、尙ほ『忠臣蔵』の眼目たる由良之助の役に就いては、言ふべきこと甚だ多ければ、そは他日稿を更

市川團洲と其の技藝
めて語る所あるべし。(明治廿九年五月)

市川團洲と其の技藝

九代目團十郎今や役者の總本家たり、江戸隨市川の正統たり、活歴の元祖たり、明治演劇史中の大立者たり、こゝに聊か傳評を物せんとするもの、蓋し其の故なしとせんや、

第一 その家柄

彼れは實に七代目團十郎たりし海老藏が第五男なり、市川氏、是より先き元祖才牛出で、荒事の一派を創め、其の實子たりし二代目柏庭これに次ぎて父の藝風を大成し、三代目は不幸にして夭折すと雖も、四代目五粒、柏庭の遺子を以て之を襲ぎ、その實子白猿また五代目となり、いづれも名手を以て稱せらる、六代目また夭折するに及び、海老藏遂に白猿の外孫を以て七代目と號し、これまた一代の大家たり、されば此の流れ一たび元祿に源を生じてより、上下二百年の間いまだ曾つてよどまず、其の末いよ／＼はびこりて、而かも今の團十郎はこゝの中より現はれける、海老藏には二妻二妾ありて、七男六女を設けぬ、はじめ五代目幸四郎の女うめを娶りしが故ありて離別となりけり、後妻は福地善兵衛が女にてみゑといひ、妾はさといひ、またためといへり、此等腹異りのなかに生れたるは、

先妻、うめ—すみ (淺草馬道の藥種屋大阪屋市兵衛方へまつげり)

ひる (深川寺町のさる方へ縁付きしが、離別して實家へ歸り、明治廿二年三月十日、六十九歳にて歿りぬ)

八代目團十郎 (長男なり、幼名は新之助といひ、安政元年八月六日、大坂にて自盡す、三十二歳)

後妻、みゑ—重兵衛 (次男なり、矢張新之助といひしが、抱瘡にて明を失ひたるより商人となり、明治元年六月廿三日、行方

知れずとなれり、或は入水せりともいふ)

ます (坂東襲助の妾)

白猿 (第三男なり、幼名は矢張新之助、六代目幸四郎の養子となりて高麗藏といひ、のち新作を改め、また白猿

妾、さ—こなり、明治七年七月十三日没せり)

女子二人 (いづれも早世)

猿藏 (第四男なり、安政二年九月十九日、廿一歳にて歿り)

九代目團十郎 (第五男)

妾、ため—幸藏 (第六男なり、初めあかん平といひ、早世)

海老藏 (第七男なり、幼名は矢張あかん平、中ごろ新之助、明治十九年十一月十二日、四十二歳にて死せり)

はな (他家へ嫁せり)

團十郎が實母、ためは葛西小松川村の農家に生まれ、父を甚平、母をみつといへり、幼き時より龜井戸の越前屋といふ料理茶屋に奉公し、後そこの養女となりけるを、海老藏に思はれて妾となりしなり、豊芥子の『多話戯雜紙』などに種々のよしなし言を傳へたれど、障るところあれば言

はず、海老藏の許へ奔りしは廿七歳の時なりしとぞ聞こゆ、かくて團十郎は天保十年に生まれぬ、海老藏が四十九歳、おためが三十六歳の時なりけり、生まれ落ちてより三十日目に、河原崎權之助が養子となりて、名を長十郎といへり、この權之助は河原崎座六代目の太夫元にして、同座は所謂江戸三芝居の一たりし森田座の扣櫓なり、當時森田座は財政困難のため暫く興行を休みたれば、河原崎座その代りとして櫓を上げ、此の人世才に長じて芝居町には其の羽振り最も強かりける。

第二 その生立

門閥階級のやかましき此の社會に、一文取らずの相中役者より成り上りたる昔の名優に比らべて、團十郎の如きは幸福の人なりと謂ふべし、實家は芝居道の本山と仰がれし市川氏なり、實父は三が津役者の惣巻軸と尊ばれし海老藏なり、養父は大芝居の太夫元、養父は三座の大軍師、どちらを向いても先祖のひかりと親のひかり、七つにも八つにも光りたるならん、さりどて此の寧馨見實父養父におぶさつて表方の眉を擡ます御荷物役者の類にあらず、十歳の頃より文徵明の法帖に就きて書道を學び、また山本流をも兼ねて堪能の譽れあり、なべて芝居道の書き物は勘亭流を用ふることなれど、團十郎は其の卑俗なるを好まずして、今もちのが書抜き(臺辭を書抜きたるもの)は必ず他流にて書かしむといへるは、幼き時よりかゝる素養あればなるべし、また書道にも執心淺からず、光琳の風を慕ひて抱一上人の畫帖を學び、且つ青々其一にも事へしが、其の頃

花川戸の通客にて生田隣春といふ人、土佐畫に巧みにして團十郎を最負にしければ、時々わが宅に招ぎ其の筆意をも教へけり、菊五郎の昔咄にいはいはく、

私共の幼少の時、妙に畫の稽古なぞをなしたもので團十郎をば、私共の師匠といふのは隣春といふ畫師でござりました其頃から團十郎は乳母がついて黄八丈の小袖に黒の紋付の羽織を着て来るといふ寸法で……私などは調升と向ひあつて坐つて調升が格子を描いて其中から煙管の出る繪を描きまして一寸吸付煙草といふ趣向を私に見せました私の方でも徳利に壺をかいてそれから女が後向きになつて居る繪を見せまして一枚一本で遊興に行かうといふ約束なぞをなして居たものでござります團十郎だけは一生懸命に蘭を描いたり竹を描いたりして居ましたから今でも立派に繪をやります其れに可笑しいのは團十郎は其頃は變物なぞと云はれたもので御座います今になつて見るに變物の方が普通の人でこつちが大の變物なのでござります

と、如才なき菊五郎の言ふ事ながら、彼れが所謂乳母日傘のうちに育てられて、無邪氣に、鷹揚に、また物事に熱心なりしこと思ひ遣らる、斯の通り土佐繪に骨を折りしが、後年渡邊華山の筆意を好みて、今は文人風となれり、また俳諧を其角堂永機に學び、併せて普子の書風をも受けたりと云ふ、

されば世の覺えもまた格別なりけり、中にも「今紀文」とうたはれし山城河岸の津藤(細木氏、津國屋藤兵衛、俳號を香以といふ)は、海老藏以來の最負客にて、團十郎を愛すること一方ならず、自ら荒磯連といふ見連を作りて其の控書を物せることあり、安政四年の秋市村座にて、小團次の小猿七之助に、團十郎(當時廿一歳)が坊吉三を勤めたる時、津藤は兩人に引幕を贈り、

市川團洲と其の技藝

七二

この興行中七度の見物ごとに綺羅を盡し、樂屋表方の潤ひ莫大なりければ、其の餘光は自ら團十郎の一身に輝きて茲に出世の端緒を開きける、津藤また彼れを戒めて、

心を高く持つとも氣は必ず低く、持つべし舞臺は人より進むとも樂屋は物事ひかへ目にすべし

木綿着て居ても花見は花見かな

とて自畫の破れ笠を描き添へたり、かくて萬延文久に至りて津藤が家も殆ど退轉に及びぬ、「本物の豆ばかり時く今紀文」とは其の頃の悪口なりけり、

何時しか代は明治と改まりて、河原者と賤しめられし役者も公だちて貴紳に咫尺するを得るに至り、土佐の山内容堂侯いたく彼れを愛せられぬ、侯と馬車を合乗せること、侯に伴はれて假宅の素見に往きしこと、また「勸進帳」の衣裳を賜はりしこと、などは「報知」の「團十郎昔話」にも見えれば言はず、

彼れしばしば藝名を改めぬ、藝名を改むると共に其の技藝また遷りゆけり、名四たび更はりて藝また四たび變はりぬ、即ち長十郎といひし頃は子役の時期なり、權十郎と改ためて若立役の時期に進みぬ、更に權之助と改めて座頭の時期に進みぬ、最後に團十郎となりて彼れが演劇改革の時期はじめて到りぬ、左に之れを詳述せん、

第二 子役河原崎長十郎

そもく彼れが役者として初めて舞臺に上りたるは何時なるか、「團十郎昔話」はいはく、

以前は仕初きて春には幼少の者にて必ず舞臺に上るを例とし居りしかばわれらも出でたりしが三歳の折より痲瘡にて暫く引き居り五歳の折助高屋の豆、兄貴（八代目團十郎）の盛衰の時われら升平といふ奴を勤めたり又六歳の折には「千歳」を舞たりき

と、役割番附にては天保十三年正月、曾我狂言の犬坊丸に若太夫長十郎、として出でたるが始めなるべし、此の時團十郎は四歳なり、それより四年過ぎて、弘化三年正月は「權八小紫」の狂言に禿ゆかり、それより又四年目の嘉永三年三月は、海老藏の「琵琶景清」に娘人丸など、すべて子役の役廻りなりしが、翌くる嘉永四年三月には「石田局」に小姓嘉門、「近江源氏」に信樂太郎の役をふりあり、前のは前髪若衆形、後のは野郎頭の若立役なれば、この時よりそもく子役の部を脱けたりと見ゆ、

第四 若立役河原崎權十郎

嘉永五年九月、將軍家に長七郎君生れ給ひぬ、其の頃はありし慣はしなり、「長」の字憚る所ありとて河原崎長十郎は權十郎と名を改めぬ、彼の澤村長十郎が助高屋高助と改名せるも此の時なりけり、

前に言へる如く、團十郎の權十郎は此の前後より若立役の部に加はりたり、そもく當時江戸三座の役者を見渡すに名人上手は殆ど地を拂ひたる有様にて、先づ役者總巻軸とも稱すべき海老藏は、はや六十二歳の高齡に達して餘命も長からず、七年たちて病死せる程なれば、伎倆もさか

市川團洲と其の技藝

七三

け人氣も下だり坂の方なり、特に其の頃は太坂の出稼ぎに忙かしければ、江戸の舞臺には頼と姿を見せず、六代目幸四郎と十二代目羽左衛門とは三四年前に亡き人の數に入りぬ、次いで長十郎の高助も此の年に身まかりぬ、あとには四代目彦三郎(五十三歳、後に龜藏)六代目團藏(五十三歳)、十一代目勘彌(五十一歳、始め三津五郎)、三代目關三(四十八歳)、四代目小團次(四十一歳)などあれど、大抵は艶のなき藝風とて、老練の妙はあれども見物を呼ぶに足らず、ひとり小團次は伎倆といひ人氣といひ、當時賣り出しの利け者なれども、門地の卑き悲しさは未だ座頭たるに足らず、たかゝ「庵り」か「書出し」くらゐの身分なり、八代目團十郎この時三十歳、江戸中の最負を一身に擔ひて、勢ひ旭日の昇るが如くなれど、惜しや浪花の旅に果敢なき最期を遂げぬ、さて先輩の無人なること斯の通りなるに引き換へ、後進の役者にては、先づ彦三郎の子に竹三郎(廿二歳、この前の彦三郎)あり、四代目歌右衛門の子に福助(廿二歳、今の芝翫)あり、四代目友右衛門の子に友松(廿歳、この前の友右衛門)あり、團藏の子に白藏(十七歳、今の九藏)あり、高助の子に源平(十五歳、この前の高助)及び由次郎(八歳、この前の田之助)あり、故羽左衛門の子に羽左衛門(十歳、今の菊五郎)あり、小團次の子に左團次あり、權十郎また海老藏の子を以て當時十五歳なりき、斯くの如く名家の息子株が澤山なれば、見物の家最負は自ら此等の若手を持囃し、座元もそれをよき事にして、まだ乳の香も失せぬ子供に、ふさはしからぬ大役を負はすことゝなりぬ、團十郎が出世の早かりしも、一つは此の故なり、一方より言へば弊に屬すと雖も、梨園の革新を促がせる天の配劑は、わざと新舊の間にかゝる大過渡を設けたるならん

か、

されば、此の時期に於ける彼れが役柄を見るに、つまらぬ端役を勤むるかと思へば、飛んでも無き大役を引受け、先づ改名の時は「一の谷」三立目に初島五郎、二年たちて安政元年には、小團次の「櫻餅の惣太」に奴泥平、「殿下茶屋」に葉末と新十郎、これらは眞の端役なり、この時しうかの「女鳴神」に押戻し、これは市川家の十八番なればなり、翌くる安政二年には、幡隨長兵衛弟長吉といふ役名にて、鈴が森の場に「お若いのお待ちなせへ」と長兵衛の穴を往きたり、此處にて「其の長兵衛はわしが兄貴」と八代目の變死を悲しみたる臺辭、その次ぎには見雷也の役、これも八代目の係といふを當て込みたるなり、

安政三年には森田座再興して、河原崎座は休座に及び、これより七年間、權十郎は市村座に出でたり、正月は「雪駄直し長五郎」に山崎與五郎の突轉し、七月は「千本櫻」の入江丹藏、小金吾、駿河次郎、翌くる安政四年の春は、「鼠小僧」に辻番伴與之助と船頭長吉、これまで左したる役にあらねど、夢の場に二丁町の女郎屋亭主文吉にて、「白石嘶」の惣六もどき、小團次の鼠小僧が臺辭に「若いに似合はず解つた男だ」とあるが場當りなるに、近年芝翫が文吉にて菊五郎が言ひしも可笑し、十月は「阿國歌舞伎」に勝元と男之助、此等の大役に引換へて、翌くる安政五年は、「黒手組の助六」に牛若傳次、「大功記」に十次郎など、不調子この上もなし、

安政六年七月には「勸進帳」の辨慶を勤め、九月は「忠臣藏」に若狹之助と、勘平、定九郎、與一兵衛の早替り、此頃よりますます器量を上げて、文久二年には書出しの地位となれり(當時廿

市川團洲と其の技藝

七六

五歳)、翌くる文久三年には中村座へ轉じて、「御所櫻」の辨慶といふ大物を勤め、慶應二年には市村座にて、「阿國歌舞伎」の頼兼、八汐、仁木、同三年には中村座にて「琵琶の景清」、明治元年には市村座にて「扇屋」の熊谷、「忠臣藏」の由良之助を勤め、こゝに始めて座頭の身分となりけり、

さて其の頃の評判記によりて、權十郎が藝風の一斑を見るに、萬延元年出版の『役者商賣往來』に、

まづ此の御人の押立て格別ゆゑ七代目白猿丈いまだ團十郎三升と申せし盛んの時分と同し様に存せられ升、目の大きい所から顔の細い頬のすぼんだ所から口跡の稚聲ひき音にて鼻へかゝる所まるで壽海老生寫しにて

とあり、翌文久元年出版の『役者狂言草』の中には、

淨瑠璃に京人形、随分面白かつたが何を申すも荒々しい人形で御座り升た、夫は其苦下や根が荒事のお家にお生まれゆゑ五月人形のおつもりか知れぬ……

といひ、「源治店」の切られ與三を評して、

兎角口跡が時代めいて強談の場もいまいと際手軽く仕て貰ひたく……
とて、不出來のやうにいへり、この所作に荒々しく、世話物に重もくしといへる評言は、後年かれが時代物に最も成功したることと思ひ合はせて、成程どうなづかるゝ所なり、

第五 河原崎權之助と時代物

技藝も漸く圓熟の域に達せんとし、身分は次第に高くなりて、世は花開き鳥囀り、權十郎が得意この上なきが如しと雖も、更に眷族血縁の間を顧みれば、誠に傷ましき限りなりし、實父海老藏は既に老衰して愛妾おため萬事を取計らひ、兎角よからぬ舉動多かりければ、權十郎が爲め異母の兄に當れたる八代目團十郎は、其等の事を苦に病みて、安政元年大坂の客舎に不慮の變死を遂げ、市川の名跡一旦斷絶に及びたるさへ味氣なきに、其の翌年は同母兄なる猿藏夭折し、四年たちて安政六年、同七年と二歳續けに、海老藏もおためも亡き人の數に入りぬ、生前は子福長者壽海老人などと號して、さすが一門の繁昌に誇りつるも、二子は既に先き立ち、残れる同胞はまだ幼なくて物の役にも立たざれば、果敢なきは市川の末の流かな、と最負の涙の種なりし、實家の有様この通りなるのみならず、養家にては、權十郎を貰受けてより間もなく、權之助夫婦の間に男子を産みたれば、河原崎國太郎と名乗らせ、女形に出だして鍾愛いと淺からざりしに、慶應三年僅に十九歳を一期として無常の露と消えぬ、かへて加へて翌くる明治元年には異母兄なる成田屋重兵衛か踪跡知れずなりしさへあるに、此年十一月には、養父權之助強賊の手にかゝりて、今戸の自宅に非業の最後を遂げたり、かゝる嘆きの數々のうちに、彼れは養父の名を襲ぎて、七代目河原崎權之助と名乗り、それと同時に座頭の地位に上りぬ、實にこれ明治二年、彼れが三十二歳の春なりけり、

かくて權之助が始めて座頭として出でたるは市村座なりしが、此時中村座にては菊五郎はじめて座頭となり、守田座にては訥升はじめて座頭となり、即ち明治二年は、三座の芝居に三個の新座

市川團洲と其の技藝

七七

頭を出だせる年なりき、蓋し先輩は既に老朽し、新進は未だ成熟せず、所謂新舊過渡の時代なりしことは前に述べたりしが、今や老朽せるもの益々老朽し、成熟せざるもの漸く成熟す、是に於てか、梨園の氣運は此の過渡を越えて、終に新たなる境界に入りけるなり、讀者は大勢の是れより一變せんとする事を忘るべからず、

さて此の期に於ける權之助に就いて特筆すべきは、彼れが殆ど時代物専門となりし事なり、是れより先き若立役たりし頃は、重もに小團次の一座に加はりて、「三人吉三」「小猿七之助」など世話物を演じたれども、大概は好評ならず、家兄傳來の「切られ與三」を勤めて、兎角時代めきたり、どの評判ありしことは前にも言へり、畢竟するに世話物は其の天品に適せざりしなり、されば彼れが一躍して座頭となれるや、時の立作者河竹新七（黙阿彌）は、まさりに時代物を新作して彼れに與へたり、こは權之助自身の注文にも因るべけれど、新七が目利に上手なる、此の人の柄には時代物が相應なるべしと看破したればならん、さて此時より權之助が勤めたる新狂言の役々を擧ぐれば、先づ明治二年五月は市村座にて、「忠臣藏後日」に由良之助の十八ヶ條申開きと切腹、小山田庄三郎、水間浩徳、天川屋儀平、八月は「地震加藤」、十一月は「日蓮記」、三年五月は同座にて「眞田の打紐」、四年一月は守田座にて「碁風土記」の小宮山内膳、九月は「九度山の眞田」、十月は「忠臣藏十二時」の師直、由良之助、高田郡三郎、尾林平八、大鷲文吾、玄宗皇帝、五年一月は同座にて「名歌聞」に吉野落ちの義經、碁盤忠信、十月は「瓢軍配」に齋藤内藏之助捕物、焼香場の久吉、六年三月は村山座にて「酒井の太鼓」、五月は「眞田軍配」に片桐且元、笹田行村、薄田隼人、

億川家康、九月は「地震加藤」の増補に清正、秀次、關羽の像實は石川五右衛門、十月は中村座にて「木下竹中間答」の久吉、十一月は村山座にて「いろは實記」に山科閑居の内藏之助、七年三月は同座にて「狩場問答」の時致と祐經など、孰れも時代物にあらざるはなし、此他に世話物にて、明治三年二月市村座の「寶來曾我」に生島新五郎と桑名屋徳藏、四年九月、守田座の「藝者評判」に齋の金五郎、五年十月、同座の「坊主與三郎」、六年三月、村山座の「笹松峠」に夏目四郎太夫、速水主水、同年六月同座の「姐妃お百」に美濃屋重兵衛、などあれど其の數至つて尠く、且つ大概はワキ師の役なり、以上は書卸し物ばかりを言ひたれど、舊作の分にては、時代物が多く、たま／＼世話物に顔を出せるも、「法界坊」（明治二年三月市村座）ならば道具屋甚三と押戻し、「双蝶々」（明治三年十一月中村座）に南方十次兵衛、「廓文章」に喜左衛門、「天網島」に孫右衛門など、スケに屬する役なり、

かく時代物専門となれると同時に、科よりは寧ろ白を重んずる風となりぬ、例へば前に擧げたる新作のうちにて、「十八ヶ條申開き」、「大徳寺焼香」、「木下竹中間答」、「曾我狩場問答」、など所謂見せるよりは聞かせるといふ種類のもの多し、時代物はやがて演説芝居となり、それより更に一轉して活歴史となる、いま活歴史のことを述ぶるに先ちて、彼れか改名の次第を語らん、

第六 市川團十郎と活歴史

八代目團十郎自殺してより、世の好劇家は均しく權十郎に望を屬しぬ、八代目變死後わづかに二

年たちたる安政三年の評判記に、

本當に氣性さいひ八代目其儘だ其上孝心の所までも似てあるから何でも九代目は若大夫だ(中略)春はイヨク九代目になつて兄御の當り役を見せたくんなヤレ若大夫の紫扇さまく

とあり、安政六年三月、市村座にて「遺念海老洞」といふ新狂言に、權十郎は楠明王丸を勤め、泣男の杉本佐兵衛に育てられ、生來臆病なる佐兵衛が血汐を呑んで本心となり、楠家を再興するといふ脚色、これは矢張河竹新七が作にて、市川團十郎の名跡絶えたるを楠氏に擬らへ、權十郎を明王丸に見立てたるなれば、其の頃より實家へ復歸すべき内約もありしにや、かくて其年の七月、初めて「勸進帳」を勤めし時より、これまでの俳號紫扇を改めて、市川家に縁ある三升を名乗り、降つて明治六年、村山座にて増補の「地震加藤」を勤めし時より、權之助を名乗らずして、番附にも始終河原崎三升と俳號を記るしたり、

是より先き、養家に附屬せる河原崎座は、元來守田屋の控櫓なりしゆゑ、安政三年、守田座再興後はやむを得ず休座となりければ、別に獨立して永久興行の許可を得んとて、養父權之助いろく心に心を碎きしも、未だ素志を貫くに及ばずして死せしかば、彼れまた其の遺志を繼ぎて公私の間に周旋し、終に明治六年二月に至り、芝新堀にて河原崎座再興の事を許され、多年の希望こゝに成就しければ、日夜に工事を急ぎ、翌くる明治七年七月、いよ／＼舞臺開きに及びしが、此時當座の競争者たりし新富町の守田座(後に新富座といふ)にては、彦三郎、芝翫菊五郎、半四郎、など歴々の一座なるに、此方は權之助の外に訥升、新車あるのみ、斯くては餘りに不人なれば、

せめて權之助を九代目團十郎に推し立て、敵方との權衡を取らんとて、表掛りの者など色々に奔走し、特に當時河原崎家にては、故國太郎の代りに尾上梅幸(四代目菊五郎の子)を養子とし、二代目の國太郎と名乗らせられたれば、權之助實家へ歸りても、別に差支はなかるべしとて、段々に説勤め、もとより此の事に就いては養父存命中よりの内約もありたれば、權之助も終に其の意に任かせ、養母の爲めに甥に當たれる熊次郎といふを八代目權之助と名乗らせ、おのれは實家を繼いで九代目市川團十郎と改名したりけり、

かくて活歴は彼れが尙ほ權之助といひし頃より舞臺に現はれぬ、前に言へる明治五年「片田落の内藏之助」を勤めし時、舞臺へ鎧櫃を持出して、見物の眼前に鎧の着様を見せ、また片田落ちは十三夜なるに九き月を出だすは心得ずとて、道具方へダメを出せりとか、それより團十郎と改名したる明治七年七月は、河原崎座の舞臺開きに「太平記」の楠正成と見島高德、十月は「河内山」、明治八年五月は「吉備大臣」、九月は「柳澤騒動」、十一月は「毒饅頭の清正」を勤め、明治九年より中村座へ轉じて、三月は「六浦の局」と朝比奈物語、五月は「重盛諫言」と島の俊寛、九月より更に新富座へ轉じて二度目の「片田落ち」、十一月は「天草軍記」にて森宗意軒、天草甚兵衛、などの役なりしが、當時座頭たりし彦三郎、ある人に對ひて團十郎が「チットも動かぬから」とて、眉を擡めしと言へば、活歴熱の漸くかうむたるを知るべし、是より殆ど新富座据付けの役者となりて、十一年一月は「曾我の敷草」、三月は「西南戦争」、六月は「家康の伊賀越」、十月は「延命院」の曉星右衛門、「千種の重藤」の實盛、十二年一月は「赤松滿祐」、「金世中」の毛織五郎右衛門、五月

市川團洲と其の技藝

八二

は「中山問答」、十一月は「戸田大炊」、十三年三月は「實録の伊賀越」、六月は「荏柄平太」、十一月は「茶白山」の宮内局、十四年三月は「大石の城受取」、十月は春木座にて「幡隨長兵衛」の風呂場、十一月やはり同座にて「加賀騒動」の坂田善三郎、十六年四月は新富座にて「金看板甚五郎」、十七年四月は市村座にて「弓張月」の阿公、五月は新富座にて「仲光」、七月は市村座にて「木内宗吾」、十月は「大黒割の藤吉」、十一月は猿若座にて「天狗舞の高時」、十八年二月は千歳座にて「法樂舞の静」、十一月は新富座にて「實盛討死」、「船辨慶」の静と知盛、十九年一月は新富座にて「西洋断」の春見丈助、五月は「渡邊華山」、十二月は「文珠九助」、「伊勢三郎」、廿年十月は「ノルマントン没沈」、「紅葉狩」、廿一年一月は市村座にて「井上正鐵」、七月は新富座にて「民谷轉」、廿二年七月は中村座にて「文覺勸進帳」、以上おほかたは黙阿彌が新作なりしが、此年十一月、歌舞伎座設けられてより、櫻痴居士おもに彼れが爲に筆を執れるは誰も知る通りなり、

第七 活歴の源流

さて活歴とは此處に言ふまでもなく、芝居は活動する歴史なりとの意にして、成るだけ當時の實境を寫さんとする一種の寫實主義なれど、また寫實の外に高尚といふ事をも意味す、更に詳しく言へば、高尚といふ事に二様の義ありて、先づ一面に於ては古雅を尙べり、彼れが演ずる大かたの時代物にして、世話物の稀なるは、前に述べたる生得の得手と不得手にも因るべけれど、別に此の尙古といふ事も原因なるべし、また他の一面に於ては、勸懲主義をも含めり、野卑猥褻なる

ことを斥け、且つ不忠不義なる人物に扮するを嫌ふは此の故なり、次に寫實といふ側に於ても二つの別あり、第一は道具、衣裳、鬘など役者の技藝以外に屬するもの、故實を正し、成るべく當時の風俗を示さんとする事にして、こは寫實主義の外に、前にいへる尙古といふ事も與りて力あるべし、第二は役者の技藝そのものを實地の通りに演じ、わざとらしき科、わざとらしき白を斥くる事にして、例へば在來の臺辭廻し、見得、思入れ、などは芝居事の嘘なりとて、成るべく之を避くる類なり、また此の考よりして、技藝の形即ち科白よりは寧ろ其の精神を第一にすべし、とて所謂腹藝といふものを創めたり、加之その寫實主義は脚本の上に及びて、趣向の不自然、脚色の減裂なるを非難し、時としては、脚色の爲めに正史上の事實を枉ぐるだに屑よしとせず、また脚本中の役柄を論ずるに、正史を典據とするなど、こゝに至つて彼れは芝居と歴史とを全く混同し畢んぬ、今これを圖にて示せば次の如くなるべし、



之を昔に徴するに、衣裳、鬘などに寫實を尙びたるは珍しからず、彼の物真似盡し、島原犯言の時代は暫く措き、中古にても初代中村仲藏が、時代物を演ずる毎に橘守國が繪本を参考して衣裳を工夫せること、四段目の由良之助を勤めし時、國元より驅け附けたりとの意にて、手甲腹當にて出でたること、定九郎の山岡頭巾大トテラを廢して、澁蛇目、黒小袖の浪人姿を摸せること、

市川團洲と其の技藝

八三

など寫實派中興の開山とも謂ふべし、仲藏は世話物に不得手にして、多くは時代物を勤めたれども、この寫實主義は作者にて初代櫻田治助、役者にて四代目松本幸四郎、などに導かれて世話物に入り、次に四代目南北、五代目幸四郎、三代目菊五郎、その次に河竹新七、市川小團次、今の菊五郎、など、系統を引いて、所謂生世話といふ藝風とはなりけり、一方に於て、時代物にても、三代目彦三郎(樂善)、四代目團藏(目黒の團藏)、五代目團藏(澁團)など此の風を襲ぎ、今の團十郎の父なる海老藏も此の黨の人なり、尤も道具は劇場の構造などの關係より、衣裳、小道具の如く手取り早く進歩し難き事情あれば、随つて實地實境の詮索も疎かなりしが、これにて今の長谷川勘兵衛が祖先の力によりて、寛政前後より著しく巧妙となり、同時に寫實といふことも喧しくなりぬ、

さて役者の技藝外に屬するものは斯の通りなれども、科白に至つては尙ほ舊套を免れず、特に時代物に於て最も然りき、若し強て寫實派の名を附せんには、澁團が其の名の如く澁く、ヨヒ三津が其のヨヒ／＼の爲め、動作の不自由なりしより、一種の腹藝を見せたるなど、活歴の先鞭とも謂ふべきか、また脚本の上に理窟を捏ね廻せるは、昔の話に多し、現に澁團が對決場の仁木にて、「彈正恐れ入つたか」と言はるゝ時、呪文を唱へて變形の術を行はんとすれど、勝元が鹽竈の御札を差附けるゆゑ、妖術破れて詮方なきに「ハ」と平伏する事になせる、これは床下にては鼠に化けながら、此處にて何事もせぬは、理窟に合はずといふ用意なりとか、江戸は左程になければ、大坂の見物は理窟を喧しく言ふ事とて、彼地の芝居には取分けて此の類枚擧するに違あらず、

さりながら維新以前に在りては、政府の干渉厳しかりし爲め、寫實派に取つては種々不便なる事情もありたり、先づ脚本の題目、當代の武家に關する事を禁じたれば、もし陰かに之を演ずるも、時代、人名、地名等を變更せざるべからず、義士討入の吉良上野之介は「忠臣藏」の高師直となり、大阪陣の徳川家康は「近江源氏」及び「鎌倉三代記」の北條時政となる、此等は誰も知る所なり、かく武家の威嚴を重んじたる事は、更に一方に於て、道具衣裳に武家用の實物を禁じ、一とせ海老藏が江戸追放に處せられたる罪條のうち、「革製ならびに鐵小札具足いづれも武用の器を狂言に相用ひ、跣込を着し、帶刀致し、身分を顧みざる所業」云々と見え、同じ頃、三代目菊五郎も勘平の役にて「木筒には候へども、臺引金物等全く鐵砲の形を其のまゝ、寫取り候品狂言に相用ひ候始末」不埒千萬なりとて、過料十貫文を申付けられぬ、加之、徳川政府治國の大本たりし勤儉主義は、特に芝居の如き、浮氣家業の奢侈を戒厳し、「衣裳結構なるもの着せ間敷」「おどりたる狂言仕る間敷」とは、承應明暦以來いくたびも繰り返へされたる布告なりき、後世役者の給金の高くなれると共に、半ばは贅澤、半ばは例の寫實主義より、衣裳道具に莫大の費用をかけて、此の禁忌に觸れしもの趣からず、彼の七代目の追放されし大原因もそれなりし、何かに就けて斯の通りなれば、これが爲めに寫實派の妨げられたるは明かなり、

更に尙古主義、勸懲主義、などに至つては昔の芝居には皆無なりき、そは役者の河原者と卑しめられて、裏面は兎に角表面に於ては上流人士に接する事を得ず、随つて其の見識及び氣品の低かりし事、芝居町は遊女町と共に悪所と爪弾されて、上流の立ち入らぬ處と定められたる事、當時

の上流なりし武家の間には、別に能樂といふものありて、高尚典雅などの趣味は全く此處に片寄り、芝居は只無位無識なる平民を相手にして、通俗卑近を以て本分となせる事、など此れが重なる原因なるべし、

第八 その發達

然るに明治維新の大變動は、此等の舊慣を打破して、役者は他の藝術家が待遇さるゝ如く待遇され、芝居町は不潔の意味なき娛樂場として承認され、同時に能樂の勢力は武家と共に地に墜ちたり、是に於て、芝居は單に下流の娛み場に止まらずして、上等の社會また之を持囃すに至り、此等の新しき客種は更に新しき嗜好を齎らしたれば、在來の通俗卑近を以て満足を與ふるに足らず、所謂改良の氣運は動き初めぬ、團十郎は恰も此時に出で、其の社會に於ては最も高き家柄に生まれ、且つ最も豊かなる家庭に養はれて、割合に高尚なる教育を受け、其の人となりまた多少の氣品あり、昔とは變はりて、おさ／＼縉紳者流の門下に出入する事を得たる、中にも彼れが特色はゆくりなく容堂侯の愛する所となりて、自ら其の感化を蒙けたれば、天生の氣質は茲に幾段の彫琢を加へぬ、彼れが高尚主義の源は恐らく此の邊りなるべし、

さて維新後の俳優は、階級に於て優れたる人士に近づく事を得たると同時に、智識に於て勝りたる人物にも接する事を得、權家に入ると共に、學者識者とも知己を結びたり、蓋し後者が團十郎に及ぼせる感化力も亦大なりしならん、

然れども彼等は感情の人よりも、寧ろ道理の人なり、彼等が芝居を見て第一に感じたるは、其の夢の美しきに非ずして、其の現の實らしからぬ事なりき、「あれでは理窟に合はず」「これは九で嘘なり」など、彼等が打込みたる半疊は大抵この邊なりけり、團十郎かしこまりて之に耳を傾く、これ彼をして似而非なる高尚主義、似而非なる寫實主義に陥らしめたる主動者なるべし、

就中、衣裳道具の尙古主義に於ては、容堂侯に啓發さるゝ所多かり、此侯、能樂の薙に志ば／＼彼れを待らしめ、また其の衣裳若干を賜はりければ、彼れは「勸進帳」の如き能がりの狂言、及び時代物を勤むる時に之を用ひたり、また前に言へる如く、維新來能樂、廢れて衣裳の需要順に減じたりし爲め、御裝束師なりし關岡某、所藏の品を芝居へ貸出だしたりければ、團十郎は之をも舞臺に用ひけり、されば初めは能の衣裳を着けて私かに高尚がりたるに過ぎざりしが、當時直參の故實家にて市川熊男といへる人、これも廢幕以來世祿に放れて落魄を極めしより、何時しか團十郎を語らひ、其の帷幄に參して道具衣裳の顧問をなしぬ、彼れが故實に埋頭せるは此時より生まれり、市川氏に次いで松岡明義氏あり、これ亦團十郎が爲めに故實を授け、此の人まかりてより今は櫻痴居士おもに幹旋の勞を取り、また黒川氏、關根氏など朝野の學士を招き、求古會といふを設けて其の益を乞ひつゝあり、

第九 その頓挫

彼れが高尚主義、寫實主義、必しも不可なるに有ねど、その旨まことに膚淺にして、舞臺の興

市川團洲とその技藝

味これが爲めに索然、殊になまじひなる改竄を古狂言にまで施したれば、却て其の妙を没し、且つ之を傷つけたりき、かくて活歴は多数の見物に倦かれ、近年復古の風吹き初むると共に一頓挫を生じたることは、讀者の目撃する所なり、さりながら、假令その方法は如何に淺はかに愚かなりしにもせよ、明治以後わが梨園に於ける最初の改革者たりし彼れが名は永く劇史上に特筆せらるべきものならん、

若し夫れ、活歴を取除きたる彼れが技藝、俳優としてより以外の行狀、等に至りては今日いふべきの好機會にあらざれば普く之を措くべし、

風雲集 (終)

明治三十三年四月廿五日印刷
同 年四月廿八日發行

風雲集
實價金六拾錢

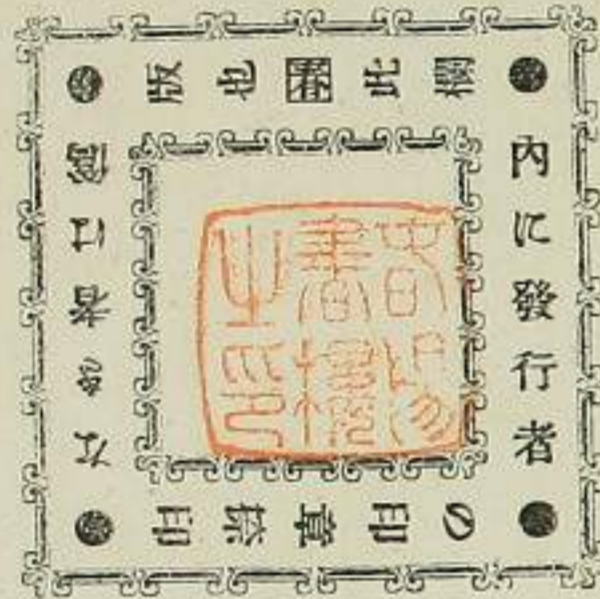
著者 島村瀧太郎
後藤寅之助
伊原敏郎

發行者 和田むつ久
東京市日本橋區通四丁目五番地

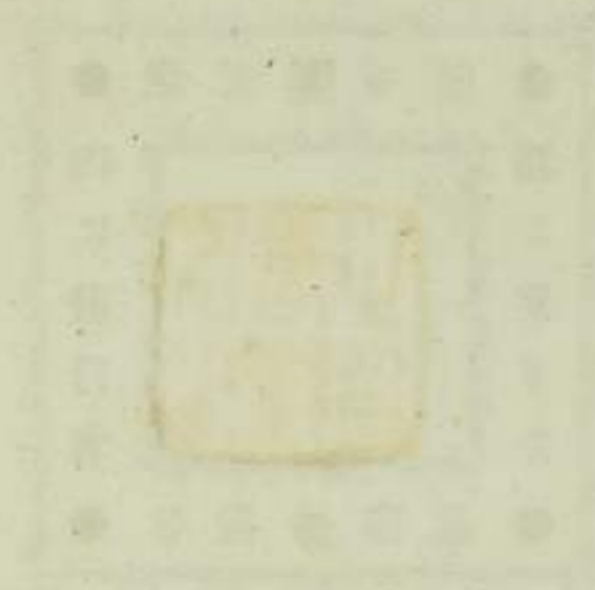
印刷者 青木弘
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 春陽堂
東京市日本橋區通四丁目角
電話本局五拾壹番

印刷所 株式會社 秀英舎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
(電話新橋十八番)



卷之三十三



其
春
關
堂
青
木
是
晴
田
寺
成
林
洲
廣
太
和
親

